

湖の騎士の力を何故か 得ていた転生者の話

何処でも行方不明

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生者

元々生きていた世界で死亡し、神やその他の要因によって

転生し記憶などを引き継いでもう一度人生をやりなおしている者。

今作のオリ主はそんな転生者の中でもテンプレのような神様転生者……と自分のことを思っているトンデモ設定の悪魔さんです！

生まれつきで変な力を持っているわ、母親はトンデモナイ強さの戦士だわ、父親はよく家に留守をするエリート会社員……

なんでもっと普通の設定にしなければならんかね。

いやほんと。

あ、それはそれとして

神様転生者も転生者も普通に出ますよ。

それなりにたくさんね。

追記

※気が向いた時に更新します。日曜以外なら更新する可能性があると考えてください。
い。

え？日曜はなんで無理かって？

眠気に勝てません

さらに追記

質問箱の設置についてアンケートを行いました。

結果だけでいうと質問箱を設置することにしました。

というわけで、活動報告にて質問箱設置しました。

よければどうぞ。

目次

プロローグ	1
第1話 《詳細不明の神器》	8
旧校舎のディアボロス	
第2話 《動き出す物語》	17
第3話 《初戦闘という名の駒紹介》	27
第4話 《はぐれ祓魔師》	38
第5話 《打倒墮天使》	50
第6話 《けっせん！ディアボロス！》	61
第7話 《疲れた日にはミルクココア》	132
を《	77
戦闘校舎のフェニックス	
第8話 《不死鳥襲来》	81
第9話 《特訓 とりあえず強くなる	
う》	91
第10話 《特訓終了 もげかける手	
足》	101
第11話 《決戦開始 初のレーテ	
ィングゲーム》	113
第12話 《決戦継続中》	122
第13話 《中盤（ミドルゲーム）》	
第14話 《不死鳥（フェニックス）と	

赤い龍（ウエルシユ・ドラゴン）

141

月光校庭のエクスカリバー

第15話 《聖剣の予感》

154

第16話 《聖剣の使い手》

166

第17話 《教会からの要請》

175

第18話 《騎士の覚悟》

184

第19話 《墮天使の教会》

194

第20話 《月光校舎》

207

第21話 《聖魔剣爆誕》

217

第22話 《神の事実と白龍皇》

217

231

第23話 《目覚めただけの力》

217

257

停止教室のヴァンパイア

第24話 《プール掃除と墮天使首脳》

265

第25話 《初プール。そして、ゼノ

265

ヴィア無事暴走》

276

第26話 《参観日》

287

第27話 《もう一人の僧侶（ビシヨッ

287

プ）》

296

第28話 《龍殺しの聖剣と騎士の剣》

296

第29話 《王勇を示せ、遍く世を巡る

305

十二の輝剣（ジュワユーズ・オールドル）

305

	318	第30話 《トップ会議 開催》	
	327	第31話 《キャスリング》	
		第32話 《嵐の航海者》	
		第33話 《オカ研顧問 アザゼルセ ンサー》	360
		冥界合宿のヘルキャット	
		第34話 《大改造兵藤家、ついでにハ ルトマン邸》	370
		第35話 《夏休みの予定》	381
		第36話 《若手悪魔》	390
		第37話 《ある意味ラッキースケベ	469
		第41話 《黒猫と白猫》	445
		第42話 《猿と半龍と赤龍帝》	457
		第43話 《開幕！VSシトリー眷属》	469
		第40話 《彼方より繋がる幻想の物 語（ファンタズマ・フィックスト・ミソロ ジー）》	434
		第39話 《目覚めてください騎士の 力》	424
	413	第38話 《目覚める騎士の力》	400
		《？》	

第44話 《英雄VS戦士》 | 480

天生輪廻のセカンドライフ

第45話 《本来のハルトマン家》

488

第46話 《転校生、もはや集団疎開レ

ベル》 | 499

第47話 《英雄の子孫であるという

こと》 | 509

第48話 《総裁家の恋愛感》 | 520

第49話 《開幕レーティングゲーム》

| 532

第50話 《剣士(セイバー)VS疑似

(デミ)剣士(セイバー)》 | 544

第51話 《真名解放》 |

プロローグ

あくる日／日本

1人の少年は春の心地よい風を受けながらコンクリートで整備された道を歩いていた。

高校に進学する時に少し奮発して買った運動靴とこの1年ですっかり着慣れてしまった制服に身を包み地面を歩く。

それは普通の登校風景。学校指定の鞆には筆記用具や教科書ノートが入っていて制服の胸ポケットには生徒手帳。鼻歌を歌いながら呑気に歩いている。

少年の名前は《リヴィエール・A・ハルトマン》

ドイツと日本のハーフであり、自分の名前が若干顔文字に見えることに少し悩んでいる高校2年の男子。

リヴィエの愛称で呼ばれている彼は一見すると普通の高校生（外見は黒髪の末端に白のメッシュが入っているので普通ではないし顔も整っているので普通では無いかもしれない）である。

ただ彼にはひとつ周りからは秘匿しているものがあつた。

それは彼の身に宿る不思議な力

《騎士の誉》
ナイト・オブ・オーダー

そしてあとひとつ。

彼には前世の記憶がある。

※※※

十数年前 別世界／日本

リヴィの転生前の少年は一般的な高校生だった。

大学受験の前日。地元から遠く離れた大学に受験するために新幹線で現地に向かっていた。

その際、やっていたのはもちろん受験前の復習……ではなく、携帯ゲーム。

受験前に緊張をほぐそうといつも通りを装っているが、内心は不安でいっぱいだ。

その証拠にいつもならクリアできるステージをミスが重なりクリアできていない。

ならばイヤホンをして音楽を聞いて寝てやる。

と言わんばかりに少年はゲーム機の電源を切りスマホにイヤホンを刺し音楽を聴き始めた。

そして、シートを倒し目的地に着く時間を検索。その時間にアラームをセットし目を閉じた。

ガタガタとする音で少年は目が覚めた。
まどろみの中感じたのは揺れだった。

車両がやけに揺れているのだ。

そして、不意に揺れが収まった。

少年が目を開けると……

そこは光の届かない海底だった。

※※※

「……??」

意味がわからない。そういつた表情で辺りを見回す少年。

新幹線は海の中を通ってはいない筈だ。

それに何故か何も感じない。

息苦しさも体表に触れているはずであろう水の温度も感じない。

水に触れている抵抗もなく異質な場所にいると嫌でも感じれた。

「……おはようございます」

「……!?!」

突如、少年の前に光が見えた。

否

光ではない。

あれは龍。

日本の伝承に伝わる龍だった。

蛇のような体には手足が生え、頭部には2本の長い髭と鹿のような角。

龍は少年に近づき話を続けた。

「申し訳ありませんがあなたは死にました」

「……?」

「死因は列車の脱線による頭部の殴打。即死であなたの意識は眠っている状態だったので認識できてないのも無理がないかもしれません」

「……?!?!」

龍は少年が戸惑っているのを見て待つことにした。

気持ちの整理がつくまでは待つつもりのようなのだ。

そして数刻の時間が流れた。

「さて、貴方には選ぶ権利があります。

輪廻転生の枠に埋まり、自分という存在を無くして新たな生を得る生まれ変わり。

そして、記憶を引き継ぎより良き人生を行うための転生。

どちらがいいですか？」

「……………」

「わかりました。ならば、貴方には特別な来世を」

※※※

そして転生した。

本来は記憶を引き継ぐだけのものだったはずなのだ。

……それが何故か珍妙な力を持っている。

理由は不明。

力はオンオフができるようで普段はオフにしている。

というかオンにしたら両腕が黒い鎧に包まれるのでオンにするわけが無い。

そもそも、転生と言っても少年の前世はさほど影響しなかった。

前世の記憶は知識程度のもので周りから見たら少し賢い程度。

どうやら前世のリヴィは医学生を目指していたようで体の構造等に精通していたり

勉強優秀であったり中々にハイスペックだったようだ。

最も、それを理解できるほどの知識は受け継がれなかったようで理解できたのは漢字

を読めたり自分から調べだした小学校四年生からだったらしいが。

「やあ、リヴィ」

「ん？あ、ユート」

そんな彼は現在普通の高校生活を楽しもうとしている。

前世の記憶があり妙な力を持っていてもそこはソレ。

高校生活を楽しみたいのであればそんなものは使わなくてもいい。ただし、今後の人生に関わるかもしれないので評定平均は良くしておく。

「そういえば結局1年の時は部活には入らなかつたね？」

「なにかこう……ビビッと来るものがなくてね……まあ、いざとなったら勉強漬けになれば問題ないし……」

訂正、楽しもうとはするのだが前世の記憶が影響してるのか部活へ勉強なりヴィ。気がついたら机の上に参考書を広げている性格が祟ってなんと、高校に上がってからできた友人は片手の指で数える程しかないのだ。

なお、先程話しかけてきたのは数少ない友人の木場祐斗だったりする。

「相変わらず勉強ばかりだね……じゃあ、僕がいるオカルト研究部に来るかい？」

「オカ研……たしかグレモリー先輩が部長をやっているんだっけ？」

「そうだよ。どうか？」

「考えてみるよ。放課後には答え出すから」

※※※

そして、放課後。

リヴィは今日の予定が無いことを確認し木場の机に向かった。

「で、どうするんだい？」

「話だけでも聞いてみようかな」

リヴィの答えを聞くと木場は席を立った。

「じゃあ行くこうか」

「ああ」

その時、教室が少しザワついたようだが当の二人は全く気にきにしていなかった。

第1話 《詳細不明の神器》

校舎を歩き、校舎の裏手にある旧校舎についたりヴィと木場。

旧校舎はみかけでは木造ではあるが割れている部分は無く、手入れは行き届いているようだ。

「なるほど……旧校舎だからオカ研の部室を当方が見ることがなかったわけか」

「探してたんだけ？」

「いや、ユートに用があつた時に探してただけだ」

「そう」

そう言いながら木場は旧校舎の中に入っていく。

もちろんリヴィは木場について行く。

廊下も使われていない教室も清掃されていて綺麗だった。

今のところ、窓に汚れが貼り付いたところも蜘蛛の巣もみしていない。それほどには綺麗だった。

「さあ、ついたよ」

木場は《オカルト研究部》というプレートがついた教室で止まった。

「旧校舎に部室、しかも一室まるごとか……結構待遇はいいのか？」

「まあ、やってる事が本校舎の定教室じゃできないだろうからね……部長、連れてきました」

「入ってちょうだい」

木場が確認を取ると教室の中から声がする。

女性の声で恐らくは部長……つまりリアス・グレモリーのものだと考えられる。

木場が扉を開けリヴィイの中に入るように促す。

教室に入ったリヴィイはその教室の内装に驚いた。

至る所にかかれた何らかの文字。とりあえず、英語、ドイツ語、ラテン語ではないだ

ろう。

そもそもアルファベットではない。

そして中央には巨大な魔法陣。デカデカと書かれてあるソレは教室の大半を占めている。

そして、ソファアや机が数個。

ソファアにはリアス・グレモリーと他には黒髪ポニーテイルの女性、白いショートカットの髪の少女がいた。

「ようこそ、オカルト研究部へ。貴方は二年生のリヴィエール・A・ハルトマンくんね？」

「あ、はい」

「祐斗から話は聞いているわ。入りたい部活がないんですって？」

「ええ、まあ……」

「リヴィエール……いえ、リヴィエ。私たちオカルト研究部は貴方を歓迎するわ」

※※※

ということがあり、リヴィエはソファアに座っていた。

「粗茶ですが」

「ありがとうございます。……えっと」

「姫島朱乃よ。よろしくね」

「はい。姫島先輩」

リヴィエは黒髪ポニーテイルの女性……姫島朱乃にそう言ってお茶……恐らくは紅茶を口につける。

「美味しいです」

「あらあら、ありがとう」

うふふ、と嬉しそうに笑う朱乃。どこか気品がある。

「朱乃、あなたも座ってちょうだい」

「はい、部長」

リアスの隣に腰を下ろした朱乃。

オカルト研究部の視線がリヴィイに集まりリヴィイは少し身をたじろいだ。

「さて、改めてよろこそ。リヴィイ」

「はいグレモリー先輩」

その声でリアスの説明が始まった。

オカルト研究部は名前の通りオカルトを研究する部活。

基本的に魔術的なものを研究することが多いが研究する題目は部員の自由。

宗教絡みのことは一応は禁止。特に十字架を持ち込んだりすることは厳禁。

「……っていうのがオカルト研究部の表向き活動よ」

「表向き……とは？」

「本来の姿は悪魔の集まり。オカルト研究部っていうのは私の趣味よ」

「……（ユート、そういう設定なのか？）」

「いや、聞いてたらわかるから」

「??」

小声で聞いたリヴィイにそう答えた木場。

リアスはその会話を聞き……

「まあ、信じてもらえないわよね。ちょうどいいわ。祐斗」

「はい、部長」

木場はそう言うのと背中に羽根を出した。

黒いコウモリのような羽根。マンガなどでよく見る悪魔の羽根だ。

「ふえ!？」

気がつくのとリヴィイ以外の全員の背には悪魔の羽根が生えている。

「……特殊撮影かなにか？」

「そう思うなら触ってみなよ」

木場の言葉に従いペタペタと羽根に触るリヴィイ。

その顔は徐々に青ざめて行く。

「……本物……つて、まさか」

「ええ、私たちは……」

「当方つて生贄ですか!？」

リアスの声を遮って驚愕の声を上げるリヴィイ。

すぐさま拳を構え自身の中に眠る力を起動。

両腕に黒鎧を纏わせる。

「あら、もう自分で呼び起こせるのね」

「……? 反応が予想外」

「僕としてはリヴィイの反応の方が予想外だったよ」

リアスはソファーに座ったまま紅茶を飲み、木場は戦う意志はないと両腕を上げている。

白髪の少女はジツと見つめているだけで朱乃は未だにニコニコしている。

リヴィイは少し考えると構えを解き、黒鎧を解除した。

「……生贄じゃないってなら一体」

「それはね。貴方を私たちの仲間に迎え入れたいからよ」

※※※

リヴィイは簡潔に悪魔について聞いた。

その延長線で天使、堕天使についても聞いた。

「で、当方に悪魔になれと？」

「まあ、出来ることならね。だけど……」

リアスを取り出したのは赤いチェスの駒。戦車ルークの形を模しておりそれをリヴィイに見せる。

「どうやらリヴィイを悪魔に転生させるには《戦車》が1ついるようね……」

「……《騎士》じゃないんですか？」

「適性があるのはどうやら《戦車》みたいよ」

リアスはそう言いながらリヴィイに歩み寄る。そしてリヴィイの手を取り《戦車》の駒をリヴィイの手に握らせた。

「悪魔になるかどうかは貴方が決めなさい。

私はこれ以上は強制しないわ。力がいるのならこの駒はきつと貴方の力になる。

いらなければ……そうね……取っておきなさい」

「……いいんですか？ 当方はまだ部外者なのに」

「いいのよ。貴方の力は他の堕天使に狙われるかもしれない。その保護も兼ねているのだから」

リヴィイにそう言ったリアスはソファアに戻った。

リヴィイは握っている駒をジッと見つめた。

悪魔になるのには興味がある。なにせ楽しそうだ。

だけど直感是这样言っている。

まだ、その時じゃない。

「駒は受け取っておきます」

「そう」

「でも悪魔にはまだなりません」

「……まだ、っていうことは前向きに捉えていいのかしら？」

「そこはご想像にお任せします」

※※※

翌日。

教師にオカルト研究部の入部届けを提出し人間のままオカ研に入部したりヴィ。

何故かりヴィの心はワクワクしていた。

これから自分が知らない世界が見れると思ったからだ。

「さて、今日はリヴィの神器について調べて見ましようか」

リアスの一言で今日の部活の時間はリヴィの力の解析となった。

「リヴィ。あなたは神器をどういう風に認識してる？」

「えと……黒鎧を腕に出現、纏わせることができます。黒鎧を纏っている間は身体能力

の向上があります」

「それだけ？」

「はい」

リアスはリヴィの説明を聞くと木場をリヴィの前に立たせた。

「祐斗、剣をリヴィに渡しなさい」

「はい部長」

木場はどこからともなく剣を出しリヴィに手渡した。

すると白かった剣の刀身は赤い線が走り、その色をリヴィイの黒鎧と同じ色に変えた。
「……………」

「これは……………」

リアスは剣の変化を見るとひとつの結論至った。

リヴィイの力の正体。それは……………」

「《騎士ナイト・オブ・オナーの誉》……………状態変化系の神器の中でもレア中のレア……………自身が触れた武器という概念に対して発動し、所持者の武器に変換させる……………まさか、空想の存在とされていたモノを持っているなんて……………」

「あ、なんかコレしまえるみたいです」

そう言いながら黒に変わった剣をどこかへとしまおうリヴィイ。

「……………この子……………とんだ大物になれそうね」

なお、その間二人は興味本位で剣を作り出しそれを奪取、収納を繰り返していたそう
な。

旧校舎のディアボロス

第2話 《動き出す物語》

先日の部活は有意義だった気がする。

ユートと調子に乗って《騎士ナイトの誉オウ、オーナー》に魔剣を格納し続けなければ。

何故かというと、あの後に部長にめちやくちや怒られた。

何でも、当方の神器は詳細不明なのであまり行使しない方がいいとの事。

「そんな事言われてもな」

「まあ、部長の言うことは聞いておくものだよ」

「そうなんだけどさ」

今日は当方たち二人はオフ。

ユートも悪魔の仕事が今日は回ってこないよう二人で特訓をしていた。

当方はまだまだ弱すぎるし、ユートはなにか成し遂げたいことがあるそう。

ともかく、当方たちはもつと精進しないとイケない。

特に当方。武器を奪えたりできてもそれを振るう力がなければ悲しいかな。戦えな

いんだよ。

鎧で覆われている部分は身体能力の向上があるが……

「ん？」

その時、ふと。変な気配を感じた。

人じゃないものの気配。なんかこう……

よくわからんがとにかく。

異質な感じがした。

この数日で遭遇したはぐれ堕天使と似たようなもの……それと、隠すつもりのない殺気。

一言でいうと。

まずい

多分、誰かが堕天使に殺されそうになっている。

けれど、当方とユートが歩いているのは人通りの多い商店街。

今ここで神器を使って駆けつけるともれなく生徒会（シトリー眷属）の皆さんのお世話になる。

当方は未だに人間のままなのでなにかやらかすのは怖い。

とりあえず、今日は事の経過を待つことにした。

※※※

というわけで数日後。

オカ研に入ったおかげで友好関係が片手の指で数えれなくなった当方は隣のクラスに来ていた。

……しかたないじゃん。高校入学して友達を作るのを目標にしたのはいいけど、友達になってくれたのってエロバカ御三方とユートだけだし……

当方は自分のクラスに居るのが時たま嫌になるのでエロバカ御三方がいる隣のクラスに行く事が多い。

特にユートがまだ来ていない朝の時間とか。

「という理由で来たのだよ」

「リヴィ、お前ってほんとにコミュ障なのな」

「コミュ障じゃない。ただ、友達を作るのが下手なだけだ」

「それをコミュ障って言うと思うんだが……まあいいか」

時に友人の1人の兵藤一誠ことイツセー。

最近は何んがおかしい。

いや、いつもはおかしくて最近は何故か落ち着いていることが多い。特に朝方は今までと違って溜息をついている事が多々ある。

「そういうえば、リヴィもほんとに夕麻ちゃんのこと覚えてないのか？」

「……? いや、知らないな」

「そうか……」

そして、この調子。少し不安が残る。

「じゃあ、そろそろ戻る」

「ああ、またな」

軽く挨拶を交わし自分のクラスに戻る。

にしてもなんで当方は友達ができないんだろうか?

※※※

さらに翌日。

今日は部長からの言伝でイツセーをユートと一緒にオカ研に連れていくことになっている。

「なにか色々と飛んでる気が……」

「気のせいだろ。イツセー帰ってるか?」

どうやら帰っていないかったイツセー。

そして、廊下から聞こえる黄色い声。どうやら、当方とユートに向けられているらしく、イツセーはとても面倒な顔をしている。

ちよつと露骨すぎないか?

「……リヴィはまだわかる。だけど、お前は何のようだ？」

いきなり喧嘩腰……まあ、イツセー含むエロバカ御三方は基本的にユートを目の敵にしているからな。

「僕らはリアス・グレモリー先輩の使いできたんだ」

「……OKOK、で俺はどうしたらいい？」

「当方たちに付いてきてくれ」

「またもや上がる女子の声。」

ウザイ。友達になってくれそうにないから嫌いだ。

だって、友達になってくれないか？

って声かけたら「私なんて恐れ多いです！」って返ってくるんだ。遠回しに友達になる気はないと言われて三日はシヨックを受けていた。

そんなことを考えているうちに旧校舎前に到着。

「ここに部長がいるんだよ」

ユートはそう言いながら歩き続ける。

「当方も数日前に通った道。」

「たしかあと少しで1ヶ月前になるんだっけか。」

「そう言えばリヴィって部活入っていたのな」

「ん？ああ……言ってなかったっけか？」

「俺は聞いてない」

「まあ、楽しいところだ。色々」と

俺はイツセーとそんな会話をしながら引き戸の前に来た。

「部長、連れてきました」

「ええ、入ってちょうだい」

部長の確認が取れたので引き戸を開け部室に入る。

この約一ヶ月で見慣れた部室に入り、すっかり定位置となったソファアに腰掛ける。

なお、当方の席は小猫ちゃんの向かい側である。

羊羹を食べていたが特に気にしない。

部長と姫島先輩はシャワールーム。

その時、イツセーはいつもの顔をしていたがここは割愛しておこう。

「さて、みんな揃ったわね。兵藤一誠くん。いえ、イツセー」

「は、はい」

「私たち、オカルト研究部はあなたを歓迎するわ」

「え、ああ、はい」

「悪魔としてね」

あ、この間の当方みたいな顔してる。

※※※

そして、オカ研とグレモリー眷属にメンバーが増えた。

イツセーにも神器が宿っているようで驚いた。

しかも、転生に消費した《悪魔の駒》^{イブイル・ピュス}は《兵士》^{ポーン}8個。

当方は《兵士》^{ポーン}5個分の《戦車》^{ポック}なので、ポテンシャルでいうと当方はイツセーに負けていることになる。

「ま、気にしても仕方ないか」

「リヴィイが独り言なんて珍しいね」

その時、部室の引き戸が開かれた。

「入りまーす」

どうやらイツセーが来たようだ。

ちなみにイツセーが最後に来ていた。掃除当番かなにかだったのだろうか？

「来たわね」

イツセーを確認するなり、部長が姫島先輩に指示を出す。

姫島先輩はイツセーを部室の大半を占める魔法陣の真ん中に立たせた。

「イツセー、あなたのチラシ配りも終わり。よくがんばったわね。」

改めてあなたにも悪魔としての仕事を本格的に始動してもらおうわ」
「おおっ！俺も契約取りですか！」

「ええ、そうよ。もちろん、初めてだからレベルは低い契約内容だけど。

リヴィに予約契約が入ってしまったの。

リヴィはまだ悪魔じゃないから……」

「あ、言つてませんでしたっけ？」

当方はたしかに未だに悪魔ではない。

しかし、ユートとの特訓で考えついて身についたことがある。

「……報告はちゃんとするように。何を言つてなかったの？」

優しい部長のお言葉。感無量です。

「実は一時的に悪魔になれるようになりました」

「一時的に……どういうこと？」

「えつとですね……当方の神器《騎士ナイト・オーナーの誉》は奪取した武器を魂に貯蔵できます。

その応用で、この《戦車ルック》の駒を当方の武器と認識、魂に貯蔵してみたんです」

そう言つて当方は背中に羽根を出す。

悪魔の象徴である黒いコウモリの羽根。

「魂と駒が同化するようで一時的に悪魔になれるようになりました。」

まだ、当方は転生するほどの大事に至ってないので当分はこれで行こうと思います」
当方の言葉を聞いた部長は溜息をついてこう続けた。

「……わかったわ。じゃあ、イツセーには小猫の契約を変わりにやって貰いましょう。

実は、二件の予約契約が入っちゃって両方行くのは厳しいから片方を任せたいわ」

「……よろしくお願ひします」

どうやら、他に契約依頼が入っていたようだ。

良かった。イツセーのぬか喜びにならなく……て……

なんだろう。めちやくちや部長が怖い

※※※

あその後、こつてり絞られた。

報告をちきんとしていなかったこともだし、貴重な駒を勝手に使用したこともめちやくちや怒られた。

その後は魔法陣を使えなかったイツセーが自転車を使って契約相手のところに行くために部室を飛び出した。

当方はその後にキチンと魔法陣を使い契約相手のところにジャンプした。

「……えと……貴方が悪魔？」

「はい。当方は悪魔のリヴィエールと申します」

なんだろう。父と母が名付けた名前がものすごく悪魔っぽい。
初めてそう思った。

ちなみに相手は20代女性の西山さん。

「それで、契約内容は？」

「えつと……友達が欲しいです！」

「すいません、当方も友達欲しいです。」

足の指を使っても足りないくらい友達欲しいです。

第3話 《初戦闘という名の駒紹介》

「つ、疲れた……」

昨日の晩、初めて悪魔としての契約を行った当方。

契約内容がまさかの「友達がほしい」

契約を叶えるのは簡単だったんだ。

※※※

「友達が欲しいです！」

グサツとその言葉が当方の胸を貫いた。

トウホウモトモダチホシイ

「わかりました……では、友達になりたい人物像などがありますか？」

「ええと……私なんかと友達になってくれる人なら誰でもいいです！」

おっと、この人高望みしないぞ。

こういう場合は適度な魅了チャームを発生させればいいのか？

でも、この際は……

「わかりました。では、その契約果たしましょう」

ここまででは良かったんだ。

ただ、帰る時に……

「あの……悪魔さんも私と友達になってくれませんか？」

この一声がものすごく心に効いたんだ。

※※※

「悪魔の契約って（精神的に）疲れるんだな」

「そうかな？なれたらそうでも無いかもしれないよ？」

「そうなるといいな……」

代価の品も部長に献上したし、初契約は見事達成。

その次の契約も達成できた。

イツセーとは違い、いい駆けだしだと思う。

家路に着くために俺は荷物をまとめた。

「今日は契約ないし、そろそろ帰るよ」

「そう、じゃあまた明日」

そうして当方は家路についた。

と思った矢先だった。

滅多に使わない登録されている番号がかなり少ない携帯電話に着信が入った。

着信が入った。

大事な事なので（ry

人生初の親以外からの着信だ！

「も……もしもし！」

『あ、リヴィイ。申し訳ないけど戻ってきてくれない？』

「当方、忘れ物はしていないと思うのだが？」

『いや別件。はぐれ悪魔が出たんだ。』

討伐依頼が出たから兵藤くんにレクチャーついでに行くんだってさ』

「わかった。すぐに向かう」

自転車を方向転換させ、学校に戻る。

戦いはまだ数える程しか経験してない。

※※※

当方は自転車を走らせ町外れの廃屋に到着した。

部室について早々に先んじて現場へ赴き辺りに人がいないかの確認。

気配を感じたりすることは得意なのでまだ人間である当方にはうってつけの仕事だ。

「ええと……たしか発信はこうやって……」

後方に待機してある部長たちに連絡を取る。

すぐに来てくれるそうなので、自転車を止めて待つておくことにした。殺意と敵意が立ち込められた空気。

はつきりいつて怖い。

「……そろそろ準備するか」

当方は鞆から悪魔の駒を取り出す。

悪魔の駒を武器と認識し、赤い線を走らせる。

駒は赤から黒に変わり当方の胸の中に入っていった。

擬似悪魔リヴェールの完成である。

悪魔化が終わってすぐ。

部長たちと合流した。

イツセーの足がガタガタ震えているがそこは気にしないでおう。

防御能力の高い当方が小猫ちゃんやんが戦闘に行くことになることが多い。

後ろでは部長と姫島先輩がイツセーに説明をしていた。

それを話半分に聞きながら警戒を続ける。

「……」

立ち込めていた敵意や殺意が濃くなった。

それに伴い嫌な気配も近づいてくる。

「不味そうな臭いがするぞ？でも美味そうな臭いもするぞ？

甘いのかな？苦いのかな？」

地の底から聞こえるような低い声音。

やっと聞き慣れた声だ。

「はぐれ悪魔バイサー。あなたを消滅しにきたわ」

部長がそう言い切る。

ケタケタと笑い声が辺りに響く。

ヌーッと視界に上半身裸の女性が目に付く。

しかし、その上半身は宙に浮いている。

その理由はすぐにわかった。

重い足音。

下半身は化け物のものだった。

5mを超える大きさ。まさにバケモノだ。

「主の元を逃げ、己の欲求を満たすためだけに暴れ回るのは万死に値するわ。グレモリー公爵の名において、あなたを消し飛ばしてあげる！」

「ござかしいい！小娘ごときがああ！その紅の髪のように、お前の身を鮮血で染めて上げてやるわあああ！」

吠えるバケモノ。うるさい。

「雑魚ほど洒落のきいたセリフを吐くものね。リヴィ武器を貯めるチャンスよ」

「はいー」

当方は部長の指示で前方に躍り出る。

さほど来ない武器を蓄える機会だ。

バケモノは両手に1本ずつ槍のようなものを持っている。

奪取できれば突撃槍として使えそうだ。

「死ねえええー」

バケモノは当方に向かって槍を突き出す。

早いな。

「リ、リヴィー！」

避けるまでもないけど。

砂煙すら起こらない。当方の両腕は既に具現化させた《騎士ナイト・オブ・オーダーの誉》に包まれており
槍の穂先を掴んで止めている。

「イツセー、さっきの続きをレクチャーするわ」

部長の言葉を尻目に当方は魔力を槍に流し込む。

「リヴィと小猫の役割は《戦車》、特性のひとつ屈強な防御力。あんな攻撃じゃリヴィも

小猫も倒れないわ」

腕に触れているところから槍に赤い線が走り、その色を黒に変えていく。

「リヴィイは特殊な神器持ちなの。神器の名前は《騎士ナイト・オブ・オーナーの誉》敵の武器を奪い、自身のものにする神器よ。

敵が何らかの武器を持っている場合はまずはリヴィイをけしかけて武器を奪い取ることにしてるの」

「はなせええええ！」

「やだ」

一本目の奪取が完了し、当方の魂に収納する。

二本目の槍もすぐさまに奪いたいが今回はイツセーのレクチャーも兼ねている。

ここら辺でいいだろう。

槍を無くしバランスを崩すバケモノ。

そのスキをグレモリー眷属が見逃すはずも無くユートが追撃を行う。

「次に祐斗。祐斗の役割は《騎士》、特性はスピードよ」

ユートは急激に加速し、自身の神器で魔剣を想像。

バケモノの両腕を綺麗に寸断した。

「これが祐斗の力。目では捉えきれない速力と達人級の剣さばき。

ふたつが合わさることで、あの子は最速のナイトとなれるの」

バケモノは悲鳴をあげ足元にいた当方と小猫ちゃんを踏み潰そうとした。

「《戦車》に戻るわね。さっきは防御力を見てもらったけどもうひとつ特性があるの」

バケモノの足を腕で止める。悪魔化しないと無理な芸当だが今なら余裕だ。

「それは怪力。あんな悪魔の踏みつけじゃ二人は沈まない。潰れないわ」

バケモノの足をどけ終わった当方と小猫ちゃん。

当方は先程奪った槍を具現化し高く飛翔した。

小猫ちゃんがバケモノを後方へ飛ばすのはわかっていたからそれに合わせるように槍を投げバケモノの胴体を地面に固定させる。

「最後に朱乃ね」

「はい、部長。リヴィくん、いいのかしら？」

「はい？」

「せっかく取った武器が壊れてしまうわよ？」

「問題ないですよ。同じ武器はあんまり多くはいらないので」

「そう？なら、どうしようかしら」

姫島先輩の力は重々承知している。

「朱乃は《女王》。私の次に強い最強の者。《兵士》《騎士》《僧侶》《戦車》、すべての力を

兼ね備えた無敵の副部長よ」

「う……………う……………」

低い唸り声を出すバケモノ。どうやらまだ息はあるみたいだ。

……………当方が調子に乗って槍を投げなければ敵愾心は残っていたと思うが

「あらあら、まだ元気みたいですね？それなら……………」

姫島先輩はそう言うのと天に向かって手をかざした。

刹那、天が光り、バケモノに雷が落ちた。

「ガガガガッガガガッガガガッ！」

激しく感電するバケモノ。

じゆううう、と煙を上げて全身丸焦げとなった。

「あら？もうおしまい？まだいけますわよね？」

再び雷がバケモノを襲った。

姫島先輩は嘲笑を浮かべている。

「朱乃は魔力を使った攻撃が得意なの。雷や氷、炎などの自然現象を魔力で起こす力ね。

そしてなにより彼女は究極のSよ」

姫島先輩の雷は2分ほどで止んだ。

その間、当方は切り離された腕に握られている槍を奪っていいおいた。

いよいよ完全に戦意を失ったバケモノのもとへ部長が近づく。

「最後に言い残すことはあるかしら？」

「殺せ」

「そう」

そんな問答をする部長とバケモノ。

「なら消し飛びなさい」

部長の冷徹な声と共に魔力の塊が撃ち出される。

魔力の塊はバケモノを包み込み消し去った。

何度見てもすごいな。

「終わりね。みんな、ご苦労さま」

これで今回のはぐれ悪魔討伐も完了。

新しく槍も手に入ったことだし万々歳だ。

少し体を伸ばし、悪魔の駒を魂から摘出する。

「お疲れ様リヴィ」

「ユートもな、お疲れ様」

悪魔化を解いてしまったので夜目が途端に悪くなる。

ほんとに真つ暗だな………暗闇にずっといたから慣れてる当方の目にもみんな

の影がわかるぐらいしか見えない。

「部長聞きそびれてしまったんですけど」

「何かしら?」

「俺の駒……ってというか、下僕としての役割はなんですか?」

「《兵士》よ。イツセーは兵士なの」

一番下つ端であることを告げられたイツセー。

でもな、悪魔の駒はそんな簡単なものじゃないんだよイツセー。

第4話 《はぐれ祓魔師》

唐突だが当方の身の上話をしよう。

当方は日本人の父とドイツ人の母との間に生まれた。

年は16歳で高校2年生。彼女いない歴11年齢のよくいる男子高校生だ。

部活は2年生からオカルト研究部に所属するようになり、人間の身でありながらグレモリー眷属に入っている。

当方の父は名のある実業家で世界を飛び回っている。

連絡もよく来るし1ヶ月に1度は家族3人で外食に連れて行ってくれる。それに困った時は大体いつもそばにいてくれた。自慢の父だ。

さて、問題の母だ。

おばあちゃんから付けられた渾名は《抜刀妻》

働いているらしいがどこでなにをして稼いでいるかは不明。いつもニコニコしており目は糸目。

見開かれた瞳は一言で言う《怖い》

当方は母の手ほどきで様々なことを覚えた。

包丁の握り方から剣の振り方まで。

なんで剣の振り方を母から教わっているのかはよくわからない。

たしか当方が幼い頃に「強くなりたい!」と言ったのが原因だった気がする。

とにかく、何らかの武術に精通しており免許皆伝級の腕を持っているのだ。

我が家の教育方針は自由主義なのだが……

「……リヴィ、あなた最近力を使っているようね」

「へ?」

今日の家に帰ってからの母との会話はこうやって始まった。

※※※

結果だけ言おう。

バレていた。中学校の時にチョーシに乗って黒鎧を出してしまった時はかなりこっ

びどく怒られた。

その例を考えるに今回も怒られるのだろう。

「あ、別に叱ろうって訳じゃないのよ?」

母はそう言いながら体を解していた。

「リヴィの行動の理念は《楽しむ》だけどそれで人が傷つかないのは知ってるし、無駄な事をする子じゃないと思うの」

「じゃあなんで……」

「母親とのスキンシップよ♪どうやら誰かから『セイクリッド・ギア神器』について教えられたみたいだし、『ナイト・オブ・ネオト騎士の誉』で何個も武器を取得したみたいだし。

それならソレがちやんと扱えるかのチェックは必要でしょ？」

当方の母は一体何者なのか。

普通の人は神器とか知らないはずだが？

たしかに幼少期に突然現れた黒鎧のことは真っ先に母に相談した。だからといって神器の名前もわかっているのはおかしくないか？

※※※

「ということがあった」

「おめーの母ちゃん何者だよ……」

「当方もよくはわからない……イテテ」

昨日の晩、母に付けられた傷が痛む。

なんでユートから貰った魔剣を使ってるのに木刀で当方を圧倒できるのか？

理由を聞いたなら「オカンは最強の種族らしいわよ？」

と答えられた。

意味がわからん。

昼を過ぎててもまだ痛んだので昼休みからは悪魔化して治癒能力を高めたのだが何故か一向に治らない。

「さて、今日も契約の割り当てをするわよ」

部長の一声ですっかり日課になった悪魔活動が始まる。

※※※

『何か嫌な予感がするわ。イツセーについて行つてくれないかしら?』

今夜は契約がないので暇だから良かった。主の命を聞かなかつたらどんなペナルティがあるかわからない。

にしても、部長はイツセーに対して過保護じゃないか?

さすがに大丈夫だと……

そこで異常な気配を感じた。

触れてはいけない予感。殺気や敵意ではない。

触れることですら今の当方には危険となる。

最悪なのは……

それがイツセーが向かった家の方からしたんだ。

「死ぬ死ぬ悪魔!死ぬ悪魔!塵になって、宙を舞え!全部、俺様の悦楽のために!」
鋭くなった聴覚がイカれた声を拾った。

不味いだろ、これは！

「間に合つてくれよ！」

自転車から飛び降り、《騎士の誉》ナイト・オブ・オーナーを発現させる。

そして駆け出す。

走っている最中に先日パクった槍を構え家屋に突撃する。

家に住んでいる人がいたらごめんなさい！

ドガアアアという音と共に壁が碎ける。

「オヒョー！新しい悪魔さんの登場ですか！いいねえ今日は豊作の予感！」

煙が晴れる前にイカれた声の持ち主が当方に接近してくる。持っているものは……

光の剣！

敵は祓魔師か！

光の攻撃ではいささかこの槍は相性が悪い。

すぐに槍を取納し魔剣に持ち替える。

「あの駄悪魔と違つてこつちは殺りがいがあるねえ！」

「イツセー逃げろ！」

「こんな時にお仲間の心配ですかい！」

声の主は神父服を来ていた。その声からは悦楽を感じる。

酔狂で悪魔狩りをしている祓魔師もいるとは聞いていたが……

ガキン！

光の剣と魔剣が打ち合う。

打ち合いなら《戦車》である当方に分がある！

「……よけろリヴィー！」

「は？」

その瞬間、下腹部に傷みが走った。

じわじわと毒に汚染されるような傷み。

イカれ神父の左手には銀の銃が握られていた。

硝煙が出ている事から撃たれたのは光の弾を放つ祓魔弾が装填されたものだと理解できる。

視界の端にはイツセーと修道服を着た外国人らしき少女がいる。

イツセーが庇うように立っていることから少女も守った方がいいだろう。

「こいつ……効力が薄い……てめえ何もんだ？！」

「この国の礼儀に則って先に名乗ったらどうだ！」

当方が擬似悪魔であるからだろう。痛みはあるが激痛という程じゃない。

数合打ち合いどころからともなく後に飛ぶ。

「キハハ！おもしろええ！効力が薄いなら普通の奴らよりも楽しめんじゃねえ！」
「狂ってるな……」

ただ、当方よりも相手が格上だ。天性の才能と培った経験。《バトルマニア戦闘狂》なら1ヶ月ほど前から戦い出した当方よりも経験は勝る。

だが、ここで諦めてはいけない。

祓魔師は悪魔の仇敵。

ここで当方が倒れたら神器の能力を解放していないイツセーだけが残る。

「……守ってられてばかりじゃいられねえ。庇ってくれた女の子に共に戦う仲間もいるんだ……逃げられるかよ！」

イツセーが当方の隣に立ち戦う構えをとる。

それを見たイカれ神父は嬉しそうに口笛を吹いた。

「え？え？マジ？マジ？俺と戦うの？死んじやうよ？苦しんで死んじやうよ？」

「当方としては……このまま黙って負けるつもりは毛頭ない！」

「ああ、もちろんだぜー！」

イカれ神父が飛び出してくる

その時、床が青白く光出した。

「何事さ？」

青い光はイカれ神父の事なんて気にせず魔法陣を構成していく。

「まったく……当方の身にもなってくれ……」

「あれって……グレモリー眷属の魔法陣か！」

イツセーの声で魔法陣が光り出す。

光が晴れた先にいたのは……

見知った悪魔達。

「リヴィ、兵藤くん、助けに来たよ」

スマイルを送るユート。

「あらあら、これは大変ですわね」

「……神父」

姫島先輩に小猫ちゃん。

イカれ神父の声が聞こえた時に既にメールを送っておいた。

メールの内容は

《援軍求》

「ひゃっほう！悪魔の団体さんに一撃目！」

イカれ神父はもちろん構わず切ってくる。

瞬間、ユートが飛び出した。

ガキン！という金属音が辺りに響く。神父の一撃をユートが止めたのだ。

「悪いね。彼らは僕の仲間でさ！こんなところでやられてもらうわけにもいかないんだ！」

「おーおー！悪魔の癖に仲間意識バリバリバリユーですか？悪魔戦隊デビ…」

「いけ、小猫ちゃん！」

小猫ちゃんを新しく出現させたハンマーに乗せフルスイング。

小猫ちゃんはまっすぐ飛び、イカれ神父に一撃を入れる。

「ぐへえー！」

イカれ神父の腹に小猫ちゃんの拳がクリーンヒット。

そのまま倒れてくれたら楽だったがそういう理由には行かなかった。

ユートは小猫ちゃんを回収し戻ってきた。

「即席でやってみただけど上手くいくもんだな……」

「え？あれって即席だったのかい？」

ユートはそう言いながら当方にひとつの武器を手渡してきた。

「これ、リヴィイなら使えるんじゃない？」

手渡されたのはイカれ神父が持っていた銀の銃。

「どうやら、あの一瞬で拾ったようだ。」

「その通りだな。ありがとうユート」

すぐさま銀の銃を奪取。収納する。

これで相手に武器の有利がひとつ減った。

ゆらりと、人影が立ち上がる。イカれ神父はケタケタ不気味に笑っている。

「一番厄介なタイプだ。悪魔を狩ることが生き甲斐……いや、悪魔を狩ることで快楽を得るタイプ。僕達にとつて1番有害だ」

「悪魔さまがそれを言うかい？ 俺ちゃんだつて精一杯一生懸命まいにちをいきてるんだぜえ？」

頭から血を流しながら笑う姿は狂気が溢れ出ていた。

もとおり、隠すつもりはなかっただろうがな。

「悪魔にだつて、ルールはあります」

姫島先輩が微笑みながらいう。

だが視線は鋭い。

「いいよ、その熱視線。お姉さん最高！俺を殺そうつて思いが伝わってくる。

これは恋？ 違うね。俺は思うよ。これは殺意！最高！マジ最高！殺意は向けても向けられてもいいもんだねえ！」

「なら、消え去るといいわ」

スつとイツセーの横に現れたのは部長だった。

「イツセー、リヴィ、ゴメンなさいね。まさか、この依頼主のもとに《はぐれ悪魔祓い》の者が訪れるなんて計算外だったの」

謝る部長はイツセーと当方の姿を見るなり、目を細めた。

「二人とも、ケガをしたの？」

「あ、すみません……。そ、その、撃たれちゃつて」

「獲物が剣だけだと油断してました。申し訳ありません」

もつとも、その銃は今は当方のものだがな。

意趣返しとしてあいつは銃で殺したい。

「私のかわいい下僕たちをかわいがつてくれたみたいね？」

部長は低く怖い。

多分キレていらつしやる。

「はいはい。かわいがつてあげましたよお。本当は全身くまなくザクザクに微塵切りにする予定でしたが、どうにも邪魔が2回ほど入りましてえ、それは夢幻となつてしましましたあ」

ボンツ！と音がしてイカれ神父の後方にあつた家具の一部が消し飛んだ。

部長が魔力の球を発射したのだ。

「わたしは、私の下僕を傷つける輩を絶対に許さないことにしてるの。特にあなたのような下品極まりない者に自分の所有物を傷つけられることは本当に我慢できないわ」
空気さえ凍えるような迫力だ。

殺気がリビングを包み込む。部長の周囲には魔力の波動らしきものが発生している。
だが…

「部長！この家に墮天使らしきものが複数近づいていますわ。このままではこちらが不利になります！」

何かを感じたのか姫島先輩がそう言った。

遅れて気配を察知できた。

数は恐らく4。

足でまといを3人抱えてはさすがに対処できないだろう。

「……朱乃、イツセーを回収しだい、本拠地へ帰還するわ。ジャンプの準備を」

「はい」

一番良い手は逃げ。

次点で当方たちを切り捨て墮天使ごとイカれ神父を倒すことだが部長の性格上、その作戦は絶対に取りたくないだろう。

当方はジャンプする瞬間までイカれ神父を睨みつけていた。

第5話 《打倒墮天使》

イカれ神父との戦いの後、当方は旧校舎の一角で特訓に励んでいた。というのもイカれ神父から奪取した銀の銃の使い心地を試すためだ。

引き金に手をかけ、標的に向かって放つ。

無音で弾き出された光弾は寸分違わず標的を撃ち抜いた。

「……これってレーティングゲームで使えるのかな？」

どうやら、当方の魔力を使って装填されるようで弾数は当方の魔力次第。

しかも、当方は魔力を使った技は覚えていないので《騎士ナイト・オブ・オーダーの誉》で武器を奪取する時以外は魔力を消費しない、魔力の消費先が見つかって得した気分だ。

ただ、威力がイカれ神父が使っていた時より高い。

《騎士ナイト・オブ・オーダーの誉》にはわからないことだらけだ……

威力も確かめられたので部屋に戻ってみる。

その時、当方の耳に届いたのは……

パンツ

という頬を叩いた時になる乾いた音だった。

※※※

「何度言ったらわかるの？ダメなものはダメよ。あのシスターの救出は認められないわ」

ユートに聞いたところによると先日、イカれ神父と戦闘した際に見かけたシスター《アーシア》を墮天使の手から救うためにイツセーは墮天使の拠点に攻め込もうとしているのだから。

部長はこの件に対し、一切関わらないことを明言したが納得できないイツセーが詰め寄ったところを叩かれたらしい。

「なら、俺一人でも行きます。やっぱり儀式つてのが気になります。墮天使が裏で何かするに決まっています。アーシアの身に危険が及ばない保証なんてどこにもありませんから」

「あなたは本当に馬鹿なの？」

そのような会話をしている二人。

部長はイツセーをむぎむぎ殺すわけにはいかなかったので墮天使たちのところに行かせるつもりはなく、かといってイツセーは部長の言うことを聞く気はないらしい。

「俺はアーシア・アルジェントと友達になりました。アーシアは大事な友達です。俺は友達を見捨てられません！」

「……それはご立派ね。そういうことを面と向かって言えるのはすごい事だと思うわ。それでもこれとそれは別よ」

あくまでも冷徹に判断する部長。

悪魔と墮天使の関係は簡単ではない。隙を見せれば即殺される。

それがイツセーのようななりたてなら尚更だ。

少しだけ論争が続いた。

しかし、終わりもすぐ来た。姫島先輩が部長に耳打ちをした。

「大事な用ができたわ。私と朱乃はこれから少し外へ出るわね」

「ぶ、部長！話はまだー」

「イツセー、あなたには話しておくことがあるわ。まず、ひとつ。あなたは《兵士》を弱い駒だと思っっているわね？どうなの？」

※※※

イツセーを論す様に部長は《兵士》の特徴と《神器》の扱い方を教えると魔法陣を使い去って行った。

部屋に残ったのは当方、ユート、イツセーそして小猫ちゃんだ。

イツセーは息を大きく吐いた後にこの場から去ろうとした。

「兵藤くん」

去ろうとした。というのはユートがイツセーを呼び止めたからだ。

「行くのかい?」

「ああ、行く。行かないといけない。アーシアは友達だからな。俺が助けなくちゃならないんだ」

「間違いなく殺されるぞ。神器を持っていてもプロモーションを使っても墮天使と祓魔師の集団を1人で相手にするなんて不可能だ」

そこで当方も口を挟む。

「それでも行く。たとえ死んでもアーシアだけは逃がす」

「いい覚悟……だがそれは無謀すぎるんじゃないか?」

「だったら、どうすりゃいいってんだ!」

怒鳴るイツセーに当方たちは顔を見合わせて答えた。

「僕（当方）達も行く」

「なっ……」

イツセーは予想外だと言わんばかりに絶句した。

「僕はアーシアさんをよく知らないけど、君は僕の仲間だ。部長はああおっしやつたけど、僕は君の意志を尊重したいと思う部分もある。」

それに個人的に墮天使や神父は好きじゃないんだ憎いほどにね」

「当方は……いや、この方がわかりやすいか。

友達が困っているなら手を貸すのが友達だろう？」

当方はそう言いながらサムズアップしてみる。

「それに部長はこう言っていた

『私が敵の陣地と認めた場所の一番重要なところへ足を踏み入れたとき、王以外の駒に
変ずることができると。』

これは『件の教会をリアス・グレモリーの敵のいる陣地だと認めた』と解釈できない
か？」

「あつ」

「だね、部長は君に遠回しに行ってもいいと認めてくれたんだよ。

もちろん、僕達にフォローをさせる気ではあつただろうけどね」

ユートは苦笑する。

イツセーは部長の言葉の真意を理解したのか感嘆していた。

そこで小猫ちゃんが一步前へ出た。

「私も行きます」

「なつ、小猫ちゃん？」

「……3人だけでは不安です」

「感動した！俺は猛烈に感動しているよ、小猫ちゃん！」

「あ、あれ？ぼ、僕らも一緒に行くんだけど？」

「安心しろユート。あれがイツセーだ」

落ち着いたイツセーは戸を開け放ちこう言った。

「んじゃ、ちよつくら4人で救出作戦と行きますか！待ってる、アーシア！」

※※※

既に外は暗く、街頭の光が道を照らす時間帯になっていた。

当方たち4人は教会が見える位置で様子を窺っていた。

人の出入りはない。

「リヴィ」

「わかってる」

戦車の駒を魂に収納し悪魔化する。

悪寒がした。悪魔特有の悪寒だ。

恐らくは墮天使が教会の中にいるのだろう。

ユートは凶面を広げイツセーと会議中。

当方と小猫ちゃんはそれを見ている。

「……墮天使……一体何人いるんだ？」

「大丈夫です。私トリヴィ先輩が役目を果たしていれば勝てます」
寡黙な小猫ちゃんにしては饒舌だ。恐らくは緊張を紛らわそうとしてくれたのだらう。

月明かりに照らされた教会の入口。

当方たちは顔を見合わせ頷き合う。

覚悟はどうにできている。

戦闘開始だ！

入口を一息で潜り、一気に聖堂まで駆け抜ける。

入口に入った瞬間から当方たちの侵入は気付かれている。

後戻りはできないしするつもりもない。

前に見えた扉に対し槍を投擲し破壊する。

破壊された扉の向こう側には聖堂が見える。

聖人の彫刻の頭が砕かれていたがそれ以外は至って普通の聖堂だ。

しかし、異常な気配も感じた。

「ゴ」対面！再開だねえ！感動的だねえ！

イカれ神父。たしか名前はフリード。

相変わらぬふざけた笑みを浮かべている。

「俺としては二度会う悪魔なんていないことになってるんだけど！初見でチョンパなわけですよ！」

「言いたいことはそれだけか？」

「はあ？」

当方はフリードに接近する。その途中で床に突き刺さった槍を回収し魔剣を構えた。

「人が話している時に割り込むなんてやつぱり悪魔様は悪魔様様ですねぇ！人が話している時は聞いておくことって習わなかったのかあ？だめだよねぇ〜礼儀がなっていないのは。人の話は最後まで聞いた方がいいよ！」

だからさあ、ムカつくわけで！死ねと思うわけよ！」

「ならお前が死ね」

間髪入れずにフリードに剣を振るう。フリードはソレを光の刃で受け止めた。

「てめえら、アーシアさんを助けに来たんだろう！」

「それがどうかしたか！」

「ハハ！あんな悪魔も助けちゃうビツチな子を救うなんて悪魔様はなんて心が広いんでしょうか！というか、悪魔に魅入られている時点であのクソシスターは死んだ方がいいよね！」

数合打ち合う。やはり、経験差から少しづつ追い詰められている。

「アーシアをどこにやった！」

フリードを弾き飛ばしたタイミングでイツセーがそう聞いた。

「んー、その祭壇の下に地下への階段が隠されてございます。そこから儀式が行われている祭儀場へ行けますぞ」

「……余裕だな」

後に飛びのき3人の元まで下がる。

「セイクリッド・ギアア！」

イツセーは神器を装着、ユートは剣を鞘から抜き打ち、小猫ちゃんは……

「……潰れて」

自身の何倍もある長椅子を投げた。

……当方も結構、あれの似たような事してるからなんとも言えないな。

「わーおーしゃらくせえー！」

フリードは長椅子を光の剣で一刀両断にした。

両断された長椅子が床に叩きつけられる。

「そっだ」

ユートが飛び出し剣と剣で火花を散らす。

「んーんー！邪魔くせえー！しゃらくせえー！てめえら、なんでそんなにウザイのよ！もう

チヨベリバ！死語でごめんね！死後に許してちよ！

当方は武器を銀の銃に持ち替え偏差射撃で援護するがそれすらもフリードは見切っている。

「ユート！少しは本気出せ！」

「わかった………よ！」

撃ち合う最中にユートの魔剣が闇を放出する。

闇は剣を覆い、闇の剣へと性質を変化させた。

「な、なんだよこりゃ！」

フリードの驚く声^{セイクリッド・ギア}が心地いい。驚くのも無理はない。自身の武装が闇の剣に侵食されているのだから。

「神器！動けえええ！」

『Boost!!』

「おつとお!?これはなかなか不味いですぞ！」

「それならさっさと倒れちまえ！プロモーションッ！《戦車》^{ルイック}ッ！」

「な！《兵士》^{ポーン}だど!?!」

「《戦車》^{ルイック}の特性！ありえない防御力と！」

イツセーの拳がフリードの顔面に食い込む。その時、硬い音がした。

当方はそれを聞いた瞬間に魔剣を手に駆ける。
フリードはその時、既に吹き飛ばされていた。

「文字通りの馬鹿力だ」

イツセーは笑っている。だが、まだ敵は健在だ。

よろよると立ち上がる瞬間に魔剣のへりでさらにぶっ飛ばす。

神父は壁にめり込みズドンと床に伏せる。

「……そこで……寝てろ！」

第6話 《けっせん!ディアボロス!》

イカれ神父のフリードを倒し、武装を奪い無力化する。

無闇に殺すのはアイツと同類になるためしない。

光の刃を出す柄だけの剣もナイト・オヴ・オーナー《騎士の誉》で奪取させて貰った。

そして、祭壇の下にあった地下への階段を下った。

どうやら地下まで電気が来ているようだ。

当方が先頭、小猫ちゃんが殿を務め進んで行く。

階段を下り終えると奥へ続く一本道だけが存在していた。両脇の壁には複数のドアがあるが……

「たぶん、この道の奥……。あの人の匂いがするから……」

つまり、儀式場はこの奥か。

小猫ちゃんの言葉を信じ、ひたすら進む。

最奥には大きな扉があった。

「あれか」

「おそらく、奥には墮天使と祓魔師の大群が存在すると思う。覚悟はいい?」

ユートの言葉に当方たち3人は頷いた。

「わかった。じゃあ、扉を」

ユートと当方がドアに手をかけようとしたとき、ひとりでに扉が開き出した。重い音を立てながら、儀式場とやらの内部が見えてくる。

「いらつしやい。悪魔の皆さん」

そこには件の墮天使レイナーレがいた。

他の人物は全員はぐれ被魔師だろう。

光の刃を発生させる剣を手にしていた。

「……アーシアアア!!」

イツセーが奥の十字架に磔にされている少女を見て叫ぶ。

イツセーの声に気がついたのか少女はこちら側に顔を向けた。

「……イツセーさん?」

「ああ、助けにきたぞ!」

「イツセーさん……」

イツセーの言葉に涙を流すアーシア。

その状況を卑しい笑みで見るレイナーレ。

「感動の対面だけれど、遅かったわね。いま、儀式が終わるところよ」

儀式が終わる？

一足遅かったということか!?

突然、アーシアの体が光りだした。

「……あああ、いやああああああッツ!!」

アーシアが絶叫を放つ。とても苦しそうに。

「アーシア!」

イツセーは駆け寄ろうとするが神父たちはそれを囲む。

「邪魔はさせん!」

「悪魔め!滅してくれるわ!」

「どけ!クソ神父ども!おまえらに構っているヒマはねえんだ!」

バン!

大きな音、小猫ちゃんが神父の1人を殴り飛ばした音だ。

「……触れないでください」

ユートも闇の剣を抜き放つ。

「最初から最大でいかせてもらおうかな。僕、神父が嫌いだからさ。こんなにもいるなら、遠慮なく光を喰わせてもらおうよ」

ユートは冷徹な声とともに剣に闇とともに殺気を纏わせる。

「当方も本気を出していく」

今までの《騎士ナイト・オブ・オーナーの誉》は第一解放段階。当方の体で制御できるだけの出力で発現させなければ体が振り回されてしまうのでいつもはこの状態だ。

だが

「《騎士ナイト・オブ・オーナーの誉》第二解放！」

今の当方なら脚に黒鎧を纏わせる第二解放段階も使いこなせる。

この状態ならひとつずつしか取り出せなかった武器が2つ以上同時に取り出せる。
銀の銃と魔剣を出現させ装備する。

「いやああああ……」

そうこうしているうちに、アシアの体から大きな光が飛び出した。

「これよ、これ！これこそ、わたしが長年欲していた力！セイクリッド・ギア神器！これさえあれば、私

は愛を！」

狂喜に彩られた表情でその大きな光をレイナーレは抱きしめた。

途端に眩い光が儀式場を包み込んだ。

光が止んだ時、緑色の光を全身から発する堕天使がそこにいた。

「うふふ……アハハハハハ！ついに手に入れた！至高の力！これで、これで私は至高の堕天使となる！私をバカにしてきた者達を見返すことができるわ！」

高笑いする墮天使。

その時、イツセーが駆け出した。

当方たちはイツセーに立ちふがろうとする神父どもを吹っ飛ばす。

ユートの魔剣が光を喰らい、小猫ちゃんが武装を無力化された敵を怪力一発で打倒する。

当方は神父どもの足を狙い、行動を阻害する。

無音で放たれる弾丸を避けるためには目線や銃口で弾道を見る必要があるが、そんな暇はない。

洗練されたコンビネーションにより神父は次々に戦闘不能になる。

「サンキューー…3人ともー」

磔にされたアーシアに駆け寄るイツセー。

手足の拘束具を解き、彼女を抱きかかえていた。

「……イ、イツセーさん……」

「アーシア、迎えにきたよ」

「……………はい」

返事をする彼女の声はあまりにも弱々しい。

それもそのはず

「無駄よ。セイクリッド・ギア 神 器を抜かれた者は死ぬしかないわ。その子、死ぬわよ」

「……っ！なら、セイクリッド・ギア 神 器を返せ！」

怒鳴るイツセー。そんなことで墮天使は神器を返すはずも無く。嘲笑を向けた。

「これを手に入れるために私は上を騙してまでこの計画を進めたのよ？返すわけないじゃない。あなたたちも殺して証拠は残さないわ」

「……くそ、夕麻ちゃんの姿が憎いぜ」

その一言を聞いて墮天使は高笑いをする。

「ふふふ、それなりに楽しかったわよ？あなたとの付き合いは」

「……初めての彼女だったんだ」

「ええ、見ていてとても初々しかったわ。女を知らない男の子はからかいがあったわ」

「……大事にしようと思ったんだ」

「うふふ、大事にしてくれたわね、私が困ったことになったら、即座にフォローしてくれた。私が傷つかないように。でも、あれ全部私がわざとそういう風にしたのよ？」

「……初デート、念入りにプランを考えたよ。絶対にいいデートにしようって思ったから」

「アハハハ！そうね！とても王道なデートだったわ！おかげでとてもつまらなかったわ

よー!」

「……夕麻ちゃん」

「うふふ、あなたを夕暮れに殺そうと思っていたから、その名前にしたの。素敵でしょ? ねえ、イツセーくん」

今まで自分に聞かせるように言っていたイツセーの声が怒声に変わった。

「レイナーレエエエエエエエエエエツ!!」

「アハハハハハ! 腐ったクソガキが私の名前を気安く呼ぶんじゃないわよ!」

嘲笑するレイナーレ。

なんだ、こいつもただの悪党ってわけか。

「兵藤くん! ここでその子を庇いながらでは形勢が不利だ! 一度上にあがってくれ! 僕たちが道を開ける! さあ、早く!」

ユートと共に当方も神父を薙ぎ払う。

まだまだ神父はいる。この場で人1人守りながら戦うのは至難の業だ。

「リヴィ、小猫ちゃん、兵藤くんの逃げ道を作るぞ!」

「ああ!」

「……了解」

3人でイツセーの邪魔をしようとする神父を倒す。

武器を切り替えながら効率的に対処していく。
既にイツセーから入口までは道ができている。

「木場！リヴィー！小猫ちゃん！」

「先に行くんだ！ここは僕たちで受け止める！」

「さっさとそのお姫様を避難させとけ！」

「……早く逃げて」

「でも！」

「いいから行け！」

イツセーは入口前で少し葛藤していた。だがすぐに顔を上げた。

「木場！小猫ちゃん！帰ったら、絶対に俺のことはイツセーって呼べよ！絶対だぞ！俺たち、仲間だからな！」

それだけを言い、去っていった。

……当方は？

「とまあ、格好つけたものの……」

「少し量が多いね」

「骨が折れそうだ……な！」

そんな軽口を言いながら当方とユートは別々の方向に駆け出す。

走りながらもひとつまたひとつと敵を倒していく。

時に銃を命中させ、時に足で蹴り飛ばし、時に剣で切り伏せる。

小猫ちゃんも小猫ちゃんて敵を吹き飛ばしていた。

みるみるうちに神父たちは地に伏せる。

そして最後には

「後はお前だけだな。腐れ墮天使」

「あなたたち下級悪魔に私が倒せると思って?」

「もちろん」

当方はそう言いながら、戦いの最中で踏みつけ回収した光の刃を発生させる剣を何本も投擲した。

踏んづけて回収したせいとか、ボロボロなのが多い。

「悪魔であるまいし、そんなもので倒せるとでも?」

「思ってたええよ、ばーか!」

本命は槍だ。《戦車》で強化された筋力で投げる槍はちとばかし早いぞ?

「ユート、行けるよな!」

「もちろん!」

魔剣だけを構えてユートとともに突撃する。

その間にどうやら槍は避けられたようだ。

まあ、いい。

「こしゃくなー！」

光の槍を投擲する墮天使。闇の魔剣にはそんなものは脅威ですらない。

「さっさとー！」

「倒れちまえー！」

二人で墮天使に向かって剣を振る。

だが、墮天使は体を逸らして直撃を避けた。

「あら？ なかなか痛いわね？」

墮天使はそう言いながら傷口に手をかざす。

傷口は緑色の光に包まれ綺麗に消えてしまう。

「…!!」

「長期戦は不利になりそうだね」

「だな」

魔剣を構え直す。最悪、イツセーが帰ってくるまでもしくは部長たちが来るまで持ち

こたえればいい。

「イツセーに因縁がある相手だ。最後は主人公様に譲れるように活躍できるところは残

さないとな!」

※※※

side イッセー

「俺が悪魔になったから、ダメなんスか!?!この子の友達の俺が悪魔だからナシなんスか!?!」

悔しさに歯噛みした。

力がない。

俺には力がなかった。もっと、悪魔としての力があれば……。

アーシアを救えるだけの力があれば……。

そんな後悔を今更しても、彼女は再び微笑んでくれない。

俺は立った。

彼女を失った俺にできることはリヴィたちが足止めしてくれているレイナーレを倒すことだけだ。

俺は再び地下への階段に向かっていた。

side out

※※※

光の槍を魔剣で逸らし攻撃を与え続ける。

小猫ちゃんには後ろで機を伺ってもらっている。

《騎士》であるユートと《騎士の誉》第二解放で敏捷性が上がっている当方でないと光の槍を受けて死んでしまうかもしれない。

もつとも、小猫ちゃんが受け切る可能性だってあるが。

「一撃で倒さないと……キツイね」

はつきりいって物凄いジリ貧だ。

ゲームで無限に回復する相手を突破法がわからずに倒せない感覚に似てる。

「槍を投げても心臓をピンポイントで狙わないと無理か……」

闇の魔剣を使い続けると魔力が消費されて行く。

しかも、神父を倒していた時から全開だったのでそろそろ当方もユートも魔力が尽きる頃合だ。

そして、既に二人ともボロボロだ。

小猫ちゃんは戦車としての力が守っているのか当方たちほどの損傷はない。

「……返せよ」

その時、1人の男が儀式場に入ってくる。

「アーシアを返せよオオオオオオッ!!」

『Dragon booster!!』

イツセーの叫びに答えるようにイツセーの神器が動き出す。

手の甲に嵌められた宝玉が眩い光を放つ。

「墮天使だとか、神様だとか、悪魔だとか……そんなもの、あの子には関係なかったんだ」

『Boost!!』

「あの子は静かに……普通に暮らせたはずなんだ……!!」

「今更何を言うかと思えば! そんなこと、叶うはずがないわ! 異質な《セイクリッド・ギア神器》を宿した者はどこの世界でも組織でも爪弾き者になるのよ!」

「……なら、俺が。俺が、アーシアの友達として守った!」

「アハハ! 無理よ! だって死んだじゃない!」

とりあえず、分かったことがある。

人が死んだのに……自分が楽しんで認められるために人を殺したのに殺した人間のこ
とを笑うやつってというのは

当方も許せない。

「……お前に……あの子を笑う資格はない!」

神器は思いの力で動き出し、その力が決定する。

あと少しだけでいい! 動き回れるほどの力を貸してくれ!

「うおおおおおおお!!」

イツセーの咆哮と当方の咆哮が重なる。

当方たちは同時に動いていた。

「へえ！少し力が増したの？でもまだね！」

イツセーの拳も当方の剣も両方とも避けられる。

次の瞬間、レイナーレの両の手に光が集まりだし、何かを形成していく。

「力を込めてあげたわ！食らいなさいな！」

放たれたのは二本の光の槍。

両方ともイツセーに向かっていてる。

光の槍は悪魔にとって劇毒の武器。

擬似悪魔であり《戦車》の恩恵で防御力が上がっていても相当の痛みを感じる。

だから、今の当方たちにはそれだけで決定打になってしまう可能性の方が高い。

だが！

「しやらくせえええええ！！」

魔剣に最後の魔力を全て込め、解き放つ。

光を食らう闇を持って光の槍を二本同時に打ち消した。

だが、その欠片が当方たちに降り注ぐ。

「ぐああああ！！」

ものすごく熱い。前に受けた光弾とは桁違いの痛みが全身を突き刺す。

当方の体がいよいよ力を使い果たし地に伏せる。

「だれどこんな痛み!」

「!?」

「あの子が!アーシアが苦しんだものに比べたらなんだってんだよ!」

イツセーはそれでも立っている。

槍の欠片が体に入り内側から光という毒に蝕まれているにも関わらず。

「なあ、俺の《セイクリッド・ギア神器》さん。あの腐れ堕天使をぶっ飛ばすほどの力はあるんだろうな

?トドメとシヤレこもうぜ!」

『Explosion!!』

その時、当方は何故かその機械的な声に力強さを感じた。

「下級悪魔風情が!この私に勝てるといきがるなあアア!!」

レイナーレは片手で槍を形成し投擲しようとする。

だが

その槍は取り落としたように消えてしまった。

理由はかんたん

「正真正銘、今の当方の最後の魔力だ。文字通りの残り香でもこんなことができるんだ

ぜっ」

当方が銀の銃でレイナーレの腕を撃つたからだ。

「行け、イツセー！ぶつとばせええええええええ！！」

「うおおおおお！！」

イツセーの拳は吸い込まれるようにレイナーレの顔面に直撃する。

そして、力強く押し出しぶつ飛ばした。

ガツシヤアアアアン！

大きな破砕音を立てて、墮天使は壁に叩きつけられる。

墮天使は壁にめり込んだままピクリとも動かない。

死んだかどうかはわからない。だが…

「ぎゃーみる」

墮天使は倒したと言っただろう。

その言葉を聞いた時、魔力の使い過ぎだろうか。

当方の意識は闇の中に消えた。

第7話 《疲れた日にはミルクココアを》

「……んん」

目を覚ますと知っているが起きてすぐは見ない天井だった。

「……？」

寝ぼけ眼を擦りながら体を起こすとどうやら旧校舎の一室でソファアに寝かせられていることがわかった。

「……おはようございます」

どうやら小猫ちゃんが向かい側のソファアで当方を見ていたようだ。

「おはよう小猫ちゃん……つて……そんなに時間経ったのか？」

「はい。今は朝6時です」

つまり当方はあの後ずっと寝ていたことに……

まあ、いいか。

「そう言えば墮天使は？」

「リヴィ先輩が倒れたあとに部長によって消滅させられました」

「そうか……」

「どうやら墮天使は死んだもよう。消滅させたのに生きていたらソレはもはやホラーである。」

「……そう言えば、悪魔もホラーの産物だったりするよな
いや、どっちかというとおカルトか？」

「そう言えば体に受けていた傷が全て消えている。」

「どういふことだ？」

「傷はアーシア先輩が治療しました」

「……ん？アーシア？あの子は死んだんじゃ？」

「いえ、部長が悪魔イヴァイル・ピリスの駒を消費したことで転生しました」

「……へえ」

「確か、空いていた駒は《騎士》と《僧侶》の2つだけ。」

「つまり、アーシアはグレモリー眷属の《僧侶》として生まれ変わったってことか……
「ところでなんで当方はここで寝かされていたんだ？」

「魔法陣での転移なら家に帰すことも可能だったはず。」

「なぜ、旧校舎で寝ていたのか気になる。」

「リヴィ先輩の中にあつた悪魔イヴァイル・ピリスの駒が排出されて悪魔としての特性が無くなったからです」

「なるほどね……」

もつと変な理由も覚悟してたから少し拍子抜けだ。

「起きたところすぐに申し訳ありませんが部室に行ってもらいます」

「わかったよ」

※※※

小猫ちゃんとトボトボ歩きながら部室に向かう。

部室の前でユート、姫島先輩と出くわした。

「おはようリヴィ。無事に治ったんだね」

「ごきげんようリヴィくん。体は大丈夫かしら？」

「おはようございます。姫島先輩、ユート。体の方は大丈夫みたいです」

軽く言葉を交わし部室に入る。

中には既にリアス部長、イツセー、アーシアがいた。

「おはようございます、部長、イツセー、アーシアさん」

「おはようございます、部長、イツセーくん、アーシアさん」

「……おはようございます、部長、イツセー先輩、アーシア先輩」

「ごきげんよう、部長、イツセーくん、アーシアちゃん」

みんなの呼び方からしてアーシアを既に眷属の一員として認めているようだ。

イツセーもみんなからイツセーと呼ばれており以前より距離が近くなったと思う。

「さて、全員が揃ったところでさきやかなパーティを始めましょうか」

部長はそう言うのと立ち上がり指を鳴らした。

すると、テーブルの上に大きなケーキが出現した。

これも魔力を用いたらできるのかな？

「た、たまには皆で集まって朝からこういうのもいいでしょ？あ、新しい部員もできたことだし、ケーキを作ってみたからみんなで食べましょう」

部長が照れくさそうにいった。

それにしても手作りケーキ……

昨日の戦闘のあとに作り出したのか？

だとしたらお疲れさまです部長。

それはそれとして、ありがたくいただきます！

まだ明確な目的はできてないけど、とりあえずは上級悪魔を目指して頑張ってみようと思う。

何故かって？

できることなら登りつめたくなるよね、何事も

戦闘校舎のフェニックス

第8話 《不死鳥襲来》

「部長のお悩み？」

墮天使レイナーレとの戦いから数日後。

授業も終わり疎らに部活に行くもの、自宅に帰るもの、はたまた校内に用があるもので忙しく音で溢れている駒王学園。

当方たちはオカ研部室がある旧校舎に向かうために廊下を歩いていた。

たまにイツセー、アーシアと合流する。

今日は渡り廊下で合流したがイツセーがこう問いかけた。

「部長が最近、心ここに在らずって感じなんだけど悩みとかあるのかな？」
当方はうーんとうなる。

そもそも当方は部長とはそんなに付き合いが長くない。

ほとんどイツセーと同レベルだ。

だから、何に付いて悩んでいるのかとかさっぱりわからない。

当方はユートの方をチラッとみる。

聞くところによると4年の付き合いらしい。

ユートならわかるのではないだろうか？

「部長のお悩みか……たぶん、グレモリー家に関わることじゃないかな」

「ユートでこれだから当方には全く検討がつかないな……まあ、朱乃さんなら何か知ってそうではあるけどな」

「朱乃さんは部長の懐刀な訳だしね……」

呼び名が変わったことについては……まあ、色々あったと言っておこう。

堕天使を倒した後は本当に色々あった。

鎧武者（外国人女性）と騎士（転生悪魔の騎士ではなくマジモンの西洋の騎士）のラブラブ大合戦やアーシアの悪魔としての初仕事、あとは……ああ、突如当方の家に大量の銃火器を送り付けられた事件もあったが、まあいつか話すとして今はいいだろう。

そんなことを考えていたらいつの間にか部室の前。

だが、普段は感じない気配を部室の中から感じた。

ユートと顔を見合わせ頷く。

「……う・どうしたんだ、二人とも？」

イツセーはそんなことつゆ知らず、部室の扉を開けていた。

室内には部長、朱乃さん、小猫ちゃん。

そしてあと一人。確か部長のお兄さんにあたる現魔王サーゼクス・ルシファー様の《女王》グレイフィアさんだ。

部長は機嫌の悪そうな面持ちで、朱乃さんはニコニコしながらも冷たいオーラを漂わせている。

小猫ちゃんは部屋の隅の椅子に座っていた。

会話のない張り詰めた空気が室内を支配している。

ユートが「まいったね」と小さく呟いた。

「…まったく、その通りだな」

当方も小さく呟いたところで部屋に入る。

まあ、もちろんこんな空気なら挨拶が来ることもない。

余裕が無いのかそれとも……

「全員揃ったわね。では、部活をする前に少し話があるの」

「お嬢様、私がお話ししましょうか？」

部長はグレイフィアさんの申し出を断ると話を続ける。

「実はねー」

部長が口を開いた瞬間だった。部室の床に描かれた魔法陣が光り出す。

転移現象だ。

魔法陣の一部……グレモリーの紋様が変化し別の家の物に変わる。

たしかあれは…

「フェニックス」

つい、ポロリと出てしまった。

なぜ知っているかというのと、一応の知識は全て頭に叩き込んだからだ。

室内を眩い光が覆い、魔法陣から人影が姿を現す。

ボワッ！

魔法陣から炎が巻き起こる。火の粉がチリチリと肌を焼く。

炎の中には男性のシルエツト。それが腕を横に薙ぐと、周囲の炎が振り払われた。

「ふう、人間界は久しぶりだ」

そこには赤いスーツを来た男が1人。

スーツは着崩されておりネクタイもせずシャツをワイルドに開いている。

男は部屋を見渡し、部長を捉えると口元をにやけさせた。

「愛しのリアス。会いに来たぜ」

…なんだろ、魂胆が見えてきた感じがする。

婚約者で部長が好意的に思っているのなら早く当方たちに言うはずだ。つまりは…

部長が婚約に反対しているということになる。

えたようだ。

……ん？確か《ブエル》も七十二柱の悪魔の内の一人だったような……ま、今はたぶん関係ないか。

そういうわけで部長の家系であるグレモリー一族はお兄さんのサーゼクス・ルシファー様は家を出られた。

だからグレモリーが潰えるかもしれないから早々に婚約を決めたいらしい。

まあ、部長は反対してるけど

まあ、当方は部長の下僕（仮）だ。部長の決定に従うだけだし、そもそも家の問題に口出しできると思っていない。

「私は家を潰さないわ。婿養子だつて迎え入れるつもりよ。でもそれはライザー、あなたじゃないわ。私は私が良いと思った相手と結婚する。」

古い家柄の悪魔にだつて、それぐらいの権利はあるわ」

その言葉を聞いてライザーは機嫌をわるくする。

そりゃあね、婚約者からそんな言葉を聞くとそうもなる。

「……俺もな、リアス。フェニックス家の看板背負った悪魔なんだよ。この名前に泥を塗るわけにはいかないんだ。俺は人間界があまり好きじゃない。この世界の炎と風は汚い。炎と風を司る悪魔としては、耐えがたいんだよ！」

ライザーの周囲を炎が駆け巡る。

それと共に大きなプレッシャーを放った。

「俺はキミの下僕を全部燃やし尽くしてもキミを冥界に連れ帰るぞ」

殺意と敵意が室内に充満する。

何故だろう。体が昂ってきた。

体中の毛穴がざわつく。何か体がまとわりつく感覚。

これほどの強敵を倒せたらどれだけ心地いいんだろうか。

当方は口角を上げいつでも騎士の誉を起動できるように待機しておく。

部長はライザーと対峙し、赤い魔力のオーラを薄く発し始めている。

ライザーも体に炎を纏い始めた。

魔力が高まりあい、室内は一瞬即発の空気に包まれた。

だが、そこでグレイフィアさんが冷静に介入した。

「お嬢様、ライザーさま、落ち着いてください」

鶴の一声で両者の魔力が収まり始める。

それ程までにサーゼクス・ルシファー様の影響力があるということだろう。

殺気を巧妙に隠すグレイフィアさん。

それが一番怖い。

「こうなることは、旦那様もサーゼクス様もフェニックス家の方々も重々承知でした。正直に申し上げますと、これが最後の話し合いの場だったのです。これで決着がつかない場合のことを皆様方は予測し、最終手段を取り入れることにしました」

そこからはさらに簡単。

グレイフィアさん曰く

「意見を通すならばレーティングゲームでライザーに勝て」

とのこと。

レーティングゲームとは下僕同士を戦わせて競い合う爵位持ちの悪魔たちのゲームだ。

……当方ってどうなるのだろうか

というか、その前に成人前では参加出来ないんじゃないやなかったっけか？

ところがどっこい。グレイフィアさんの説明を聞くと非公式の純血悪魔同士のゲームなら半人前の悪魔でも参加できるのだとか。

部長もライザーも純血悪魔。条件は満たしている。

もちろん部長はレーティングゲームを受けることにした。

ライザーはレーティングゲームに勝ったら部長と即結婚という条件でその要求を飲んだ。

当たり前のことだが二人とも負ける気はさらさらないようだ。

「なあ、リアス。まさか、ここにいる面子がキミの下僕なのか？」

「だとしたらどうなの？」

部長は若干イラつきながらもライザーに答えた。

ライザーはクククと面白いものでも見たかのように笑い出す。

「これじゃ、話にならないんじゃないか？キミの《女王》である《雷の巫女》ぐらいしか俺のかわいい下僕に対抗できそうにないな」

そう言いながら、ライザーは指をパチンと鳴らした。

魔法陣が輝き出す。紋様はやはりフェニックス家。

魔法陣から続々と人影が現れる。

……総計15人。あつちはフルメンバーか。

「と、まあ、これが俺のかわいい下僕たちだ」

鎧を着込んだ騎士、フードを深く被った魔導師、チャイナ服の闘士に十二単をしている人まで十人十色だ。

こちらの戦力は部長含めて7人。対してライザーは眷属だけで15。倍以上の人数差だ。

まあ、それも重要なのだが……特筆することはあとひとつあった。

ライザー眷属、全員女性なのだ。

しかも、全員が美少女もしくは美女。

全員女性であるということはそれ相応の理由があるはずなのだが……

まさか、全員が朱乃さん級なはずがないし……というか、全員が朱乃さん級だったら勝ち目がない。

そこでふと横に目をそらすとイツセーが号泣していた。

……そう言えばハーレムを作るのが夢とか言っていたな。

当方は……うん。ハーレムなんて烏漣がましいので先に20人ほど友達を作りたいです。ハイ

第9話 《特訓 とりあえず強くなろう》

「ん〜いい天気だ。絶好の特訓日和だな、そう思わないか、イツセー」

「ひーひー………」

いま、当方たちは山にいる。今朝、突然現れた小猫ちゃんとユートに身支度をすまう言われて集合。

皆でここに来た。

空は雲ひとつない快晴。周囲は自然豊かな木々が生い茂り、小鳥がさえずっている。山の風景としては最高だ。

問題があるとすれば土肌がむき出しの山道だろうか。

当方は歩く度にガチャガチャ音を立てる。

先日、アミティエ・ブエルを名乗る悪魔から大量の銃火器を受け取った当方は訓練の一環として当方の荷物十所持している銃火器を巨大なバツクに詰められ持たされている。もちろん肩にもバツクをかけられその中にも銃火器は入っている。

重い重くないの問題じゃない。

これらをひとつでも落とした時が怖い。

目的地にはつけるだろうが思いの外神経を使う。

ユートは途中で山菜を見つけて摘みだす。

イツセーは先程から急加速↓停止↓休憩↓急加速を繰り返している。

燃費が悪いとは思うが口には出さない。

なお、当方は小猫ちゃんと同じペースで歩いている。

まあ、小猫ちゃんの方が荷物の大きさはあるけどね。

こんなことをしながら、当方たちは目的地である別荘にたどり着いた。

※※※

木造の別荘の中に入ると木造独特の木の香りが鼻に入り込んできた。

リビングに一旦荷物を置き、銃火器を収納する。

あー重かった。戦車の力でどうにでもなるけど。

「じゃあ当方は着替えてくる」

青紫のジャージを持って当方は空き部屋に入る。

これからレーティングゲームに向けた特訓が行われる。

この特訓が終わる頃に自分がどれだけ強くなっているか……

気になるな。

とりあえずは魔力の扱い方を覚えよう。それと神器についての理解も深めるとしよ

う。

当方が着替え終わりリビングに戻ると既に全員が集まっていた。
やはり、銃火器の収納に時間をかけすぎたか……

※※※

レッスナー ユートとの剣術修行

「今思うけど、リヴィも教える側じゃないのかな？」

「眷属歴というと当方とイツセーはさほど変わらないぞ」

「そうじゃなくてさ……」

当方は木刀でユートと打ち合いをしていた。

剣の修行だ。母から教わっているとはいえ様々な相手から教わるのが良いと思い、今回の特訓は当方は鍛えられる側にした。

「まあ、剣術はさほど重要視はしてないけどな。

他の流派の型と自分のが混ざったら面倒だ」

役割でいうと《騎士》と《戦車》。やはり敏捷性というとユートに分がある。

《騎士の誉》の第二解放ならやりようがあるだろうが……

「まあ、それでもやるけどな」

「そう」

ゼーハーゼーハーいいながら呼吸してるイツセーを尻目に剣を構える。

「さて、イツセーくんも交えてやろうか！」

「2対1でするつもりか？ いいぞ、手加減はしないがそっちは頼む！」

レススン2 朱乃さんとの魔力修行

「体全体のオーラを流れるように集める……」

ユートの次は朱乃さんに魔力について教えて貰っている。

集中し朱乃さんに言われたことを暗示をかけるように唱える。

徐々に青い魔力の塊が集まっていく。

大きさはおよそピンポン玉ぐらいの大きさ。

ふと、隣を見てみるとアーシアが魔力を収束するのに成功したようで淡い緑色の魔力の塊を手のひらに作り出していた。大きさはソフトボールほど。

なお、イツセーは米粒程度の大きさだった。

「あらあら、やつぱりアーシアちゃんは魔力の才能があるかも知れませんか」

朱乃さんに褒められ頬を赤く染めるアーシア。

当方はどうやら魔法については平均より少し上程度らしい。

中の上って感じか。

「では、その魔力を炎や水、雷に変化させます。これはイメージから生み出すこともでき

ますが、初心者は実際の火や水を魔力で動かす方が上手くいくでしょう」

朱乃さんがペットボトルの水に魔力を送る。

すると水は鋭い棘と化してペットボトルを内側から突き破った。

「アーシアちゃんとリヴィくんは次にこれを真似してくださいね。魔力の源流はイメージ。とにかく頭に浮かんだものを具現化させることが大事なのです」

と言われたので試しにイメージしてみる。

母に言われて水流のように自在に攻から守に転じることをイメージすることを余儀なくされた当方は水をイメージすることが得意だ。

というか、想像するのは得意だ。

数学の立体図形の問題等も想像して解いている。

まあ、方向性が違うかもしれないが。

「あらあら、リヴィくんは水を生み出すのが得意なようね」

気がつくと当方の手のひらには水球が浮いていた。

……自分でやったのに言うのもあれだが気味が悪いな。

レッスン3 小猫ちゃんと組手

「のああああ!?!」

「ぬががああああ!?!」

ドゴツ！ドサツ！という音が響く。

当方は2回目。イツセーは10回目の巨木との抱擁を交わしていた。

「……リヴィ先輩、全力で来てください。練習になりません」

なぜ小猫ちゃんがこんなことを言うかというと、今の当方の状態は擬似悪魔状態で止めているからだ。

つまり小猫ちゃんは《騎士の誉》の第二解放を使えと言っている。

馬鹿げた腕力と強固な防御力。

当方と小猫ちゃんは与えられた駒こそ同じだが当方は完全に悪魔になっていない。

そのため、悪魔の駒による恩恵が少なく、悪魔の弱点である光が効きにくいのだ。

そして、《騎士の誉》による身体能力向上によってようやく同じステージに立つ。そう言ってもいい。

「じゃあ、お言葉に甘えるとしようか《騎士の誉》ナイト・オブ・オーナー第二解放！」

というわけで当方は腕と脚に黒鎧を纏う。

少し飛び跳ね感触を確認する。

「さて、もう1セット頼むよー」

レッスン4 イツセーに銃撃を仕込む

まさかの当方が教える側である。

なんでも、一応銃の扱いを眷属全てに教えておいた方がいいとの事。

とりあえず、ハンドガンを取り出す。

「まずは当てるところからだな」

「おう！」

銃を水平に構え木から切り出した簡易ターゲットに標準を合わせる。

「始めの方は片手じゃ銃身がぶれるから両手で持つことをおすすめする」

ということで一応、両の手を使い銃を構える。

「反動は悪魔の身体能力のおかげでほとんど感じないからこのさい割愛する」

そして、引き金を引く。

「パアン」と音がし銃弾が発射される。銃弾は寸分の狂いもなく中央に風穴を開けた。

「ま、こんな感じ」

「今思ったけど、銃の使い方を学んだとしてどこで使うんだろうな？」

「当方が手渡しする可能性も考慮してののだろうか」

※※※

「……ほんとにこの量を現地調達したのか？」

そして晩御飯の時間になった。

食卓には豪華な料理が並んでいる。

肉料理は部長が仕留めた猪、魚料理も部長が釣ってきたらしい。

だが、美味しいのでそれ以降は味わうことに専念する。

どうやらほとんどが朱乃さんの手作りでスープはアーシアの手作りのようだ。

「さて、イツセー。今日一日修行してみてもうだったかしら？」

部長はお茶を飲みながらイツセーに問いかけた。

「どうやらイツセーは誰よりも修行の量が多かったのだとか。その感想を聴きたいの
だろうか？」

「……俺が一番弱かったです」

「そうね。それは確実ね」

「けっこうはつきりと言いつつ、この部長。」

「朱乃、祐斗、小猫はゲームの経験がなくても実戦経験が豊富だから、感じをつかめば戦えるでしょう。リヴィも母親から手解きを受けているみたいだし経験は浅くても実力は祐斗に並ぶわね。その点、あなたとアーシアは実戦経験は皆無に等しいわ。それでもアーシアの回復、あなたのブーステッド・ギアは無視できない。相手もそれは理解して
るはず。最低でも相手から逃げられるぐらいの力は欲しいわ」

とのこと。逃げも戦略の一つだ。

「強敵に背を向けて逃げ切るのは難しいだろうが無事に逃げることも実力のひとつと言えらるだろう。」

「当方は逃げるとなれば弾幕を張り、スタングレネードでも投げつけてしまえば逃げ切れる可能性が高くなるのでそんなに難しくは考えていないが。」

「そんなことを考えていると部長の話は終わったようだ。」

「その証拠に話題が移り変わっていた。」

「食事を終えたらお風呂に入りましょうか。ここは温泉だから素敵なのよ」

「温泉か……体にいい効力とかあつたらいいな。」

「疲労回復とか。」

「まあ、イツセーの考えることはある程度解っているから先制攻撃を仕掛けておく。」

「当方は覗かないからな、イツセー」

「僕も覗くつもりないよ、イツセーくん」

「当方はニヤニヤ顔、ユートはニコニコスマイルで言い切った。」

「バツカー！お、おまえらな！」

「わかりやすいほど慌てているな。」

「色々あるが今の状態もなかなか楽しい。」

「なお、風呂の後の特訓で無事に当方もイツセーと同じく筋肉痛コースとなった。」

原因は後々にわかると思う。

第10話 《特訓終了 もげかける手足》

あつという間に1週間が過ぎた。

ゲームで予想される連携や攻防の練習。

朝から晩までずっと特訓だった。

今は深夜。全員が寝静まった中、当方は森を駆け抜けていた。

いわゆる自主練だ。

《騎士の誉》の新しい段階に至ったのはいいが、いかんせん体がついて行っていない。

というか、反応速度が足りてない。攻撃のタイミングが合わないのは致命的だ。

なので、巨木のひとつに傷をつけ森を疾走。

傷をつけた巨木に攻撃を当てる。というものをしている。

もつとも母がいたらこんなことをせずに済んだかも知れないが。

目に写る木を速度を落とさずに避ける。

当方の特訓の完成のイメージは《戦車》は《戦車》でも《戦車》チャリオットだ。本来の《戦車》ルーク

との役割からは大きく外れるが強襲や侵略に長けるようになりたい。

そのため、高速機動の練習をしている。

暗い闇の中、木々が前から後ろへどんどん通り過ぎていく。

その中、傷を付けた巨木が目に入った。

その瞬間、手に武器を出現させ斬撃を行う。

ズガアアアン！

と音がする。

音の方を向くと巨木がメキメキと音を立てて折れるところが見える。

「おしっ！」

試行6回目にしてやっと成功した。

やっと反応速度が追いついた。身体能力を向上させるのだから反応速度も向上させ

てくれればいいのに……とか思ったのは内緒だ。

けれどもまだ1回。

1／6ではまだ低すぎる。

せめて1／2だ。

というわけで特訓続行。

試行回数15回を超えたあたりで腕と脚が負荷に耐え切れず曲がれない方向に曲がった。

※※※

「あだだだだだ!？」

芋虫のように這い蹲ってなんとか別荘にたどり着いた当方。

とりあえず、アーシアに会って治療してもらわないとこのままだと死ぬ可能性がある。
る。

ヤバイヤバイ

本格的に生命の危機とついでに小猫ちゃんに見られたら大きじ一杯分ほどしか残っていない先輩の威厳が消失しそうという危機も感じる。

扉を開けるのに一苦労し、階段の麓までなんとかたどり着く。

玄関の段差ですら超えるのに時間がかかったのに階段なんて1日かかっても無理かもしれない。

「……一階の方で朝が来るのを待つか？」

最終手段はそれだ。

痛みでろくに動かない手足を引きづっているうちに4時間ほど時間が経ってしまっている。

現在時刻は恐らく朝4時ぐらい。

2時間ほどで起床時間である6時だ。

あと2時間をこの激痛と過ごすと思うと辛い……

「……全部声に出てますよ。リヴィ先輩」

「……へ？」

声がした方を振り向いたら小猫ちゃんがいた。

やー、威厳がなくなりそうだな。

※※※

「……で、何でこんなことに？」

小猫ちゃんの怪力で近くの椅子まで運ばれた当方は事の顛末を話した。

「……馬鹿ですか？」

まあ、呆れ顔にもなるだろう。当方も傍から見たらアホなことしてるなと思う。

「たはは……申し訳ない……」

「ここで大人しくしておいて下さい」

そう言いながら小猫ちゃんは2階に上がっていった。

ズキズキなんて比じゃない痛みが全身を襲う。

さつきから目を逸らしているが肘が前に、膝が後になりかけている。

時間が経てば経つほど手足が変な方向に向いていつてる気がする。

気のせいだと願いたい。

そして、数分後。

バタバタと階段を駆け下りる音が聞こえる。

「だ、大丈夫ですか！リヴィさん！」

どうやら小猫ちゃんがアーシアを呼んだみたいだ。

「まあ、大丈夫ではないかな」

「治療します！」

「……その前に手足を元の向きに戻します」

と、小猫ちゃんが当方の腕に手をかける。

ま、まさか……

「あの……もしかして……」

「はい、リヴィ先輩の考えているとおりです」

ゴキ

と音とともに腕が元の向きに戻った……つて

「イテエエエエエエツツ?!?!?」

「うるさいですよ」

※※※

そして、日が昇り朝になった。

アーシアの神器《トワイライトヒリク聖母の微笑み》により痛みは引いたが寝れなかったので当方は少し

ポケーとしていた。

「リヴィ、少しいいかしら?」

そんな中、部長が声をかけてきた。

多分、さっきのことだろう。

「わかりました」

というわけで今は誰もいない部屋の一室で部長と向き合っている。

「あなた今朝、セイクリッド・ギア神器のせいで怪我をしたそうね」

「はい。アーシアさんに治して貰ったので今は痛みはありません」

「そう……それにしても……《ルーク戦車》の手足がもげかける程の出力が出るのね……」

部長は考え込む。恐らくはあの解放段階の使用禁止を検討しているのだろう。この特訓でできるようになったことは部長に報告している。

だから、当方の今の成長の度合いがわかっているのは当方自身と部長だけだ。

「……一度検証してみる必要があるわね」

「検証とは?」

「このあと、イツセーと戦いなさい」

「へ?」

「もちろん、ナイト・オフ・オーナー騎士の誉は第二解放でね」

……？何が狙いだ？

※※※

「ブーステッド・ギアを使いなさい。イツセー」

イツセーはこの山に入ってから神器の使用は一切禁止されていた。

その使用禁止が今は許された。その事にイツセーは困惑している。

「リヴィ、相手を頼むわ」

「わかりました」

部長に促され、当方は前に出る。

「二人とも、模擬戦が開始する前にセイクリッド・ギア神器を発動させなさい。そうね……発動から2分

後、戦闘開始よ」

「は、はい」

「はい」

当方たちは部長の言われるままに神器を起動させる。

「ナイト・オブ・オーダー騎士の誉」第二解放！」

「ブースト！」

『Boost!』

そして十秒毎にイツセーの神器から『Boost!』という音声流れる。

確か、この音声ができる度にイツセーの力が倍増するらしい。いやはや、とんでもない神器だ。

そして2分が経過した。

「いくぞ、ブーステッド・ギア！」

『Explosion!』

イツセーは力の増加を止め、ソレを解き放った。

その力は気配でわかるほど増大している。

2分ということは2の12乗分力が増大していることになっている。

つまりは4096倍か？

数字だけ見るととてもないな。

「その状態でイツセーはリヴィと手合わせしてみてちょうだい。リヴィ、相手を頼むわ」

「わかりました」

部長の指示に従い当方は木刀に魔力を流し込んだ。

朱乃さんから学んだ物質を強化させる方法だ。

「イツセー、剣を使う？それとも、素手でいく？」

「素手で行きます！」

使いこなせない剣よりも素手を取ったわけか。

まあ、手合わせと言って負けるつもりは一切ないけどな。

初速からギアを上げていく。

流石に一瞬で消えるほどの《騎士》のような敏捷性はまだ無い。

だが、一手一手の重さはユートンを既に上回っているぞ！

たかが4096倍で……

いや、無理だろ

ガンツ！

と音がする。

イツセーが咄嗟に腕を交差させ当方の攻撃を防いだのだ。

まあ、流石4096倍ってところかな。

当方もかなり本気で攻撃したのだが……

木刀からミシリと音がする。

「ツ！」

まさかここまでとは……

どうにかしないと勝ち薄そうだな。

だが、騎士の誉で貯蔵している武器の使用も騎士の誉で木刀を強化するのはこの手合

わせでは禁じられている。

そこにイツセーの拳が見える。

拳の速さが4096倍じゃなくて助かった。

速度まで4096倍になられると軽く音速は超えるだろうな。

軽く避けることに成功したが、有効打がないままじゃ部長の言う通りにはならない。

予想打にしない場所……上か下か……

下は地面だから無理だな。

上から行くか。

ゴツ！

と鈍い音がした。

イツセーは間髪入れずに蹴りを放つが、昨夜の特訓で動体視力も反応速度も上昇して

当方には避けやすいことこの上ない。

「イツセー！魔力の一撃を撃つてみなさい！魔力の塊を出す時、自分が一番イメージし

やすい形で撃つの！」

当方は耳を疑った。当たることはないだろうけど……

いやいや、4096倍ですよ？

死ぬって。

「ありがとう、リヴィイ。そういうことらしいわ、イツセー」

「どうやら部長は……まあ、呼ばれた時の会話で知っていたけど、イツセーに自信を持たすために手合わせを行ったようだ。」

その目論みは成功したようだ。

当方もまだまだということも痛感した。

「相手がフェニックスだろうと関係ないわ。リアス・グレモリーとその眷属悪魔がどれだけ強いか、彼らに知らせてやるのよ！」

『はい！』

全員が力強く返事をした。

その後は山籠り修行を続けた。

何回か手足がもげかけたがその他は順調に進んだと言っておこう。

第11話 《決戦開始 初のレーティングゲーム》

現在時刻は午後十一時四十分。

レーティングゲームは明日の零時から始まるのであと二十分ほどで始まる。

当方たちは待機場所であるオカ研部室で開始時刻を今や今やと待っている。

当方は学校の制服を着てホルスターを装備、そのホルスターには例の銀の銃が入っている。

なぜ学校の制服かというと

「私の眷属のユニフォームがあるとすれば、駒王学園の学生服かしら。オカルト研究部ですものね」

と笑顔で言われたからだ。

なお、他の面々はというと

ユートは手甲とすね当てを装備している。剣を壁に立てかけ集中力を高めているのだろうか、無言だ。

小猫ちゃん椅子に座り、本を読んでいる。手にはオープンフィンガーグローブ。格闘家が付けるようなもののだが何故か似合っている。無言だ。

イツセーとアーシアは静かに椅子に座っている。無言だ。部長と朱乃さんは……優雅にお茶をしている。余裕があるな。

なお、当方は暇なのでスケッチブックを持ち込み今の風景を書いている。気分的には授業中にノートに落書きをする感じ、それに似ている。

開始十分前となった頃、部室の魔法陣が光りだし、グレイファイアさんが現れた。

「皆さん、準備はお済みになりましたか？開始十分前です」

グレイファイアさんが確認すると、皆が立ち上がった。

グレイファイアさんが説明を始める。

「開始時間になりましたら、こここの魔法陣から戦闘フィールドへ転送されます。場所は異空間に作られた戦闘用の世界。そこではどんなに派手なことをしても構いません。使い捨ての空間なので思う存分にどうぞ」

レーティングゲーム用の使い捨ての異空間。

いやはや、普通に生きていたらそんな所に行く機会はないだろうな。

それに、何をやっても害が出ない世界というのはいい。

つまり、壊し尽くしても構わないということだ。

「今回の『レーティングゲーム』は両家の皆さまも他の場所から中継でフィールドの戦闘をご覧になります」

上級悪魔の人達に見られるのか……

それ自体はどうでもいいのだが、両家の皆さま……つまり、部長のお兄さんであるサーゼクス・ルシファー様もご覧になれる可能性が高いわけ……

「さらに魔王ルシファーさまも今回の一戦を拝見されております。それをお忘れなきように」

やっぱりか……

無様にやられることだけは避けなとな……

※※※

というわけで戦闘フィールドに転送した。

あの後にはイツセーがサーゼクス・ルシファー様が部長のお兄さんにあたるとはじめて知ったりしたが別段、重要な事じゃないだろう。

ちなみに転送された場所は部室だった。

『皆さま。このたびグレモリー家、フェニックス家の《レーティングゲーム》の審判役を

アービター

担当することになりました、グレモリー家の使用人グレイフィアでございます。我が主、サーゼクス・ルシファーの名のもと、ご両家の戦いを見守らせていただきます。どうぞ、よろしくお願い致します。早速ですが、今回のバトルフィールドはリアスさまとライザーさまのご意見を参考にし、リアスさまが通う人間界の学舎《駒王学園》のレプリカ

を異空間にご用意しました』

再現度がかなり高いな。前もって異空間に行くとは伝えられずに急に連れてこられて「学校です」と言われても信じてしまうほどには再現度が高い。

どんな力を使ったのだろうか？

悪魔の世界はまだ不思議だらけだ。

『両陣営、転移された先が《本陣》でございます。リアスさまの《本陣》が旧校舎のオカルト研究部の部室。ライザーさまの《本陣》は新校舎の生徒会室。《兵士》^{ホーン}の方は《プロモーション》をする際、相手の《本陣》の周囲まで赴いてください』

《プロモーション》チェスのルール同様、《兵士》が王以外の駒に変化できるものだ。

発動条件は相手陣地の最奥に攻め込むこと。

こっちの《兵士》はイツセー人だがライザー眷属の《兵士》はフルメンバーなので8人いる。全員が《女王》にプロモーションしたら厄介だ。

そのため、レーティングゲームの序盤は兵士同士が潰し合うのが定石らしい。

「全員、この通信機器を耳につけてください」

朱乃さんがイヤホンマイクタイプの通信機器を配る。

それを受け取り耳につける。どうやらこれで戦場でのやり取りを行うみたいだ。

『開始のお時間となりました。なお、このゲームの制限時間は人間界の夜明けまで。そ

れではゲームスタートです』

キンコンカンコン

鳴り響く学校のチャイム。どうやらこれが開始の合図らしい。

「さて、戦術を考えるわよ」

※※※

現在、当方は運動場近くの部室棟に来ていた。

近くにはユートが隠れており、当方が囷となつて敵を呼び寄せる役目を請け負っている。

まあ、部長に「別に倒してもいいですか？」と聞いたら笑顔で「できるなら任せるわ」と言った。

ふふ……いよいよ、母から叩き込まれたゲリラ戦闘が行えるのか……上手くいく保証はないが楽しみだ。

既に《騎士の誉》は第二解放で待機している。

『リヴィ、始めてちょうだい』

「了解です」

《騎士の誉》からマシンガンを取り出し構える。索敵と殲滅を同時にこなす。

それが当方に与えられた役割だ。

というわけで部室棟を駆け回る……
とでも思っていたのか？

「よっしっ」

S M A W ロケットランチャーを取り出す。

本来ならば両手で構える代物だが、今の筋力なら片手でこと足りる。

山籠りでわかった《騎士の誉》の特性のひとつ。

当方の魂に収納された普通の武器は何らかの魔力的強化が施されている。

これは、大木に向かって拳銃を撃った時に判明した。撃たれた弾丸が大木を貫通したのだ。

つまり、ロケットランチャーならばさらなる破壊力が期待できるはず……

まさか、壁の強度が鉄のように硬いわけではあるまい。

敵が潜伏していそうな場所に向かってロケット弾を放つ。

シュゴオオ

という音とともにロケット弾が部室棟に直撃。

大きな爆発とともに部室棟の一部を粉微塵にした。

すぐさまロケットランチャーを収納しマシンガンを空いている片手で持つ。

さて、ゲームを始めようか。

ロケット弾が着弾した直後、煙の中から二つの影が飛び出たのが見えた。おそらくは相手の《兵士》だ。

始めはマシンガンの弾幕で牽制、距離を詰めたところで光の刃を発する剣に持ち替え撃破するのが得策だな。

二人の少女が挟み撃ちをするように当方に襲いかかる。

2つの銃で真反対の方向にいる2つの標的には当てられないと踏んだのか？

だとした迂闊だったな。

そんなことを想定していないとでも？

もともとこっちは数では2倍ほどの開きがある。

2対1なんて全員が想定済みに決まっている。

マシンガンから吐き出された弾丸の群れは少女たちを襲うが流石にそれには当たってくれそうにない。

それはもちろん当ててるつもりがないからだ。

このマシンガンはデチューンで吐き出される弾がバラけやすいようになっている。

あえて命中精度を落としている。と言った感じだ。

これは、避けられることを前提にしたデチューンだ。

そもそも、弾幕を張る用なので命中精度は元よりいらぬ。

迂闊に回避するとバラけた弾が襲いかかる。

それを知らずが円を書くような軌道に少女たちは映るが次々に弾が当たる。

「…ツー」

1人の足に弾が命中したようで片足がカクンと地面に接触する。

こうなればこちらのものだ。

足を負傷した少女の元に駆けつつ、もう1人を牽制し続ける。そして、光の剣に持ち替え一閃する。

「撃破^{テイク}」

1人目を倒し、あと1人。

光の剣を収納し今度はデザートイーグルを取り出す。

デザートイーグルは強力な弾薬を安全に扱えることで有名だ。確か……マグナム弾だったか？

詳しくは知らないがとにかく威力が高い。

マシンガンで誘導し、デザートイーグルで確実に仕留める。

それが今の戦略だ。

その時、マシンガンの弾が切れたのか引き金が軽くなった。そうなたらすぐさま持ち替えるがその隙にどうやら物陰に隠れられたようだ。

マシンガンを撃ちすぎたようで少々見晴らしが良くなってしまった。

でも、慌てることは無い。

ドガアアン！

『ライザー・フェニックス様の《兵士^{ポーン}》2名リタイヤ』

逃げると思われた場所にはクレイモア地雷を仕込んである。これを使うことを提言した時はユートに呆れられたような目で見られたが気のせいだろう。

さて、部長の予測ではあと《騎士》と《兵士》が最低でも1人ずつはいるらしい。

レーティングゲームは始まったばかりだ。

第12話 《決戦継続中》

「さて、ここからどうしたものか……」

相手の《兵士》を二人撃破したあと、運動場は無音になっていた。

残った敵がどの駒の者かは知らないが、《騎士》のように敏捷性が高くないと弾幕をかいくぐれないと踏んだのだろう。

今、当方が装備しているのはデザートイーグルと光の刃の剣。

いい加減にこちらから相手を探しに行くべきだろうか。

「なあ、ユート。どうしたらいいと思う？」

『僕に聞かれても困るよ』

「だよね……ふむ」

少し考え込む。当方の予測ではそろそろ体育館での戦いが終わる頃だ。

……仕方ない。

ここらとしても不本意だが騎士の誉の解放段階を上げるとしよう。

「当初の予定通り、完全解放を使用する」

『了解、こつちもすぐに行動に移れるように待機してる』

「頼んだ。さてと……」
ナイト・オブ・オーナー
 《騎士の誉》リミットアウト 完全解放!!」

当方の体が騎士の誉によって出現する黒鎧に包まれる。フルフェイスの兜を頭につけ、魔力が黒い瘴気として漏れでる。

これが完全解放の姿だ。

完全解放のメリットは3つある。

ひとつは第一解放、第二解放とは段違いの身体能力の向上。

ひとつは際限無しに騎士の誉で貯蔵した武器を取り出せる。

あとひとつは……

「隠れるのならそれも結構。だがこちらには……」

当方はデザートイーグルを収納しBGM-71 TOWを取り出す。

これは対戦車ミサイルである。本来ならば半自動指令照準線一致誘導方式でミサイルを誘導するのだが……

そもその形状が従来のものとは違っている。

残っているのはスコープと発射装置などだけで、シルエットはほぼほぼ先程使ったSMAWロケットランチャーと大差ない。

それを片手で持ち、スコープをのぞき込む。

ピッピッと機械的な音と共にターゲットサイトが動いている。

ターゲットサイトが狭まり赤くなる。

……敵を察知したということだ。

「潜伏していても撃破する武装は整っている」

ドゴオオオン

TOWを発射した。その瞬間、茂みの中から人影が飛び出る。発射したタイミングから隙があると思ったのだろうか。たしかに半自動指令照準線一致誘導式のものにはレーザーサイトを弾着地点、もしくはターゲットに当て続ける必要がある。だがな

TOWはその弾道を自由自在に変える。しかも、速度を落とさずに。まっすぐに相手に向かっていく。

「え……キャアアア!!」

飛び出した敵は爆炎に包まれた。

これが完全解放の最後のメリット。

ある程度の改造がその場で行える。

今回はTOWの誘導方式を魔力感知に変えさせてもらった。これならば魔力を保持している悪魔ならば誰であろうと追尾できる。

他にも熱感知式やビーコン感知式に変えることも出来る。すぐさまどの誘導式か把握し対抗策を考え実行に移すほどの手腕はあちらにはなかったようだ。

「さて、あといつたい何人いるんだ？」

『ライザー・フェニックスさまの《兵士》^{ポイン}一名、リタイヤ』

本来の作戦では当方が囷になり潜伏している敵を炙り出し、実弾兵装で敵を撃破することだった。

少し順序や手段が変わったが問題は無いだろう。

ただ、完全解放は長時間行くと体力の消耗が激しくなる。この辺りで一旦ユートと合流するのが吉か。

と考えていたところにアナウンスが聞こえた。

『ライザー・フェニックスさまの《兵士》^{ポイン}三名、《戦車》^{ルック}一名、リタイヤ』

『皆、聞こえる？ 朱乃の最高の一撃とリヴィの強襲により敵の頭数はかなり減ったわ。最初の作戦は上手くいったと言っているでしょうね』

……なるほど、体育館ではイツセーたちに軍配が上がったようだ。

これであちらは残り9。数の利は少しずつ削り取っている。このままいけば勝てるだろう。

そう思っていた。

だが、現実はその上手くは行かない。

『リアス・グレモリーさまの《戦車》^{ルック}一名、リタイヤ』

「……小猫ちゃん」

このアナウンスを皮切りに戦闘は序盤オープニングから中盤ミドルゲームに移っていかうとしていた。

※※※

当方は最速でユートの隠れる体育倉庫の影に移動した。

もちろん、場所を把握されないように念の為に閃光爆弾を焚いてからな。

「聞いたか、今のアナウンス」

「ああ、どうやら小猫ちゃんがやられたみたいだ」

「これで9対5か……」

完全解放から第二解放に騎士の誉の段階を戻す。

大きく息を吸い、運動場をのぞき込む。

「敵はどんなのかわかったか?」

「どうやら残りは《僧侶》ベシヨップ《戦車》ルーク《騎士》ナイトが1人ずつみたいだよ」

「……体育館が潰れたから妥当と言えば妥当か」

先程、TOWが爆発したせいで運動場の一部にクレーターができているがさほど気にしない。

それに、イツセーがこちらに合流すれば駒の価値でいう戦力はこちらが上になる。

「イツセーと合流したら仕掛けるか」

「だね、イツセーくんを待つとしようか」

待つこと数分、体育館側からイツセーが運動場へ向かっている。

そんなイツセーをユートが腕を引いて止めた。

「ーッ！……ってなんだ、木場か」

「うん」

「当方もいるぞ」

イツセーは当方たちであることを確認すると胸を撫で下ろしていた。

敵だと思っていたのか？

「すまん、二人とも。小猫ちゃんは……」

「アナウンスを聞いているから僕らも知ってるよ。無念だったろうね」

「ああ、森にトラップを作る時も一生懸命だった。普段はなにを考えているかわからな

いが、今回は張り切っていたと思う」

「……勝とうぜ」

「もちろんだよ、イツセーくん」

「当たり前だ」

3人で拳をコツンとぶつけあう。

オカルト研究部の男子トリオが揃った。

そろそろ行動を起こしてもいいだろうな。

「で、これからどうするんだ？」

「まずはここを仕切っている《僧侶》^{ビショップ}《戦車》^{ルーク}《騎士》^{ナイト}を倒す。そして侵入ルートを確保するのが先決だね」

「体育館からのルートは部長の作戦で消し飛んだからな。あとは新校舎裏手の運動場を使うしかない。激戦になるだろうな」

そこで突如、女性の声が聞こえた。

「私はライザーさまに仕える《騎士》^{ナイト}カーラマイソン！こそこそと腹の探り合いをするのも飽きたー！リアス・グレモリーの《戦車》^{ルーク}に《騎士》^{ナイト}よ、いざ尋常に剣を交えようではないかー！」

……当方がさんざん銃火器を使っているのを見ていないのだろうか。

運動場のど真ん中で大声を上げるなんて撃つてくださいと言っているようなものだ。

しかし、母の教えは……

「名乗られてしまったら、《騎士》として、剣士として、隠れているわけにもいかないか」
「だな、当方としても同意見だ」

名乗られたなら名乗り返せ。そして、誇りある戦いをしろ。だとか。

それに、当方の神器の名前は《騎士の誉》。仮にも《騎士》と付いているのだから名乗

り返すのが筋というものだ。

……これって、さつきまで強襲してた奴の考えることじゃないのは当方も承知している。

「さて、行くか」

そう呟くと当方とユートは運動場……詳しくはカーラマインの待つ野球グラウンドに真正面から向かっていった。

「たつく……」

イツセーは諦めたように呟いたが当方たちを追って真正面から出ていく。

※※※

「僕はグレモリー眷属の、《騎士^{ナイト}》木場祐斗」

「同じく、グレモリー眷属の《戦車^{ルーク}》リヴィエール・A・ハルトマン」

「俺は《兵士^{ボーン}》の兵藤一誠だ！」

それを聞くとカーラマインは嬉しそうに口の端を吊り上げた。

「リアス・グレモリーの眷属悪魔にお前達のような戦士がいたことをうれしく思うぞ。堂々と正面から出てくるなど、正気の沙汰ではないからな」

それを聞き当方は呆れてしまう。

たしかに同意見だが、それは自分も頭おかしいです。と言っているようなものじゃないな

いか？

まあ、どうでもいいが。

「だが、私はお前達のようなバカが大好きだ。さて、やるか」

剣を鞘から抜き放つカーラマイン。それに答えるようにユートも銀光をきらめかせながら剣を抜き身にした。

「《騎士》同士の戦い。待ち望んでいたよ。個人的には尋常じゃない斬り合いを演じたいものだね」

「よく言ったーリアス・グレモリーの《騎士》よー！」

そうして騎士同士の戦いが始まる。

「さて、当方たちも始めるもするか」

「……気づいていたのか」

当方が振り向くもそこには仮面で顔の半分を隠したライザー眷属の《戦車》とお嬢様っぽい《僧侶》がいた。

「当方たちも《戦車》同士で戦うかい？」

「ああ、それもいいだろう」

そうして当方は再びデザートイーグルと光の剣を構える。それに対し、相手の《戦車》は拳を構えた。

「念の為、もう一度自己紹介だ。当方はグレモリー眷属の《戦車》、リヴェイエル・A・ハルトマン」

「ほう……私はライザーさまに仕える《戦車》イザベラだ」

「では……」

「勝負！」

第13話 《中盤（ミドルゲーム）》

拳と光の刃がぶつかり合う。

光の刃は実体があるので掴むことも殴ることも可能だが光は悪魔にとっては毒。それを武装しているとはいえ触れるとかなりの度胸が必要だろう。

つまり、当方が戦っている相手はそれほどの勇士だと言うことだ。

「なかなか、防御が……硬いな！」

「そちらもな」

イザベラの蹴りを刃で逸らし、デザートイーグルを撃ち込もうとするが強引に体をひねって繰り出された拳を避けるために弾道が逸れフェンスが弾丸によって弾け飛ぶ。

いつか、銃の誤射を狙われる可能性があるな。

「どうした？先程の全身鎧は使わないのか？」

「使おうにもその際を出してくれない癖になにを言うか！」

一度イザベラを腕力で強引に弾き飛ばしデザートイーグルを収納。

ユートから貰った魔剣を出現させる。

魔剣を手に握る頃には鋭い蹴りが当方の身を穿った。

「……ッウー」

肺の中の空気が抜ける感覚。

咄嗟に2つの剣を交差させ身を守ったが……

それでも重い一撃だ。

気を抜いたらこっちがやられる！

少しよろめいた隙にねじ込むように拳が続けざまに叩き込まれる。

フリツカーのコンビネーションが何発も剣のガードの合間を縫うように当方の体に入る。

騎士の誉第二解放では黒鎧は腕と脚のみ。

体は《戦車》の駒の恩恵と魔力で覆った服の防御力しか有していない。

拳が叩き込まれ少しずつ空気が口から漏れでる。

このままだと蓄積するダメージは洒落にならない。

重ねた剣をそのままイザベラに突進する。

イザベラは突然の事で困惑するが意に返さず突進のスピードを上げイザベラごと運動場を駆け抜ける。

「くっ……離れろ！」

イザベラは引き剥がそうと肘打ちを繰り返すが当方はそんなことでは止まらない。

やがて、運動場の壁に激突してようやくやく止まる。

すぐさま右に飛びのき距離を取る。

そして、特訓中に朱乃さんに言われたことを思い出す。

魔力はイメージ。頭に浮かんだものを具現化させる！

「ゼアアアアア!!」

想像したのはポンプが水を放水するところと水圧カッターだ。

結果、2つの剣は魔力で構成した水で覆われ水の刃で縦横無尽にイザベラを襲う。

水とは常に形状が変化する。

その攻撃は予想がしにくく軌道はどちらかというと鞭に寄る。

狙ったのは脚。機動力を削ぎ確実に仕留める！

何度も剣を振り回し攻撃を何度も命中させる。

「……………これでどう……………だ！」

魔力を放出するのは体力を使う。先程、短時間とはいえ完全解放を使った当方は少し息を切らせイザベラがいるであろう地点を睨む。

できればそのまま倒れて欲しい。

だが、そう上手く行かないのが現実だ。

「……………なかなかやるな。だが、ひと押し足りてない」

服装が水の刃で切り刻まれそこから生傷が痛々しく露出するもイザベラは立ち上がった。

先程の突進のせいでユート、イツセーからはかなり距離が空いてしまった。応援は期待できそうにない。

「まだ立ち上がるか……」

かと言って負けるつもりはもちろんない。

初めてのレーティングゲーム。

黒星でデビュー戦を飾るのは当方としても遺憾だ。

水の刃を再び剣に纏わせ戦闘の意を示す。

今度は当方の脚がもげかけた原因の技をぶつけてやる。

そのためには……

「ナイト・オブ・オーナーリミットアウト
《騎士の誉》完全解放!!」

完全解放を行い、身体能力を上げる必要がある。

漏れでる魔力を体内に戻し水に変換。

黒鎧で全身を覆い、その上をさらに水でコーティングする。

「これが今の当方の全力だ!」

「面白い、受けて立とう!」

水を後に放出しジェット噴射のように扱い加速する。

先程の突進とは段違いの速度でイザベラに迫る。

生半可な勇士では目で捉えることすら難しい速度。

音速には届かないかもしれないが、この瞬間だけならユートの速度を追い越せる。

それほどの高速機動。

イザベラを剣で上空にかち上げる。

そして、速度はそのままに当方も上空へ。

狙いはもちろん追撃。突然空に飛ばされたことで意表を突き強引に体勢を崩す。

360。全ての方向からの攻撃を防ぐのは至難の業だ。

「だアアアア！」

連撃を放つ。その攻撃はイザベラの体に当たり、無造作にその体を蹂躪した。

そしてトドメは至近距離での魔力放出。

ドラグ・ソボールの技でたしかあつたような気がする。

ゼロ距離での極太ビームの発射のような感じだ。

ドガアアアアン！

と大きな音を立てイザベラは放出された水と共に地面に追突した。

その体は光り輝き次第に透けていった。

そして、この場から消え去った。

『ライザー・フェニックスさまの《戦車》^{ルーク}一名、リタイヤ』

水を全て消し去り地表に着陸する。

そして、完全解放を解く。

魔力を消費しすぎた。やはりあの技は魔力の消費が早い。まだペース配分が掴めてない以上多用は厳禁だ。

「そう言えば……ユートとイツセーは……!?!」

その時だ。

突然、剣が地面から大量に生えてきたのだ。

危うく当たるところだった……恐らくはユートの《魔剣想像》だろうが……ここまで
のことができるなんて聞いてないぞ。

『ライザー・フェニックスさまの《兵士》^{ポーン}二名、《騎士》^{ナイト}二名、《僧侶》^{ビショップ}一名、リタイヤ』

……一気に大量撃墜だ。頭数はこれで3対6。数では逆転できた。

当方が辺りを見回すとユートとイツセーがこちらに向かって手を振っているのが見えた。

だが、その直後アナウンスが響いた。

『リアス・グレモリーさまの《女王》^{クイーン}一名、リタイヤ』

負けたのか？あの朱乃さんが？

たしかに驚愕する事実だが、今は戦闘中。

素早く判断をし動くことが大切だ。

すぐにユート、イツセーと合流する必要が……！

「避ける、ユート!!」

ドオオオオオオン！

当方が出した爆発音とは全く違う規格外の爆発音。

当方は駆け出すが魔力を大量に消費したので完全解放は行えない。

当方がつく頃にはユートは消えていた。

『リアス・グレモリーさまの《騎士^{ナイト}》一名、リタイヤ』

「嘘……だろ？あつけなさすぎる……」

パキツ……

運動場を支配していた魔剣たちは主がいなくなると儂い音をたて、一本、また一本と崩れていく。

数秒もしないうちに魔剣は全てこの運動場から消えていた。

「その《戦車^{ルック}》は危険ね。今のうちに退場願うわ」

当方はその声とともに放たれた魔力の塊と共に爆ぜた。

※※※

「……………ッ！」

痛みと共に体を起こす。

辺りを見回すとユート、小猫ちゃん、朱乃さんがいた。

「リヴィ……………君もか」

そこで当方はやつと認識した。

撃破されたのだ。

魔力も体力も消費してあの一瞬で。

反応すらできなかつた。

《戦車》イザベラとの一戦……………その時に放ったあの技が原因だろう。

「……………けど、まだ部長とイツセー先輩、アーシア先輩は残ってます」

小猫ちゃんは戦いのフィールドを中継しているスクリーンを見て呟いた。

「イツセーくんも部長もまだ体力を温存しているわ。勝機は十分にあるはずよ」

朱乃さんもそう言う。だけど……………

「くそっ！」

「悔しいよね……………分かるよ。その気持ち……………僕も…悔しいよ」

心に残っているのは悔しさだった。

しかし、もう見ることしかできない。

勝利を祈ることしかできない。

自分の不甲斐なさが苛立たしい。

「もつと……できたはずなんだ……もつと、なにか……」

「過ぎたことなんだ。今は祈ろう。部長たちの勝利を」

この数時間後

イツセーはライザー眷属の《女王》を撃破することに成功したがそれで力を使い果たしライザーに蹂躪され、部長は血と汗に塗れ力なく倒れたイツセーの頭を膝に乗せ

投了を宣言した。

第14話 《不死鳥（フェニックス）と赤い龍（ウエルシュ・ドラゴン）》

「……………」

あのレーティングゲームから二日後。

当方は部屋でスーツに着替えネクタイを緩めたり締めたりを繰り返していた。勝てなかった。

二日経った今でもそのことが悔しい。

敗北を糧にして次に勝てればいいが……

「リヴィ先輩、落ち着いたらどうですか」

「……………ん、スーツって着慣れなくてね」

レーティングゲームが終わってからイツセーはずっと眠っている。

それこそ死んだように。

早くしないと取り返しがつかないことになるぞ。

「皆様、準備はよろしいですか？」

「……………ええ、大丈夫よグレイファイア」

「あ、すいませんグレイフィアさん。イッセーにこれを渡してくれませんか？」
※※※

そして、当方たちはグレモリー家が用意した結婚式会場に転移した。
転移されたのは廊下のようなようだ。

大きな扉まで一本道で壁には蝋燭がずらりと奥まで並んでいる。

「皆様、こちらでございませす」

タキシードを着た執事らしき人が先導し案内をしてくれる。

どうやらグレイフィアさんは旧校舎に残ったようだ。

大きな扉が開かれ大広間に出る。

どうやらここが会場のようだ。

「リアスお嬢様はこちらへ。お連れ様はご自由にパーティをお楽しみください」
きらびやかな内装に包まれた広間は既に何人かの悪魔がいた。

部長と別れ当方たちは1度は別れ悪魔の方々に挨拶を交わした。

そしてその後合流した。

「わかつているわね、3人とも」

「はい、イッセーくんが来たら……ですな」

そして数十分後、ひとつの大声が会場に響いた。

「部長オオオオツツッ！」

そう、イツセーが来た。

周囲の悪魔の視線はイツセーに注がれている。

イツセーは駒王学園の制服のまま腰には銃の入ったホルスターがある、一見するだけで祝に来たのでないとわかる。

イツセーは胸いっぱい息を吸いこみ宣言した。

「ここにいる上級悪魔の皆さん！それに部長のお兄さんの魔王さま！俺は駒王学園オカルト研究部の兵藤一誠です！部長のリアス・グレモリーさまを取り戻しに来ました！」
会場がいつそうガヤガヤと騒がしくなる。

もちろんイツセーはそんなことに構わず部長とライザーの元に歩み寄った。

「おい、貴様……ここがどこだと……」

衛兵らしきものがイツセーを止めようとする。

さて、出番だ。

「《人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて死んじまえ》……まあ恋かどうかは知らないが」

当方たちは衛兵を止めるために衛兵たちに立ちふさがる。

これは前もって決めていたことだ。

イツセーが部長を取り戻すために殴り込みに来たら邪魔するであろう者達を当方たちで足止めする。

「イツセーくん！ここは僕たちに任せて！」

「……遅いです」

「あらあら、やつときたんですね」

皆、思い思いにイツセーに声をかける。

「部長を取り戻すのはお前の役目だ。さっさと行け」

「おうー」

当方とイツセーは拳を互いに合わせそう言葉を交わした。

その後、イツセーはサーゼクスさまのご意向によりライザーと決闘を執り行うことになった。

イツセーが勝った場合は部長を連れ戻すことを許可するとの事。

イツセーはもちろん勝つ気である。

策をこうじて来たのだろう。

※※※

会場の中央に急遽作られた空間。

その周囲にある関係者席に当方はいた。他の部員たちと一緒に座っている。

空間の真ん中にはイツセーとライザーが対峙している。

「部長、十秒でケリをつけます」

「……イツセー？」

イツセーの言葉に訝しげな表情を浮かべる部長。

そりやそりだ。

十秒といえど赤龍帝の籠手でも1回分の倍加しか行われない。

焼き鳥がなにやら言っているが当方は全く聞き耳を持たない。

そろそろスーツ姿であることがムズ痒くなってきた。

欲をいえば戦いたかった。

だが、今回の戦いの主役はイツセー。

当方じゃない。

「プロモーション！ 《女王》^{クイーン}！」

最強の駒に昇格したイツセー。どうやら最初から全力で戦うらしい。

「部長！俺は木場みたいな剣の才能はありませんッ！朱乃さんみたいな魔力の天才でもなければ、小猫ちゃんみたいな馬鹿力も、アジアのような治癒の力も、リヴィのような多彩な攻撃手段も持ってません！」

それでも最強の《兵士》になりますッ！

あなたのためなら、俺は神様だってぶっ倒してみせますッ！このブーステッド・ギアでッ！俺の唯一の武器でッ！俺はあなたを守ってみせます！」

イツセーはそう部長に誓った。

……これで負けてら笑いものだがイツセーが負けるのではないだろう。

先程すれ違う時に感じた気配。

今まで感じたことのない異様な気配。

「輝きやがれエエエエツツ!!オーバーブーストオッ!」

『Welsh Dragon over booster!!!』

イツセーの籠手の宝玉が赤い閃光を放つ。

そしてイツセーの全身が異様な気配で覆われた。

「……あれが……バランスプレイヤー禁手……聞きしに勝る迫力だ」

神器の全てが到れる可能性、禁手。

当方の騎士の誉もユートの魔剣創造も禁手に至る可能性をもちろん秘めている。

それは持ち主の思いに呼応し進化する神器の奥の手のようなもの。

先日、神器に目覚めたばかりのイツセーが到れるものじゃない。

つまりそれ相応の代価を払って条件付きであることが伺える。

……十秒で倒す……つまり、十秒しかもたないのか？

『X』^{テン}

イツセーの神器がカウントを開始した。

※※※

IX、VIIIと徐々にカウントが減っていく。

見ている当方でもかなり長い十秒。

イツセーの中ではもつと長く感じているだろう。

『VII』^{セブン}

ライザーの拳をイツセーがクロスカウンターの要領でカウンターを決める。

「そんなもの！効くと……ゴバツ！」

突如、ライザーの口から大量の血が吐き出された。

「十字架！十字架だど!？」

驚愕するライザー。会場にいる悪魔からも悲鳴が上がる。

十字架は悪魔の苦手とするアイテム。

恐らくアーシアから借りていたのだろう。

『VI』^{シックス}

「十字架の効果を赤龍帝の箒手で増大させたのか……単なる聖なる攻撃じゃ上級悪魔にはダメージは薄い。だが赤龍帝の箒手で高められたのなら例え不死身のフェニックス

でもそう簡単には癒せない」

当方はそう結論を出した。

「でもなんで十字架に触れていても無事なのかな？」

ユートはそう呟いた。

「……推測だが、自分の腕を禁 バランスフレイカー 手の代価として払ったんじゃないか？ 本物のドラゴン

の腕なら十字架は効かない……と思う」

「けど、そんなことをすれば……」

「イツセーの腕は元には戻らなくなる。けど……」

「それがどうした」

『ファイブ
V』

当方の言葉を引き継ぐようにイツセーが言う。

「俺みたいな奴の腕一本で部長が戻ってこられるんだぜ？ こんな安くて美味しい取引はないだろ？」

イツセーはそう言い切った。

イカれている。そうとも取れるイツセーの行動。

だからこそ放てる迷いない一撃。

それが今のイツセーの力だ。

『フォー
I V』

「うおおおおおおおおおおおおッ!!」

イツセーの拳とライザーの拳が重なり合う。

赤龍帝の籠手によって高められた聖なる力とフェニックスの炎が正面からぶつかり合い、眩い閃光と凄まじい衝撃を辺りに撒き散らした。

だが、それと同時に異様な気配……ドラゴンの気配は霧散してしまった。

閃光が晴れた時、当方はイツセーの変化に気がついた。

「鎧が……っ!」

まだ十秒は経っていないはずだ!

なぜ鎧が解除されたのか……まさか、基礎能力不足か?

神器の力……特にイツセーの赤龍帝の籠手は持ち主の基礎能力に応じて強くなる傾向にある。

鎧の力を制御できずに安全装置のようなものが働き強制解除されたのか?

ライザーがイツセーの首を絞め持ち上げる。

『《兵士^{ポイン}》の力でよくやったと褒めてあげよう。本当によくやったよ。正直、ここまでやれるとは思わなかった。ドラゴン使いの力、この身で十分に体験できた。おまえさんがあと一年……いや、半年、ドラゴンの力に慣れていたら俺は負けていただろうな』

ライザーは服も体もボロボロだった。

聖なる攻撃はやはり悪魔である以上ライザーにも効力があるみたいだな。

……なら、勝ったも同然だ。

「うるせえ！鳥なら銃で撃ち落とされな！」

イツセーは手早く腰のホルスターから銀の銃を構えた。

当方がはぐれ悪魔を倒す時によく使う件の銃だ。

ここに来る前にグレイフィアさんにイツセーに渡すように頼んだものだ。

銀の銃単体では上級悪魔のライザーには傷をつけることはできない。

だが、イツセーには赤龍帝の籠手がある！

「ブーステッド・ギア！ギフト！」

『Transferr!!!』

倍増された力が籠手から溢れ出し銀の銃へ収束される。

そして、イツセーは引き金を引いた。

ゴオオオオオ!!

銀の銃からは光弾ではなく極光のレーザーが放たれた。

ライザーはイツセーから手を離すが既に遅い。

極光はライザーを飲み込み吹き飛ばした。

だが、銃も自身のキャパをオーバーした力で放たれた極光により自壊していた。
「がああああああ!!」

痛みによりのたうつライザー。

そんなライザーにイツセーは一步一步歩み寄る。

「リヴィイはメモでこう書いていた。勝つためには周りを見て全ての物を利用して意地でも諦めるな」

イツセーは床に落ちている十字架を拾い上げた。

「アーシアが言っていた。十字架と聖水は悪魔が苦手だって。それを同時に強化して、同時に使ったら、悪魔は相当なダメージだよな」

イツセーは懐から聖水が入っているであろう瓶を取り出した。

「木場が言っていた。視野を広げてる相手と周囲を見ろと」

『Transferr!!』

「朱乃さんが言っていた。魔力は体の全体を覆うオーラから流れるように集める。意識を集中さへて、魔力の波動を感じればいいと。ああ、ダメな俺でも感じられましたよ、朱乃さん」

イツセーは魔力を集中させ拳を構える。

「小猫ちゃんが言っていた。打撃は体の中心を狙って、的確に決り込むように打つんだ

と！」

イツセーは拳の標準を定めた。

「俺に難しいことはわからねえ。悪魔の未来だとか、純血がどうかわからねえ。でもな、おまえに負けて気絶したとき、うつすらとだけ覚えていることがある。」

部長が泣いていた。

部長が泣いていたんだ！そして、さつきも泣いていた！俺がてめえを殴る理由はそれだけで十分だアアアアアツツ！！

ドゴンツツ！！

十字架と聖水付きのイツセーの拳がライザーの腹を正確に抉り込む。

「ガハッ！」

ライザーは血反吐を吐きそのまま床へ前のめりに突っ伏した。

ライザーはその場では二度と立ち上がることはなかった。

※※※

「ちよつと行つてきますー！」

当方は我慢せずにイツセーに近寄つた。

本来は部長が行くべきだが今のイツセーには肩を貸す相手が必要だろう。

その証拠にイツセーはライザーが立ち上がらないことを確認すると後ろ向きに倒れ

た。

だが、その表情は笑顔だ。

「お疲れ様、イツセー」

「リヴィイか……悪い貰った銃壊しちゃった」

「いいさ、別に。立てるか？」

「ああ……と言いたいが肩を貸してくれねえか？」

「もちろん」

当方はイツセーを立たせると肩を貸して部長の方へ進む。

間に飛び込む影がひとつ。ライザーの妹だった。

「たつく……文句があるなら後にしろ。今は色々と立て込んでいるんだ」

当方はイライラを隠さずにそう言った。

イツセーはボロボロ。始めに声をかけるべき女性は既に決まっている。

するとライザーの妹は後ずさりきりきり道を開けた。

……物分りいいじゃん。

「ほら、行けよヒーロー」

こうして赤い龍ウエルシュ・ドラゴンと不死鳥フェニックスの戦いは幕を閉じた。

月光校庭のエクスカリバー

第15話 《聖剣の予感》

旧校舎裏手。そこには少しだけ草の生えてない開けた場所がある。

そこで当方はボールとグローブを持っている。

「……」

そしてボールを小猫ちゃんの持つミットに向かって全力で投げる！

ボールはありえない軌道を描き小猫ちゃんのミットの中に収まった。

なお、当方のグローブと先程投げたボールは黒くなつてたりする。

「……ナイスボールです」

来週には駒王学園球技大会が開かれる。

そこで行われる部活対抗戦に我らが部長、リアス・グレモリーさまは勝つ気である。だから眷属である当方たちは球技の練習をしている。

といつても種目は当日発表なので今はめぼしい球技の練習をしてるだけ。

今日は野球だ。

なんと、当方がピッチャー3番に指名され先程からキャッチャー4番の小猫ちゃんと

ペアを組み練習をしていた。

「やっぱりボールを文字通り我がものにできるリヴィがいるとなると野球は貰ったも同然ね」

いえ、部長。お言葉ですが球技大会で神器を使用するのは良いのでしょうか？

バツティングでもバットを騎士の誉によって強化して打てと言われた。

試しに軽くボールを打つてみるとホームラン並の飛距離があった。

まあコントロールは騎士の誉があつたら常軌を逸したものになるが、そもそも筋力がいらいしくカーブやスライダー、チェンジアップなら投げられる。

それになかなかの弾速だとか。

……銃器を乱射したり剣を振ったりしているので肩が強くなっているのだろうか？

「バツティングの練習はこんな感じでもいいわね。次はノックよ！さあ、皆！グローブをはめたらグラウンドにばらけなさい！」

なんとというか、気合十分な部長。ものすごくハキハキして元気だ。というか、闘志で燃えているように感じる。

「……焼き鳥との一件で部長って負けず嫌いになったよな」

「リヴィもそう思うか？俺もそう感じていたところだ」

「ほら！イッサーにリヴィも早く位置につきなさい！」

「はい」

「返事は短く、はつきりと！」

「はい！」

小学生か、当方たちは。

「ほら、アーシア！行くわよ！」

カーン！

部長がバットで弾いたボールがアーシアのほうへ飛んでいく。

「はう！あうあうあう……あつ！」

ボールはアーシアの股下を通して転がってしまふ。

「アーシア！取れなかったボールはちゃんと取ってくるのよ！」

「は、はいっ！」

やっぱり気合が違う。

やはり焼き鳥との一戦で負けたのが響いているんだろうな。

「次、祐斗！行くわ！」

カーン！

今度はユートの方にボールが飛んでいく。

普段のユートなら楽勝だったろう。

だが、最近のユートはどこかおかしい。

授業中もボーツとしてることが多く、今日なんて当てられた問題を即答できなかつたんだ。

しかも理由が

「すいません、何ページの問題ですか？」

とのこと。

大丈夫かな〜と思っていたら案の定頭にボールが命中していた。

「木場！ シャキツとしろよ！」

イツセーの言葉に気がつきユートはイツセーの方を向いた。キョトンとしている。

「……あ、すいません。ボーツとしてました」

……本当に大丈夫なんだろうか？

※※※

次の日の昼休み。

普段なら弁当や学食を食べて図書室で本を読んで過ごすところだが、今日はお昼を食べたら部室に集まることになっていた。

最後のミーティングをするらしい。

というわけで今日もユートと一緒に弁当を食べ（この間もユートはボーツとしてい

て) 部室に向かう。

部室には隣のクラスのイツセーとアーシア以外が既に集まっていた。

……なんでソーナ会長がこんなところにいるのだろうか

あ、ついでにサジもいる。

「……?」

「久しぶりですね。リヴィエール・A・ハルトマンくん」

「あ、はい。お久しぶりです、支取会長」

久しぶりというのは当方が入学したての時、休み時間全てにおいて図書室で過ごしていたからだ。

あの頃は変態三人衆ともユートとも仲良くなかったのが基本的な

朝、HRギリギリに登校(他のみんなが談笑している空気が当方にとって毒だった)↓
昼、すぐさまお昼を食べ終え図書室へ。予鈴がなつてから教室へ↓放課後、部活に入つてなかったので図書室へ。そのまま帰宅時間まで教室で自主学习

を繰り返していた。

そんな一年を不安に思った当時のソーナ会長(確か、その時はまだ会長じゃなかったと思う)に声をかけられた。

そして、当方はことある事にソーナ会長に友達を作るための相談を持ちかけていた。

今思えば、当方の中にある《騎士の誉》を狙っていたかもしれないが、そうではないと勝手に確信している。

何故なら、親身になって相談に乗ってくれたしなんなら生徒会にも誘われたこともある（その時はソーナ会長以外と話したことが最低限しかなかったのでやんわりと断った）

そういえば、ソーナ会長の応援演説は何故か当方が任されたっけな。

まあ、それはさておき。

なによりでいらっしやっただのだろうか？

「……………会長、なんでハルトマンがここに？」

サジがそうソーナ会長に聞いた。

「…？ソーナ会長には当方がグレモリー眷属になったことを伝えまし、悪魔同士なら気が付くものと聞いていたが……」

「……………あ、そうか」

当方は基本的に悪魔の駒を体内に宿すのは悪魔の仕事やレーティングゲームなどの戦いの時のみだ。

現に今の当方は胸ポケットに悪魔の駒を入れていて悪魔化していない。

だからサジは今普通の人間である当方がここに来たことを訝しげに思ったのか。

「当方はこれでもグレモリー眷属の《戦車》だ」

「《戦車》だと……駒価値が俺より高い……」

「つかぬ事を聞くがサジの駒は何なんだ？」

「俺は《兵士》四つだ」

なるほど、兵士ひとつぶんだけ当方の駒価値が勝っているのか。

まあ、レーティングゲームにもさまざまな形式のものがあるので駒価値≡強さは通用しないがな。

「まあ、よろしく。当方はリヴィエール・A・ハルトマン。リヴィと呼んでくれ。その方が楽だろうし」

「ああ、俺は匙元士郎。改めてよろしくな」

当方とサジは握手を交わす。

数分後にわかったことだが今回ソーナ会長が来たのは新人同士の顔合わせだったよ
うだ。

※※※

当方はただいまバットを持ちバッテリーボックスに立っている。

何故こんなことになっているかと言うと今日が球技大会だからだ。

まずはクラス対抗戦、その次に男女別種目、そして昼を挟んで部活対抗戦だ。

クラス対抗戦の種目は野球だった。

そのため、こうしてバッターボックスに入っているわけだ。

ガヤガヤとうるさい観客の声の中、相手のピッチャーがボールを投げた。

……練習の時も思ったが動体視力が向上しているのでかなりハッキリとボールが視認できるな。

カキン！

バットの芯でボールを捉えた快活な音になる。

ボールは飛距離をグングン伸ばしフェンスを飛び越えた。

「ホームラン！」

「ハルトマンって、あんなに野球上手いのか!？」

「おい、誰か声掛けろよ」

「やだね。ハルトマンに声をかけるだけで女子から恨み辛みを言われるんだ。やなことしたい」

「おいおい、当方はどんな立ち位置なんだ？少なくともユートより人気はないとは思っているのだが……」

「とりあえず、ホームベースに戻りベンチにいるユートに声をかける。」

「見たか？練習はするもんだな……って聞いているのか、ユート?？」

「……あ、リヴィ。なんだい？」

ダメだこりや。

こんな調子でいざと言うとき大丈夫なんだろうか……

※※※

「狙え！兵藤を狙うんだ！」

「うおおおつ！てめえら、ふざけんなああああ！」

クラス対抗戦と男女別種目、昼休みが終わり部活対抗戦が始まった。

種目はドッチボール。

当方たちオカルト研究部の初戦の相手は野球部だった。

投げられる球は全て豪速球。

なぜかイツセーに照準を定め投げられているので他の部員にはボールが飛んでこな

い。

不思議だ。

「イツセーを殺せえええええ！」

「アーシアちゃああああん！ブルマ最高おおおお！イツセー、死ねえええええ！」

「いや、えらく直球だな」

「殺せえええ！死ねえええええ！ロリコンは俺だけでいいんだあああ！」

んー……ギャラリーがとにかくうるさい。

殺せ、だとか死ねだとかドツチボールで聞くとは思わなかったな。

「イツセーにボールが集中しているわ！戦術的には《犠牲》サクリファイスつてどこかしらね！イツセー、これはチャンスよ！」

ちなみにいうと当方は外野でもものすごく暇してます。

たまに飛んでくるボールをキャッチし、フルスイングで敵チームに叩き込む。

あんまり力は込めてないし悪魔化もしてないので問題ないだろうな。

内野には小猫ちゃんがいるしこれなら優勝も楽だろうな。

と思っていた矢先、豪胆な野球部員がボールの照準をユートに変えた。

「クソオー！恨まれてもいい！イケメンめえええええ！」

どっちにしろ妬み100%ですか。

ユートは……やはりボーツとしている。

イツセーがユートの前に立ちボールを止めようとするが……カクンとフォークボールのように軌道が下がったボールがイツセーの急所に激突した。

「……うわあ」

見ているだけでも縮こまってくる。

部長はアーシアと小猫ちゃんに指示を飛ばした。

あ、イツセーが小猫ちゃんにズリズリと引きずられて行った。

「イツセーの弔い合戦よ！リヴィも気合い入れなさい！」

部長、お言葉ですがイツセーは死んでませんよ。

※※※

ザーツと雨が降る中。

当方は傘をさし帰路についていた。

ユートは今日一日様子が変だった。

今日の部活をユートは休んでしまった。流石に変だ。

本人は調子が悪い。と言っていたがどうも納得出来ない。

「何かあったのだろうか……ん……う？」

時刻は深夜、この時間帯に変な気配を感じるとやはり意識をそちらに向けてしまう。

そこにはフラフラと歩く1人の少女がいた。

目の焦点はあつておらず何かを棒のように扱い歩いている。

服装は……神父服！

まさか祓魔師か？

「……あ……あ」

不意に少女が棒として扱っていたものをコチラに構えた……

それは棒ではなく一振りの剣。

このゾワゾワする気配……聖剣か？

「どいて……死んで……助けて……！」

少女はそう言いながらドサツと倒れた。

「……ッ！」

全くいい迷惑だ。こんなところで倒れるならもつと別の場所で倒れてくれ。

……見た以上は助けるしかないか！

今はまだ部屋でみんながいるはず。

アーシアさえいればこの少女も助かるはずだ！

そう思い、当方は少女を背中でおぶさり剣を片手で拾い上げ進んだ道を大急ぎで引き返した。

第16話 《聖剣の使い手》

「すみません！治してもらいたい人がいるんですけど！」

当方は部室の扉を開けそういう。

「……見てれば大体の予想はつくわ。彼女は誰？」

「さあ、誰なんでしょう？」

「そう言うと思ったわ……全く。アーシア、あなた今日、契約なかったわよね？」

「はい、ありません」

「なら早速治療してあげなさい。あなたは怪我人をみるとほととけないものね」

「はい！」

という会話を経て今は運んできた少女を当方が特訓で使っている空き教室のソファアーに寝かした。

「どうアーシアさん。治せそう？」

「外傷の方は私の神セイクリッド・ギア器でどうにかかりますが意識の方は……」

「いざとなれば水をかけてでも起こすよ」

当方の直感だがこの少女の持っている情報は有益な気がする。

あと、少女の神父服はそこら辺で捨ててきた。

神父服を着た人を部屋に連れこむのはできないし、そもそもずぶ濡れだったから風邪をひくと思った。

当方の制服の上着を着せていたので雨には濡れていないはずだ。

そしてソファアーに寝かして改めて気がついたことがある。

結構発育いいんですね。アンタ。

小猫ちゃんと身長はあまり変わらないがその……出るところ出て引つ込むところは引つ込んでいる。

おぶってる時は必死だったからか感じなかったけど改めてみると意識してしまう

……

「……………う……………ううん」

翌日に少女は目を覚ました。

旧校舎にはユート、小猫ちゃん、朱乃さんがいる。

下手に家にいるよりもこの子を保護するのに向いてると考えた当方は少女をここに預かってもらうことにした。

「やあ、おはよう……………といっても今は午前1時だけどね」

「……………人間……………?」

※※※

小猫ちゃんから服を借り少女に着替えをさせた。

もちろん当方は着替えている最中は外に出ましたとも。

「で、君は何者なのかな？」

搭城と書かれたジャージを来ている少女は口を開いた。

「……私の名前は……カレンです。ファミリーネームは……ありません」

カレンと名乗った少女はソファーに座りながらオドオドと答えた。

「じゃあ、君はなんであそこにいたの？」

「私は……」

「言いたくないなら。無理に言わなくてもいい。」

じゃあ、質問を変えよう。君からは墮天使と似たような匂いを感じる。しかも……」

「だ、墮天使?! 嫌です!! あそこには戻りたくない!!」

カレンは《墮天使》というワードに過剰に反応した。

……墮天使の捕虜か何かか？

「あなたが私をあそこに戻すというのなら殺します!!」

と言いながら殺気を滲み出させるカレン。

その姿は足元から青白い炎に包まれ、次の瞬間にはあちらこちらに殺気と青白い炎を

噴出させる黒い鎧に身を包んでいた。そして、手にはいつの間にか大剣を握っている。

……殺気が尋常じゃない。

これほど高密度なものはそうそう出せないと思う。

「ストップ。当方は敵じゃない。その証拠に当方は人間だ」

「……………たしかに……………墮天使ではないみたいですね」

少女は服装を小猫ちゃんのジャージに戻した。

……神器か何かか？

「話を続けよう。しかも、君が持っていた武器。あれは聖剣じゃないのか？」

「……………はい。たしかにあの時、私が握っていたのは《聖剣》と呼ばれる

《透明の聖剣》です……………けど、もういません。欲しいのなら差し上げます」

「ちよつと待って。エクスカリバー？」

その言葉は流石に見過ごせない。

ユートの復讐の対象《エクスカリバー》

ユートはその使い手になるために育てられ殺されかけた。目の前で何人もの仲間が毒ガスによって殺され、その復讐心は想像できない。

「……………私はカトリック、プロテスタント、正教会から一本ずつ、計3本の盗まれたエクスカリバーを用いて戦争を起こそうとする一派の離反者です」

ちよつと待て。なんで聞いてないのにこいつはペラペラ話すんだ。
流石に怪しい。

とうかエクスカリバーが盗まれた？

※※※

「……信じてもらえないかも知れませんが私は転生者です」

ブツブツとカレンが言い出した。

「転生者……神に転生させられた人の俗称なら当方もそうなるが？」

「……そうですか……なら、信じてもらえますか？」

「とりあえずは」

「良かったです。前世の私は俗にいうオタク少女でした。毎日を無意味に過ごし、そしていつの日か事故で死にました」

ふむ……そんな人もいるんだな。と思いつながら当方は話を聞いていた。

「死んだ瞬間、私は後悔しました。私は世の中になにも残していかない。なにもなしえていないのだと。そう思うと人生をやり直したいと思つたのです。そんな私に神さまは転生を行ってくれました。しかも、特典をつけて。

その特典は私に《山の翁》の力を与え、そして困難を与えました。私はそれを望んで手にしたんです。

困難を乗り越えたならば私は世の中に何かを残せると思いました」

そこでカレンは自重したような笑みを浮かべた。

「そんな考えは安直でした。私の体に《山の翁》の力はあまりありませんが、昔は何も扱うことができず、そして困難はとても大きかったです。

困難の一つ目は恵まれない家庭。

父と母は私が生まれた時には異端者として教会に処理され、私は異端者の娘として教会の神父、祓魔師たちから狙われ逃げ回る日々を送っていました。そして一年前、本能的に《山の翁》の能力を使って誰の目にもつかないように過ごした私は墮天使に拾われました。

そこで困難が終わったように思ったのです。

しかし、困難は続きました。

拾われた私は聖剣適性の因子というものを埋め込まれました。私の他に因子を埋め込まれたのは二人いたのですがその一人が因子によって死亡し、私はそれが恐ろしくなって墮天使たちから逃げてきたのです……お願いです。あの聖剣……
エクスカリバー・トランススペアレンシ
《透明の聖剣》を……木場祐斗という少年に渡してくれませんか？」

「待て、なんでお前がユートの名前を知っている」

当方は腕に騎士の誉を顕現させカレンの眉間にデザートイーグルを突き付ける。

「……原作知識です。まさか、ここがハイスクールD×Dの世界だと知らずに転生したのですか？」

その声を聞き当方は胸ポケットに入れてあつた悪魔の駒をカレンに見せつけるように取り出した。

「これがなにかわかるか？」

「……《イヴァイル・ピリス悪魔の駒》です。上級悪魔が下僕を得る時に使用するもの……そう記憶していません」

「正解だ。改めて自己紹介だ」

当方は悪魔の駒を黒化させ取り込んだ。

そして悪魔の翼を生やす。

「グレモリー眷属《ルック戦車》リヴィエール・A・ハルトマンだ」

「……リヴィエール……本当に転生者なんですな」

※※※

あの後、カレンの話を聞くだけ聞いた。

とりあえず、悪い人ではないことがわかった。

直感でもそう感じる。

不遇のヒロイン。

そんな役割を押し付けられた少女だった。

「……なるほど……聖剣使い……イツセー、アーシアならずリヴィにまでそんなことが……」

イツセー、アーシアと共に昨日のことを報告する当方。

「ところでそのエクスカリバーは今どこに？」

「当方が《騎士ナイト・オブ・ナイトの誉》を用いて所持しています」

「わかったわ。昼間に件の二人組と遭遇したソーナの話では、彼女たちは私……この町を縄張りに行っている悪魔リアス・グレモリーと交渉したいそうなのよ」

「教会の者が、悪魔と？」

イツセーの問いに部長はうなずいた。

「……エクスカリバーの回収が目当てなんででしょうか？」

「恐らくはね。明日の放課後に彼女たちは旧校舎の部室に訪問してくる予定よ。こちらに対して一切の攻撃を加えないと神に誓ったらしいわ」

「信じられるんですか？」

「信じるしかないわね。彼女たちの信仰を。信徒にとつて邪悪な存在である悪魔に依頼をするぐらいなのだなら、相当切羽詰まっついて、かなりの厄介事……つまりは聖剣エクスカリバーの回収についてというのはもはや確定ね」

昨日、イツセーの家を訪問したという二人の女性。

1人はイツセーの幼馴染である紫藤イリナ。

なんでも、もう片方は布にくるまれてはいたがとてつもない悪寒を感じさせる得物を
持っていたのだとか。

……盗まれた聖剣、転生者、墮天使に二人の教会関係者。

今からこの町でなにが起ころうとしているんだ？

第17話 《教会からの要請》

そして時間が経ち翌日の放課後となった。

当方を含むグレモリー眷属とカレンは部室に集められた。カレンは当事者なので呼ばれたのだろう。

ソファアに座るのは部長と朱乃さん。

そして教会の女性二人が座って対面している。

当方は一応悪魔化してきているが先程から肌寒い。

恐らく、悪魔の本能が彼女たちの危険性を察知しているのだろう。

部長と朱乃さんも真剣な面持ちで対応していた。

だが、一番危なかつしいのはユートだ。

彼女たちとカレンを怨恨の眼差しで睨んでいる。

今にも斬りかかりそうな雰囲気だ。

ユートの嫌いな現役信徒に墮天使側の少女、いい気分であるはずがないな。

そんな空気の中、話を切り出したのは教会側の紫藤イリナだった。

「先日、カトリック教会本部ヴァチカン及び、プロテスタント側、正教会側に保管、管理

されていた聖剣エクスカリバーが奪われました」

やはり予想通りの事柄だった。

大昔に四散したエクスカリバーはその折れた刃の欠片を錬金術を用いて新たな姿に生まれ変わった。

その時、七本に増えエクスカリバーとしての機能も七分割されたい。

その内の一本が今は当方が所持している《エクスカリバー・トランスペレレンシー透明の聖剣》だ。

なお、イツセーは現在のエクスカリバーがどのようなものか知らないので説明を受けている。

説明のために二人の女性は自分たちの所持するエクスカリバーを掲示した。

紫藤イリナが持っているのは《エクスカリバー・ミミック擬態の聖剣》カタチを自由自在に変えられるそうだ。

それと……ゼノヴィアだったか？ が持っていたのは《エクスカリバー・ディストラクション破壊の聖剣》名前からして

破壊力が高そうだ。

擬似悪魔である当方でさえ悪寒が止まらない。本物の悪魔であるイツセーたちにとつては恐怖の対象でしかないだろう。

「カトリック教会に二本、プロテスタントにも二本、正教会にも二本。残る一本は神、悪魔、墮天使の三つどもえの戦争の折に行方不明。そのうち、各教会の管理下にあったエクスカリバーが一本ずつ奪われた」

「その奪われたエクスカリバーの内の一本は私の眷属が所持しているわ。リヴィ
「はっ」

部長の指示で当方は《騎士の誉》を起動させ《透明の聖剣》を取り出す。

「な……」

当方の隣で驚愕の声を漏らしたのはユートだ。

友人が自身の恨みの根源であるモノを持つていたらそうもなるか。

「ふむ……どうやらたしかに《エクスカリバー・トランスベアレンシー透明の聖剣》のようだな」

「ここで嘘をつくメリットはないだろう」

当方は呆れながら透明の聖剣を直す。

「なぜ、彼がエクスカリバーを？」

「部長、よろしいですか？」

「構わないわ」

ゼノヴィアの質問を部長の許可をとって話す。

先日、カレンを保護しその際にエクスカリバーを取得したこと。それと、当方の神器
によって収納されていたこと。それと、カレンの内情もだ（もちろん神様転生云々は
言っていない）

「……祝福を受けたものの因子を植え付けることでエクスカリバーの使い手を作ろうと

したのか」

「どうにもそうらしい。カレンはその失敗作……でいいのか？」

「……はい。私は因子に適応はしましたが、因子によって死んだ人を見て怖気ずきました。そして、《エクスカリバー・トランススペアレンシー透明の聖剣》を持つて逃走しました」

カレンは意を決したように前を向き話した。

「なんで墮天使に協力した？」

「それが主の与えた試練だからです。主は乗り越えられない試練を私たちに与えません。主の祝福を得るためには墮天使たちの言いなりになるしかありませんでした。そして、私は聖剣を操る資格を得ました。それは想像を絶する痛みでしたが主からの試練であると信じ、乗り越えることに成功しました。そして、今、私の前に聖剣の使い手たちがいる。主の祝福を受けたエクスカリバーをあなたたちの元に返すために私はいるかもしれない。そう思えただけで幸せです。私は主に必要とされたのだから。しかし、そこに主の許しはあるのか。いえ、主なら何事も許してくれます。かつて、後に裏切り者となるユダを迎えたように主は救いを乞うものを拒まない。私はそう信じています」

とんだ盲信だな。

というかカレンはそういうキャラだったのか？

実は前世はキリスト教徒だとか……

「ほう……なら、カレンと言ったか。お前は私たちと同じく主を信じていると言うのだな？」

「は？」

迷いなく答えるカレン。その答えを聞いたゼノヴィアは笑みを浮かべた。

「なら、お前がエクスカリバー奪還に力を貸してくれるというのなら私が上に口利きしてみよう。公式の場で祈りを捧げられるというのなら文句はないだろう？」

「いいんですか……？」

「主の教えは隣人愛、別段不思議な事じゃないだろう？」

「どうやら話がまとまったようだ。」

にしても、カレンが言うふうには既にこの世界はズレているようだが……

まあ、いいか。

とりあえず、カレンのタレコミで出てきた情報をまとめよう。

エクスカリバーを奪ったのは《神の子を見張る者》の幹部、コカビエル。

なお、他のグリゴリ幹部は干渉しておらずコカビエルの単独犯。狙いはもう一度三つどもえの戦争を起こすこと。

コカビエル側の聖剣使いの成功例はカレンとイカレ神父のフリード。カレンが《透明の聖剣》を持ち去ったのでコカビエル側が保持しているのは《天閃の聖剣》と

《エクスカリバー・ナイトメア》
《夢幻の聖剣》の二本。

なぜ、敵が聖剣の使い手を生み出せるかというと敵側にユートの仲間たちの仇《バルパー・ガリレイ》がいるから。

どこから入手したかは不明だが聖剣の因子なるものを体内に埋め込まれ聖剣の使い手を作るらしい。

「で？本題はなんなのかしら？」

「話が早くて助かる。私たちの依頼……いや、注文とは私たちと墮天使のエクスカリバー争奪戦の戦いにこの町に巢食う悪魔が一切介入しないこと。つまり、そちらに今回の事件に関わるなどいいにきた……のだが、思わぬ収穫があった。カレンとその《透明の聖剣》を所持する少年には協力を願いたい」

「随分なものいいね？関わるなどいい、この子たちには協力をお願いするなんて」

「どう取ってもらっても構わない。上は悪魔と墮天使は信用していない。だが、現地の人間と協力すると言われていない。こちらとしてはエクスカリバーを取り戻せればそれでいい」

「ふん……リヴィ、あなたはどうしたい？」

「……この町で人殺しが起こるのは避けたいのが本心です。これ以上、犠牲者が増える前に事件を収束させるのがこの町に住む人間としての使命だと思います」

「なら、私は止めないわ。だけど、これだけは覚えておきなさい。死ぬことは許さないわ」

「わかりました」

その後、なんやかんやあって……

や、なにかカレンが言うふうには原作と変わりないとのことだ。

……原作ってなんだ？

※※※

ともあれ、カレン、ゼノヴィア、紫藤イリナと行動を共にすることになった当方。

パツと見ると白いローブ二人と駒王学園の制服をきた男女二人だ。

時にすれ違うクラスメイト（球技大会のおかげで話せるようになった）からは「オカ研の活動か？」とか言われた。

「で、どこから探すつもりなんだ？」

当方は白ローブ二人に聞いてみる。

カレンにめぼしい場所を聞いてみたが人払いとかやっていて正確な位置は全然わからない。

と言われた。

せっかくの休日が無駄にならないといいが……

「……路銀が尽きたからまずはその打破からだ」

「……はい？」

「というわけで少し軍資金を手に入れてくるわ！」

「……どういうわけだ？」

「イリナさんが露天商から絵画を買った時にお金を使い果たしたようです」

「……軍資金を手に入れてくると言ったが何をやる気なんだ？」

その問いに対する答えはすぐに出てきた。

二人の行動で

「えー、迷える子羊にお恵みを〜」

「どうか、天の父に代わって哀れな私たちにお慈悲をおおお！」

「……………」

その時、当方の電話に着信があった。画面には《イツセー》と表示されている。

「どうした？」

『あー……………今、イリナとゼノヴィアいるか？』

「いるけど……………どうした？」

『ちよつと、話したいことがあってな。落ち合えるか？』

「できるけど……………」

『マジか！助かるぜ！』

「じゃあ、30分後に駅前のファミレスで」

『了解』

通話を終え、二人に向かってこういう。

「そろそろ、ご飯にしようと思うのだが二人もどうだ？勘定はこちらが持つつもりだが……」

「いや、流石に私たちの分を払わせるのは申し訳ない。私たちの分は私たちで……」

とそこで

ぐううううう……

と腹の音が聞こえた。

「ゼノヴィア、ここは恥をしのんだほうがいいわよ」

「……だな」

第18話 《騎士の覚悟》

「うまい！日本の食事はうまいぞ！」

「うんうん！これよ！これが故郷の味なのよ！」

「……また、食べられる日が来るなんて……」

上からゼノヴィア、イリナ、カレンがファミレスのメニューを食べながら感想を言う。

三者三様、カレンだけ悲壮感がすごい。

「にしてもよく食べるな……」

父の仕事が上手くいっているのと当方が基本的に物欲が無いため、金銭に不自由なことはなかったのだが4人分……しかもゼノヴィアとイリナはやたらと食べている。

「おーい、リヴィー、来たぞー」

そこでようやくイツセーたちが到着した。

まあ、小猫ちゃんはわかる。

でも、なんでサジがいるんだ？

※※※

「リヴィエールの言いようでは私たちに話があるようだが、何用だ？」

イツセーたちがゼノヴィアたちと対面する様に席を譲る。

イツセーたちが席に着くなりゼノヴィアが切り出した。

「あんたら、エクスカリバーを奪還するためにこの国に来たんだよな？」

「そうだ。それはこの間説明したはずだよ」

公共の場だからか、それとも腹が膨れたからかゼノヴィアもイリナも今のところ敵意は出していない。

「エクスカリバーの破壊に協力したい」

イツセーがそういった。

その一言に対してゼノヴィアたちは目を丸くさせていた。互いに顔を見合わせている。

……まあ、そんな気はしてたけど。

大方、ユートのためだろうな。

「そうだね……一本ぐらいなら任せてもいいだろう。破壊できるのならね。ただし、そちらの正体がバレないようにしてくれ。こちらこそちらと関わりを持つているようには思われたくない」

おっと、これも予想外。だが、カレンの反応を見るからにこれも想定されている事項……《原作》の展開どおりなのだろう。

「ちよつと、ゼノヴィア。いいの？ 相手はイツセーくんとはいえ、悪魔なのよ？」

「イリナ、正直言つてコカビエルとの戦闘は頭数がいくつあつても足りないだろう。こちらに聖剣が3本あつたとしても辛い」

「それはわかるわ。けれど！」

「最悪、私たちはエクスカリバーを破壊して逃げ帰ればいい。私たちのエクスカリバーも奪われるぐらいなら、自らの手で壊せばいいだろう。で、奥の手を使ったとしても任務を終え、無事に帰れる可能性は四割と言つたところかな」

「それでも高い確率だと私たちは覚悟を決めてこの国に來たはずよ」

「そうだな、上にも任務遂行して来いと送り出された。自己犠牲に等しい」

「それこそ、私たち信徒の本懐じゃないの」

「気が変わったのさ。私の信仰は柔軟でね。いつもベストなカタチで動き出す」

「あなたね！ 前から思つていたけど、信仰が微妙におかしいわ！」

「否定はしないよ。だが、任務を遂行して無事帰ることこそが、本当の信仰だと信じる。カレンじゃないが、これも主からの試練だと考えればいい。……違う？」

「……違わないわ。でも」

「だからこそ、悪魔の力は借りない。リヴィエールの時もそう決めただろう？ リヴィエールの場合は《悪魔》ではなく《湖の騎士》、この場合は《悪魔》ではなく《ドラゴン》

の力を借りるのさ」

「……? ちよつと、待て。」

今、ゼノヴィアは当方の事をなんと言った?

《湖の騎士》?

「……知らなかったんですか?」

カレンが当方の表情を読み取り、話しかけてきた。

「リヴィさんの神セイクリッド・ギア器ナイト・オブ・オナー《騎士の誉》は《湖の騎士》と謳ラウンズ・ナイトられる《円卓の騎士ランズロット》の力を神セイクリッド・ギア器ナイト・オブ・オナー化化したものと言われているんです」

「知らなかったもなにも、初耳なんだけど」

「……そういえば、悪魔側セイクリッド・ギアつて、神セイクリッド・ギア器ナイト・オブ・オナーの研究つて、さほど進んでなかったんですけど……忘れてました」

聞くとところによると他にも英雄が使っていた武器やその力を神器化したものが幾つか存在しているらしい。

もつとも、その英雄の力が神器なのか。それとも、その英雄の力を神器化したのか……鶏チキンが先か卵エッグが先か。という話になるそうだ。

「OK、商談成立だ。俺はドラゴンの力を貸す。じゃあ、今回の俺のパートナーを呼んでもいいか?」

「好きにするといい」

いつの間にか話が一区切りついていたみたいだ。

※※※

「……話はわかったよ」

イツセーに電話で呼ばれたユートは嘆息しながらもコーヒーに口をつけた。

「正直言うと、エクスカリバー使いに破壊を承認されるのは遺憾だけだね」

「……けど、今はそれでも戦力が多い方がいい……私みたいな失敗作も木場さんみたいな被害者も出さないためには……」

「墮天使側の君には言われたくない」

ユートがカレンに憎悪の眼差しを向ける。

「……やっぱり、《聖剣計画》に恨みがあるんですね」

「当然だよ」

「……」

カレンとユートの会話は続かない。

そこでイリナがカレンに助け舟を出すように口を開いた。

「でもね、木場くん。あの計画のおかげで……」

「知ってるよ。そんなこと。だから、成功例である君たちがいるんだ。だから、あのフ

リード・セルゼンがエクスカリバーを持っているんだ……!」

「……とりあえず、エクスカリバー破壊の共同戦線と行こう。私たちは基本的にリヴィエールと共に行動するのでなにかあったらリヴィエールを通して伝えてくれ」

「……当方がなんで教会側の連絡役になっているのだろうか」

「ごめんね、リヴィくん。昔と今じゃ、この町も変わってるし、地元民の土地勘っていうのも充分役に立つのよ」

「……まあ、いいけど」

当方は伝票を持って席を立つ。

「じゃあ、イツセー、ユート、小猫ちゃんにサジ。また後で……って言っても学園でどうせ会うか」

※※※

数日後の放課後。当方はカレン、ゼノヴィア、イリナと共に街を探索していた。

コカビエールの尻尾どころかリードすら影も形も見せない。そろそろ嫌気がさしてくる。

「なかなか見つからないものだな」

「まだ、一週間も経っていません。まだまだこれからですよ」

カレンはそういいながら神父服を整える。

なんというか、当方よりも年下なのにすっかりとしている。

「……敵だ」

ゼノヴィアの言葉に戦闘態勢をとる。

いつもの片手に銃、片手に魔剣のスタイルだ。

なお、《透明の聖剣》はカレンが持っている。

「……墮天使の団体か。コカビエル配下だな」

「そうなるね。さっさと倒してしまおう」

「……一人ぐらい生け捕りにした方がいいかもです」

「難しいこと言わないでよ、カレンちゃん」

他の三人も各々にエクスカリバーを構える。

……つて各々にエクスカリバーを構えるつてパワーワードっぽいよな。

パワーワードの意味は深く理解してないが。

「とりあえず、翼を撃ち抜けばいいんだろ？」

騎士の誉の第二解放で墮天使の翼を寸分違わずデザートイーグルで撃ち抜く。

翼を撃ち抜かれた墮天使は息絶えてしまった。

「威力高すぎです。翼を丸ごと吹き飛ばせば墮天使でも致命傷になりますよ」

「わかった。今度は中腹辺りを狙ってみよう」

それでも無理だったら足だ。激痛で足が止まれば倒すのは容易くなる……と思っていた。

カレンが文字通り消え失せるまでは。

そして、一人を残して墮天使たちの首が飛ぶ。

「……これでいいですか？」

「……聖剣とはいったい」

どうにも、カレンの特典は使い勝手はかなりいいが《暗殺》や《殺害》といった方向に寄っているらしい。

これでも、まだ扱い切れてないらしいがもし完璧に操れるようになったらどこまで強くなるのだろうか。

その時、耳に触る声が聞こえた。

「ヒヤヒヤヒヤ！ 流星はカレンさんですなあ！ 迷いもなく、墮天使様たちの首をチョン切りましたぞ！」

「フリード……」

そう、イカれ神父のフリードだ。

「なにやら、君たち。ボクちんたちを嗅ぎ回っているみたいですがあ？ やめた方がいいですよ？」

いちいち癩に障る喋り方するな。鬱陶しい。

「コカビエルのところに案内してくれるのかい？」

「そんなわけないでしょうが！あちこちをフラフラ歩き回っているアンタらを笑いに来
たんだよ！」

たまらず発砲してしまった。

発砲音は出ないので硝煙のみが銃口から出ている。

しかし、フリードは弾着点にはいなかった。

「あれえ？その顔はリヴィエールくんじゃあ、あつりませんかあ？これまた珍妙な再会
劇でござんすねえ！」

フリードはそういいながら当方に向かって剣を振る……

剣速が異常だ！これが《エクスカリバー！ラビッドリイ天閃の聖剣》の力か……

当方も欲しくなってしまうな。

なんとか刃を合わすことができるが、フリードにはまだまだ余裕がありそうだ。

「とまあ？今はアンタら見かけただけで、俺の狙いはアンタらじゃないのよ、おわかり
？」

「わかるか！」

「あらやだ、悪魔様。すこしおツムが足りてないんじゃないの？」

悪魔化してないのでフリードの声が英語で聞こえるため咄嗟に翻訳できないが、なんか腹立つことを言われている気がする！

「逃げる気か？」

「さすがのエクスカリバーでも、エクスカリバー三本を相手にするのは、ちと分が悪い！後で殺してやるよ！」

フリードは素晴らしいながら、去っていく。

嵐のようだったな。

……て

「追うよ！」

イリナの声で我に返り、すぐに駆け出す。

何が狙いかは知らないが野放しにするはずがないだろう？

第19話 《墮天使の教会》

フリードはピヨンピヨン飛び回り、家屋の屋根を移動する。

「先に行かさせてもらおうぞー！」

当方は悪魔の駒を取り込み悪魔化する。

人に見られようが知ったことか。

ここでフリードを逃がした方が損害が大きいに決まっている。

すぐさま加速しフリードに並ぶ。

「お！このフリードさんに追いつくなんて、リヴィくんも結構強くなったのね？」
「うるせ」

光の刃の剣から光ではなく水を放出させる。

そして、斬り掛かる。

しかしフリードが持つのはスピードが売りの《天閃の聖剣》。

こちらが動くよりも早く聖剣が動く。

もちろん想定済みだ。

さすがに聖剣と言えども、魔力で強化された弾丸より早いわけがない。

遠慮なくフリードの肩を撃ち抜かせてもらった。

「ぐあー！」

持ち手を撃たれても聖剣を手放さなかったのは見事と言えるが、さすがに剣筋が逸れる。

その隙に水の剣を叩きつける。

「止まってろ」

フリードは咄嗟に聖剣を盾にする。

聖剣が使えるからといって《戦車》のパワーに並ぶには《天閃の聖剣》では難しい。ゼノヴィアの《破壊の聖剣》なら止められただろうがな。

ズガン！

鈍い音が鳴りフリードを地面に墮とす。

どこかの家の屋根を蹴りフリードに追撃を仕掛ける。

今度はフリードが当方の剣筋を強引に逸らし攻撃を躲す。

「うおっ！リヴィに……フリード！」

「イツセー……」

どうやら、当方たちとは別行動でエクスカリバーを追っていたイツセーたちと思わぬ形で合流してしまったみたいだ。

「その声はイツセーくんかい？へええええ、これまた珍妙な再開劇でござんすね！どうだい？ドラゴンパウワーは増大してるかい？そろそろ殺していい？」

相変わらずのイカれた調子だ。

イツセーたちは神父服を脱ぎ捨て戦闘態勢をとる。

「ブーステッド・ギア！」

『Boost!』

「伸びろラインよ！」

サジの手元から黒く細い触手のようなものがフリード目掛けて飛んで行く。手の中にはかわいらしくデフォルメされたトカゲの顔らしきもの……あの触手はトカゲの舌か。

「うぜえっス！」

聖剣でそれを薙ぎ払おうとするが、トカゲは舌の軌道を変えて下へ落ちていく。

ピタツとフリードの右足に張り付き、そのままグルグルと巻きついた。

「そいつはちよつとやそつとじゃ斬れないぜ。木場！ハルトマン！これでそいつは逃げられねえ！存分にやっちまえ！」

「ありがたい！」

「なら、加減は必要ないな。《リミットアウト完全解放》！」

当方は瘴気とともに黒鎧で全身を覆う。

ユートは二本の魔剣を手に攻め立てる。

「チツ！《光 喰 剣》ホーリー・イレイザーだけじゃないつてか！もしかして、《魔剣創造》ソード・パースでございませるか？

それにそつちの全身黒鎧は《騎士の誉》ナイト・オブ・オーナーですかい？わーお、レア 神 器セイクリッド・ギアを双方ともお持ちとはなかなか罪なお方たちですこと！」

「言葉と裏腹に随分楽しげだな！」

「そりゃ、もちろん。だってさあ……」

ガギイン！

破碎音をたてユートの魔剣と当方の水の剣が砕け散る。

「そんな魔剣くんや盗難品じゃあ、俺さまのエクスカリバーちゃんの相手になりはしませんぜ？」

水の剣は再び水を放出させればいいが、一振りですべて砕かれては先に当方の魔力が尽きるな。

ユートも神器の使用には体力を使う。このままだとジリ貧だ。

赤龍帝の籠手の譲渡で押し切るか、それともエクスカリバーを持っているカレンたちを待つか……

「死んじやえよ！」

「くっ！」

ユートはフリードの攻撃を幅の広い魔剣を作成し受け止めようとするが青白い聖なるオーラを纏った聖剣は魔剣を容易く砕く。

やはり、エクスカリバーよりフリード本体を狙った方がいいな。

しかし、フリードは戦いの天才。先程肩を撃ち抜かれてから銃で撃ち抜く隙は容易く見せない。

常に当方との直線上にユートが入るよう立ち回ってやがる！

その後、イツセーが力をユートに譲渡するもフリードはエクスカリバーの特性を存分に生かしユートの猛攻を防ぎ切る。

「ほう？・《魔剣創造》ソード・パースに《騎士の誉》ナイト・オブ・オーナーか？双方ともに使い手の技量しだいで無類の強さを発揮する神器だ」

その時、この場に第三者の声が響く。

「バルパーのじいさんか」

バルパー……聖剣計画の首謀者がこんな緒戦を見に来たというのか？

「……バルパー・ガリレイ！」

ユートが憎々しげにバルパーを睨む。

「いかにも」

バルパーは堂々と肯定した。こいつがユートの仇……

「フリード。何をしている」

「じいさん！このわけのわからねえトカゲくんのペロが邪魔で逃げられねえんすよ！」

「聖剣の使い方がまだ十分ではないか。おまえに渡した《因子》をもっと有効に使いたまえ。そのために私は研究していたのだからね。体に流れる聖なる因子をできるだけ聖剣の刀身に込める。そうすれば自ずと斬れ味は増す」

「へいへい！」

フリードの持つ聖剣の刀身にオーラが集まり、輝きを放つ。

「こうか！そらよ！」

ブシュツ！

サジの神器は難なく切断され、フリードを捕らえる術が無くなる。

だが、次の瞬間。

フリードは虚空に剣を振るった。

「おっと？カレンたん？もう追いついたのかい？」

フリードがそう言うのとフリードが持つエクスカリバーと打ち合うもう一本のエクスカリバー……《透明の聖剣》とその使い手、カレンが姿を現す。

その体は以前見たの鎧に包まれている。

「なんで……!」

「何って、カレンさんの力はその性質上。今から殺す相手には殺気が露見するものね!」
「そのままだ、カレン!」

すぐさまゼノヴィアが駆けつけ、フリードのいる場所に対して《破壊の聖剣》を振るうがフリードはそれを飛び退き躲す。

「やつほ。イツセーくん」

「イリナ!」

どうやらエクスカリバーを追うものが全員合流したようだ。

「フリード・セルゼン、バルパー・ガリレイ。反逆の従め。神の名のもとに断罪してくれ
る!」

「ハッ!俺の前で憎つたらしい神の名を出すんじゃないやねえ!このビッチが!」

そういいながらフリードは懐から光の玉を取り出す。

「バルパーのじいさん!撤退だ!コカビエルの旦那に報告しに行くぜ!」

「致し方あるまい」

「あばよ、教会と悪魔の連合どもが!」

フリードが光の玉を地面に投げつける。

眩い閃光が迸り、当方たちの視力を奪う。

視力が戻った時には二人の神父の姿はなかった。

「追うぞ、イリナ、カレン、リヴィエール！」

「うん！」

「はい！」

「もちろんだ！」

その場を駆け出す当方たち。

「僕も追わせてもらおう！逃がすか、バルパー・ガリレイ！」

ユートも当方たちの後に続く。

※※※

当方たちは気配を追い続ける。

そして辿り着いたのは……

「またここかよー！」

以前、墮天使レイナーレが使用していた教会だった。

「また？……ああ……」

当方の言葉で察するカレン。原作知識があると話が早いので助かる。

「ここにコカビエルが……なにか因縁を感じるね」

「だな。ここに突入するのも二回目か」

コカビエルたちは以前、潜伏していた墮天使が使っていた教会を使用して虚を突くつもりだったのだろうか？

「待て、なにか出てくるぞ」

ゼノヴィアの言う通り、教会から何者かが出てくる……

ゾワゾワと空気が変わる。

今まで感じたことのないプレッシャー……

まさか……

「コカビエルか？」

十の黒い羽根をはためかせるソレはライザー・フェニックスなんて比じゃないほどのプレッシャーを放つ。

グリゴリ幹部のコカビエルと見て間違いないだろう。

「フリードの話によると聖剣使いと悪魔が二人ずつ、それに離反者である小娘が来ているようだが……ふむ」

コカビエルはこちらに気付くと距離を一瞬で詰め光の剣を振るう。

くらつたら間違いなく即死。

「当たる訳には行かないのでね！」

全員が散開しコカビエルを囲むように位置につく。

「ほう……この俺に勝つ気だど？」

「当たり前だ。墮天使コカビエル、お前の野望もここで潰える！」

ゼノヴィアがそう言いエクスカリバーを振るうがコカビエルはそれを光の剣で叩き逸らす。そして、パンチでゼノヴィアを吹き飛ばす。

入れ替わりになるようにユートも仕掛けるが魔剣は容易く碎かれる。

「つまらん」

この場にいる全員が悟る。当方たちの力ではこの墮天使を相手取るには不十分過ぎると。

「撤退だ！敵の本拠地は割れた！部長たちと合流するのが得策だ！」

「くっ……わかったよ！」

当方の声にユートは同意し撤退を始める。

「逃がすと思うか？」

「いいや、逃げさせてもらおう！」

当方が囮になれば時間を稼げるはずだ。

「リヴィエールくんだけじゃアレだし私も残る！」

イリナも当方と同じようにコカビエルを引き受けるようだ。

「……逃げましょう、ゼノヴィアさん」

「しかし……」

「機会は時機に來ます。今は退くべき時なんです」

カレンはゼノヴィアを説得し撤退を始めた。

「全く、人間というのは理解に苦しむ」

「理解してほしいなんて頼んでないがな！」

当方はマシンガンを取り出し斉射する。

弾丸の一つ一つが魔力で強化されている。

足止めにはなるはずだ！

「そんな豆鉄砲では止めることなどできんよ」

コカビエルは素晴らしい羽根を刃のように扱い弾丸を全て叩き落とす。

なんてスピードだ。

「くそー！」

これではロケランなどもさほど影響がないだろう。

ここで全力を出し切る訳にはいかない。

そもそも、当方の全力如きで……

「リヴィエールくん、同時に仕掛けるよ！」

「ああ、まだだ！」

当方は両手でマシンガンを斉射しイリナは《擬態の聖劍》の特性を活かしその刃を幾重にも増やし刺突を弾丸の合間を縫うように繰り返す。

「ふむ、その発想はよい。だが……」

コカビエルは攻撃範囲から一息で当方たちにちかずく。

「相手の力量を見誤ったな」

黒い羽根が当方たちを襲った。

「くっ！」

「きゃあああ！」

当方は黒鎧と悪魔の駒の加護で防御力が跳ね上がっているがイリナは聖劍を使えると言ってもただの人間。

致命傷になりかねない。

このままでは命の危機に直結する。

イリナを庇うように当方が前に出るが、イリナの体は既に傷だらけだ。

当方たちも逃げ切るためには……

そうだ。

フリードの真似をしよう。

そう思い、当方はスタングレネードを取り出す。

それをコカビエルの前……つまり当方の前で爆発させる。

魔力によつて強化された光は一瞬、太陽のような光を発した。

網膜が目を閉じていても焼かれる。

だが、感覚は生きている。

イリナを抱きかかえ当方も後退を始める。

「逃げるか……まあ、いい。次に相見える時にはもつと歯ごたえをつけてこい！」

……その慢心はいつか命取りになると思うが、今はありがたく逃げ切らせてもらう。

第20話 《月光校舎》

「はあはあ……」

「コカビエルから逃げ切りひとまず休憩を取る。」

《騎士の誉》を解く。

イリナを抱きかかえたままだが……

「リヴィエール……くん？」

「しゃべるな。傷が悪化するかもしれない。今から治療できるヤツのところに連れていくからな」

向かう場所は兵藤家。アシアの神器なら怪我の治療ができる。

イリナを抱え直しおんぶする。

「恥ずかしいと思うが少しばかり耐えてくれよ」

少々こちらにも恥ずかしいのでな。……主に背に当たる柔らかな感触が。完全解放の時は鎧があつたのでそうでもなかったが今は普通の服だ。意識しないようにしないと……

夜の道を駆け出し兵藤家を目指す。

先程の場所は兵藤家からさほど離れていない公園だったので十分ほどでついた。

「……血塗れの女性を背負った奴がインターホンを鳴らすのはどうもな……どうにか……？」

少し葛藤していると玄関の扉が開かれた。

「リヴィイ、イリナ！」

イツセーが駆けてきた。

その後には部長とアーシアがいる。

「私の眷属の中でも防御力がトップのリヴィイが生傷を作ってくるなんて……」

「へ？」

どうやら、当方も傷を作っているみたいだ。

イツセーたちの顔を見た時から少し痛むなどは感じていたが……ふむ、腹の方に傷があるのが見える。

「当方よりもイリナを……アーシアさん、頼めるかな？」

「は、はい！」

……アーシアと会話するのって治療の時ぐらいしかないような気がする。気のせいだといけれど。

「誰にやられたんだ？」

「……コカビエルだ」

「コカビエルですって……」

そこで強烈なプレッシャーを上から感じた。

上を向くと件のコカビエルが月を背景に浮かんでいる。

「いかにも。はじめましてかな、グレモリー家の娘。紅髪が美しいものだ。忌々しい兄君を思い出して反吐が出そうだよ」

「あなたが私の下僕に傷をつけたのね？」

「ああ。俺たちの根城まで来たのでな、それなりの歓迎をした。まあ、そいつらが囮になつてくれたおかげで、三匹ほど逃がしたが」

「今度は何をしに来た……！」

当方はイリナをアーシアに任せてからコカビエルを睨み上げる。

「グレモリーの娘、お前の根城である駒王学園を中心にこの町で暴れさせてもらうぞ。そうすればサーゼクスも出てくるだろう？」

「やはり、墮天使と神、悪魔の戦争をもう一度起こすのが狙いなようね」

「ほう？すでに知っていたか」

「……戦闘狂め」

「そうだ。そうだと！俺は三つどもえの戦争が終わってからひどく退屈でな！アザゼ

ルもシエムハザも次の戦争に消極的だ。ゆえに俺は個人で火種を起こすことにした！戦争をするためにな！サーゼクスの妹とレヴィアタンの妹、それらが通う学び舎だ。さぞ、魔力の波動が立ち込めていて、混沌が楽しめるだろう！戦場としては丁度いい！」

「滅茶苦茶だ……」

会話がひと段落し落ち着くココビエル。その顔は今から遊びに行く子どものような笑顔があった。

「ハハハ！戦争をしよう！魔王サーゼクス・ルシファアの妹リアス・グレモリーよ！」

そう言ってココビエルは学校の方に飛んで行く。

「イツセー、リヴィ、学園に向かうわよ！」

「はい！」

※※※

学園にはオカルト研究部と生徒会執行部が集まっていた。

その中でソーナ会長は当方を見つけ話しかけてきた。

「リヴィエールくん……あなたも合流したのですね」

「ソーナ会長……そのせつはご心配をおかけしました……」

「いえ、大丈夫です。学園を結界で覆いましたが、これは最小限に抑えるためのものです。はつきり言って、ココビエルが本気を出せば、学園だけでなく、この地方都市その

ものが崩壊します」

「そんな……」

戦争を起こしたいから都市を破壊する……まさにわがままな子どもだな。しかも、その子どもが聖書やその関連書物に出てくる墮天使の幹部ときた。

……状況は控えめに言っても最悪だな。

「攻撃を抑えるために私と眷属はそれぞれの配置について、結界を張り続けます。できるだけ被害を最小限に抑えたいものですから……本来、私たちの学び舎が傷つくのは耐え難いものですが、墮天使の幹部が動いた以上、堪えなくてはならないでしょうね」

ソーナ会長は憎々しげに学園の方を見つめる。おそらくはコカビエルに向けたものだろう。

学園に被害が出るのは確実、それが壊滅的になるかどうか頑張り次第……か。

「部長、すでにサーゼクス様に増援を打診しました」

「……そう。今回ばかりは我儘を言ってもらえない……お兄さまの迷惑だとかで応援を拒んでいては……」

部長は当方の……詳しくは当方の腹にできた生傷を見て言った。眷属に被害が出てからこれ以上は見過ごせないってことか……

「加勢が到着するのは一時間後だそうですね」

「二時間……。わかりました、その間、私たち生徒会はシトリー眷属の名にかけて、結果を張り続けてみせます」

「二時間ね。さて、私の下僕悪魔たち。私たちはオフエンスよ。結果内の学園に飛び込んで、コカビエルの注意をひくわ。これはフェニックスとの一戦とは違い、死戦よ！それでも死ぬことは許さない！生きて帰ってあの学園に通うわよ、皆！」

『はい！』

部長の言葉に全員が気合の入った返事をした。

「兵藤！ハルトマン！あとは頼むぜ！」

「ああ！……って、なんでサジは少し腰が下がってるんだ？」

「……まあ、匙、お前は尻のダメージでも気にしてろ」

「言うな！言われるとかさらに痛く感じる！おまえこそ、尻は？」

「ふふふ……部長の愛が痛い。まあ、いまの状況はまさに尻に火がついた感じだ」

「いやいや笑えねえよ。ーで木場はまだか？」

「ああ、無事だと信じてるさ。だろ、リヴィ？」

「もちろん」

「そうだな。俺も信じるよ」

当方たち三人は拳を合わせ、互いの健闘を祈った。

さて、決戦だ。

今の当方の全てを持って相手になってやる！

※※※

学園に入つてすぐにイツセーは《女王》に昇格、当方も《騎士の誉》を第二解放にした。

当方の手にはイリナから（勝手に）借りた《擬態の聖剣》水を纏わせて戦闘準備は万端だ。

そこに白髪の少年神父……イカレフリードが現れた。

「いやはや、俺のボスは人使いが荒いぜえ。でも、まあ？俺たちが持っていた二本のエクスなカリバーちゃんのリミットアウトの合成剣はスペシャルな一品でね。ちよつくら、試し斬りにお堅い悪魔様をリツパーさせてちょよ！」

「部長たちは先に行つてください。こいつの相手は当方がします。《騎士ナイト・オフ・オーナーの誉》完全解放！」

黒鎧を全身に纏いフリードと対峙する。

「わかつたわ。先に行つて待つてるわね」

部長たちは当方とフリードの脇を通る。

フリードは部長たちを見過ごした。

「余裕だな」

「リヴィくんがスキを見せないからね。それがなければ斬殺してたかな？」

「そうかい」

鎧から溢れる瘴気を水に変換させる。

ゴポポと辺りの音がどんどんかき消されていく。

これで当方自体が武器と化した。表面を常に渦巻く水の激流で覆うことで視認しにくくし、さらにある程度の攻撃を減殺できる。

「くぐぞ」

その声は気泡とかしフリードには届いていない。

だが、フリードは感じ取ったのかニヤリと笑った。

次の瞬間、当方たちは打ち合っていた。

エクスカリバーとエクスカリバーがぶつかり合う。

鞭のように《擬態の聖剣》を扱うが《天閃の聖剣》の力を使いフリードは全てを弾く。それは予想しているのでフリードの足元に魔力式徹甲弾を撃ち、爆裂させるがフリードは飛び退いてそれを回避。当方はそのまま追撃にうつる。

懐に潜り込んで《天閃の聖剣》の力を使われる前に剣自体を止めれば……

と！危ない、騙されるところだった！

後に振り向くとフリードが狂笑を浮かべ斬りつけてきていた。

《夢幻の聖剣》による幻覚か！

「おおよよ？これを躲すなんてさすがですなあ」

なんて言ってるかはわからないが兎に角倒すことに集中する。

《擬態の聖剣》の剣先を幾つも増やし同時に攻撃を仕掛ける。

しかし、それもフリードは跳ね除けてしまう。

こうなったら力押ししかないか？

そう考えた当方は距離を取り魔力を剣に集中させる。

当方が纏っていた水は剣に集まり音が戻った。

この集めた水をビームのように放ちフリードごと辺りを攻撃すれば《天閃の聖剣》では防ぎきれないだろう。

が、フリードは自身の幻影を増やし対抗しようとする。

だが、《擬態の聖剣》の力により激流は幾重にも別れその全てが蛇のようにフリードの群像に襲いかかった！

ザバアアアアン！！

激流の音が辺りに響く。

これが今の当方の全力。

技名は……《ハイドロブラスト》とでもしておこう

第21話 《聖魔劍爆誕》

地面ごとフリードの幻影を飲み込む幾つもの激流。

水を生み出し操ることのみ魔力の才能を費やした。

その結果がこれだ。

極めれば他のこともできるだろうが破壊力と持続性にのみ長けた激流だ。

「……ちよつとやりすぎたか？」

水はどんどん引いていき、すぐに全てが消え失せた。

運動場には地面に突き刺さったエクスカリバーと水でぐしよぐしよになりエクスカリバーとは遠く離れた場所で倒れているフリードが残った。

「いほおー」

フリードはどうやら生きているみたいだ。

ヨロヨロと立ち上がり……心臓を見えない何かに貫かれた。

「やつと、殺せました」

声ランズロットが聞こえる。

「湖の騎士」の力を持つ転生者は大幅に魔力を消費したので体力がガタ落ち。エクスカ

リバー持ちの方はその《湖の騎士》^{ランスロット}の一撃ですでにボロボロ。どうやら、好機が回ってきたみたいですね」

スーツと足元から実像がはつきりしてくる。

いや、まさか……

カレンか!?

「こんばんは、《湖の騎士》^{ランスロット}の力を持つ人よ。私の名前は《邪の主》と申します。今は人間の体を借りて挨拶をする無礼をお許しください」

その声はカレンだったが、あり方が違った。

声の感じが違うしさらに雰囲気どころか気配まで全くの別人。

カレンは人間の気配があつたが今のカレンには全くそのようなものがない。

この気配はなんというか……当方の体にこびり付くドス黒いヘドロのような感じがした。

「なぜ、という表情をしていますね」

当方の考えを読み取った《邪の主》と言うものが口を開いた。

「私はこの人間の中にいた堕天使です。今まではこの人間の所業を見てきましたがその時は終わりました」

よく見るとカレンの手にはゼノヴィアが持っているはずである《破壊の聖剣》が握ら

れている。

「コカビエルのように私も戦争を望んでいます。その為にはこのエクスカリバーの力は外せません。ですので、使い手を見極めていたのです」

そこでカレンは《透明の聖劍》から手を離しドサツと倒れた。

「バルパーの実験で一番の因子の適性を見せたのはこの神父。ならば、私はこの肉体を乗っ取り聖劍を統合させるのが道理です」

しかし、声は続いた。

今度はフリードの口から声が出ている。

《透明の聖劍》を体から引き抜き、手に持つ。

地面に落ちた《破壊の聖劍》を拾い上げ、統合されたエクスカリバーに近寄る。

「よく戦いました。その《擬態の聖劍》エクスカリバー・ミニミツクは褒美としてあなたに預けたままにしましょう」

「なに上から言ってるんだ！」

当方は加速し水を纏わした《擬態の聖劍》を構え突撃する。

だが、劍が当たるより先にフリードの背中から生えた五対の翼が当方を貫いた。

ような感覚が当方を襲った。当方は気がついたら足を止めていた。

フリードの体は間違いなく人間のものだから翼は生えないはずなのに……

「ふむ、即座に力の差を理解しましたか」

フリードはいよいよ統合したエクスカリバーを引き抜いた。

「それではまた合いませう《湖の騎士》ランスロットの力を持つ人間。次に会うのは戦場だといいですね」

「いや、それは御免こうむるね」

フリードが三振りのエクスカリバーを持って去ろうとしているところに当方はAMRを構える。

人型のモノに対して銃を撃つのは残念ながら慣れてしまった。

迷わず引き金を弾く。

ズギャン！

けたたましい銃声が辺りに響いた。

フリードの頭部は吹き飛んだ。脳漿が飛び散り誰が見ても明らかかなほど絶命している。

弾丸は頭を吹き飛ばした後、校舎に弾痕を作った。

だけど、あの《邪の主》と名乗った存在のこびり付くようなドス黒い気配は消えてない。

フリードの脳漿は黒い泥に変わり、残っていた死体を呑んだ。

ボコボコと音を立て泥が人型になっていく。

大きな泡銭をたて、人型は人になった。

蠟人形のような白い肌に金色の瞳。髪は色素が抜けた金髪。体型は小柄な女性だ。黒いドレスを着こなし、手には黒い剣を握っている。

その黒い剣からはエクスカリバーを束ねたような悪寒を感じる。擬似悪魔の当方でもかするだけでも致命傷となりかねないもの。

それが今、当方の前にいる人物が持っている。

「これが、あの人間の最強の聖剣使いのイメージ……ふざけてますね。体がまだ成長しきっていない少女なんて……」

「……………」

コカビエル並のプレツシャー。そして、聖剣らしきものから放たれる異常な悪寒。

当方は蛇に睨まれた蛙のような感じに体が麻痺したように動かなくなった。

AMRから香る硝煙の匂いが鼻腔をくすぐる。

「それにしても先程はよくも私に銃弾を撃ってくれましたね」

ジャリ、ジャリと水の染み込んだ運動場をハイヒールで迫って来るソレは明確な敵意を剥き出しにしていた。

「折角、エクスカリバーを錬金術で統合としようとしたものの……私の泥で統合してしまつては完全なものとは言えなくなつてしまいます……ですが、これでコカビエルの計

画はもうカウントダウンを残すだけになりました」

「……なに？」

「四本のエクスカリバーが統合されたこの剣の魔力の軛を地面に打ち込み、コカビエルの魔法陣を完成させました。あと二十分ほどでこの町は消失するでしょう」

その言葉に応えるように校庭に巨大な魔法陣が出現し光り輝く。

「止めたければコカビエルを倒すしかありません。が、今の貴方たちでは赤龍帝の力を使おうともそれは難しいでしょう」

その言葉を聞いて当方はほくそ微笑んだ。

まだ、負けちゃいないという事実に、だ。

「リヴィ、大丈夫かい？」

その時、ユートの闇闇から現れた。それに追従するようにゼノヴィアも現れる。二人の手にはユートの《魔剣創造》で造られたであろう魔剣が握られている。

「五体満足かと聞かれたら大丈夫だが、目の前の相手と戦うとなると大丈夫ではないな」
「そう返事をする辺り、まだ大丈夫そうだな」

当方の言葉にそう言うゼノヴィア。

「リアス・グレモリーの《騎士^{ナイト}》と《戦車^{ルック}》、共同戦線が生きているのならば、あのエクスカリバーをともに破壊しようじゃないか」

「いいのかい?」

ユートの問いにゼノヴィアが不敵に笑う。

「最悪、私はあのエクスカリバーの核になっている《かけら》を回収できれば問題ない。《邪の主》が使っている以上、あれは聖剣であつて、聖剣でない。聖剣とて、普通の武器と同じだ。使うものによつて、変わる場合もある。あれは、異形の剣だ」

「……その破壊行為、私も混ぜてもらえませんか?」

《邪の主》の後から少女が立ち上がり、声を出す。

その体は青白い炎と黒鎧に包まれ、片手に剣、もう片方の手には白髑髏の仮面が握られている。

「カレン……もう、大丈夫なのか?」

「私の残留思念が残っているのなら立つことすらままならないはずですが?」

「……私の体は《邪の主》に乗っ取られていました。でも、今の状態なら大丈夫です。私の力で私の体の中にある《邪の主》の残留思念に《死》という概念を付与し、殺しました」

カレンは白髑髏の仮面を顔につけ剣を構える。

「ゼノヴィアさんの《破壊エクスカリバーの聖剣デイズトランジョン》が奪われたのは私の失態……汚名返上の機会をくれませんか?」

カレンの気配が別のモノに……いや、なんというか、形が変わったと言うべきか。今までの気配は危険性を隠そうとするようなもの。今は危険性どころかなにも感じさせない様に気配の流れを一切遮断している。

「別に構わないさ。主はそれすらも許す。ならば、私が許さない道理もない」

「……《聖剣計画》の生き残りと《暗殺教団》の力を持つ人間、それに《聖剣》の使い手ですか」

《邪の主》はそのやり取りを見て眩くように言った。

その声にはどこか面倒なものを感じた。

「バルパー、どうやら貴方と因縁があるようですよ」

「ふふふ……そうか。それは数奇なものだな。こんな極東の島国で会うことになるうとは。縁を感じるな。ふふふ」

嫌な笑い声とともにバルパーが暗闇から姿を現した。

「私はな。聖剣が好きなのだよ。それこそ、夢にまで見るほどに。幼少の頃、アーサー王伝説を胸を踊らせながら読んでいたよ。だからこそ自分に聖剣使いの適性が無いと知った時の絶望といったらなかつた。自分では使えないからこそ、使える者に憧れを抱いた。その想いは高まり、聖剣を使える者を人工的に創りだす研究に没頭するようになったのだよ。そして、完成した。キミたちのおかげだ」

「なに？完成？僕たちを失敗作だと断じて処分したじゃないか」

ユートの言葉に憤怒の感情がのっている。

「……人工聖劍使いは祝福を受ける時に体に聖劍使いの因子を埋め込まれます。そして、因子を抜かれた者は死に至る」

「その通りだ、カレン。君に埋め込めたものは《聖劍計画》の子どもから抜き取ったものだ」

バルパーはそう言いながら懐から光り輝く球体を取り出した。眩い光。聖なるオーラが漲っている。

「もつとも、フリードとあと一人に使って、今は最後のひとつしか残っていないがね」

「……バルパー・ガリレイ。自分の研究、自分の欲望のために、どれだけの命を弄んだんだ……！」

ユートの全身が怒りの魔力のオーラで覆われる、凄まじいほどの迫力だ。

「ふん、それだけ言うのなら、この因子の結晶は貴様にくれてやる。環境を整えばあとで量産できる段階まで研究は進んでいる。まずはこの町をコカビエル、《邪の主》と共に破壊しよう。あとは世界各地で保管されている伝説の聖劍をかき集めようか。そして、量産された聖劍使いと共に統合されたエクスカリバーを用いて、ミカエルとヴァチカンに戦争を仕掛けてくれる。私を断罪した愚かな天使どもと信徒どもに私の研究を見さ

てやるのだよ」

それがバルパーと墮天使が手を組んだ理由……、《邪の主》はわからないが少なくともコカビエルは天使を憎んでいる。そして、それはバルパーも同じ。そして、二人とも戦争を望んでいる……とんだはた迷惑な大人達だな！

バルパーは興味をなくしたように持つていた因子の結晶を放り投げた。コロコロと地面を転がり、因子はユートの足元に行き着いた。

ユートは因子を静かにかがみ、手に取った。

哀しそうに、愛しそうに、懐かしそうに、その結晶を撫でていた。

「……皆……」

ユートの表情は憤怒と悲哀に彩られている。

その時だった。ユートの持つ因子から淡い光が漏れ始める。

光は徐々に広がり、校庭を包むまでに拡散した。

光に覆われた地面の各所からポツポツと光が浮いてきて形を成していく。それは虚像から実像に変わっていき……ハッキリとした人の形になった。

彼らは……

「皆……僕は……僕は……」

彼らは聖剣計画に身を投じられた者たち。処分された者たち。

「……ずっと……ずっと、思っていたんだ。僕が、僕だけが生きていいのかなって……。僕よりも夢を持った子がいた。僕よりも生きたかった子がいた。僕だけが平和な暮らしを過ごしていいのかって……」

「ユート……」

靈魂の少年の一人が口を開いた。声は聞こえなかったが言いたいことはわかった。

『自分たちのことはもういい。キミだけでも生きてくれ』

そう言うとう靈魂たちは口をパクパクとリズムカルに同調させ始めた。

「……聖歌です」

カレンがそう呟いた。

彼らは聖歌を歌っている。ユートも聖歌を口ずさみだす。その顔は涙で濡れている。

それは、彼らが辛い人体実験の中で得た希望と夢を保ち続けるためモノ。

それは、過酷な生活で知った唯一の生きる糧。

聖歌を歌うユートは幼い子どものような無垢な表情に包まれていた。

『僕らは一人ではダメだった』

彼らの魂が輝き始めた。

『私たちでは聖剣を扱える因子が足りなかっただけ。けど……』

その光はユートを中心に眩しくなっていくを

『皆が集まれば、きつとだいじょうぶー』

彼らの声がハッキリと聞こえた。

聖歌は本来、悪魔が聞くと苦しみを与える。だが、現在、この校庭が様々な力が入り乱れているからだろうか。

聖歌に苦しみは感じず、温かみを感じる。

友を、同志を思う、暖かなもの……

当方の目にもいつの間にか涙が流れていた。

『聖剣を受け入れるんだ』

『怖くなんてない』

『たとえ、神がいなくとも』

『神が見ていなくとも』

『僕たちはいつだって』

『「ひとつだ」』

彼らの魂は天に昇り、ひとつの大きな光となってユートの体を包み込む。

「リヴィさん。あれがあなたの目指すべき到達点、そのひとつです」

「へ？」

セイクリッド・ギア

「神 器は所有者の想いを糧に変化と進化を続け強くなっています。けれど、それと

は別の領域があります。所有者の想いが、願いが、この世界を構成する《流れ》に逆らうほどの劇的な転じ方をした時、セイクリッド・ギア 神器は昇華されます。それこそが……」

闇夜の天を裂く光がユートトを祝福しているかのように見える。

バランス・ブレイカー
「《禁手》です」

「悪魔として生きる。それが主の願いであり、僕の願いでもあった。それでいいと思つた。けれど、エクスカリバーの憎悪と同志の無念だけは忘れられなかった。いや、忘れても良かったんだ。僕には……今、最高の仲間がいるんだ」

ユートトの想いは解き放たれた。
縛り付ける鎖はもう何も無い。

「でも、すべてが終わったわけじゃない。バルパー・ガリレイ。あなたを滅ぼさない限り、第二、第三の僕たちの生が無視される」

「ふん、研究に犠牲はつきものだと昔から言うではないか。ただそれだけのことだぞ？」
腐りきつてやがるな。

「木場アアアアア！その二人をぶつ飛ばせエエエ！！」

いつの間にかイツセー、部長、朱乃さん、小猫ちゃんがいた。それぞれにユートトに激励を飛ばしている。

「お前はリアス・グレモリーの眷属の《騎士ナイト》で、俺の仲間だ！俺のダチなんだよ、戦え

木場アアアアアア！あいつらの想いと魂を無駄にすんなアアアアアッ！」

「祐斗！やりなさい！自分で決着をつけるの！エクスカリバーを超えなさい！あなたはリアス・グレモリーの眷属なのだから！私の《騎士》はエクスカリバーごときに負けな
いわ！」

「祐斗くん！信じてますわよ！」

「……祐斗先輩！フアイトです！」

当方はユートの隣に立ち剣を構え直す。

「いけるな、ユート？」

「……もちろん」

「ならやるぞ。今ここで過去の因縁を振り払え！」

「ああ……僕は剣になる」

ユートも立ち上がり敵を見据える。

「部長、仲間たちの剣となる！今こそ僕の想いに応えてくれッ！魔劍創造ツツ！！」

ユートの手に魔の力と聖の力、相反する二つが混ざり合う。

神々しい輝きと禍々しいオーラを放ちながら、《騎士》の手元に一本の剣が現れた。

「……禁手 《双覇の聖魔劍》。聖と魔を有する剣の力。その身を持って受け止める

と……」

第2話 《神の事実と白龍皇》

ユートは聖魔剣を構える。

それに伴い、当方は水の剣を、カレンは大剣を、ゼノヴィアは魔剣を構える。

「行くよ、リヴィ」

「ああ、思いつきりぶつ飛ばしてやる」

再び、魔力の水を纏う。

そしてユートともに、《邪の主》に向かって地を蹴る。

ギイン！

ユートの聖魔剣と《邪の主》のエクスカリバーがぶつかり合う。

その瞬間、当方は《邪の主》の後に周り無防備な背中に水の剣を振るう。

だが、ユートを蹴飛ばし《邪の主》はすぐさま当方に向き直り水の剣を弾く。

「その剣……どうやら、一度砕けたものを再利用したエクスカリバーでは少々分が悪いようですね」

エクスカリバーから放たれている聖なるオーラをさらに放出させる。

「けれど、破壊力ならば同等程度。こちらにはエクスカリバー・デストラクション《破壊の聖剣》の力が備わっていま

す。いくら、バランス・ブレイカー 禁手でも生まれたてでは拮抗するのが精一杯のようですね」
「さて、それはどうかな？」

ゼノヴィアは右手を宙に広げ言っている。

……なにしてんだ？

「少しばかり時間を稼いでくれ、カレン」

「わかり……」

カレンはゼノヴィアに対して返事をすると青白い炎に包まれ消え……

「ました」

《邪の主》の背後に現れた。

フリードには殺気がどうか言われていたが、《邪の主》はカレンが現れるまで気がつく様子は無かった。

「くっ！」

ギイイイイン！

カレンの大剣とエクスカリバーが火花を散らす。

「規格外の力と素養、貴方は何者なんですか？」

「カレンです。それ以下でもそれ以上の存在ではありません。では……首を出せ」

カレンは再度姿を消す。

《邪の主》はカレンを探そうと辺りを見回す。

だが、そんなことはさせない。

「はあああ！」

「やあああ！」

当方とユートが同時に斬り掛かる。

《邪の主》はエクスカリバーを横に構え当方とユートの攻撃を防ぐ。

「さすがに防ぐか！」

「けど、肉薄してるならやりようはある！」

当方は水を増大させ刃を大きくする。

そして、力任せに押し付ける。

《戦車》の力の見せどころだ！

「転生悪魔の《戦車^{ルック}》の特性は馬鹿力でしたね……」

さすがに単純な力なら負けるのだろうか。

《破壊の聖剣》の力が破壊力に振られていて助かった。

これがもし、筋力などに振られていたら負けていたのだろうか。

「……我は解放する。デュランダル！」

《邪の主》との鏖迫り合いを繰り返している中、先程から何かを呟いていたゼノヴィアが

エクスカリバーとは別の聖剣……デュランダルを手に握っていた。
「デュランダルだど!？」

「貴様、エクスカリバーの使い手ではなかったのか!」

バルパーばかりか、コカビエルも驚きを隠せていなかった。

「残念。私はもともと聖剣デュランダルの使い手だ。エクスカリバーの使い手も兼任していたにすぎない」

ゼノヴィアは魔剣を放り投げ、両手でデュランダルを構えた。

なにやらバルパーとゼノヴィアの間会話があるようだが、今の当方にそちらに意識を割く余裕はない。

魔力も残り少ない、倒すなら早めにしてほしいところだ。

「デュランダル……私の技量でもどうにもできませんね」

《邪の主》はエクスカリバーのオーラを増幅させている。フリードの時よりも濃く大きいオーラだ。

だが、ゼノヴィアのデュランダルはそれに負けていない。

折れてしまい、元のエクスカリバーの4/7しか集まっていないエクスカリバーよりも、デュランダルの方が武器としてのランクが上ということか。

「!!邪魔です!」

当方たちを弾き飛ばし、真後ろにエクスカリバーを薙ぐ《邪の主》。

姿を消しているカレンに対してエクスカリバーを振るっているのだろうか。

「畳み掛けるぞ！」

「了解！」

もちろん、その隙を見逃す当方たちじゃない。

三方向から攻め込ませてもらう。

ガキイン！

当方の水の剣をエクスカリバーの柄頭で撃ち軌道を逸らす。

ザシユ！

ユートの聖魔剣は当方の逸れた剣筋を巻き込まみ水の刃ごと《邪の主》の腕を叩き斬った。

「その剣は片手で触れるほど軽くないぞ」

ゼノヴィアのデュランダルは《邪の主》がエクスカリバーを盾にして防ごうとするが容易く折られ《邪の主》は後退する。

「……わかってますよ」

片手を飛ばされ、エクスカリバーも刃が半ばほどで折れている。

「はあああ！」

ユートは追撃を仕掛ける。もちろん、《邪の主》は折られているエクスカリバーで受けようとすが……

バキイイン！

凄い金属音とともにエクスカリバーが《邪の主》の手から離れ宙に舞う。宙に舞ったエクスカリバーは地面に着地すると同時にその身を砕かれた。

「エクスカリバーが折られた以上、この戦いは意味がありません。私は撤退させてもらいますよ。コカビエル」

そういい、辺りに黒い泥を撒き散らして《邪の主》は去っていった。

「……見ていてくれたかい？ 僕の力は、エクスカリバーを超えたよ」

ユートの声でひとつの因縁にようやく、ピリオドが打たれた。

※※※

ようやく戦闘が終わった。

そのせいか、今まで保っていた《完全解放》が解かれ、久々に顔が外気に触れた。

体力はまだまだ余裕があるが、如何せん魔力が心もとない。エリクサーとかあつたら飲むぐらいには減っている。

だが、ユートの因縁の根源。バルパー・ガリレイはまだ生きています。

それを絶たなければ悲劇は続く。

なにやらぶつくさ言ってるバルパーに拳銃を向ける。

「リヴィ、僕にやらせてくれるかい？」

「……わかった。だが、妙な動きをしたら容赦なく撃つからな」

「ありがとう。さて、バルパー・ガリレイ。覚悟を決めてもらう」

ユートは聖魔剣をバルパーに向け、切りこもうとする。

これですべてに決着がつく。

「……そうか！ わかったぞ！ 聖と魔、それらをつかさどる存在のバランスが大きく崩れているとするならば説明はつく！ つまり、魔王だけでなく、神も」

ズンツ。

なにかの思考に達したバルパーの胸部を光の槍が貫いた。

バルパーは血の塊を吐き出し絶命した。

当方は光の槍が飛来した方向に銃を向ける。

そこにいたのはもちろん、宙に浮かぶコカビエルだ。

「バルパー。おまえは優秀だったよ。そこに思考が至ったのも優れているがゆえだろうな。だがな、俺はおまえがいなくても別にいいんだ。最初から一人でやれる」

コカビエルは嘲笑っている。やはり、思考が幼稚だな。

飽きたら捨てる。そんな風を感じた。

「ハハハハ！カーアハッハッハハハハハハハハッ！」

コカビエルは哄笑を上げ、地に足をつける。

圧倒的な重圧。

凄まじいまでの自信とオーラをまといながら、堕天使の幹部はついに当方たちの前に立つ。不敵な笑みを浮かべ、彼は言った。

「限界まで赤龍帝の力を上げて、誰かに譲渡しろ」

全く、自信に溢れたふざけた言葉だ。

その言葉を受けた部長は激昂し、コカビエルはまた笑った。

「リアスさんの魔力が放たれたら、突撃します」

当方の背後に突如現れたカレンがそう言った。

「わかった」

イツセーの話によると倍増の限界に到達するのは数分かかる。……数分と言えば、最大で9分だ。つまり……

$9 \times 6 \parallel 54$ 、つまり倍増は二の五十六乗、関数電卓で計算しようものなら7. 21

×十の十六乗とかになる。

ざっと7京ほど……

さすがに部長とかに譲渡したら吹き飛ぶんじゃないか？

これが5分と考えても1073741824倍だ。約11億倍。

訳が分からない。

「きたー！」

ブーステッド・ギア

そこで赤龍帝の籠手の倍増が止まったようでイツセーは部長に力を譲渡した。譲渡された力により部長の紅い魔力のオーラが膨れ上がる。

絶大な魔力の波を肌にはピリピリ感じた。

部長の手の中には既に強大な力が生まれている。

しかし、コカビエル戦闘狂は

「フハハハハハハ！いいぞ！その魔力の波！俺に伝わる力の波動は最上級悪魔の魔力だ！もう少しで魔王クラスの魔力だぞ、リアス・グレモリー！おまえも兄に負けず劣らずの才に恵まれているようだな！」

心底嬉しそうに堕天使の幹部は笑っている。

「消し飛べエエエエエエツツ！！」

部長の手から、最大級の魔力の塊が滅びの力を帯びて撃ち出される。

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ！

地の底まで響き渡るような振動を周囲に撒き散らし、強大な一撃がコカビエルに向かつていく。

コカビエルはその一撃を両手を突き出し、迎え撃とうとしている。「おもしろい！おもしろいぞ、魔王の妹よ！」

コカビエルの両手に墮天使のオーラの源である光力が集まっていく。「ぬうううううううんッッ！」

コカビエルは部長の一撃を真正面から受ける。

部長の一撃が、徐々に勢いを殺され、カタチも崩されていく。

ここまでくると、もはや当方たち人間……いや、厳密には人間ではないが、の力量なんて塵芥に等しいものだろう。

コカビエルは魔力を受け止め続ける。無傷ではないが、それでも先程の一撃で仕留めきれなかったのは当方の精神にダメージを負わせた。

部長は肩で激しく息をしている。あれほどの一撃……もう一度放つまでの時間と魔力があるかどうか……

「はあああ！」

「ふうん！」

その空気を払拭するようにカレンが大剣をコカビエルに振るった。

コカビエルは翼で大剣ごとカレンを弾き飛ばした。

「雷よ！」

朱乃さんもコカビエルに天雷を向けるがそれすらもコカビエルの翼のはばたきで消滅する。

「俺の邪魔をするか、バラキエルの娘と暗殺教団の小娘よ！」

「……！」

「私をあの者の娘と呼ぶな！」

朱乃さんは雷を連発、カレンはその雷の間を縫うようにコカビエルに肉薄しもう一度攻撃を試みるが、どちらも翼で薙ぎ払われてしまう。

「くそー！」

「当方もマシンガンをやぶれかぶれで撃つが雷とコカビエルの翼に阻まれ一つも直撃しない。」

部長の魔力を完全に消滅させたコカビエルは哄笑を再びあげた。

「悪魔に堕ちるとはな！ハハハ！まったく、愉快な眷属を持つているな、リアス・グレモリーよ！赤龍帝、バランス・ブレイカー 禁 手に至った聖剣計画の成れの果て、ランスロット 《湖の騎士》の力を宿した

小僧にバラキエルの娘！おまえも兄に負けず劣らずのゲテモノ好きのようだ！」

「兄の……：我らが魔王への暴言は許さないっ！何よりも私の下僕への侮辱は万死に値するわっ！」

「ならば滅ぼしてみろ！魔王の妹！《赤い龍》の飼い主！紅髪の滅殺姫よ！おまえが

対峙してるのは、貴様ら悪魔にとって長年の宿敵なのだぞ!?これを好機と見なければ……」

「もちろん、好機と見てますよ。少なくとも、私は」

カレンはコカビエルが喋っている途中で斬り掛かる。

空気を読む気が全くない。殺意満点だな。

「同時にしかけるぞ」

ゼノヴィアの言葉を聞き、当方とユートは駆け出す。

コカビエルにつくまでに今一度《騎士の誉》を完全解放する。

始めに斬りかかったのはゼノヴィア。コカビエルは光の剣を手に作り出し、片手で迎え撃つ。

「フーン！デュランダルか！一度壊れたエクスカリバーと違い、こちらの輝きは本物か！

しかあああし！」

「……ツツ！」

ブウウウン！と空気が震え、耳鳴りが襲う。

コカビエルが空いている手から波動を放ち、ゼノヴィアの体を宙に浮かせ彼女の腹部に蹴りを入れる。

「が！」

苦悶の声を発し、ゼノヴィアが吹っ飛んでくる。

当方はゼノヴィアと目を交わすと手にハンマーを作成した。

「まだだ！」

「コカビエル、僕の聖魔剣であなたを滅ぼす！もう誰も失う訳にはいかないんだ！」

「おうともさー！」

当方はゼノヴィア目がけてハンマーを振る。ゼノヴィアは空中で反転しハンマーの面に足を載せそのままの勢いで突撃する。

「ほう！聖剣と聖魔剣の同時攻撃か！」

「まだ、当方のエクスカリバーもあるぞ！」

《擬態の聖剣》をムチのように扱い当方も攻撃に参加する。もちろん、刃は水で覆われている。

だが、コカビエルはもう片方の手に光の剣を生み出し三本の剣の攻撃をさばっていく！

剣の技量もやはりあちらが上か！

「そー！」

「はああ！」

小猫ちゃんとカレンがコカビエルの後方から攻撃を仕掛けるが……

「甘いわー！」

黒い翼が鋭い刃物と化し、小猫ちゃんとカレンの体を斬り刻んだ。地面に叩きつけられ二人の体は鮮血を吹き出していた。

「小猫ちゃん！カレンさん！」

「ほら、余所見は死ぬぞ！」

ギイイーン！

「そんなこと、百も承知だ！」

続けざまに攻撃を行うが、コカビエルに有効打はまだ与えられていない。

ドンツッ！

コカビエルの全身から吹き出した衝撃波に当方たちはなす術なく、吹き飛ばされる。

当方の集中力が切れ完全解放が解除されてしまう。体力もそろそろ限界が見えてきた。ということか？

それにユートとゼノヴィアも肩で息をしている。

……勝てない。少なくとも、このままでは。

堕天使の幹部……これ程までに……つと！

ネガティブなことは考えるな！当方の武器は全て神器に依存している。マイナス思考になれば不利になる！

「コカビエル！まだだ！」

「当方の残りカス、貰っていけ！」

「ハハハ！まだ来るか！いいぞ、来い！」

ハイドロプラストを放つ、残った魔力を全てぶつけているが……

『Transfer!!』

突如、当方の力が溢れる。これが赤龍帝の籠手による力の譲渡……みなぎる力を全て叩き込む！

ザバアアアアアアン!!

《擬態の聖剣》により増えた激流が力の譲渡でさらに加速する。

「やれええ！二人ともおお!!」

ユートは聖魔剣でコカビエルを囲い、当方は聖魔剣ごとコカビエルに激流をけしかける。

「やるな……しかあし！」

コカビエルの十の翼が重ねられ剣のような形になり、激流も聖魔剣を砕く。

ダメージが少量入ってはいるが……

「……！」

当方の方は完全に魔力と体力が尽き、騎士の誉が解除され地に膝をつけてしまう。

赤龍帝の籠手による能力の倍加。当方の残っていた体力が全て持っていかれた。

この場にいる全員が肩で息をしている。

その殆どが絶望的な表情を浮かべていた。

殆どだ。

当方はニヤリと口角を歪め立ち上がる。

まだ、生きている。

尽くせる手はある。

ここで膝をついても状況は好転しない。

そう考え己を奮い立たせる。

「やめろ、リヴィエール」

当方の隣にいるゼノヴィアが止める。

たしかに当方の手に握られている《擬態の聖剣》の切っ先は地面についており、当方

も例に漏れず肩で息をするほど消耗している。

「うる……や……」

そこで始めて消耗している段階を自覚した。

声が始めて出ていない。考えたら今日の夕暮れから殆ど戦いっぱなしだ。

「しかし、仕えるべき主を亡くしてまで、おまえたち神の信者と悪魔はよく戦う」

突然、コカビエルは謎の言動を発し始めた。

「……………どういふこと？」

部長は怪訝そうな口調で訊く。

「フハハ、フハハハハハハハハハ！ そうだったな！ そうだった！ おまえたち下々まであれの真相は語られていなかったな！ なら、ついでだ。教えてやるよ。先の三つどもえ戦争で四大魔王だけじゃなく、神も死んだのさ」

神も……………死んだ？

なら、アーシアやゼノヴィア、イリナが祈りを捧げていたのはなんだ？ なにに捧げていたんだ？

「知らなくて当然だ。神が死んだなどと、誰に言える？」

コカビエルは話し出した。

この世界の真実を。

神はすでにおらず、戦争の被害は甚大。

神がない今、天使は増えることは難しい。

悪魔も大半が滅びたので純血種は希少だ。

「……………ウソだ。……………ウソだ」

ゼノヴィアが力なく項垂れる。

だが、当方はどこか納得していた。

聖女と呼ばれたアーシアがなんで異端として追放されたのか。

なぜ、エクスカリバーの使い手となるべく育てられたユートの同僚達が殺されなければならなかったのか。

そして……当方たち転生者が輪廻転生の枠にはまっていないのに関わらず生きていけているのか。

全てが神がいなくなると納得のいくものばかりだ。

アーシアに奇跡を与える神がいらないから切り捨てるしかなかった。

神がいらないからユートの同僚達は祝福を受けることができずに殺された。

神がいらないから転生者は何事もなく生きていけるのだと。

厳密には三つとも違うのかも知れない。当方はそこまで神にも宗教にも詳しくないからな。

ただ……

「……主はいないのですか？主は……死んでいる？では、私たちに与えられる愛は……」

今の当方には神がいらないせいで不条理に人生を歩んできた者達がいる、その事実だけが呑み込めた。

「俺は戦争を始める、これを機に！おまえたちの首を土産に！俺だけでもあの時の続き

をしてやる！我ら墮天使こそが最強なのだ！とサーゼクスにもミカエルにも見せつけてやる！」

コカビエルはルシファーにミカエル、聖書に記された偉大な存在を相手にして戦争をしようとしている。

それだけの力は有している。

……そもそも、立つステージが違ったのか。

それでも、

「それでも、諦める道理にはならない！」

当方は立ち上がり、《騎士の誉》を起動させる。

第一解放だが、それだけでも充分だ。

当方の神器の性能は奪った武器に依存する部分が大きい。

「ふざけんな！お前の勝手な言い分で俺の町を、俺の仲間を、部長を、アーシアを消されてたまるかッ！それに俺はハーレム王になるんだぜ、てめえに俺の計画を邪魔されちやこまるんだよ！」

……うわあ。と言っておこう。

うん、それしか言葉が見当たらない。

イツセー……カッコつけてるつもりなんだけど、まだまだ三枚目っぼいぞ。

「当方はまだ、目標が決まってるんでね。それすらも見つからずに殺されるのは嫌だな」

当方はイツセーの気合に負けじとデザートイーグルを構える。

「赤龍帝はハーレムを、湖の騎士は目標がお望みか。ならば、俺と共にくるか？ 赤龍帝には行く先々美女を、湖の騎士には……」

「いるものか、そんなもの。他人に与えられた目標なんか達成して何が楽しい」

コカビエルの甘言を一蹴する。

さすがにイツセーでもそんな言葉にはつられないだろうな。

「……………」

「……………おい、イツセー」

イツセーはその場で硬直していた。

「そ、そんな甘い言葉で俺を懐柔できると思ったら間違いだぜ」

なら、さっきの間はなんだ!?

「イツセー！もう！よだれを拭きなさい！あなたどうしてこんなときまで！」

部長が怒るのも無理ないな……

「す、すみません。どうにもハーレムって言葉に弱くて……」

「そんなに女の子がいいなら、この場から生きて帰ったら私がいろいろとあげてあげるわ

よー」

「マジですか!?じゃ、じゃあ、おっぱいを吸ったり!」

「ええ!それで勝てるならお安いものだけ」

カアアアアアアアアアアツツ!

赤龍帝の籠手の宝玉からとてつもない輝きが放たれていた。

それでいいのか赤龍帝の籠手!?

「よつしやああああああああ!部長の乳首を吸うため、やられてもらうぜ、コカビエ
ル!」

「……なんか、いつものイツセーだな……決めたよ。とりあえず、上級悪魔になんて考えるのはやめだ。当方は当方が住む日常を守る。そのために戦争なんて考えるお前はぶちのめす!」

バツシイイイイ!!

デザートイーグルにとてつもない量の線が走る。

デザートイーグルの形は変わっていき、どんどん変形していく。

イツセーの赤龍帝の籠手はスケベ根性、

当方の騎士の誉は目標を達成するための気概に呼応して力を発揮しようとしている。体が脈動していく。

先程からドクンドクンも心音に似たなにかがうるさい。

新しい力に目覚める予兆だろうか？

バキイイーン！

碎ける音とともにデザートイーグルが、騎士の誉が形を変えた。

禁手ではないが、大きく成長した。

騎士の誉の形状が大きく変わっていた。今までは鎧だったのが大型のガントレットに変わり、デザートイーグルはその形をゲームで見るとようなブレードライフルに変えている。

ガントレットの肘部と手の甲に当たる部分にはイツセーの赤龍帝の籠手のような宝玉が埋まっている。まあ、宝玉の色は赤だが。

騎士の誉の枠組みから外れた何かに変わった。

そう、感じた。

「……湖の騎士が目的が定まったことで力を得るのはまあいい。女の乳首を吸う想いだけで力を解き放つ赤龍帝は初めてだ。……なんだ、お前らは？どこの誰だ？」

コカビエルも溜息をつきながら言う。

この時だけコカビエルと考えが一致したと思う。

「リアス・グレモリー眷属の《兵士》^{ポイン}！兵藤一誠！」

「同じく、リアス・グレモリー眷属の《戦車^{ルーク}》、リヴィエール・A・ハルトマンだ」

「覚えとけコカビエル！俺はエロと熱血で生きるブーステッド・ギアの宿主さー！」

「……まあ、当方は湖の騎士とかどうか言われてもわからないが……名前だけは覚えただ方がいいぞ、コカビエル。今からお前を倒すんだからな！」

ブレードライフルを構えそう宣言する。

先程までの絶望感が漂っていた周囲が、イツセーのおかげで全員に活力を与えていた。

底抜けのバカらしさ。

そんなイツセーだから周りから距離を置かれていた（殆ど当方の自業自得）当方の友達になってくれたんだと

そう感じた。

部長も朱乃さんもユートも小猫ちゃんも満身創痍だがコカビエルに立ち向かう姿勢になっっている。

まだ戦える。

まだ負けたわけじゃない。

そう、まだ勝てないわけじゃない！

全員の気持ちが一瞬になった。そう、その時だった。

「ふふふ、面白いな」

空から突然声が聞こえた。

この場にいる誰でもない。

鎧か何かで防がれたくぐもった声。

空に目を向けると……

ぞっ……

全身を駆け抜ける言いようのない緊張感と恐怖……それと高揚感。

圧倒的な存在、絶望的なまでの力量差を振りまきながら白い閃光が降ってきた。

カツ！

それは闇の世界を切り裂きながら舞い降りた。

当方たちの眼前には白が映った。

闇の中でもほんの少しの曇を見せない白きもの。

白き全身鎧。体の各所に宝玉が埋め込まれ顔までも鎧に包まれている。

背中から生える8枚の光の翼は、闇夜を切り裂き、神々しいまでの輝きを発している。

見覚えがある。色とカタチは違うが似ている……

《ブーステッド・スケイタルメイル赤龍帝の鎧》にそっくりだった。

つまりあれがカレンの話にあつた……

「《白龍皇の光翼》……《白い龍》！」
（デイバイン・デイバイング）
（パニシング・ドラゴン）

当方はそう口に出していた。

美しくも同時に恐れを感じる。

イツセーの赤龍帝の箆手に惹かれやってきたのか？

「《神の子を見張る者》幹部コカビエル。お前をアザゼルの名のもとに連れ帰る」

「……赤に惹かれたか。《白い龍》よ。邪魔立ては」

ザシユ！

コカビエルが言葉を言い終える前に奴の翼が宙を舞う。

その刹那、奴の背から血が吹き出す。

「まるでカラスの羽だ。薄汚い色をしているな」

「き、貴様！俺の羽をつ！」

翼をものがれコカビエルは怒り狂う。だが、《白い龍》はため息をついた。

「……どうせ墮ちたのだから飛ぶ必要もないというのに……まだ飛ぶつもりか？」

「ダメレエエエ!!」

コカビエルは空に無数の光の槍を出現させるが…

《白い龍》は動じずにはつきりと口にした。

「我が名はアルビオン」

『Divide!』

音声が聞こえ、コカビエルを覆っていたオーラが一気に減少する。

「我が神セイクリッド・ギアの能力の一つ。触れた者の力を十秒ごとに半分にさせ、その力を我が糧にする。時間はないぞ？早くこちらを倒さねば、人間にすら勝てなくなる」

そうして《白い龍》によるコカビエルへの蹂躪が始まった。

第23話 《目覚めただけの力》

『Divide!』

何度目かの音声。

コカビエルの動きは既に当方たちが容易に相手にできるほどにまで落ち込んでいた。

「もはや、中級墮天使並か。つまらない。もう少し楽しめると思ったんだが……終わらせるか」

フツ

視界から消え去り、光の軌跡を生み出しながら、《白い龍》がコカビエルへ直進する。

ドゴツ！バキツ！

《白い龍》の拳がコカビエルの腹部にねじ込まれ、続けざまに放たれたかかと落としによりコカビエルは地面に突っ伏した。

十もの翼を生やした墮天使の幹部がこうも呆気なく……

「フリードは……そうか、《邪の主》に取り込まれたか。始末は後でいいだろう」

《白い龍》はコカビエルの体を肩に担ぎ空へ飛び立とうとする。

『無視か、白いの』

初めて聞く声だ。

発生源は……イツセーの赤龍帝の籠手についてある宝玉だ。

つまり《赤い龍》ドライグの声か？

『起きていたか、赤いの』

《白い龍》の宝玉も声を放つ。

「こちらはアルビオンか？」

『せっかく出会ったのにこの状況ではな』

『いいさ、いずれ戦う運命だ。こういうこともある』

『しかし、白いの。以前のような敵意が伝わってこないじゃないか』

『赤いの、そちらも敵意が段違いに低いじゃないか』

『お互い、戦い以外の興味対象があるということか』

『そういうことだ。こちらはしばらく独自に楽しませてもらうよ。たまには悪くないだろう？ また会おう、ドライグ』

『それもまた一興か。じゃあな、アルビオン』

会話は赤龍帝と白龍皇のもので間違いない。

何にせよ、柔和に収まって何よりだな。

「おい！ どういうことだ!? お前は何者で、何をやっているんだよ!? てか、お前のせいで部

長のお乳が吸えなくなっちゃまったんだぞ！」

緊張感が仕事を放棄した。

イツセー……言葉は選ぼうか。

「すべてを理解するには力が必要だ。強くなれよ、いずれ戦う俺の宿敵くん……それと、
《湖の騎士》^{ランスロット}の力を引き継いだ君もね」

白き閃光と化して飛び去っていった。

誰も彼もが……いや、カレン以外が予想外の戦の終焉に言葉を失っていた。

……当方の目覚めた力が手持ち無沙汰なのだが？

どうしよ、このブレードライフル。

バシッ

「やったじゃねえか、色男！へー、それが聖魔剣か。白いのと黒いのが入り混じっててキレイだな」

「見るだけ強そうなのがわかるな……ユート、一本くれないか？」

「当方たちはユートの頭を軽く叩き、興味津々に聖魔剣を凝視する。」

「イツセーくん、リヴィー……僕は」

「ま、いまは細かいのは言いつこなしだ。とりあえず、一旦終了ってことでいいだろう？
聖剣もさ、おまえの仲間のこともさ」

「うん」

「なら良かった。また一緒に学校行けるよな？」

「……木場さん、また一緒に部活できますよね？」

「だいじよ……」

「祐斗」

その時、部長がユートを呼んだ。

「祐斗、よく帰ってきてくれたわ。それに禁^{フランス・ブレイカー}手だなんて、私も誇れるわよ」

「……部長、僕は……部員の皆に……。何よりも、一度命を救ってくれたあなたを裏切つてしまいました……。お詫びする言葉が見つかりません……」

部長の手が優しくユートの頬を撫でる。

「でも、あなたは帰ってきてくれた。もうそれだけで十分。彼らの想いを無駄にしてはダメよ」

「部長……。僕はここに改めて誓います。僕、木場祐斗はリアス・グレモリーの眷属《騎士^{ナイト}》として、あなたと仲間たちを終生お守りします」

「うふふ、ありがとう。でも、それをイツセーの前で言つてはダメよ」

「俺だつて、《騎士》になつて部長を守りたかつたんだぞ！でも、お前以外に部長の《騎士》が務まる奴がいらないだよ！責任持つて、任務を完遂しろ！」

「うん、わかってるよ、イツセーくん」

そんな会話を経て、今回の出来事は終息……してなかった。

ブウウウンと危険な音を立てて、部長の手が赤いオーラに包まれた。

部長はニツコリ微笑んで言った。

「さて、祐斗。勝手なことした罰よ。お尻叩き千回ね」

祐斗に刑が執行された。当方は苦笑いでそれを見ていたのだが……

「リヴィも祐斗たちを止めなかったのだから同罪よ」

部長は相変わらぬ笑顔でそう言った。

魔王の加勢がくるまで当方とユートは部長にお尻を叩かれながら過ごしていた。

※※※

「くううー！」

当方は目が覚めた。

久々に何も考えずに熟睡できたと思う。

昨日で終わらせたので今日もまだ休日だ。

このまま一日寝てしまおうか？

「あらあら、リヴィの同級生を、ですか？」

「はい、リヴィのお母様。ぜひとも、あなたに育てて貰いたい子がいるのです」

着替えてリビングに降りると何故か部長と母が会談していた。

……そして、部長の横にはゼノヴィアがいる。

「あら？おはよう、リヴィ。朝ご飯は適当に食べてね」

「おはよう母さん……これは？」

「リアスさんがちよつとお願いがあつたの。それについて話しているわ」

「は、はあ……」

当方の母は笑顔を絶やさずにいる。

……何故だろうか、その笑顔にはゴゴゴと凄みのある効果音が似合いそうだ。

「わかりました。では、我が家でゼノヴィアちゃんを預かるわ」

「ご厚意、感謝します」

「はあ!」

※※※

そして、数日が経過した。

最近日にちが飛ぶのが早い。

秋の日は釣瓶落とし……いや、まだ春だぞ。

ともかく、我が家に家族が増えた。

神がいないことを知り、やぶれかぶれで悪魔に転生したゼノヴィアだ。

母にしごかれることによってデュランダルを使いこなすのが目的らしいが……当方との距離感が何故か近いのも気になる。

「で、ここがオカルト研究部がある旧校舎だ」

「ほう、そうか」

当方とゼノヴィアの距離、約5cm。

近い近い。先日知り合ったものの距離感ではない。

最近、手合わせを行っているのだがソレは全く持つて関係ないだろう。うん。

というか、何考えてるんだ当方は？

少し女性の距離感が近いからと錯乱しすぎだト思うぞ。

うん。

「……というか、やぶれかぶれで悪魔に転生できるものなのか？」

「神の死を知ったので異端扱いされたのでな……今思うと、この選択が合っているかどうかはわからないが……だが、元敵の悪魔に降るといえるのはどうなのだろうか……いくら、相手が魔王の妹だからといって」

「はあ……」

ゼノヴィアは当方のクラスに転入してきた。

先日、アーシアがイツセーのクラスに転入してきたから妥当だろうな。

イリナとカレンはエクスカリバーの破片を持ってヴァチカンに帰ったそうだ。
《擬態の聖剣》？もちろん返した。

本音をいえば、聖剣欲しかったな……だって、エクスカリバーってカツコイイじゃん。
なのだがな！

「それにしても、リヴィの新しい力。凄まじいな」

「ああ……なにか名前でもつけてやるかな？ 当方では上手くかんがえられないのだが」

「そうか……なら《武装結合》とかどうかな？」

「ふむ……それでいいか。ありがとうな」

「これぐらい何ともないさ」

そんな会話しているうちにオカ研部室前についた。

「さて、ここう言うかな。」

オカルト研究部、並びにグレモリー眷属によろこそ！」

停止教室のヴァンパイア

第24話 《プール掃除と墮天使首脳》

「冗談じゃないわ」

部長がなにやらご不満のご様子。当方は今日は契約がなかったのでゼノヴィアとともに鍛錬をしていた。

そこを小猫ちゃんに呼び出され鍛錬を切り上げて部室に戻ってきたらこれだ。

一体何があつたのだろうか？

「……イツセー先輩の契約相手が墮天使の総督《アザゼル》だったそうです」

「へえ……イツセーもビックネームと……って、小猫ちゃんなんて？」

「イツセー先輩の契約相手があのアザゼルだったそうです」

なんで、先日墮天使とどんちやかやつたのにどうしてこうも絡んでくるんですかね？

定期的に墮天使と会っている気がするぞ。

そこでイツセーが男子組を集めコソコソ話を始めた。

「……やっぱ、俺の神セイクリッド・キア器を狙っているのかな。墮天使の総督なんだろう？」

イツセーは不安を口に出している。アザゼルに捕まったらただではすまなそう。と考

えているな。

「確かにアザゼルは神セイクリッド・ギア 器の造詣に深いと聞くね。そして、有能な神セイクリッド・ギア 器 所有者を集めているとも聞く。でも大丈夫だよ」

「ん？ なにか考えでもあるのか？ ユート？」

「僕がイツセーくんを守るからね」

「……いや、あの、う、うれしいけどか……。なんていうか、真顔で男に言われると反応に困るぞ……」

「真顔で言うに決まっているじゃないか。キミは僕を助けてくれた。僕の大事な仲間だ。仲間の危機を救わないでグレモリー眷属の《騎士ナイト》は名乗れないさ」

ユート……それって、ヒロインとかに向けるセリフなんじゃ……

「問題ないよ。僕の《禁手フランス・ブレイカー》となった神セイクリッド・ギア 器とイツセーくんのブーステッド・ギア、リヴィの進化した騎士ナイト・オブ・オーナーの誉が合わさればどんな危機でも乗り越えられるような気がするんだ」

「それについては当方も同意だな。ユートの聖魔剣、イツセーの倍加、当方の結合が合わされば墮天使の総督でも相手にできるだろうな」

「だろう？……ふふ、少し前まではこんな暑苦しいことを口にするタイプではなかったんだけどね。キミたちと付き合っていると心構えも変わってしまう。けれども、それが

嫌じゃないのはなぜだろう……これが、リヴィの言っていた《男同士の友情》ってものなのかな？」

「むー……どうなんだろうな。イツセーはどう思う？」

「まあ、確かに熱い展開ではあるな」

そこで話が一段落した。

「しかし、どうしたものかしら……。あちらの動きがわからない以上、こちらでも動きづらいわ。相手は墮天使の総督。下手に接することもできないわね」

やはり、悪魔と墮天使の関係はこじれているな……。これ以上、当方たちが介入して掻き乱すわけにはいかないだろうし。

あちらが攻撃してきた場合は正当防衛ができるのだが……

「アザゼルは昔からああいふ男だよ、リアス」

突然、この場の誰でもない声が聞こえる……って、この声は！

声のした方に視線を向けると……

四大魔王のサーゼクス・ルシファー様がいらっしやっていた。

当方は即跪き、頭を垂れる。

イツセーとアーシアは対応に困り、ゼノヴィアは「？」と疑問符を出しながらも当方たちに習って跪いた。

「お、お、お、お兄さま」

部長は驚愕の声をを出していた。まあ、いきなり魔王様が訪問してきたら例え実の兄でもそうなるだろうな。

「先日のコカビエルのようなことはしないよ、アザゼルは。今回みたいな悪戯はするだろうけど。しかし、総督殿は予定よりも早い来日だな」

とサーゼクス様がおっしゃった。

その横にはサーゼクス様の《女王》であるグレイフィアさんともう一人、青いローブに身を包んだ人物がいた。

……お二人の護衛か？

でも、サーゼクス様とグレイフィアさんがいたらある程度の存在は圧倒できると思うんだ。

そこでようやくイツセーとアーシアが跪いた。

「くつろいでくれたまえ。今日はプライベートで来ている」

手をあげて、俺たちにかしこまらなくていいと促してくださった。全員がそれに従い立ち上がった。魔王様のご厚意は無駄にできないから……

「やあ、我が妹よ。しかし、この部屋は殺風景だ。年頃の娘たちが集まるにしても魔法陣だらけというのはどうだろうか」

部屋を見渡しながら魔王様は苦笑された。

すると、そばに控えていた青フードが声を出した。

「サーゼクス様。ここはオカルト研究部の部室。オカルトとはすなわち私たち悪魔のような非科学的存在とされるもののこと。それを研究するのであれば魔法陣があるのはやむなしかと」

「グリーンガムはよく知ってるね。まあ、確かに一理あるね」

「どうやら青フードの人はグリーンガムと言うらしい。」

「お兄さま、ど、どうして、ここへ？」

怪訝そうに部長が聞いた。

まあ、魔王様がプライベートで人間界の学舎の部室に顔を出すなんてそうないだろうからな。

すると、サーゼクス様は一枚のプリントを取り出した。

「何を言ってるんだ。授業参観が近いのだろう？ 私も参加しようと思っただけ。ぜひとも妹が勉学に励む姿を間近で見たいものだ」

「そうだった……もうすぐ授業参観だった。……む？」

「ということとは父が帰ってくるということか？」

確か、父は「授業参観の日には仕事休んでも行くから」と言っていたような……

まあ、それはさておき。

グレイフィアさん経由で授業参観のことを知ったサーゼクス様は休暇を入れて部長のことを見に来たのだとか。

「それにこれは仕事でもあるんだよ、リアス。実は三すくみの会談をこの学園で行おうと思っけていてね。会場の下見に来たんだよ」

へえ……会議の下見にいらしたのですか……えっと、三すくみって言えば……ええええええ!!

そんな重要な案件をたかが人間界の学園で執り行っけていいものなのか!?
周りを見るとオカ研メンバーは例に漏れず全員が驚いていた。

「……どこで? 本当に?」

もちろん部長も驚いていた。再度聞くのも無理はない。

「ああ。この学園とはどうやら何かしらの縁があるようだ。私の妹であるおまえと、伝説の赤龍帝、聖魔剣使い、聖剣デュランダル使い、湖の騎士ランスロットの力を継ぐものに魔王セラフォル・レヴァアタンの妹が所属し、コカビエルと白龍皇が襲来してきた。これは偶然では片付けられない事象だ。様々な力が入り混じり、うねりとなっているのだろう。そのうねりが加速度的に増しているのが兵藤一誠くん、つまりは赤龍帝だとは思うのだが?」

※※※

「ふーっ」

湯船につかり、長く息を漏らす。

あその後、サーゼクス様とグレイフィアさんはイツセーの家に行くことになった。なお、グリーンガムさんは別件で他のところに行ったらしい。

深夜11時頃に家に着いた当方とゼノヴィアは疲れを癒すために（といっても、ゼノヴィアは大して疲れていないらしいが）風呂に入っている。

もちろん、別々にだ。

パシヤとお湯を手で掬い顔にかける。

最近、自分自身でも体に疲れが溜まっているのを感じる。

母がいう風には疲れではなく、溜まっているのはもつと別のものらしいが……

風呂から上がり、リビングの方に行くとゼノヴィアがノートを開け頭を悩ましていた。

「何してるんだ？」

「リヴィ……いや、漢字がよくわからなくてな。現国の宿題に苦戦しているんだ」

「なるほど……でも、現国の宿題って提出日は明明後日じゃなかったか？今やる必要は……」

「前もってやっておくにこしたことはない。それにリヴィイは休み時間で既に終わらしているのだろうか？」

「まあそうだけど……で？どこが読めないんだ？」

「すまない。この部分なんだが……」

「だいたい当方たちの夜はこうして更けていく。

ついでに言うと

気がついたら当方は寝落ちしていることが大半だ。

というか、当方は自分の部屋で寝ること自体がレアケースだ。

※※※

サーゼクス様御一行が来日してから数日間。

当方は何故かイツセーに巻き込まれてサーゼクス様に付き添っていた。

ゲーセンに行つて競い合ったり、ハンバーガーショップで全メニュー制覇したり、神社に行ったり……一見外遊……いや、ほとんどは日本を楽しもうと来てるんだらうな

……

ソーナ会長曰く四大魔王の皆様はオフの時はとてつもなくノリが軽いみたいだし

……

まあ、それはさておき。今日は日曜だが部活はある。

我が家から駒王学園はそこそこ遠く、当方は自転車通学をしている。

それは同じ家に住んでいるゼノヴィアも同じだ。

ただ……

「まだゼノヴィアちゃんの自転車ないから今日はリヴィのに二人乗りしてくれないかしら？」

「いえ、お母さん。私は別に自転車は大丈夫です」

「でもここから走るのはかなり時間がかかるわよ？」

「なら、当分はリヴィの自転車の後に乗せてもらいます」

「それがいいわね。駒王学園はバイク通学は禁止されてるから」

という会話がゼノヴィア登校初日にあり、当方とゼノヴィアは自転車を二人乗りして通学している。

学校の前では先生の目があるのでゼノヴィアには降りてもらっているが……それよりも、距離感が異常に近いので毎朝ドギマギしている。

母もなぜ止めてくれないのだろうか……

「ほら、行くぞリヴィ」

と、いくら考えても現状は変わるわけもなく当方の自転車の後にはゼノヴィアが乗っている。

「ああ、わかった」

ゼノヴィアの鞆と当方の鞆をカゴに入れ、ペダルを漕ぎ始める。

ゼノヴィアは当方の腰に手を回しギユツと力を入れる。

……まあ、横を向いてもらっているから何とはいわないが背中にはあまり触れていない。何とは言わないが。

十数分ほど自転車を漕いでいるとイツセー、部長、アーシアの後ろ姿が見えた。

自転車のスピードを緩め3人に併走する。

「おはよう」

「おう、リヴィ、ゼノヴィア。おはよう」

軽く挨拶を交わしそこから当方は自転車を押した。

もちろん、ゼノヴィアには降りてもらっている。

「さて、あなたたち。今日は私たち限定のプール開きよ」

そう、今日が日曜日にも関わらず学園に向かっている理由は本日はオカルト研究部が学園のプールを貸切にできるからだ。

といっても、ソーナ会長の依頼で最初に当方たちがプールを使うことを条件にプール掃除をしたからだ。

そろそろ授業でもプールを扱う頃合い。他校なら水泳部などがやるのだろうか

学園には水泳部がないようだ。だから、当方たちが掃除を行った。

水を抜き、苔を落としピカピカにした。

そう言えばそろそろ夏休みだ。

宿題は貰った日に計画を立ててできるだけ手早く終わらせて……ゼノヴィアが現国が苦手みたいだから一緒にやった方がいいかな。

それはそうと、今日はユートは来れないらしい。

「ま、楽しむことにしますか」

当方は夏の陽射しを受けながらそう言った。

第25話 《初プール。そして、ゼノヴィア無事暴走》

拝啓お父様。

今もどこかで事業に励んでいると思います。

お父様は常に先を読み、家族のため、会社のために行動してきたと思います。

そこで、ひとつ質問です。

昨日知り合ったばかりの女友達から《子作り》を強ばられた場合、どのように対処すればいいですか？

回答者には知恵コインを500枚贈呈しようと思います。

※※※

「いっち、に、いっち、に」

当方は小猫ちゃんの手を持って彼女のバタ足練習に付き合っていた。

小猫ちゃんは泳ぐのが苦手で学校の授業よりも先に練習しておくことで慣れたいようだ。

当方は部長に小猫ちゃんの面倒を見るよう言われたが、そんなことを言われずとも声をかけるなりしたと思う。

なお、隣のレーンではイツセーがアーシアの練習に付き合っている。

個人的には試してみたいことがあったのだが、まあいい。

「ぷはー……先輩、付き合わせてしまってゴメンなさい……」

「いやいや、別にいい。当方も別段退屈しているわけじゃない」

本音と言えば本音だ。

母の「自分で勇士を育て上げるって楽しくない？」という言葉の意味がわかったような気がする。

「ついたよ。終点だ」

二十五メートルをバタ足で泳ぎきった小猫ちゃんは勢い余って、当方にぶつかってしまふ。まあ、こうなるだろうとは思ったけど。とりあえず、構図が小猫ちゃんが抱きついているようになってしまっている。

イツセーなら殴り飛ばされ……いや、当方も無事ではすまない可能性が大か？小猫ちゃんも年頃の女性だ。好きでもなんでもない相手に触れられたくはないだろうな。

……うん、覚悟しておこう。

「すいません、リヴィ先輩……」

うん？

なんか覚悟してたのと違うような……まあ、いいか。

「大丈夫、大丈夫。なんてことは無い」

少し小猫ちゃんの頬が赤い気がするが……運動のしすぎ？いや、まだその段階では……

まあ、それはさておき当方は小猫ちゃんの頭を撫でながら言った。

「頼られるのも悪い気分じゃないし、後輩に何かしたいっていう考えは当方にもある。だから、小猫ちゃんは好きなようにしたらいいよ」

ザバン！誰かがプールに飛び込む音が聞こえてくる。

音の方を向くと部長が優雅に泳いでいた。

綺麗なフォームだな。当方はどちらかという陸上競技の方が得意で水泳は実はあまり得意じゃない。

だから、水泳の上手な人の泳ぎを見るとついついその技術をパクるために凝視してしまふことがある。

母曰く、技術は盗むものだからしかたない。

「ほほ……上手く泳ぐものだ……」

「……私だって、練習すればあれぐらい」

※※※

「……きゆううう、疲れましたあ」

プールサイドに敷いたビニールシートの上でアーシアが項垂れている。

バタ足練習を張り切っていたせいも体力を使い果たしたみたいだ。小猫ちゃんは体力はあるが練習のしすぎも問題なので適度に休憩をしている。

そんな光景の中、イツセーが部長の方へ走り去っていった。

イツセーのせいで部長は顔しか確認できてないがご本人で間違いないだろう。

当方も休憩していたので静観していたのだが……

「ダメよ！その子は私のよ！絶対にあげたりしないのだから！」

「こんな素敵でかわいい男の子、他にめつたにいませんわ。たまにエツチにかわいがるぐらい、いいですよわね？」

部長と朱乃さんが口喧嘩を始めていた。イツセーの貞操の話まで飛躍し、口喧嘩はさらにヒートアップしている。

なにか不穏な空気が……

ヒュッ！ボンッ！

当方の目の前にあるプールの飛び込み台が部長の魔力によってひとつ消滅していた……

「……イツセー頑張れ、当方は戦線を離脱する！」

こちらを若干涙目で見えるイツセーに対して当方はそう言い切り近くにあったプール

用具室の中に避難した。

「待ってくれリヴィ！お前からも見放されたら俺は！」

「無理！無理！レベルが違うすぎる！あんなどころにいたら一瞬で塵になる！」

※※※

ふっー……

当方は無事用具室に入り、その中で安堵の息を浮かべていた。

さすがはグレモリー眷属の《王》と《女王》迫力が段違いだ。というか、女性の恋のトラブルなんてゴメンだ！

イツセーを巡る争いなら別のところでやってください、お願いします！こっちの命が足りる気がしません！

「……ん？誰……というか、ゼノヴィアか。なんでここにいる？」

当方はふとここ数日で見知った気配を感じ声をかける。

「リヴィか……どうしたのかな？と、外が騒がしいようだけど？」

「今は外に出ない方がいい。で、ゼノヴィアはなんでここに？」

「初めての水着だね。ニーナさんと一緒に買いに行ったんだけど、着るのに時間がかかってね。似合うかな？」

女子更衣室という文化を知らないのか？

さすがに外国でも男女別の着替え場所は用意されてると思うのだが……

ちなみにいうとゼノヴィアの水着は前だけ見ると布面積が大きいが、後ろ姿の布面積はほとんどビキニ。それがピッチリと体に張り付いており体の凹凸を強調している。

なお、ニーナとは当方の母の名前だ。

「当方はさほどファションセンスがあるわけではないが似合うと思うぞ。それにして水着が初めて……教会の規則で破廉恥なものは禁じられていたのか？」

「まあ、そうだね。というよりもこういうものに私自身興味がなかったんだ。周囲の修道女たち、女性の戦士はその手のものに触れられなくて不満を漏らしていたけどね」

ゼノヴィアは「戦闘している方が性に合う」とかいうタイプだから問題ないのか？

「だけど、私も身の上が変わった以上、多少なりとも女らしい娯楽を得たいと思うんだ。と、最近思い始めてね」

さいですか。間違ってもその手の話は母とするなよ。あの人は「最高の愛の形は何？」と聞いたなら「略奪愛ね」とか答えるから見本にするのは間違っているからな。

「リヴィ。折り入って話がある」

「なんだ？ また手合わせか？」

「そうではない。私と子供を作らないか？」

……………。誰に何を相談したらそうなった？

「……いま、なんと?」

「私と子作りをしよう」

んー。ん?……なにか変な言葉が聴こえたような…

「リヴィ、私と子作りをしよう」

「はああああああ!?むがつ!」

驚きのあまり大声を上げる当方の口をゼノヴィアが塞ぐ。

「しーっ。大声を出してはいけない。気づかれる」

大声を出すな?無理な相談だ!何考えてんだコイツ!

「……ながあつてその考えに至った聞いてみようか。話はそれからだ」

内心ドギマギしている当方の言葉にゼノヴィアはうなづく。

「わかった。順に話そう」

コホンと軽く咳払いしゼノヴィアは語り始めた。

「子供の頃から、これといって夢や目標というのが、すべて神や信仰に絡んだものでね。この辺りは家にいた時に話したと思うが、悪魔になつたいま、私の夢や目標は無くなつたと見えるんだ」

「ああ、それは前聞いた」

「と言つても世間話の延長上で聞いてみただけなんだけどな。」

「覚えていてくれて助かるよ。神に仕えていた時は女の喜びを捨てることにした。我が身、我が心は全て信仰のために封印したんだ。けれど、今はこの通り悪魔の身だ。何をしていたか最初はわからなかった。現主であるリアス部長とニーナさんにそれを訪ねたら……」

「訪ねたら？」

「悪魔は欲を持ち、欲を叶え、欲を与え、欲を望む者。好きに生きてみな。と双方から言われてね。だから、ひとまずは私に封印されていたものを解き放ち、それを堪能しようと思う」

「……それで女性の喜びを解放する……と？」

「ああ、今の私の目標はね。子供を産むことなんだ」

「へえ……で、それで子作りをしようと？色々つぶつ飛んでないか？」

「だね。子作りのためには男を知る必要があるが、それは子作りを通して知ることができらるだろう？」

何を言ってるんですかね、この子は。

「話はわかったが、納得できない。彼氏彼女の関係ではない当方となぜ？」

「ふーむ……この話をするのはリヴィイか兵藤一誠かの二択だった。君たち二人の中で仲が良いのはリヴィイの方だと思ってね。ちなみにニーナさんの合意は既に得ている」

母よ。あなたはなんてことをして下さいましたのでしょうか。子供とかこの歳で考えたことないぞ。

まず、恋人云々も雲の上の話だと思っていたのだが!?

「聞くところによると、この国には《既成事実》というものがあるそうだね。それを作ってしまうば、結婚という女の喜びも感じれると思つてね。ほら、一度に何個も得する。これをこの国じゃ《一石二鳥》つていうんだっけか?」

ゼノヴィアは素晴らしいながら当方に近寄つてくる。

当方は後にさがるがいよいよ壁際に到達してしまい逃げ道を失つた。

「それに、私は子供を作る以上、強い子に育つて欲しくてね。《湖の騎士》ランスロットの末裔である君との子供なら神セイクリッド・ギア器が引き継がれなくとも、強力な力を得るかもしれない。聖剣使いの私との相性はバツチリだと思わないか?」

……? 《湖の騎士》の末裔?

いったいなんの話……!?!?

当方の口に柔らかない感触が伝わった。

「ニーナさんにまずはこうするのがいいと聞いてね。何事も早めがいい。ちようどこゝは人気もないみたいだしね」

素晴らしいながらゼノヴィアは水着をずらす。

見ちゃダメだ。なにか、色々と不味いことになりそうな気がする。ファーストキスを奪われ、当方の心臓の鼓動がおかしい。

わかっていると思うが当方の本質はシャイだ。

って、誰に言ってるんだ？

「悪魔の出生もよく知っている。なかなか、子供ができないそうさ。純血同士は特に難しいらしいが、私は転生悪魔でリヴィは未だ人間の身だ。ベースは人間だから毎日行つていれば数年には妊娠できるのではないかと思うのだよ。ああ、子供の方は問題ないよ。基本的に私が育てる。ただ、父親からの愛を子供が望んだら、その時だけは遊んでやっつけて欲しいんだ。やはり、子に父と母は必要だからね」

なにその未来予想図。それを考える前に日本の法律を学んでくれない？

「残念なことに私は男性経験はない。リヴィも女性経験はないのだろうか？これから二人で覚えていこうじゃないか」

.....

「抱いてくれ。子作りの過程をちゃんとしてくれたら好きにしてくれても構わない」

.....

色々と当方のキャパシティを超えていて受け入れたくないのだが？

その時、ガチャ、バタン！

と音がする。その方向にはイツセーの気配がした。

「やっと入れた……全く命からがらだったぜ……つて、ゼノヴィア？というところはそこで追い込まれてるのはリヴィか!？」

ああ、助かった。

とりあえず、これで大事には至りそうに……

なお、この後、女性陣が用具室に駆け込み事なきを得たが。プールからの帰り際ゼノヴィアには「私との子作り。考えておいてくれ」と言われイツセーには睨まれるわ、小猫ちゃんから冷やややかな視線で見られるわ、部長とアジアは「私達も!」と意気込むわ、大変だった。

朱乃さんだけ「あらあらまあまあ」といつもの様子だった。

その余裕が当方は欲しいです。

第26話 《参観日》

「……泳いでないのにすごく疲れた気分だ」

当方は一悶着の後、校庭の方へイツセーと歩いていたりあえず今はゼノヴィアと距離を置きたい。

「いいじゃねえか。眼福だったろ？」

「なにも見てない。見たら何か起こりそうだからな」

顔を青ざめてイツセーの冷やかしにそう返す。

昇降口から校舎に出ようとするが……

コカビエルの時に感じた気配を感じた。

つまり、それは《白い龍》

校門の方にはその気配の持ち主であろう銀髪の少年がいた。

「……………」

イツセーは《白い龍》の方向をホケーと見ている。

気がついてないのか？

ジャキと騎士の誉を具現化しガンブレードを取り出す。

「お、おいりヴィー！さすがにいきなり銃で狙うのは……」

「あれは《白龍皇》だ。気付けよ」

既にガンブレードの照準は《白い龍》に向けている。

この距離なら魔力で強化されたガンブレードは《白い龍》が禁手になるよりも早く撃ち抜けるだろう。

「ほう……さすがは《湖の騎士》ランスロットの継承者、気がつくか。そうだ、俺はヴァーリ。白龍皇

《白い龍》だ。ここで会うのは二度目になるのか？赤龍帝、兵藤一誠」

ヴァーリと名乗った《白い龍》は笑顔でそう言った。

「要件はなんだ？まさか、ここでドンパチしようってわけじゃないだろう？」

「ふふ……そうだな。例えば、ここで兵藤一誠に対し魔術的なものをかけたリ」

ヴァーリがイツセーに向かって手を伸ばそうとする。

だが、もちろん当方はそれを許さない。

バキユン！

発砲音と共にガンブレードから弾丸が吐き出される。

次の瞬間、ヴァーリの首元には二つの刃が突きつけられていた。

「何をするつもりかわからないけど、冗談がすぎるんじゃないかな？」

刃のひとつはユートの聖魔剣。

「ここで赤龍帝との決戦を始めさせるわけにはいかないな、白龍皇」

もう片方はゼノヴィアのデュランダルだ。

二人ともドスの効いた声音でヴァーリを迎える。

「やめておいた方がいい。手が震えてるじゃないか」

「……………」

「誇つていい。相手との実力差がわかるのは、強い証拠だ。俺とキミたちとの間には決定的なほどの差がある。コカビエルごときに勝てなかったキミたちでは、俺には勝てないよ。最も、そこにいる《湖の騎士》フランスロットの継承者であるリヴィエールと兵藤一誠が完成した禁フランス・ブレイカー手に至れたらキミたちでも相打ち覚悟なら勝てるかもしれないね」

クククと笑いながらヴァーリはさらに話す。

「兵藤一誠、リヴィエール、キミたちは自分が何番目に強いと思う？」

「……強さ……とりあえず、その強さが腕っ節を指すものなら当方はグレモリー眷属ではアーシアと通常状態のイツセーよりは上、ユート、ゼノヴィアとは同等かそれ以上、朱乃さん、禁手状態のイツセーには負ける。」と言ったところか。

「リヴィエールはどうやら自分がどれほどの腕か理解しているようだね。もし仮にキミの神器が禁フランス・ブレイカー手になったとしても四桁代だろう。兵藤一誠の未完成バランズブレイカーでは千から千五百の間ぐらいだろうね」

真意がイマイチわからないのだが？

「何が言いたい？」

「キミたちは貴重な存在だと言うことだよ。十分に育てた方がいい、リアス・グレモリー」

そこで部長の気配が当方の後に現れた。どちらかという、当方が今気がついた。と言った方が適当だな。

「白龍皇、何のつもりかしら？あなたが墮天使と繋がりを持っているのなら、必要以上の接触は……」

「《二天龍》と関わった者はろくな生き方をしていない。あなたはどうなるんだろうな？」

「っ！」

ヴァーリの言葉に部長は言葉を詰まらせた。

文脈から考えるとイツセーに関して……か。

「今日は別に戦いに来たわけじゃない。ちよつと先日訪れた学舎を見たただけだ。アザゼルの付き添いで来日していてね、ただの退屈しのぎだよ。じゃあね」

ヴァーリはそう言うと言を返してこの場をあとにした。

緊張の糸は張り詰めたまま。当方たちは武装を解除したが、まだピリピリとした雰

困気が漂っていた。

※※※

ヴァーリが駒王学園に来るといふサプライズがあつたがとりあえず、当方とゼノヴィアは我が家に帰ってきた。

扉を開け、家の中へ上がる。足元を見ると普段は見慣れない靴が一組……

「おや？リヴィに……話にあつたゼノヴィアさんかな？おかえり」

どうやら父が帰ってきたようだ。

「ただいま、父さん。帰ってくるのは明日の午前じやなかつた？」

「予定を早めて。ニーナから聞くところによると家族が増えたそうじやないか。はじめましてゼノヴィアさん。私がこの家の一応の家主、相川哲也……いや、哲也・A・ハルトマンと名乗った方がいいのかな？」

※※※

そんなこんなでハルトマン家十？α？で夕餉を過ごし、すこしした後。

「さて！ゼノヴィアちゃんは私と稽古よ。三十分後に道場に来てね」

「わかりましたニーナさん」

母とゼノヴィアは稽古に行き、当方は父とリビングに残った。

父は湯呑みに入れられた茶を飲み干し当方に向き直った。

「さて、ニーナがいう風にはやっと力を使い出したみたいだね」
「……力？」

「確かセイクリッド・ギアだったか。リヴィの中に宿る黒鎧の事だよ」
「なんで父も神器の^レことをご存知なんですかね。」

「なんで？ っつて顔をしてるね。それはもちろん、私も神器持ちだからさ。と言っても、取るに足らない矮小な力しか持たないものだがね」

「そうなんだ……」

初めて知ったよ、そんなこと。今日は驚きが連続してるな。

「どんな力なの？」

「簡単に言えば、子に記憶の一部と技術を遺伝させるセイクリッド・ギアさ。それのおかげで私の知られたくない部分がリヴィは無意識で知っていることになったけどね」

「??？」

「ゼノヴィアさんに席を外してもらったのはね。今の内に話しておきたいからだ。リヴィ、君は自分のことを転生者だと思ってる。違うかい？」

「……は？」

当方は父の言葉に啞然とするしかなかった。

そのことを知っているのは同じ転生者であるカレンぐらいのはず……

「でも、事実は違う。君は私とニーナの正真正銘実の子で前世なんてものはない。君の中にある前世の記憶は私の前世の記憶だ」

「……待って、全く意味がわからないんだけど？」

「つまり、私が転生者だと言うことだよ。君には遺伝で記憶が引き継がれただけ。あの龍が言うには転生者には必ず《特典》と呼ばれるものを貰うらしい。けどリヴィ、君が持っているのはただの《神器》セイクリッド・ギア。転生者が持っているはずの《特典》は有していない」

「なら、父さんにはその《特典》というものはあるのか？」

「ああ。私の特典は《幸せに生きる運命》だ」

「《幸せに生きる運命》？」

ソレはいったいどういう特典なんだ？

「ハハ、まあこの《特典》は人によって受け取り方が変わってくるからね」
「??」

「記憶の一部が引き継がれているからわかるだろうけど、前世の私は事故で死んだようですね。龍に願ったのは天寿を全うして幸せの中で死ぬことなんだ」

「死ぬ前提の願って……」

「まあ、あの時の私は文字通り死んでたからね。ハッハッハッ」

笑っちゃっていいのだろうか？

「ひぎやあああああ!!!」

その時、道場の方からゼノヴィアの悲鳴が聞こえた。

恐らく……というか、十中八九、母のスパルタ稽古による悲鳴だろう。

いつもはあの悲鳴と同じタイミングで当方の叫び声も出るので客観的に聞くことはなかったが、第三者の視点で聞いてみると事件性のありそうな叫び声だな。

それでも女性が「ひぎやあー」なんて叫び声を上げるのはどうかと思うが。

「ゼノヴィアさんの悲鳴が聞こえてきたからこれで終わりにしようか」

「いまいちよくわかってないんだけど……」

「今はそれでいい。直にわかるさ」

父はそれだけ言うとう席を立ち、道場の方へ歩いて行ってしまった。

「……当方の家族って変な人ばかりだな……当方含めて」

※※※

ということがあつて参観日当日。

今日の授業参観はソーナ会長のお姉さんであるレヴィアタン様もご覧になるそうで。悪魔のトップであらせられる魔王様がまさかのお二人もいらっしやるのだ。

そそうのないようにしないと……

だが……

「いい、ゼノヴィアちゃん。参観日っていうのはね。自分の親にいかに分が他の生徒より優れているかを親に示す。いわば品評会みたいなものなのよ」

「ふむふむ……なるほど。では、他の生徒より私が有用であることを証明すればいいんですね」

「そうよ〜?」

母はゼノヴィアに変な入れ知恵してるし……

「フィルムよし……カメラよし……一生に一度きりだからね。準備は万端にしないと……」

父は親バカを發揮しようとしてるし……というか、昨日、あれだけ深刻な話をしたとは思えない切り替えっぷりだ。

「じゃあ、行ってきます。ゼノヴィアも早く行くぞ」

「ん? ああ。行ってきます。ニーナさん、テツヤさん」

第27話 《もう一人の僧侶（ビシヨップ）》

参観日は矢の如く早く終わった。

といつても、刺激的なことが多くて体感的に早く終わったただけだ。

部長のお父上もいらっしやっていた。

以前、焼き鳥パーティーでお会いしたことはあるが現当主がこうも簡単に来てもいいのだろうか？

それはそれとして。

魔王レヴィアタン様もいらっしやっていた。

魔法少女の装いで……

頭がどうにかなりそうだった。

普段着とかスーツとかじゃ断じてない

魔王様の恐ろしいところ（笑）の片鱗を味わったよ……

やはり魔王様たちはプライベートはものすごく軽いみたいだな。

認めたくは無いが。

ともかく、参観日も特にハプニングはあったが無事終わり。

時間帯は翌日の放課後。

当方たちは旧校舎一階の《開かずの教室》に来ていた。

部員全員があつまっている。

部長の説明ではここにもう一人の《僧侶》が引きこもっているらしい。

ユートや小猫ちゃんからどういう人物かは聞いている。

名前はギヤスパール・ヴラディ。人間と吸血鬼のハーフでフオレビトウンパロールレヒュー《停止世界の邪眼》というD

I〇のような能力の神器を宿している。

駒王学園高等部一年の男性。何故か女装をしておりかなり似合っているらしい。

パソコンを介した契約を行っており、グレモリー眷属一番の稼ぎ頭。ちなみにグレモ

リー眷属最下位はイツサーで次点でアーシア、その次は僅差で当方だ。

ついでに言うと、パソコンを介してはコミュニケーションを取れるので一度、trpg

gの卓を囲ったことがある。初めてのtrpg、楽しかった。買ったものの使わなかつ

たルールブックやサプリメントが文字通り山のようにあるからな……

それはさておき。

時間停止なんていう強力な神器が故に制御が難しく、ギヤスパール男児はそれが原因で悪魔の上層部から封印されていたが、先の数々の戦いで部長に扱えるほどの能力が備わったと認定。封印を解除するらしい。

が……

『外に行きたくない！人に会いたくないいいいつ！』

うん、知ってた。

※※※

『停止世界の邪眼』？
フオービトクワン・パロール・レユ

イツセーの間に部長が頷いた。

「そう。それがギヤスパーの持つている神セイクリッド・ギア器の名前。とても強力なの」

「時間を停めるって、それ、反則に近い力じゃないですか？」

「ええ、そうね。でもあなたの倍加も、白龍皇の半減、それにリヴィの強奪も反則級なの

よっ。」

おっと。当方のも反則級だったか。

まあ、武器を持つているのなら奪ってしまえばある程度は弱体化できるし……だから
 といって勝てるという話ではないがな。

「問題はそれを扱えないところ。リヴィも一応は経験あるのじゃないかしら？」

「ええ、まあ……幼い頃は箸やフォークがいきなり黒くなったり、いきなり消えたもので
 かなり狼狽えましたよ」

あまり思い出したくはない。特に小学校低学年の時に蹴ったサッカーボールが消え

た日はボールを無くしたと思つて半泣きになつたぐらいだ。

「しかし、そんな強力な神セイクリッド・ギア器を持つた奴をよく部長は下僕にできましたね。しかも駒

ひとつ消費だけで済むなんて」

《変異の駒》よミューテーション・ピース

「ミューテーション・ピース？」

「確か、明らかに駒を複数使うであろう転生体が、ひとつの駒消費で済んでしまう現象を起こす駒でしたっけ？」

イツセーの言葉に当方はそう付け加えた。

「そうよ。部長はその駒を有していたのです」

と朱乃さんが付け加えた。

「だいたい上位悪魔の十人に一人ぐらいは持つているよ。《悪魔の駒》イーヴィル・ピースのシステムを作りましたときに生まれたイレギュラー、バグの類らしいんだけど、それも一興としてそのままにしたらしいんだ。ギヤスパークくんはその駒を使った一人なんだよ」

「つまり部長はレアな駒をギヤスパークに使つた。つてことか？」

「そうなるね」

「ただ。当方としてはその件のギヤスパークから変な気配をピンピン感じるんですけどね」

当方がそういうと部長が口を開いた。

「それはギヤスパークがデイウオーカーという特殊な吸血鬼の血を引いてるからじゃないかしら？リヴィイは確か、まだデイウオーカーとは遭遇したことはないわよね？」

「まあ……そうですが」

「最近、気配感知の才能が開花したのかしら？リヴィイの感知能力は魔力で強化してないにも関わらず、一級品ね」

「そういえば、デイウオーカーってなんですか？」

そこでイツセーが再び疑問符を口にした。

「なんでも日中でも普通に活動できる吸血鬼らしい。まあそれでも太陽は苦手みたいだぞ」

「へえ……」

「ついでに言うと。ギヤスパークくんはハーフだからそこまで血に飢えている訳じゃないから。十日に一度、輸血用の血液を補充したら問題ないよ。ギヤスパークくん自体が血液苦手らしいけど……」

「血、嫌いですううう！生臭いのダメエエエエ！レバーも嫌いですううう！」

「意外と好き嫌が多いな……」

「……へたれヴァンパイア」

「うわああああん！小猫ちゃんがいじめるうううう！」

一年生どうし、小猫ちゃんはギヤスパー男児に対して容赦しないらしい。……イツセーにも容赦しないような……ま、気のせいだろ。

「とにかく、私が戻ってくるまでの間だけでも、イツセー、リヴィ、アーシア、小猫、ゼノヴィア、あなたたちにギヤスパーの教育を頼むわ。間違えてもニーナさんの所には連れていけないこと。私と朱乃は三すくみトップ会議の会場打ち合わせをしてくるから。それと祐斗、お兄さまがあなたの禁手バランストレーイカーについて詳しく知りたいから、ついてちょうだい」

「はい、部長」

※※※

ということがあり。

当方たちはギヤスパー（男児付けはやめようと思う）を鍛えるためにとりあえずは旧校舎を出た。

と言つても……

「ほら、走れ。デイウオーカーなら日中でも走れるはずだよ」

「ヒイヒイッ！ デュランダルを振り回しながら追いかけてこないでえええええッ！」

「おつかないな」

「リヴィさんも素晴らしいながら発砲しないでええええ！」

ゼノヴィアのデュランダルからブウウウンツッ！という危険な音と共に放たれる聖なるオーラと当方のガンブレードから放たれる水で形成された銃弾が逃げるギヤスパーを襲う。

当てるつもりは元よりないし、銃弾は校舎を傷つけないようにするために着弾しても濡れる程度だ。

ギヤスパーには聖水だと説明してるがな。

このようになったのは当方とゼノヴィアで「健全な精神は健全な肉体から」という考えになったので精神よりも先に肉体を鍛えることにした。

少々スパルタだが、母に比べたらまだまだ甘いから問題ないだろう。

ちなみに当方たちの後方には何故か小猫ちゃんがニンニクを持ってギヤスパーを追いかけている。

「……ギヤークン、ニンニク食べれば健康になれる」

ああなるほど、ギヤスパーを弄りたかったのか。

「ひゃあああ！小猫ちゃんが僕をいじめるううう！」

どうでもいいことだが第三者視点からは

噂の留学生と2年のイケメン2柱の1人と高等部のマスコットが女学生を追い回し

ている、だ。

何をしているか他の人からはわかんないだろうな。

イツセーは遭遇したサジと何やら会話しているご様子。

詐欺がどうか言ってるな。理解に苦しむとも言ってる。

その時、異様な気配を感じた。

コカビエルを越える迫力と敵意が一切感じられない。

……イツセーの言っていたアザゼルだろうか？

可能性として一番妥当そうな感じがする。

もつとも、今ここで事を荒らげる意味は無いだろうから……

「よー、赤龍帝。あの夜以来だ」

軽い。予想してたけど軽い。

「ひよ、兵藤、アザゼルって！」

「マジだよ、匙。俺はこいつと何度か接触を……って、あれ？」

アザゼルはイツセーを無視して当方の方に近寄ってきた。

「おお……それが進化した《騎士ナイト・オブ・ナイトの誉》で連結された武装か……それにしても体の一部に鎧を出現させずに武装の展開も可能に……なるほど、成長とともに進化もしたってことか。基本機能とその強化ってところか。いやー今まで見たことのない事例だな。

宿主の意思で亜種化したということか？それとも禁^{フランス・ブレイカー}手の予兆……いや、それすらも違うかもしれねえ。そうだ、お前これやるよ」

とアザゼルは白い盾のようなものをどこからともなく取り出し手渡してきた。

「えつと……」

「そいつは《^{エナジー・ウイング}光の翼》つて言つてな。珍しく形になった人工^{セイクリッド・ギア}神器なんだがただの攻撃できる翼は間に合つていてな。どうせだから和解記念にやるよ。安心しろ。攻撃機能はついてあるから問題なく奪取できるはずだ」

「えと……ありがとうございます？」

「おう。札を素直に言えるやつは好きだぜ？ああ、それと……」

アザゼルはギヤスパーとサジの神器についてアドバイスをし去つていった。

一体なんなんだ？まるで嵐のようだったな……

第28話 《龍殺しの聖剣と騎士の剣》

アザゼルが突如来訪してきた次の日の深夜。

今日も契約が当方は入っていなかったのでアザゼルが寄越した人工セイクリッド・ギア神器とやらの練習をしていた。

まあ、練習と言ってもかなり使い勝手の良い武装なので今後は多用しそうだ。

ただ、見た目がほとんど色違いの《白龍皇の光翼》デイブリン・デイバイディングではない。

白いところが黒で翼が赤いだけだ。また、白龍皇にはないであろう翼を形成するエネルギーを飛ばすという機能が付いているが……

まあいいか。

今重要なのは時間帯が深夜で悪魔稼業が他の部員も終わっているということだ。

当方はそろそろ頃合だろうと部長か朱乃さんに今日は帰るといふ旨を伝えようとしたのだが……

「おまえが出てくるまで、俺はここを一步も動かないからな！」

というイツセーの声が聞こえた。

声のした方に向かってみるとギヤスパアの部屋の前で座りこんでいるイツセーが目

に付いた。

「……………なるほど」

当方はそれだけ声を出すとイツセーの隣にもたれかかる。

「せっかくだから付き合おうぞ。ギヤスパーの問題はグレモリー眷属の問題。グレモリー眷属の問題なら当方の問題でもある」

「そうか……………」

そこから一時間ほど経過した。

こんなことになるだろうと疑似悪魔化しておいたので寝落ちすることはないが、何もせずに1時間待つというのは結構退屈だったな。

「……………怖いかな？ 神セイクリッド・ギア 器と……………俺たちが」

『……………』

イツセーが扉越しに話しかける。

「俺も最強のドラゴンが宿った神セイクリッド・ギア 器を持つてる。でも、お前みたいにヴァンパイアだとか、木場みたいにすごい生き方をしたわけでもないし、リヴィみたく名のある英雄の末裔ってわけでもない。普通の男子高校生だったんだよ」

あ、イツセーがさらりと当方が《湖の騎士》の末裔であることを知ってるけど、母曰く、当方が知らなかったのは《聞かれなかったから》だそうな。

部長は元から知ってたらしいし、イツセーには参観日に母が教えた。

ちなみにその時の会話は

「そう言えばリヴィイのお母さん」

「何かしら、兵藤くん？」

「リヴィイって実は特別な感じだったりするんですか？明らかに俺との差がありすぎるよ
うな……」

「うーん……といっても《ランスロット》の末裔であることぐらいしか思い当たらないわ
ねえ」

「へえ……って。え?!」

と言うものだった。

「俺は……正直、怖い。ドラゴンの力を使うたび、体のどこかが違う何かになっていく感
じがするんだ。悪魔のこともよくわからないし、ドラゴンってのがどういうものかもわ
からない。だけど、前に進もうと思う」

「強いな……イツセーは」

「当方も会話に参加する。」

「当方の答えはイツセーと同じく《怖い》だ。当方もギヤスパーほどではないが小さい頃
に苦勞したからな。あんまり話したくはないが、今思えば中学校の時は虐めのようなも

のにあつていたんだろうな。それに、力を使う度に何かに変わるって感じはしないがそれでも当方がただの人間でないことをいつも突きつけられている気がする。英雄の未裔だからどうか、悪魔がどうか正直当方もよくわかっていない。もしかしたらギヤスパーの方が詳しいかもしれない。それでも力を使うのは……なんだろうな、後悔したくないからだと思う」

あの時にあの力を使っていたら……って後悔したくないからな。そんなのはただの間抜けじゃないか。

『……どうしてですか？も、もしかしたら、大切な何かを失うかもしれないですよ？せ、先輩とリヴィさんはどうして、そこまで真っ直ぐいきていられるんですか？』
返事がかえってきた。話は聞いていたようだな。

「……ううん……。俺はバカだから、難しいはよくわからないんだ。ただ」
『ただ？』

「部長の涙を見たくない。レーティングゲームやったときさ、俺たち負けたんだ。やられた時の記憶が無いぐらいボコボコにやられてさ。情けないっつらありやしねえ。……なのに、部長が泣いていたところだけは覚えてやがる」

「……そうだな。当方なんか虚を突かれて数秒でやられたからな」

「ああ、あれはキッツいんだ。脳みその奥に深く焼き付けられてさ。小猫、木場、リヴィ、

朱乃さん……仲間がどんどん倒れていって、最後に俺だけ……。いまでも夢に見る。俺だけが誰もいない戦場を走り回る夢だ。仲間を見つけても近づいたらみんな消えて……部長を見つづけるんだけど、泣いていて、俺は何もできなくて……」

「……………」

思いのほか当方にダメージがくるな。

と思っていたらギイ……と鈍い音を立てながら、扉が少しだけ開かれた。

「……………」
「……ぼ、僕はそのとき、いませんでした……」

扉の奥から姿を現したギヤスパは涙を懸命にこらえている。

「ああ、わかっている。俺たちはそれを責めやしない。でも、これからは違うだろう？」

「……………」
「……ぼ、僕じゃ、ご、ご迷惑をかけるだけです……。ひきこもりだし、人見知り激しいし……」

「……………」
神セイクリッド・ギア器はまともに扱えないし……」

「よっー！」

当方は手にサッカーボールを出現させる。

ボールの色は黒でところどころ赤いラインが走っている。

「当方も昔は神セイクリッド・ギア器で苦労してな。これは小学生ぐらいの時に誤って奪取したサッカーボールだ。今でこそ自分の忬度で取れるものを選べるが昔はこの手で触れるもの殆どがどんどん消えていく……一時は触れた友達も消えてしまうとと思ってな。人と触

れ合うことが無性に怖くなった。けど今は……」

サツカーボールをクルクルと回転させ一瞬で魔剣と入れ替える。

「わあ……」

「この通り自由自在だ。やる前に諦めるよりも。当方やイツセー。ユートにゼノヴィア。アーシア、小猫ちゃん、朱乃さん。それに部長。グレモリー眷属のみんなと頑張つてからでも遅くないだろ？ユートも昔は《魔剣創造》ソッド・パースをうまく扱えなかつたみたいだからな。結果はついてくるさ」

「俺たちはお前を嫌わないぞ。先輩としてずっと面倒見てやる。……まあ、悪魔としてはこの中ではギヤスパーが一番先輩だろうけどさ。でも、実生活では俺たちが先輩だから、任せろ」

「……っ」

ギヤスパーは目をパチクリさせているが、イツセーは続ける。

「力を貸してくれ。俺たちと一緒に部長を支えよう。おまえが何かを怖がるなら、俺たちはそれを吹っ飛ばしてやる。これでも伝説のドラゴンの力が宿っているやつと円卓最強の騎士様の末裔なんだぜ？」

「客観的に言うな。恥ずかしい」

イツセーはニカツと、当方は呆れながら笑みを浮かべる。ギヤスパーは……コメント

に困ってるな。

「そうだ。俺の血飲むか？アザゼルの野郎が言っていたことが真実なら、俺の血を飲めばセイクリッド・ギア器を扱えるかもしれない」

イツセーのそんな提案にギヤスパーは首を横に振る。

「……怖いんです。生きたものから直接血を吸うのが。ただでさえ、自分の力が怖いのに……。これ以上何かが高まったりしたら……僕は……」

「そんなに怖がることか？」

「へ？」

「当方としては、ギヤスパーのセイクリッド・ギア器はうらやましいけどな」

「……？」

当方の一言に心底驚いた表情をギヤスパーは浮かべる。

「漫画とか読んでたら一度は憧れないか？《時間を止める能力》。D I Oとかラスボス級の能力なんだぞ？もし当方に宿っていたら……そうだなあ……。ふむ、とりあえず時間を止めて殴るかな。相手がなにもできないっていうアドバンテージはかなり大きい。しかも、時間が止まっているからそれを認識出来ないときた。当方のセイクリッド・ギア器との相性もバツチリだからな。時間を止めて武器を確実に奪う。相手は一瞬で武器を取られたと勘違いを起こすだろうな……イツセーならどう使うよ。D I Oの能力」

「俺か？俺なら……きつと、クラス……いや、学校中の女子にいかがわしいことをしていたに違いない。これは断言できるな。廊下を匍匐前進しながら女の子のパンツを覗き見していただろうなあま。あー、その神セイクリッド・ギア器キだつたら、ぶ、部長を停めて、お、お、おっぱいを……ッ！あ、あのおっぱいを好き放題にできるなんて考えただけでよだれが止まらんぞー！」

おいおい……だらしなげイッセー……つていつもの事か。

流石にギヤスパーも呆れ……てないだど!?

「……先輩たちってやさしいんですね。そんな風に言われたのは初めてです。うらやましいなんて言われたことなかったです。しかも具体的な例まで……。先輩方は、楽しい人達ですね」

イッセーはわかるが当方はそんなにおかしいこと言っていたか？

「いいか、よく聞いてくれ、ギヤスパー。俺は赤龍帝の力を部長のおっぱいに譲渡したいんだ」

……はい？今なんと？

「……す、すごいです。イッセー先輩。強大な神セイクリッド・ギア器キを持っていながら、そこまで卑猥に前向きに向き合えるなんて……。ほ、僕にはとうてい及ばない思考回路ですが、なぜか少しだけ夢と希望をかんじました。イッセー先輩の煩惱って勇氣に溢れてますね」

バカにされてるぞイツセー。

「そうだろうそうだろう！ 強大な神セイクリッド・ギア 器なんだ！ ようは使い方だ！ 俺は俺の性欲を満たすために神セイクリッド・ギア 器を使うね！」

「当方は……そんなこと考えてないからな」

「ほほ……じゃあ、この間借りたノートに書いてあったアレはなんですかね？」

「アレ……なんのことだ？」

「仮名《ドレッドノート》概要 ミサイルや魔力砲を搭載しているフロートユニット。主に一対多を想定しており破壊力は申し分ない」

サアア……と血の気が引いていく。

「そもそもドレッドノートとは《恐れ知らず》という意味であり。本懐は……」

「やめろお！ これ以上言われたら暴れるぞ！ そして泣くからな！ 当方、泣くからな！」

「ははは。真面目キャラを装っているリヴィイでもこんな事考えてるんだ。気に病むことねーよ」

「ぼ、僕もなんだか少しだけ勇気が湧いてきたような気がします。本当に少しだけだけ……」

いつの間にか当方たちはギヤスパアの部屋に入って談笑していた。

「さすがイツセーくん。ギヤスパークんとすぐに談笑できるなんてね。リヴィイだけじゃ

「こうも行かなかつたろうに」

「うっせ！その通りだ！」

これでグレモリー眷属の男子が全て揃ったことになるな。

「二人とも話がある」

「なんだい、イツセーくん」

「ろくでもないことじゃないだろうな」

「俺たちは男だ」

「そうだね。そんなことを聴いて突然どうしたの？」

「俺はグレモリー眷属の男子チームでおこなえる連携を考えた」

「それは……興味をそそられるね」

「連携……効率的なんだろうな？」

「まず、俺がパワーを溜める。リヴィはこの間に武装した敵の無力化を行ってくれ。溜

めた力をギヤスパーに譲渡して周囲の時を停める。その間、俺は停止した女子を触り放

題だ」

「またかよ……」

「エツチな妄想をしていたんだね。……それはそうと、それだけなら僕の役目はないん

じゃないの？」

「いや、ある。おまえは禁手バランスブレイク化して、俺を守れ。もしかしたら、エツチなことをしている間も敵が襲来してくるかもしれない。これは大事な連携だ。俺が溜めて、リヴィが足止め、ギヤスパーが停めて、俺が相手に触り、おまえが俺を守るを完璧な陣形だ」

「んなわけあるかあああ！」

「イツセーくん、僕は仲間のためなら何でもするけど……一度、真剣に今後のことを話そうよ。力の使い方がエツチすぎるよ。ドライグ、泣くよ？」

そんなこんなでガヤガヤと夜は更けていった。

最終的には夜通し猥談が始まった。

意外にもユートがスケベで当方がお姉さん好きだとわかった。

※※※

次の休日、当方とイツセーとはある場所へ向かっていた。

朱乃さんに呼び出されたんだ。部長も用事を終えたら、あとから向かうらしい。

ちなみに言う……向かっている場所は神社だ。

当方の立ち位置って人間だけど半分悪魔みたいなものだし……今年の初詣以外に神社に行っていないからどうなることやら……

「いらっしやい。イツセーくん、リヴィくん」

「あ、朱乃さん!？」

なんで神社の石段に……しかも、なんで巫女服なんですか？

※※※

「そう言えば、ここ神社なんですけど大丈夫なんですか？その……不可侵領域とか」

「ここは大丈夫ですわ。裏で特別な約定な執り行われていて、悪魔でも入ることができません」

鳥居の前で当方が問いかけると朱乃さんはそう言いながら何事もなく鳥居をくぐった。

大丈夫なんですね。

……でもなんか重圧感じるんですけど

「朱乃さんはここに住んでるんですか？」

「ええ、先代の神主が亡くなり、無人になったこの神社をリアスが私のために確保してくれたのです」

「彼らが赤龍帝と湖の騎士ランスロットですか？」

第三者の声が聞こえ後に振り向く。さつきから感じてる重圧の正体はこの人か？

輝くまでの金色の羽が目の前で舞う。豪華な白いローブに身を包み、頭部には金色の輪っかが漂う。

……さては天使ですか？

「初めまして赤龍帝、兵藤一誠くん。そして、湖の騎士^{ランスロット}、リヴィエール・A・ハルトマンくん」

イツセーの名前はまだしも当方の名まで……

「私はミカエル。天使の長をしております。なるほど、このオーラの質、まさしくドライブですね。懐かしい限りです」

ミカエル……え？天使側のトップのひとりじゃないですか!?

※※※

朱乃さんの先導の元、当方たちは神社の本殿に向かう。

ピリピリと感じる力の波動……それが……二種類だな。

なにが待ち受けているのか……

「実はあなたたちにこれを授けようと思ひましてね」

何かくれるんですか？

ミカエルさんが指差す方へ視線を送ると、そこには聖なるオーラが滲み出ている2本の剣が宙に浮いていた。

「右のはゲオルギウス……聖ジョージといえは伝わりやすいでしょうか？彼の持っていた龍^{ドラゴン・スレイヤー}殺しの聖剣《アスカロン》。左のはシャルルマーニュ、こちらはカール大帝の方が伝わりますかね。彼の剣《ジュワユーズ》です」

第29話 《王勇を示せ、遍く世を巡る十二の輝劍（ジュウユーズ・オールドル）》

「なぜ、こんな貴重なものを当方たちに？特にジュウユーズはルーブル美術館で展示されているんじゃない？」

「ルーブル美術館で展示されているジュウユーズは贋作です。これは失われた正真正銘本物のジュウユーズです」

「へ、へえ……」

「なぜ、ということですが。私は今度の会談は三大勢力が手を取り合う大きな機会だと思っっているのですよ。あなた方はすでに神の真実を知っています。です所以说ってしましますが、神がお亡くなりになり、悪魔の旧魔王たちは全員戦死、墮天使の幹部たちは沈黙し、アザゼルは戦争を起こしたくないと建前上は口にしていきます。これは好機なのですよ。無駄な争いを無くすためのチャンスなのです。このまま小規模の争いが断続的に続けば、いずれ三大勢力は滅ぶ。そうでなくとも、横合いから他の勢力が攻め込んでくるかも知れません」

他の勢力……ほかの神話体系のことか？

北欧神話はまだしもギリシャ神話のテュポーンとか来たたらやばそうだな……

「その二振りの聖剣は私から悪魔サイドへのプレゼントです。もちろん、墮天使側にも贈り物をしました。悪魔側からも噂の聖魔剣を数本いただきましたし、こちらとしてもありがたい限りなのですよ。聞くところによるとリヴィエールくんは墮天使側から贈り物を受け取ったそうなので、和平はうまく結べると思います」

「そうなのかなあ……あのアザゼルっていう人、どうもいらぬものを当方に押し付けてきたような……」

「イツセーは……めちやくちや疑問符出してよ……」

「過去、我々が敵対した《赤い龍》ウエルシュ・ドラゴンが悪魔になったことを知りましてね。ごあいさつと悪魔側へ私たちからのプレゼントのひとつとして兵藤一誠くんがこの剣《アスカロン》をわたします。あなたはこれから龍王クラスのドラゴンや《白い龍》パニング・ドラゴンに狙われるでしょう。《歴代最弱の宿主》と噂のあなたにとって補助武器になるのではないかと思いませんか」

「は、はい……でも、なんで俺に？」

「二度だけ三大勢力が手を取り合ったことがあったのです。それは赤と白の龍を倒した時です。我々の戦争に乱入してきた2匹のドラゴンは戦場を乱しに乱してくれましたから。あの時のように再び手を取り合うことを願って、赤龍帝に願をかけたのですよ。」

日本的でしょう？」

この人？も少しどこかズレてらっしやるのか？

もしくは皮肉だな。

イツセーは聖剣を触れるのが怖いのか腕は伸ばしているが聖剣を掴んでいない。

「その剣はこの神社で最終調整をしました。魔王さま、アザゼルさま、ミカエルさまの各陣営の術式を施していますので、悪魔でもドラゴンの力を宿していれば触れますわ」

へえ……そんな調整をしたのか。

イツセーはそこでやっとな聖剣を手にとった。

「さて、リヴィエールくんにはこの《ジュワユーズ》をわたします。これも悪魔側に対するプレゼントです。リヴィエールくんは円卓の騎士最強の《湖の騎士》ランスロットの末裔であると

同時にその神セイクリッド・ギア器をも受け継いでいます。これは運命と言って過言ではないでしょう。この運命は戦乱の予感がする……と考えたのです。案の定、リヴィエールくんの近くには赤龍帝である兵藤一誠くんがいますからね。これから来るであろう戦乱への対策のひとつとしてこの剣を送ります」

「……ありがたく頂戴します」

そう言いながら当方は久々に《騎士ナイト・オブ・オナーの誉》の黒鎧を出現させジュワユーズに触れる。

………魂に格納しようとするが、赤いラインが走って当方の武器となっても色はそのま

まを保っている。

……そう言えば、《擬態の聖剣》も色変わってなかったな。武器としてのランクが高いと色は変わらないのか？

「ジュワユーズは柄頭に聖槍の穂先が埋め込まれ、デュランダルと同じ素材で鍛えられています。聖剣としての質はデュランダルと同等かそれ以上でしょう。特殊な力として《輝剣》の召喚などがあります」

「はい……だいたいわかりました」

当方の武器となったので使い方は理解できた。

ただ実行できるかどうかは別だ。また特訓だな。

カッ！

辺りに赤い閃光が走る。

「マジで合体しやがった……」

「おお……」

閃光の発生源であるイツセーの赤龍帝の籠手を見ると甲の先端から刃が生えていた。神器と聖剣が統合したんだな。

ミカエルさんはそれを確認すると手をポンと叩いた。

「と、時間です。そろそろ私は行かねばなりません」

さすが天使側のトップのうちの一人。忙しいんだろうな。

「あ、あの、俺、あなたに言いたいことがあるんです」

「会談の席か、会談後に聞きましょう。必ず聞きます。ご安心を」

ミカエルさんはそれだけ言うのと全身を光で包み、一瞬の閃光とともに消え去った。

「……当方も帰りますね。早くジュウユーズになれないと」

「そうか……ゆつくりして行かないのか？」

「実は今日、ゼノヴィアと自主特訓の日なんだ。母さんも家にいなくてね。早く帰らないとゼノヴィアが少し不貞腐れる。全く……そんな性格じゃないだろうに。真顔ですても怖いだけだ……」

当方はそう言うのと本殿を出て石階段を降りていく。

カツカツと音が聞こえる。

この時考えていたのは、ミカエルさんが言っていた

《来るであろう戦乱》

というキーワードだった。

※※※

さて、家に帰ってきてゼノヴィアと道場で向き合っている。

そこでひとつ思いついたことがある。

「実はさっき、ジュワユーズを貰った。性能を試してみたいんだが……いいか？」

「ああ、わかった。じゃあ、私もデュランダルを使わせて貰おう。ジュワユーズとの軽い撃ち合いならデュランダルでないと釣り合わないだろうからね」

「ああ助かる」

こうして当方とゼノヴィアはそれぞれが所持している聖剣を構える。

「まずは簡単なステップと切り払いからだな」

「来い！」

タンツ！

床を蹴り加速する。

ジュワユーズには持ち主の基礎能力を上げる効果もあるようだ。いつもより体が数段軽く、スピードのギアも上がりやすい。

キーン！

ジュワユーズとデュランダルがぶつかり合う。

ジュワユーズはデュランダルと違い、技能派が扱う聖剣のようだ。力よりも技がある。

一度距離を取る。

「じゃあ、次行くぞ。《輝剣》と言うのを試したい」

「わかった。私はどうすればいい？」

「そうだな。一度《輝劍》だけで攻撃するからそれを防いでみてくれ」

当方はそう言うどジユワユーズの劍先をゼノヴィアから外す。

そして、《輝劍》を呼び出す。

「輝劍よ」

当方の左右に並ぶように計四本の輝劍が現れる。

一応騎士の誉で触れ、当方の武器にしておく。

「行くぞ」

輝劍をゼノヴィアにけしかける。

なんか、とある作品のロングレンジ兵装だな。

と考えていた。

※※※

「ふう……良い汗かいたな」

「だね。聖劍同士の撃ち合いがあれほど白熱するとは……私はまだまだ《女》よりも《戦

士》みたいだ」

「別に《戦士》でもいいだろ。それがゼノヴィアなんだし。無理に変える必要性はないだ

ろ」

「当方たちはそんな会話をしながらリビングに向かう。」

そして、当方はリビングの机に置かれていたメモを見る。

『今日は帰ってこれそうにありません。多分、一週間ぐらいは家を空けると思いますが。リヴィとゼノヴィアちゃんは特訓に集中していたからメモを残すことにしました。食費とかはリヴィの口座に振り込んでおくので好きに使ってください。というか、リヴィはもうちよつとお小遣いとか使ってもいいのよ？それと、親がないからつてあんまりエッチなことはしちやダメよ？避妊するならいいけど』

ビリー

最後の方だけ破りくしゃくしゃにしてゴミ箱に放り込む。あの部分をゼノヴィアに読まれたら何をされるかわかったもんじやない。勘弁してくれ。

「なんて書いてあったんだ？」

「母さんが一週間は帰ってこれないらしい。一週間ほど二人暮らしたな」

「そうか……確かニーナさんは親がいない時が狙い目だと……」

「なにが!？」

大丈夫？色々ヤバそうな気がするんだけど……

「早くお風呂に入ってしまったおう。汗を流さないと風邪ひくぞ?」

当方は強引に話題を変えようとする。

「いや、お湯がもつたいたないし一緒に入ってしまおう」

「……はい？」

その後、十分間の交渉でお風呂を一緒に入るのは諦めてもらった。

その代わり……

「あの広い部屋を一人で寝るのはまだ慣れないんだ。一緒に寝ていいかい？」

「……それぐらいならいいが……ゼノヴィアは寝相は……」

「悪かったがニーナさんに矯正された」

「そうかい……」

何故か同衾することになりました。

第30話 《トップ会議 開催》

「さて、行くわよ」

部長の言葉にオカ研部室に集まった面々はうなずいた。

今日は三大勢力の会談の日。

会場は駒王学園新校舎にある職員会議室。今日は休日の深夜ですでに各陣営のトップたちは新校舎の休憩室で待機しているらしい。

学園全体が強力な結界に包まれ外部からの侵入者をシャットアウトしている。もちろん、中から外も同様に。

結界の外には、天使、墮天使、悪魔の軍勢がぐるりと囲んでいる。

ユートと様子を見に行ったが一触即発の雰囲気だった。

もし協議が決裂したら……すぐさま戦争になるのだろうか？

粗相のないように……もしあつたら？

消し炭待ったナシかな。

※※※

「失礼します」

部長がノックのあとにそう言い入室する。

開かれた扉の先にはこの日のために用意された豪華絢爛なテーブル。それを囲むように各陣営のトップがいた。空気は静寂に包まれており、全員が真剣な面持ちだ。

悪魔側。サーゼクスさま、セラフオルーさま。そして、給仕係のグレイフィアさんと護衛の（この人たちに護衛なんていらなと思うが）グリーンガムさん。

天使側。先日お会いしたミカエルさまと……!?カレン!?あと一人は知らない天使さんだ。なぜカレンがこんな所に……

墮天使側。アザゼルとヴァーリ。アザゼルは愉快に口角を上げている。

「私の妹と、その眷属だ」

サーゼクスさまが各陣営の人たちに当方たちを紹介した。

「先日のコカビエル襲撃で彼女たちが活躍してくれた」

「隣にいるカレンから報告は受けています。改めてお礼を申し上げます」

「悪かったな、俺のところのコカビエルが迷惑をかけた」

ミカエルさまはまだしもアザゼルのやろ……ふてぶてしいな。悪びれている様子が全くない。

「その席に座りなさい」

サーゼクスさまの指示を受け、グレイフィアさんが当方たちを壁側に設置された椅子

に座るように促してくれる。その席にはソーナ会長がすでに座っていた。

会長の隣に部長が座りそして、その横にイツセー、朱乃さん、ユート、当方、アーシア、ゼノヴィア、小猫ちゃんと続いて座る。

「全員が揃ったところで、前提条件をひとつ。ここににいる者たちは、最重要禁則事項である《神の不在》を認知している」

ここににいる者たち……つまり、ソーナ会長もか。事前に部長かセラフオルーさまから伝えられたのか？

「では、それを認知しているものとして、話を進める」

サーゼクスさまのその一言で三大勢力の会談が始まった。

※※※

会談は順調に進んでいった。

どうやら三大勢力の全てが和平を結ぶつもりでいたらしく、トントン拍子で話が進んでいった。

部長がコカビエルの一件のあらましをトップたちに伝え、そこから和平を結ぶこととなった。

最も、アザゼルは神器の研究で文句が言われたくないだけなようだが。

「さて、話し合いもだいぶ良い方向へ片付いてきましたし、そろそろ赤龍帝殿のお話をき

いてもよろしいかな」

……ああ。

あの時のやつか。

覚えていたのか……まあ、上に立つ者として当然だとは思いが……

そこからは……何故かカレンから「原作と同じなので飛ばした方がいいです」と目線で訴えられたので端折るとしよう。

イツセーはミカエルさまに対してなぜアーシアを追放したのか聞いた。

それに対する答えは神の不在で不安定になっているシステムを守ることにある。システムを守るために影響を及ぼす神器を宿すものと神の不在をしる存在は追放するしかないのだという。

神の不在を知っても天使側にいれる存在は限られているらしい。

「では、何故カレンがそちらにつけるのですか？」

当方はつい質問してしまった。

どうしても気になったからだ。

そもそもカレンは転生者であり、この世界の物語をすでに知っている。それはもちろん、神の不在は知っているはずだ。知っていなくともコカビエル戦の時にカレンはいたから否応でも知っているはずだ。

「それは……」

「ミカエルさま。私から説明します」

「……わかりました」

カレンはそう言い席を立つ。

「では、お話したいと思います。なぜ私が神の不在をしりながら人間の身でシステムに影響を及ぼさずにいられるか。推測が多くなりますが……」

カレンはスウと心を落ち着かせ話し始めた。

「この会場にいる人たちはすでに《転生者》に出会っています。《転生者》とは別の世界で生を終えた者がこの世界で記憶、技能を引き継ぎ転生した者のことを指します。この転生者は……本来はこの世界には存在しません。そのことからこの世界の《システム》に触れても問題はありませぬ。その代わり、どう足掻いても加護も慈悲も与えられませぬけどね」

「《転生者》……しかし、それだけ聞くとデメリットの多い存在じゃないかな？」

サーゼクスさまはカレンに問うた。

「はい、サーゼクスさまの仰る通りです。私の話だけ聞くと《転生者》はデメリットが目立ちます。ですが、メリットはあります。《転生者》は《特典》と呼ばれる《贈物》^{ギフト}を生まれながら得ています。例えば……」

カレンはゴオオと音を立て腕部にのみ例の鎧を付けた。

「暗殺教団の力。ありとあらゆる存在に死という概念を付与し殺す力。この力を模した神セイクリッド・ギア器は無いはずですよ。ですよね、アザゼルさま？」

「……ああ。そんな大それた力を持つ神セイクリッド・ギア器は確認できてない」

ゴオオと音をたて鎧を消しカレンは話を続ける。

「この《特典》を転生者は必ず有しています。《特典》は多岐に渡り様々なものがあります。人生の成功を約束するもの、異性を魅了させるもの、別の世界の力をそのまま持ってきたもの、はたまた神のような力を与えるものまであります」

「つまり、システムからの加護や慈悲がなくてもお釣りのくる力を持っている……つてわけか」

「その通りです。問題はこの力を必ず有していることにあります。先日、天使側はエクスカリバーの護送中、《転生者》と思わしき人物と交戦、エクスカリバーは守りきることができましたが戦闘地帯の地形は大きく変えられました」

「知ってるぞ……たしか、朝のニュース番組で地震による地形変動と報道されたやつだ。」

「それすらもやってのけるといふのか……」

「その力はおそらく《特典》によるものだと考えていいでしょう。《転生者》が三大勢力

に牙を向き始めています。そして……」

「そして?」

「転生者の大半はこの世界のたまかな未来を知っています」

『?!?!?』

会場にいる殆どに激震が走った。

トップたちは平然としているが内心、驚いているだろう。

「それは何故かな?」

「……………」

「話しても構いません。この事実は共有すべきものです」

「わかりました。《転生者》のもといた世界ではこの世界は《物語》として書物に載っているのです。まさに漫画や小説、神話のように。……とくに今代の赤龍帝、兵藤一誠の物語が」

「なっ……俺について……だって?」

「はい。その書物には兵藤さんがこれから進むであろう可能性が書かれていました。《転生者》の介入により少しズレが生じていますが……」

「多少なりともズレても殆どは変わっていない……つまり、この会談も……」

「バッチリ書かれていました。三大勢力が和平を結び、そして……」

体の機能が一瞬停止した。

カレンはそのまま言葉を振り絞った。

「外敵の襲来の事実をです！」

※※※

ジジジ……

体の内側から波動のようなものを感じる。

波動は我にはないはずだが……

いや、ジュワユーズのオーラか。

指に熱が戻り、体が動き目が光を捉えた。

「《湖の騎士》ランスロットもお目覚めか」

「先日渡したジュワユーズが機能を果たしてくれたみたいですね」

周囲を見渡すと動いているものと動いていない者がいた。

動いていないのは……

カレン、ソーナ会長、朱乃さん、小猫ちゃん、アジアが動いていなかった。

その他は全員動いている。

「カレンが言っていたテロですね……」

「だな」

「グリーンガム、君は……そんな力を持つていたのかい？」

「ルーンで対抗策を講じました。あと少し早ければ全員分をカバーできたのですが……申し訳ありませんサーゼクスさま。私とリアスさま二人分が限度でした……」

「いや、よくやってくれたよ。ありがとう、グリーンガム」

グリーンガムさんと部長の周りには文字らしきものが浮いていた。それは役目を果たすと霧散した。

「ありがとうごさいますグリーンガムさん。私は眷属の確認をしてきます」

グリーンガムさんに一礼すると部長はこちらに向き直った

「眷属で動けるのは私とイツセー、祐斗、リヴィ、ゼノヴィアだけのようね。イツセーは赤龍帝を宿す者、祐斗な禁バランス・ブレイカー手に至り、聖魔剣を持つているから無事なのかしら？リヴィは魂にジユワューズを宿しているから、ゼノヴィアは直前になってデュランダルを発動させたのね」

部長はそう推測した。ゼノヴィアはちょうど空間の歪みにデュランダルを戻していた。

「リヴィ、無事だったのか……良かった」

「ゼノヴィアもな……よくデュランダルが間に合ったものだ」

「なに、時間停止の感覚はなんとなく体で覚えてね。停止させられる寸前にデュランダ

ルを盾にしたんだ」

「体で覚えたつて……んなめちやくちやな……」

「イツセーもニーナさんのしごきを受けたら身につくと思うぞ」

「やめとけ！絶対後悔するぞ！」

そんなこんなで緊張感もなくワイワイしだす当方たち。

「ちようどいいな。ランスロットの小僧、外見てみる？」

「え、あ、はい」

当方はアザゼルに言われるまま窓の外を見る。

カッ！

閃光が眼前で広がった。

「あの悪趣味なローブ……魔法使いですか？」

「ご名答。時間が停止したのは力を譲渡できる神セブクリッド・ギア器か魔術でハーフヴァンパイアの

小僧の神セイクリッド・ギア器を強制的に禁バランス・ブレイカー手状態にしたんだろうな。たつく、視界に写したもの

の内部にまで影響を与えるか……未恐ろしい小僧だぜ」

第31話 《キャスリング》

とんでもないことになりそうです。

当方は開け放たれた窓からAMRを構えている。

敵の攻撃が向かってくるがグリーンガムさんのルーンで魔法は当方を逸れ壁に当たっている。

筋肉は信用できない。

ライフルは骨で支え……じゃない。

なお、AMRには当方の悪魔の駒を変質させ弾丸と連結させたモノが装填されている。

なんでこんなことになっているかという……

※※※

「ギヤスパーは旧校舎でテロリストの武器にされている……どこで私の下僕の情報をえたのかしら……しかも、大事な会談をつけ狙う戦力にされるなんて……ツ！これほど、侮辱される行為もないわ！」

部長はギヤスパーを利用されたことで怒っていた。

全身から紅いオーラを滲み出させるほどには。

「……サーゼクスさま、あちらの戦力は底が知れません」

そこでいつの間にか斥候に出ていたグリーンガムさんが戻ってきた。

「そうか……こちらでも迎撃をしているがすぐに補填が来るね……先に転移の方をどうにかした方がいいか……他にわかったことは？」

「すでに皆様承知の上だと思われませんが、やはり校舎を取り囲んでいた悪魔、天使、墮天使、その全てが停止させられていました。こちら側で校内で動けるのはここにいる数名だけです。敵の算段は『フォービトゥン・パロール・ピュウ停止世界の邪眼』の出力を上げ皆様を停止。その後、校舎ごと屠るつもりだと思われれます」

「だろうね……ありがとう、グリーンガム」

「たつく……タイミングといい、テロの方法といい、こちらの内情に詳しい奴がいるかもしれない。案外、ここに裏切り者がいるのかもな？」

サーゼクスさまとグリーンガムさんのやり取りを聞いていたアザゼルは呆れたように息を吐く。

確かに……カレンが動けていたら裏切り者の存在もわかったのだろうか？

「……とまあ、我々首脳陣は下調べ中で動けない。下手に動いてはあちら側の思うつぼだからね。だが、まずはテロリストの拠点となっている旧校舎からギヤスパークンを奪

「い返すのが目的となるね」

とサーゼクス様が言った。

確かに、現状最も危険であるものを先に取り返してしまえば相手の計画にも破綻が生じるかもしれない。

「お兄さま、私が行きますわ。ギヤスパーは私の下僕です。私が責任を持って奪い返します」

「言うと思ったよ。妹の性格ぐらい把握している。しかし、旧校舎までどう行く？この新校舎の外は魔術師だらけだを通常の転移も魔法に阻まれる」

「ひとつ案があります」

「……聞こうか」

「お兄さまもご存知ですが。リヴィイはまだ悪魔イーヴィル・ビースの駒で転生していません。今は駒を取り込んで悪魔化してますが排出し別のモノとしても機能します」

「そうだね」

「リヴィイの駒は《戦車》ルーク。そしてリヴィイは自身の神セイクリッド・ギア 器で武装を自在にカスタムできます。それを用いて駒を弾丸に変化させ旧校舎の部室に届かせます。あとはその駒を用いて《キャスリング》を行うだけです」

「なるほど……ちなみにリヴィイくん。この案は実行可能なのかい？」

「可能です。当方の神セイクリッド・器ギア《騎士ナイトの誉オブ・オーナー》で悪魔の駒をライフル弾に変え、誘導性能を付与すれば問題はありませぬ」

※※※

ということがあり現在に至る。

「グレイファイアの術式の改造が終わったら放ってくれ」

「わかりました」

キヤスリングで転移するのは部長。そして、グレイファイアさんの術式で定員を増やし
イツセーも共に行く。

今は術式の改造で転移はできないが準備ができしだいトリガーを引く。

ギヤスパアの魔力を感知するためにグリーンガムさんに感知能力をあげるルーンを頬
に刻んでもらった。

……ルーンって使い勝手いいな。機会を見て当方も覚えるか？

カツ！

突然、当方の背後から眩い光が放たれる。

「リヴィくん！撃ってくれ！」

「わかりました！」

ズガン！

引金を弾く。

そこそこの反動を地面に逃がしすぐさまキャスリングが行われるところに行く。悪魔の駒を回収しないと後々面倒になりそうだからな。

「ちよ、ちよつとグレイフィア!? お兄さま!」

部長はそんな声をあげながらイツセーと共に光に包まれた。

光が晴れたあとには見慣れた駒が落ちていた。

当方はそれを拾い上げ魂に収納した。

「レヴィアタンの魔法陣……」

当方はそこで気がついた。

床には魔法陣が展開され……

「あれは……旧魔王レヴィアタンの魔法陣……なのか?」

「違う。ヴァチカンの書物で見たことがある」

当方の呟きにゼノヴィアが答えた。

……旧魔王。まだ存在していたのか。

魔法陣からは深いスリットが入り胸元が大きく開かれたドレスに身を包んだ悪魔が

現れた。

「いきげんよう、現魔王のサーゼクス殿」

「先代レヴィアタンの血を引く者。カテレア・レヴィアタン。これはどういうことか？」
やはり、旧魔王の一族……

カテレア・レヴィアタンは挑戦的な笑みを浮かべている。

「旧魔王派のほとんどの者たちが《禍カオス・ブリゲードの団》に協力することを決めました」

「新旧魔王サイドの確執が本格的になつたわけか、悪魔も大変だな」

「カテレア、それは言葉通りと受け取っていいのだな？」

「ええ、その通りです。今回の攻撃も我々が受け持つております」

「……クーデターか」

現魔王派に対する旧魔王派の反乱……クーデターか。こんなときに、こんな場面で宣言するなんて……

そこから少しの問答が続いた。

禍の団の目的が新世界の想像とは驚いた。

それをまとめているのが《ウロボロス》オフィス。

《赤い龍》や《白い龍》よりも強いとされる神すら恐れたドラゴン。無限の力を宿し神にも等しい存在らしい。

なんかやかんやあつてアザゼルがカテレア・レヴィアタンの相手をするこゝろになつた。

原因の殆どはアザゼルが挑発したことにあるんだけどな。

二人は校庭の遥か上空で攻防戦を開始した。放たれるオーラはどちらとも当方たちとは次元が違う。

鍛錬していればあの領域に到れるのだろうか？

そんなことを考えていた当方にサーゼクスさまが声をかけてきた。

「木場くん、リヴィくん。私とミカエルはここでこの学園を覆う結界を強化し続ける。アザゼルとカテレアが暴れる以上、被害は大きくなるかもしれない。できるだけ外に被害を出したくないからね。悪いのだが、グレイフィアが魔術師転送用の魔法陣の解析が済むまでの間、外の魔術師たちを始末してくれないか？」

サーゼクスさま直接の命令……光栄の極みだ！

「はい」

「ありがとう。君たちが妹の眷属で良かったよ。その力を妹と仲間のために揮ってくれたまえ」

「はっ！」

当方たちは互いの獲物を手に校庭を見る。

「ゼノヴィア、一緒に来てくれ」

「ああ、私もリアス・グレモリーの眷属だ。いざ参ろうか」

当方たちは顔を見合わせて頷く。

ユートとゼノヴィアは校庭に切り込みに行った。当方は光の翼を展開し弾丸のように飛び出した。

※※※

ダラララ！

空を飛翔しマシンガンから無数の弾丸と空薬莖を吐き出す。

弾丸一発一発がジュワユーズと同じ特性を得ておりなおかつ誘導式だ。魔術師たちを追尾し一発目で防御障壁を破壊し二発目で頭を撃ち貫く。

人間である以上、頭が撃ち抜かれるとほぼ即死だろう。

せめて痛みがないように一瞬で屠る。

だが数が多い。倒しても倒しても補充される。

仕方ない……

マシンガンからジュワユーズに持ち替え剣を垂直に構える。

「……輝剣よ」

輝剣を6本出現させる。ただ、その6本は当方の神器の影響でカスタマイズが施されている。

簡単に言えばミサイルランチャーが結合されている。

本来は牽制用だが。

今はグリーンガムさんが刻んでくれた感知のルーンで容易く扱える。

「食らってくたばれ、怪焰王の流^トじやない。放て！」

ミサイルを6本の輝劍から発射する。当方の腕は二本しかない。扱う武器の総数はその都合上、頑張つて4本が限度だが、輝劍を扱うことで幾つも増やすことができる。しかも、放たれたミサイルは16連装のもの。つまり総計96発ものミサイルが魔術師たちを一掃する。

この武装のいい点は魔力の消費がほぼないということだ。魔力で強化する分だけしか消費しないので燃費がかなりいい。

ドドドド!!

あちらこちらでミサイルが着弾し爆炎が上がる。

「ふう……少しは休憩できるか？」

ミサイル全ての着弾を確認し一息つく。

その時だった。

ギューイイーンという音ともた当方に向かって極光が放たれた。

第32話 《嵐の航海者》

「ホーリーレイザー
光喰剣!!」

展開していたジユワユーズ、輝剣、光の翼に光喰剣の光を食う性質を付与し極光を打ち消そうと力を振るう。

避けてしまうと校舎に直撃するため避ける選択肢はない。

「はあああ!」

騎士の誉を介して強化された当方の武装は光攻撃に滅法強い。極光を危なげなく打ち消すことに成功した。

……内心、防御能力を上げててよかったと思っではいる。

「あれ?生きてる?おつかしいな……」

極光を打ち払い、放たれた方向を向くと一隻の海賊船のようなものが浮いている。

操舵輪を握っているのは見かけは10歳半ばの少年だ。

だが……気配が異常だ。ヴァーリ級だろうか?

「なんだ……あれ」

兎に角、海賊船が浮いてるのも問題だしなんでその船から光が放たれたかも不思議

だ。

とりあえず敵と見て間違いないだろう。

「あれが他の奴が言ってたイレギュラーかな？ 転生者でもない、原作に登場しない人物……ま、いいか！ 僕は僕の役目を果たすだけだね！」

少年はそう踏ん切りを付けると当方に向かってマスケット銃を構えた。

「打て打て打て！」

少年の樂しげな声で辺りに砲門が展開されそこから無数の光が当方に向かってくる。

ま、光である以上は大丈夫だけどな。

「よっ！」

輝劍とジュウユーズで上手く打ち消す。

「悪魔って光に弱いはずだよね……あれも悪魔なら特攻火力ですぐに終わるはずなのに……試しにこつちならどう？」

少年はそういうと無数の船を出現させる。

その時だった。

ドツガアアアアア！

という音が当方の耳に届いた。

音の方に目をやるとそこには負傷したアザゼルがいた。

「チツ……この状況で反旗を翻すか、ヴァーリ」

「そうだよ、アザゼル」

まばゆい輝きを放ちながら白龍皇が少年の船に着地した。

その傍らには先程のカテレア・リヴィアタンがいる。

「今から楽しくなるところだったのに……なんで邪魔するのさ」

「彼は《英雄派》が欲しがっているほど人材です。ここで殺すのは簡単ですが、こちら側の戦力が増えるのに越したことはありません。鹵獲して洗脳でもすればいい駒になるでしょう」

「転生者を二、三人手駒にした方が手っ取り早いと思うけど……」

「ともかく、和平が決まった瞬間、拉致したハーフヴァンパイアの神セイクリッド・ギア器を発動させ、テ

口を開始させる手筈でした。頃合を見てから私と共に白龍皇と航海者が暴れる。三大

勢力のトップの一人でも葬れば良し。会談を壊せばそれで良かったのです」

サラツと洗脳だとか聞こえたが……あちら側がそういう組織ということだろうな。

「いやらしい視線を感じるわ……その子が赤龍帝なのですか、ヴァーリ？」

「ああ、残念ながら、そうだよ。本当に残念な宿主なんだ」

「イッセーと部長戻ってきてたのか……お、ギヤスパーもいる。作戦は成功つてところか？」

「残念残念言うな！俺だつて懸命に日々を生きてんだ！……つて、なんでおまえとアザゼルが対峙してる？つーか、その姉ちゃんも坊主、誰だよ？」

「前評判通りの残念っぷりだね。殺して次の宿主に移した方がウエルシュ・ドラゴン《赤い龍》のためなんじゃない？」

「どうしようか迷っているのが本音だ。正直、俺は彼にそこまで期待をかけているわけじゃないんだ」

……そろそろ攻撃してもいいか？

ヴァーリが裏切ったのはわかったから早く始末したいのが本音だ。

「この船団出しておくのも魔力消費するから僕はもう始めちゃうよ？」

「ああ、わかった好きにしてくれ」

ヴァーリはそう言うのと飛翔しアザゼルの前へ行く。カテレアもそれに続いた。アザゼルを確実に始末するためだろうか？

「野郎ども！略奪の時間だ！」

宙に浮く船に乗る少年がそう唱えると次元が崩れ、船団が姿を現した。

《アン女王の復讐》！

無数の船からアンカーが落とされる。

船からは人の形をした泥が次々にアンカーを伝って降りてくる。

「名も無き黒髭の部下よ！」

少年の号令の元、泥人形たちがゴボゴボ音をたてと形を変えた。

その姿は…頭にバンダナを巻いたもの、曲刀を持ったもの。当方たちが想像するような海賊のような風貌だ。

『『ウオオオオオオオオオオ!!』』

その全てが雄叫びをあげ突撃してくる。

「奪え！殺せ！一番の大目玉は赤龍帝の籠手と三大勢力のトップ4人だよ！」

少年は楽しげに声を上げた。

「邪魔しないでくれよ、ラッセル」

「ぶー…：…じゃあ仕方ないな。目標はジュウユーズに変更だ！」

ヴァーリの呟きを聞き入れた少年…：…ラッセルというらしいが、そいつの命令だと

…

こちらに向かつてきそうだな。

「そう簡単に取りれると思うなよ！」

「とるよ？だって海賊だし！欲しいものは横から奪わないと気が済まないのさ！」

と言つても泥人形たちは空中を浮遊する能力すらない。

基本的には当方は空から一方的に攻撃を与え続けるだけだ。

それに地上にはユートとゼノヴィアがいる。

地上側は任せても問題ないだろう。

ならば、当方が取るべき行動は泥人形を投下し続ける船を落とすことだ。

そう考え光の翼をはためかせ高速で船に接近する。

「やっぱりそう来るよね？なら僕はこうするよ！野郎共！時間だよ！嵐の王、亡霊の群れ……嵐の夜の始まりだ！」

船団の砲門が煌めいたような気がする。それでも速度を緩めてはいけない。

あれが砲門を積んだ武器なら当方の神器で奪えるはずだ！

「《ゴールドテン・ワイルドハント黄金鹿と嵐の夜》!!」

砲門から幾つもの砲弾が放たれる。全てが実弾だ。そのせいで先程のような対処はできない。

ならば撃ち落とすだけだ！

「輝剣よー!」

輝剣の数を二本増やし、ミサイルによる弾幕で迎え撃つ。

が、火力はあちらの方が上。

砲弾はミサイルをもろともせず突き進んでくる。

少しでも弾道が逸れてくれればと思っただが……

だが、砲弾は密集して放たれているがその隙間はもちろんある。

「ああくそ！試すしかないか！完全解放！！」
リミットアウト

騎士の誉を完全解放し、鎧を魔力で生成される水で覆う。

高速機動で砲弾の合間を縫うように立ち回る。

だが、砲弾は相手の全ての船から放たれ続けている。

時おり輝剣で叩きおとすがほとんどがストレス。

鎧に掠りガリガリと嫌な音を出す。

それでも何とか一隻目に辿り着くことができた。

まあ、その船の甲板にはもちろん泥人形が大量にいるのだがな！

泥人形ども切り払い、スキを作つて海賊船を奪取することに意識をさく。

ビシイイイ！

岩に亀裂が走るような音とともに赤いラインが海賊船を覆う。以前よりも遥かに奪取

する速度が早いな……

「おお！奪つちやつた!?海賊から船を奪うなんて……君、なかなか豪快だね！」

「それはどうも！」

一度船を魂に収納し泥人形たちを地面に落とす。

そしてもう一度出現させ当方の手心を加える。大量に。

イメージするのは駆逐艦だ。海賊船如きには小回りの効く駆逐艦が丁度いい。ガシヤガシヤと音を立て改造が完了する。

……16連装ミサイルポットを2つ搭載し艦砲のようなものを二門載せている。艦尾には光の翼のような翼が二対生えている。

なんだこのリアル＋ファンタジーみたいな駆逐艦は？

まあ、いいけど。

「目標、敵艦隊。撃て！」

「艦隊戦かな？ 相手一隻だけだけど！ 面白くなってきたじゃん!! カルバリン砲、どんどんブツパなせ！」

お互いの船が攻撃を再開する。

なお、当方の船から放たれたのは殆どが魔力を帯びたビームのようなものだったりする。

駆逐艦を放っている間に当方は次の船に飛び移りその船をも奪取する。

二隻、三隻と少しずつこちら側の戦力が増える。

が、三隻目を奪取すると同時にこちらの船が爆散する。

こちらの船はジュウユーズを利用してあるので装甲はあちらよりも上だが数の暴力で集中砲火で沈められてしまうか……

「このままじゃジリ貧だな……先に体力と魔力が先に尽きるな……」

船を出し続けるのは存外に魔力を消費する。少なくとも半日は大丈夫だろうか……ギヤスパーを取り返した今、持久戦に持ち込めば勝ち目は存分にあるか。それなら戦略を変えよう。

「あれ？やる気ないの？」

ラツセルという少年は少し残念そうにした。

そりゃ船を全部収納したからな。

持久戦をするなら当方一人で飛び回って回避した方が長続きするのな。

「ぬかせ。お前の船を全部奪ってやる」

「出来るもんならやってみなよ。君の力が足りるのならね！」

ラツセルはそう言いながらさらに船を出現させる。

残念ながら騎士の誉が進化したことで武器を持っている相手なら余裕で対処できるんだよな……

「行くぞー！」

「やってみせなよ」サンタマリア・トロップアンカー《新天地探索航》!!」

無数の錨と鎖が当方を目掛けて飛んでくる。

ジュウユーズからオーラを飛ばし錨を弾き飛ばす。

一隻ずつ確実に奪っていく。奪取して即座に収納。これの繰り返しなので空を飛んだままでいた方がいい。

確実に船の個数を減らしにかかるがラッセルはまだまだ余裕があるようだ。

その証拠に……

「撃て撃て撃て！」

「自分の船に向かって容赦ないな！」

「僕にとつては無数にあるうちのひとつだからね！」

数隻の船ごと当方を砲弾と錨が襲った。

というか、今なんていったコイツ……

無数にあるうちのひとつだと？

無数にあるものを取り続けるなんて不可能だぞ。

確認してはいないが騎士の誉にも容量というものがあると思う。イツセーの赤龍帝の籠手にも倍加の限界があるのだからな。

なお、こんなことを考えている合間にも砲弾と錨は雨あられのように撃ち込まれている。

砕けた船の破片により飛ぶのが難しくなる。

が……

光の翼には一応攻撃機能があるのでな!

光の翼から放たれた光のナイフが破片を欠片に変え塵にする。

あとは羽ばたくだけでどこかへ飛んでいく。

これならもはやラッセル本人がいる旗艦に行つた方が早いな。

射線が通れば無論ガンブレードを出現させ弾丸を放つ。

だが、ラッセルの前に泥人形が現れ阻まれる。

……そうか、ならいつそのこと

「えつちよ……それは卑怯じゃないかなー!」

「ほざけ。勝てればいいんだよ。そもそも物量差が何倍だと思つてるんだ」

ラッセルの旗艦の上空に飛翔する。

船は真上に対する攻撃手段に疎い。それが海賊船なら尚更だ。宙に浮いているので

上に向けることも可能だろうが時間はかかるだろう。

「輝剣よ」

輝剣の最大本数である十二本を展開する。

右手にはジュワユーズ、左手にはガンブレード。

全ての剣の刃に水を纏わせる。

輝剣の柄にあたる部分はミサイルポッドに改造し、狙いをつける。

「これが今の当方が考える最高の攻撃方法だ」

バシユバシユと景気のいい音と共に魔力の水を纏ったミサイルが放たれる。

コカビエルの一件で思いついた《ハイドロブラスト》ソレの発展版だ。

単純に手数が増えている。流石に無事にはすまないんじゃないか？

「なんてね」

「?!?!」

ハイドロブラストを放つ瞬間、ラッセルの艦隊は姿を消しその代わりに大量の砲門が当方の方を向いていた。

「本来太陽がある方向に行くとか……僕の特典を知らないだろうけど言っておくかな」

ラッセルはそう言うとなやりと笑いこらいつた。

「僕の特典は《風の航海者》の力！《黒髭》にテル・メツソ・エル・ドラゴ《太陽を落とした女》それにコンキスタドール《新天地征服者》

！その英霊たちの力を甘くみちやいけないよ!!」

砲門からは光が放たれる。当方はハイドロブラストを放ち相殺を試みるが光に対してアドバンテージがある《光喰剣》の力は今は外してあるので拮抗してしまう。

それにラッセルはまだ……

「これで終いだよ。《新天地探索航》!!」

錨と鎖が手段として残ってる！

「はああああ！」

「な!？」

がその錨と鎖は真下から飛んできた光の刃で船ごと打ち砕かれる。

あの光の刃には見覚えがある……

ゼノヴィアのデュランダルだ!

「……くふふ!」

船を砕かれたことで自由落下を始めるラッセルだがその表情には余裕がある。

「そうだった、そうだった。デュランダルに聖魔剣。量があるからって容易く勝てるわけないか。ここらが引き時かな?」

そう言うのと砲門を消し、小型艇を出現させる。

その頃にはイツセーやアザゼルの戦闘も終わっていた。

「ちようどいいところに美候も来たみたいだし」

ラッセルはそう言いながらいつの間にか地面に展開されていた黒い闇に潜っていた。

「じゃあねイレギュラーくん。次はその力、略奪してみせるよ!」

闇に飲まれラッセルは完全に姿を消した。

「……もう二度とゴメンだ」

当方の中にあつたのは……まだ本気を出していないラッセルの余裕めいた笑みだけ
だつた。

第33話 《オカ研顧問 アザゼルセンセー》

西暦20×年七月

天界代表天使長ミカエル、墮天使中枢組織《神の子を見張る者》総督アザゼル、冥界代表魔王サーゼクス・ルシファー、三大勢力各代表のもと、和平協定が調印された。以降、三大勢力の争いは禁止事項とされ、強調体制へ。

この和平協定は舞台となった学園の名前をとり《駒王協定》と称された。

※※※

協定が成立し日をまたいで朝が来た。

当方の隣では寝息を立てながらまだ眠っているゼノヴィアがいる……あれ？昨日も当方は勉強机で寝落ちしたんじゃ……ま、いいか。

「起きろゼノヴィア。朝だぞ」

「……ああ、わかった」

ゼノヴィアは唸りながら目を覚ました。

まだ母は帰ってこないののでゼノヴィアは当方の部屋で寝ている。

当方は寝袋で寝るつもりだったのだが、やはりそこは体質。いつも寝袋に着く前に変

なところで寝落ちしてしまう。

そして何故かいつもゼノヴィアの隣で寝かされている。

恐らく運ばれたのだろうな……

「おはようございます。今日も一日見守っててください。アーメン」

ゼノヴィアで変わったことと言えば一つ、イツサーの口利きのおかげでゼノヴィアとアーシアの二人が祈りを捧げて頭痛が起らないようになった。

「そう言えば祈りを捧げる時間とか決まっているのか？」

「そうだね……デボージョンと言って夜就寝する前に聖書を朗読して、示されたお言葉に感謝し、悔い改め、家族や友人、教会の事を祈る。というの毎日やっていたよ。その他は特に決めてないかな。私が祈りを捧げたいと思った時に捧げているよ」

「なるほど……うん、勉強になった」

「ならよかった。じゃあそろそろ朝練するかい？」

「ああ、じゃあ着替えたら玄関で」

※※※

早朝ランニングと手合わせ、各種筋トレを行い学園に登校。

先日の戦いの影響は感じないいつもの登校風景。

一般生徒はもちろん戦いのことなんて知らないのだ

「おはよう」

だとか

「あと一日で夏休みだな。そう言えばハルトマンは予定あるか？」

とか（感涙）話してる。

学校生活であつた変化はひとつ。それは……

「てなわけで、今日からこのオカルト研究部の顧問になることになった。アザゼル先生と呼べ。もしくは総督でもいいぜ？」

そう。墮天使の総督であるアザゼルがアザゼル先生となってオカ研の顧問教師になったのだ。

「つて、その腕は？片腕失いましたよね？」

「ああ。これか。セイクリッド・ギア 神器 研究ついでに作ったホンモノそつくりの義手だ。光力式

レーザーやら、小型ミサイルも搭載できる万能アームさ。一度、こういうの装備したかつたんだよな。片腕失つた記念に装着してみたわけだ」

バシユ！アザゼル先生の左手が飛び出した。ゴオオと音を立てながら部室を飛び回り先生の腕に戻る。

なんだそのロマン武器

「俺がこの学園に滞在できる条件はグレモリー眷属のもつ未成熟なセイクリッド・ギア 神器を正しく成

長ささせること。まあ、セイクリッド・ギア 神器 マニア知識が役に立つわけだ。お前らも聞いただろう

が、《禍の団》カオス・ブリゲード ってたけつたいな組織がある。将来的な抑止力として、《赤い龍》ウエルシュ・ドラゴン とお

前ら眷属の名が挙がった。というよりも、対《白い龍》パニング・ドラゴン 専門だな。天使側の転生者の

情報ではヴァーリは自分のチームを持っていてらしい。仮に《白龍皇眷属》とでもして

おくか。判明してるメンツは今のところヴァーリと孫悟空、それに転生者と思わしき

ラツセルつてボウズだな。転生者の話だと他にも猫又や聖剣使い、それに魔女もいるつ

て話だな」

「なるほど……これが原作知識というやつか」

「俺としては半信半疑だが、嘘をついてる様子じゃないから情報のひとつとして頭に入

れといてくれ」

アザゼルの言葉に頷きを返す。

「まあ、難しく考える必要は無い。お前らが大学部を卒業するまでは戦なんて起きやし

ない。学生生活を満喫しとけ。ただ、せつかくの準備期間だ。いろいろと備えようじゃ

ねえか」

「うーん……」

「赤龍帝、さつき言つたみたいに難しく考えるな。どうせ、脳が足りねえんだから、余計

な心配をしても埒があかんぞ。おまえのテキはあくまでも白龍皇ヴァーリだ。それだ

けは忘れるな」

「そうか……敵がはつきりしてるだけマシだな」

「……まあ、赤龍帝以上に問題があるやつがいるがな。自分でもわかってんじやないか？湖の騎士、お前だよ」

「……………」

「お前はたしかに日頃の鍛錬のおかげで既に中級悪魔並の実力を有している。そして、ポテンシャルも二天龍に並ぶほど秘めている。このまま鍛錬を続けていたら上級悪魔も数年後には狙えるだろうな。だが……」

「平均的な成長を続けていては禁^{フランス・ブレイカー}手には至れない。爆発的な進化が必要だ……つてところか？」

「その通りだ。《騎士^{ナイト・オブ・オーナー}の誉》は武器を強奪、そして所有する武器を自在にカスタマイズするという本来ありえない武装を作り出すドチートの神^{セイクリッド・ギア}器。扱い方も誰に学んだか知らねーが、既に達人級だ。それ故に、伸び代はあってもきつかけを受け入れづらい。その証拠にコカビエルの一件の時は機能の拡張が起こっただけだ」

「……………」

痛いところをついてくれる。たしかに当方にはきつかけがない。今はまだ流されるままに戦っている節がある。

目的意識がまだ薄く、周りを守るぐらいに強くはなりたいたがそれも自分の欲求ではないと思う。

「そうだ、聖魔剣の。おまえ、バランス・ブレイカー禁手状態どれくらい戦える？」

アザゼルの問いにユートが答える。

「現状、一時間が限界です」

「ダメだな。最低でも三日は継続できるようにしろ」

なかなか手厳しいな。ユートも今の言葉で気合の入った表情に変わった。

「お、俺は限定条件付きで十秒ですけど……」

「おまえは一から鍛え直す。ヴァーリは一ヶ月は保つぞ。それがおまえとあいつの差だ」

当方に至っては禁手に至ってすらいないのでからな……

その後、アザゼルは朱乃さんと話をする。

バラキエルという堕天使を許す、許さないとの会話だった。

話を聞くところによるとバラキエルは朱乃さんの父親らしいが……

とりあえず、朱乃さんの家庭の事情は複雑と言っておこう。

「おい、赤龍帝……イッサーでいいか？イッサー、おまえ、ハーレムを作るのが夢らしいな？」

「ええ、そうっすけど……」

「まーた、この話か。」

「俺がハーレムを教えてやろうか？これでも過去数百回ハーレムを形成した男だぜ？話を聞いておいて損は無い」

「そ、そ……」

「そうだったアアア!!」

「そう言えばアザゼルって人間の女性に誘惑されて、天界の知識を教えてしまったことで墮天してるんだった!!」

「しかも、人間を妻にしたこともあるとか!」

「マ、マ、マ、マ、マジツスカ!?!」

「ああ、マジだ。おまえ、童貞か?」

「は、はい!」

「よし、女も教えてやる。適当に美女でもひっかけて男になったほうがいいな。これでも俺は人間の女の乳を揉んで堕ちた身の上だ。エロに関して妥協はねえさ」

「そ、そんなことで堕ちたんスか?ええ?マジで!?!」

「まさか伝承通りなんて……」

「イツセーの疑問と当方のつぶやきに対して部長がうんざり顔でうなづく。」

「本当よ。グリゴリ幹部たちは人間の美女に誘惑されて、天界の貴重な知識を教えられてしまつて墮ちたのよ」

「あの頃は俺たちも若くてな。童貞丸出しで……」

賑やかに話みんなを尻目に当方は色んなことを考えていた。

他の神話体系、《禍の団》、白龍皇、転生者。

目下の問題は様々であり、立ち向かうべき困難も増えるだろう。

今のままの当方では困難に直面しても死んでしまふ確率の方が高い。

いや、まあ。恐らく一回は死んでも転生するので問題はないのだろうか……

アザゼル先生は夏休み中に修行を行うつもりらしい。

そこでさらなるレベルアップをする必要がある。

いや、レベルアップじゃない。

禁手に至る必要がある。

勝つためじゃない。守り、生き残るためには相手と同等の力が必要だ。しかも、守るとなると相手に勝る力がないと厳しい。

転生者……ラツセルに苦戦するようじゃダメなんだ。

強くないといけない。

強くなつて……

「リヴィ先輩？」

「……………」

小猫ちゃんが当方の顔を覗き込んでくる。ふと周りを見ると部長やユート、イツセーやゼノヴィア、朱乃さん、アーシアが当方の方を訝しげに見つめていた。

「どうしたリヴィ？ 話に参加しないなんて珍しいな？ どこか痛むのか？」

「…………いや、なんでもない。なんの話でしたっけ？」

「たつく、話聞いとけよな。お前にやった人工^{セイクリッド・ギア}神^{セイクリッド・ギア}器に関する話だ。あれは見てくれ

でわかるが《白龍皇の光翼》^{デイバイン・デイバイング}を研究し作成した劣化模造品だ。だが、お前は俺たちが想

像だにしない方法で活用した。つまり、お前の騎士^{ナイト・オブ・オーナー}の誉もイツセーの赤龍帝の籠手の

ように未知の進化を始めてる」

「へえ……………」

「未知の進化を始めた神滅具級^{ロンギヌス}の神^{セイクリッド・ギア}器が二つ、それに聖魔剣と《停止世界の邪眼》^{フォービドゥン・パロール・ピュー}。

ククク、俺の研究成果をたたき込んで独自の進化形態を模索してやる」

うわあ…………完全に危険な考えしてるな…………まあ、当方たちより神器には詳しいから頼

りにはなるけど…………

大丈夫だろ。多分

駒王学園 一学期 終業

駒王学園高等部 オカルト研究部

顧問教諭

アザゼル(墮天使総督)

部長

リアス・グレモリー(王) 三年生 残る駒 なし

副部长

姫島朱乃(女王) 三年生

部員

リヴィエール・A・ハルトマン(戦車) 二年生

塔城小猫(戦車) 一年生

木場祐斗(騎士) 二年生

ゼノヴィア(騎士) 二年生

アーシア・アルジェント(僧侶) 二年生

ギヤスパール・ヴラディイ(僧侶) 一年生

兵藤一誠(兵士) 二年生

冥界合宿のヘルキヤット

第34話 《大改造兵藤家、ついでにハルトマン邸》

夏休みになりました。

青春の一ページに記録をつけるのには最適な高校二年の夏。らしい。

が……

「……リヴィ……生きてるか？」

「なんとか……ゼノヴィアも大丈夫か？」

「とりあえず四肢はついてるよ……」

「……カフ」

当方はゼノヴィアと一緒に道場の床に突っ伏していた。

顔を上げるとやけにニコニコしている母が見える。

その横には先日から何故か居候しに来た小猫ちゃんがいる。

母の趣味で剣道着に着替えさせられている。

かわいい。

と考える余裕？あるよ。

体動かしてないからな。

あちらこちらが何故かズキズキする。

「リヴィ先輩、ゼノヴィア先輩、大丈夫ですか？」

「大丈夫、いつもの事だ……」

「いよいよニーナさんの実力の底の無さに嫌気がさしてきた」

「小猫ちゃん。リヴィとゼノヴィアちゃんにタオル渡しておいてね」

「はいニーナさん。あと、私の鍛錬は……」

「もちろん、行うわよ？」

その後、小猫ちゃんからタオルを貰いゼノヴィアと当方の鍛錬は一応終わった。

これが青春の一ページなのだろうか？

※※※

「それは……どうなんだろうね」

「違うのか？」

「俺としては色々言いたいことがあるけどな。そんなにリヴィのお袋つてリヴィより強いのか？」

「そりゃあ……当方とゼノヴィアがそれぞれ聖剣を使っていないが剣を持っていてかつ本気でも、本来の獲物……かどうかはわからないがとにかく武器を持っていなくても圧倒さ

れるな」

「それってつまり……」

「多分、ユートもボロ負けするだろうな」

「らしいね。ゼノヴィアから話は聞いてるけどほんとにニーナさんは人間なのかな？」

「……実は妖怪でした。とか言われても当方は驚かないからな」

「当方たちは珍しくオカ研の活動がない日で旧校舎の一室にて夏休みの宿題を片付けていた。」

夏休みは始まったばかりで先んじて宿題をしている。

まあ、当方たちのクラスはイツセーのクラスよりも宿題の量が若干少なかったりする。

何故かって？

担当教員の違いだ。

世界史の先生だけ違うので総量に差があるんだ。

グレモリー男子で集まっているのでギヤスパーも一応いるのだが……

「ギヤスパーもダンボールの中から出たらどうだ？」

「……」

「そうか」

こんな感じで一人だけダンボールに入っている。無理強いはしないが……出ないと
今後は色々と厳しいと思うぞ。

「リヴィ、この問題はどうか解けばいい？」

「そこは……不等式の証明か。まず、 $a < b$ ならば $a + c < b + c$ というのは頭に入れて
やれば……」

「なるほど……あとは頑張ってみるぜ」

「ああ」

そこで戸が叩かれた。

「リヴィ、少しいいかしら？」

「部長……はい、わかりました」

部長が当方をお呼びのようなのでペンを止め席を立つ。

「また、報告を怠ったのかい？」

「報告をしてなかったのはもげかけた一件だけだ」

ユートの軽口にそう答え部長の前に立つ。

「どうされました？」

「リヴィの家の屋敷、改築してもいいかしら？」

「……えつと……話が見えて来ないのですか？」

「そうね。初めから話すわ。先日からイツセーの家には朱乃が、リヴィの家には小猫が居候し始めたわよね」

「はい。小猫ちゃんが何故我が家に居候してるか甚だ疑問ですが」

「……まあ、それは置いておいて。兵藤家は普通の家屋なの。そこでお兄さまに頼んで今夜改築してもらおうの」

「はあ……」

「そのついででリヴィの家も改装しようと思ったらしいのよ」

「……えっ？サーゼクスさまですか？」

「そうよ。なんでも、ニーナさんは屋敷一面を訓練場にしたいといっていたわよ？」

「そう言った要望があるのは知ってますが……」

「せっかくだからこの機会に改装してみたらどうかしら？」

「今の住居で特段不自由は感じてないのですが……」

「今後、必要になるわよ？昔から《英雄色を好む》というからリヴィもハーレムを形成すると思ったのよ……ニーナさんが」

当方の母は何を考えているんですかね。いや、ほんとに。

「というか、そういった話は父さんか母さんに行くと思うのですが……」

「ニーナさんも哲也さんもリヴィに一任するって言っていたわ。お金の方は余裕があり

すぎるから好きにしてくれともね」

訂正

当方の両親は何を考えているんですかね。いや、ほんとに。

「……折角なんで受けてみようと思えます……どれくらい時間がかかるんですか？ 一月？ 二週間？」

「一夜よ」

「へえ……それぐらいですか。一夜……一夜!?!」

それってリフォームに要する時間なんですか!?

当方は建設業とか詳しくないのでよくわかりませんが、早すぎますよね!?

「それじゃお兄さまに伝えておくわ。邪魔して悪かったわね」

「いえ……それでは……」

そう言つて当方は部屋に戻った。

「な、なあイツセー」

「ん？ どうした？」

「リフォームつて一日で終わるものなのか？」

「いや、ありえないだろ」

「だよなあ……」

椅子に座り宿題にペンを走らせる。

……リフォームつて後でパソコン使って検索してみよう。

※※※

翌日

「……………」

「……………」

「当方とゼノヴィアは朝の鍛錬のために二階にある各々の自室から一階に降りたのだが……一階一面が何かしらのトレーニングルームになっている。」

「なんだこれ……………」

「あら、リヴィにゼノヴィアちゃん。おはよう」

「ニーナさん、おはようございます……………って、これどうしたのですか?」

「サーゼクスくんに頼んでみたのよ。哲也くんの了承も取れたし、最終判断はリヴィに任せまし……………」

……母よ、今サーゼクスさまのことをサーゼクスくんと呼んでいなかったか?

「何回体験しても不思議なものよね。一夜で改築しちゃうんだもの」

「しかも何回もと来た。たしかに長期休暇で家族旅行から帰ったら家が大きくなっていたことは何回もあったが……………」

その時からサーゼクスさまたちと母は関わりがあったのか？

いや……まさか……

ないとも言いきれないのがなんとも怖い……

「小猫ちゃんは？」

「小猫ちゃんは既に地下に行ってもらってるわ。少し持つて行って欲しいものがあつたの」

「地下……地下!?!」

なんでそこまでやるのか。

「一度外に出たらどうかしら？全貌を把握してた方がいいと思うの」

「……そうしてみる……図面とかあつたら出しといて」

「はーい」

「ニーナさんは何者なんだろうか……」

外に出てみると……和風の屋敷だった家が階数が一部分のみ二階だったのが全体が二階に、一部分が三階になっている……一階追加されてる。

しかも、ここに来る途中にエレベーターとかあつたり、地下に伸びている階段があつたりした。

ほんとに地下があるのか……

「……これってほんとに一夜でできるレベルなのか？」

その後、部屋割りを決め直し（二階部分と三階部分は生活スペースだった。主に二階は個人部屋などが多い。三階はキッチンやリビングなどの団欒の間になっている）トレーニングスペースの説明。それと地下の内装などを説明された。

……なんで、敷地の面積が増えるのかね。

前の四倍ぐらいになっていたような……気のせいだとありがたい。

元々広かったのにさらに広くしてどーする。

「サーゼクスくんが戦争になってもいいようにって改装を手配してくれたの。私がいればケルベロスぐらいいなら片手間で倒せるのにね」

「ケルベロス……たしかにニーナさんと片手間で倒せそうだ……」

「……ケルベロスって地獄の番犬ってやつだよな」

「はい。ゼノヴィア先輩はコカビエルの一件でケルベロスと交戦してます」

「経歴則から言ってるってことか。その時の結果は？」

「祐斗先輩が魔剣創造でケルベロス^{ソードベロス}を身動き取れないようにして魔剣で膺切りしてきました」

「想像に容易いな」

「そう言えば、小猫ちゃんとリヴィの関係ってどんななの？」

「はあ!？」

母よ。唐突すぎないか。

まあ、ただの先輩後輩関係だと思おうが。

「ただの先輩後輩とかいうの禁止ね？面白くないから」

……この人はまた……面白いかどうかで物事図ろうとしてるよ。

「鈍感な先輩と恋する乙女です」

「ちよつとお!？」

「なら、夜這いでもNTRでも何でもしてモノしなさい」

「母あ!？」

さすがは理想の愛の形が略奪愛の人ですね！

ちくしょう！ゼノヴィアも母に何か吹き込まれているのに小猫ちゃんまで母の毒牙

にかかるって言うのか!？」

「ちなみに私は哲也くんを当時付き合っていた同級生から略奪して結婚してるわ」

そんなこと聞きたくなかったわ！

ハルトマン家の闇なんて見たくねえ！

「……お話聞いてもいいですか?」

小猫ちゃんも興味持たないでお願いだから！

「…………ふむ、ライバルが増えた…………ということかな？」

ゼノヴィアはある意味平常運転だな。

安心したよちくしょう！

「話は後でね。今日はリアスちゃんに呼ばれているんでしょ？」

「そうだったな。リヴィ、行くのでしょうか」

「え？あ、うん…………」

第35話 《夏休みの予定》

「……イツセーの家初めてきたけど、こんなに大きいのか」

「リヴィの家のリフォーム前と同じくらい敷地面積だな」

当方は現在、ゼノヴィア、小猫ちゃんと共に兵藤家に来ていた。

どうやら兵藤家もハルトマン邸と同じく一夜で改装が終わったようだ。

……つまり、二件のリフォームを一夜でやったのけたということか？

頭痛い。

それはさておき。

既にユートやギヤスパーも兵藤家に来ているだろう。

待たせるのは不本意なのでお邪魔することにする。

※※※

「そういうわけでもうすぐ皆で冥界に行くわ。長期旅行の準備しておいてちょうだい」

「え？俺たちもですか？」

「そうよ。あなたたちは私の眷属で下僕の悪魔なのだから、主に同伴は当然。一緒に私の故郷へ行くの。そういうえばアジアとゼノヴィアは初めてだったかしら？」

部長の問いにアーシアはうなずく。

「は、はい！生きてるのに冥府にいくなんて緊張します！し、死んだつもりで行きたいと思えます！」

死んだつもりで生きたい？

……ああ、死んだつもりで行きたいか。

日本語って難しいな。

「うん。冥界……地獄には前々から興味があつたんだ。でも、私は天国に行くため、主に仕えていたわけなのだけれど……悪魔になった以上は天国に行けるはずもなく……」

「まあまあ……元信者とか深く考えずに行つたほうがいいぞ。今のゼノヴィアはグレモリー眷属なんだからな。開き直る……のは無理かもしれないけど」

ゼノヴィアの変な癖は重々承知してるからな……変なことで悩んで沈むはやめてもらいたい……

「八月二十日すぎまで残りの夏休みをあちらで過ごします。こちらに帰ってくるのは八月の終わりになりそうね。修行やそれら諸々の行事は冥界でおこなうから、そのつもりで」

夏休み……宿題を早めに終らせて……はい、予定はありません。

当方に夏休みの予定があるわけないだろいい加減にしろ。

「あー、でも、俺はさ、夏休みやりたいことあったんですけどねえ」

……確か、マツダとモトハマと一緒に海やプールでナンパしようとしてるんだっか。

去年は同行したが今年は「リヴィイがいると女がリヴィイに流れていくから今年は遠慮してくれ」と言われた。

……遠回しに絶交されたのか？

さすがにそんなこと……ありえる。

さほど一緒に遊んでる訳では無いし……

「絶交……一人……ポッチ……ふふ……当方はポッチがお似合いか……」

「リヴィイ先輩？……大丈夫ですか？」

「なんともない……一人は嫌だな……」

ネガティブにどんどん考えてしまうな……そろそろ思考を切り替えないと……？

ん？

薄らと墮天使の気配……ああ……アザゼル先生か。

特に揺れを感じない静かな気配だな。

「俺も冥界に行くぜ」

「あ、おはようございます。アザゼル先生」

『ッ!?!』

そんなに驚くことか？

さすがに部長やユートは……気づいてなかったみたいだ。なんでさ

「ど、どこから入って来たの？」

「うん？普通に玄関からだぜ？」

目をパチクリとする部長の間に先生は平然と答えた。

当方も廊下に先生が現れてから気配を察知できた。

さすがは墮天使のトップだ。

「廊下に来てやつと気配を感じれましたよ」

「……え？リヴィは気がついていたのかい？」

「まあな」

禁手に至っていても……というか、これは禁手とか関係ないか。

恐らくは向き不向きの問題だし、なぜか当方は気配察知能力が異様に高い。

……そういうえば父の種族聞いたことなかったな。

人間だとは思うけど。

「おいおい、俺は普通に来たただけだぞ。それよりも冥界に帰るんだろう？なら、俺も行くぜ。俺はおまえらの《先生》だからな」

まだ少ししか教えてもらえてないが、既に当方を含め眷属内の神器所有者は何かをつかんでいる様子だ。先生は力の使い方、導き方、何よりも教え方が上手い。

端的に言えば説明するのがすごい達人。先生とか講師向けの人だと感じた。

「冥界でのスケジュールは……リアスの里帰りと、現当主に眷属悪魔の紹介。あと、例の若手悪魔たちの会合。それとあっちでおまえらの修行だ。俺は主に修行に付き合うわけがだな。おまえらがグレモリー家にいる間、俺はサーゼクスたちと会合か。つたく、面倒くさいもんだ」

本気で面倒くさがっているなこの人。だが、それでも一勢力のトップ。カリスマ性がものすごく高い。ときたま、名も知らない堕天使がアザゼル先生に会いに来て主に側近にしてくださいと頼みこんでくることがある。

それほどにはカリスマ性は高い。

とまあ、そんなこんなで夏休みの予定が決まった。

母にこのことを言うと

「なら少しサーゼクスくんに頼み事してみるかしら？」

と言っていた。

……何を？

※※※

旅立ちの日。

最寄り駅で駒王学園の夏服に身を包み到着。

疑問点は特にない。

そもそも、冥界行きはこれで三度目になる。

一回目はブエル領に銃器の山について直談判しに行った時。

二回目は焼き鳥パーティーの時だな。

「リヴィは確か列車で行くの二回目だっけ？」

「ああ。魔法陣よりも当方はこちらの方が好みだな」

下っているエレベーターの中で当方とユートはそんな会話をする。

「遊び道具で暇は潰せるし、何よりも風情があるしな」

というわけで詳しい描写は省き、列車に乗らせてもらう。

……描写つてなんだよ。謎電波もたいがいにしろ。

リイイイイイイイイイ

発射の汽笛が鳴らされ、列車が動き出す。

当方はユートの隣に座り、その対面席には小猫ちゃんどギヤスパーが座っている。

なお、その隣の席は部長を除いた眷属メンバー。

端っこにはアザゼル先生が寝ている。

なお、部長はしきたりに則り先頭車両に座っている。

既にイツセーたちは談笑を始めている。

なにやら朱乃さんとイツセー、アーシアが主に喋っているな。

「リヴィ、君の神器なんだけど……」

「ん？どうしたユート？」

バランス・ブレイカー

「いや、なんでリヴィだけ禁手に至ってないのか不思議で……」

「遠回しに煽っているのか？」

「いや、そういうつもりじゃ……」

「わかってるよ」

理由なんてわかり切ってる。

これまでの戦い、その参加していた理由が全て

その場の空気に身を任せていたから

だからだ。

自分の意思で戦おうとしたのは数少ない。

恐らくVSCコカビエルぐらいだ。

アーシアの時は友人が戦おうとしたから。

焼き鳥の眷属と戦ったのは興味本位、部長の眷属なら出ないとな程度の認識だ。

聖剣回収の時は一番はじめにカレンに遭遇し、ゼノヴィアに指名されたから。

三大勢力の会合の時なんてなんとなくだぞ。

母は感づいているだろうな。

昔から物欲がかなり薄く、自発的に物事を行うことは数えられるぐらいしかない……

そろそろ将来の夢の考え時か

「……どんな禁バランズ・ブレイカー 手になるんだろうね」

「アザゼル先生が言うには名称は《騎士王仇なす裏切りの騎士》で能力は命や魔力といっ

た概念的なモノですら強奪することが可能になるそうだ」

「もしそうなら……恐ろしいね」

「ま、先生も『お前の騎士ナイト・オブ・オーナーの誉は未知の進化をしている。禁バランズ・ブレイカー 手も未知なモノにな

る可能性が高いだろうな。至ればの話だが』と言っていた。前情報はそんなに当てに

ならないみたいだな」

「へえ……そういえば、リヴィの神セイクリッド・ギア 器は亜種になったんだっけ？」

「先生の見立てによればな。少なくとも、今まで騎士ナイト・オブ・オーナーの誉の使い手は武装の連結なん

てものは使えなかったそうさ」

「なるほどね……未知数ってところかな」

「良く言えばそうなるな」

「……悪くいえば？」

バランス・ブレイカ
「禁 手までの寄り道が長すぎる。って感じだな」

そんな会話をしていたらイツセーに声をかけられた。

「リヴィ、小猫ちゃん、木場、ギヤスパ、トランプしないか？」

「ん？構わないが何をするつもりだ？」

「まずは軽くババ抜きかな」

「でも人数多くないか？」

「そうだよな……どうしようか」

「ふふ、こんなこともあろうかと」

当方はそう言いながらシヨルダーバッグを漁る。

その中からUNOの箱を二個取り出す。

「単純に数を二倍にしたUNOはどうだ？」

「ああ、なるほど。これなら大人数でできるな」

というわけでUNOなどをして当方たちは時間を潰し始めた。

第36話 《若手悪魔》

時は経ち出立した日の翌日。

昨日の時点でグレイフィアさんを始めとしてミリキャスさま、ヴェネラナさま、ジオテイクスさまたちグレモリー家の方達には挨拶はしてある。

今日はグレモリー城の観光を終えた後、若手悪魔の会合に行くことになっている。

……会合……会合ではないか。

そもそも、若手悪魔と一括りにするのは礼儀に欠けるな。

集まる面子はそれぞれ

現四大魔王様の元々の家系の次期当主候補四名

大王家、公爵家、総裁家の次期当主候補三名の総計七名の上級悪魔の方達だ。

……なお、当方が気にしているのは総裁家……つまりはブルエル家だ。

当方に銃火器を《投資》という名目で大量に送り付けて来た家だ。

そのおかげで色々と戦いの役にはたっているが……

まあ、勘繰りはここらでやめにしておこうか。

※※※

「ここが魔王領の都市ルシファード……まさに都市だな」

グレモリー城観光ツアーを終え当方たちはルシファードという都市に来ていた。

「リヴィはルシファード初めてだっけ？」

「ああ。行ったことあるのはグレモリー領とブエル領だけだ……さすがは旧魔王さまがおられた冥界の旧首都のことだけあるな」

ルシファードの近代的な街並みを見つつ当方は他のグレモリー眷属のメンバーについて行っている。

「次は地下鉄に乗るのだったか？」

「え？地下鉄もあるのか？」

「あるよ。そもそも悪魔社会と人間社会は密接に繋がりがあからね」

転生悪魔だとか文明機器とかが結びついていっているんだろうな……そう考えたら人間と悪魔は共存関係にあると言えるな。イソギンチャクとカクレクマノミみたいな感じか？

「キヤーツ！リアス姫さまああああっ！」

突如起こる黄色い歓声。ホームにいた悪魔の方達が部長に対して憧れの眼差しを向けていた。

以前と変わらぬ人気ですね部長。

「ヒイイイ……悪魔がいつばい……」

「この程度で慌てるなギヤスパー。ここからは当方たちも見られている。グレモリー眷属として振る舞わないとな」

ギヤスパーはイツセーと当方を壁にするように引つ込んでいる。引きこもりには辛いと思うが克服しないとこの先、生きていけないぞ？

その後、地下鉄を経由しルシファードの中で一番大きな建築物の地下にあるホームに
ついた。

部長を先頭に地下からエレベーターに乗り込む。全員が乗り込んでも広さに余裕があるエレベーターだ。

「皆もう一度確認するわ。何が起こつても平常心でいること。何を言われても手を出さないこと。上にいるのは将来の私たちのライバルたちよ。無様な姿は見せられない」

部長の言葉は気合が入っていて凄みがあった。誰にも負けるつもりは無いみたいだ。これから会うのは未来有望な上級悪魔の方々、まだ見ぬ強者や初めて感じる気配。

今からでもピリピリとその場の空気というものが伝わってくる。

そんなことを考えているとエレベーターが止まった。

扉が開かれ、その向こうには広いホールが目映る。

「ようこそ、グレモリーさま。こちらへどうぞ」

使用人のあとに続き、通路を進んでいく。

すると、一角に複数の人影が現れた。

「サイラオーグ！アミティエ！」

部長はそのうちの2つの人影について知っている様子……というか、片方は当方も顔を合わせたことがあるな。

あちらも部長を確認すると近づいてくる。

片方は男性だ。見た目は当方たちと同年代ほど、黒髪短髪の野性的なイケメンだった。活動的な格好で体格がすごくいい。かなり筋肉質だ。瞳は珍しく紫色。どこことなく顔の面影はサーゼクスさまに似ている気が……

「久しぶりだなリアス」

もう片方は女性。

白色の俗に言う軍服ワンピースというもので身を包み頭には服と同じく白色のベレー帽。桃色の髪をショートボブにしており腰には何やら剣と銃を携帯している。どこか理性的な顔には怪しく光る群青色の瞳がある。

「ボクは2ヶ月ぶりぐらいかな。元気そうだねリアス」

二人とも部長とにこやかに握手している。

女性の方は例の銃器の山を送り付けた主、アミティエ・ブエル。名前や外見から想像

するに男性の方は若手悪魔ナンバー1と言われているサイラオーグ・バアルさまだろう。

「ええ、そうね。二人とも変わりないようで何よりよ。初めてのものもいるわね。彼はサイラオーグ。私の母方の従兄弟でもあるの」

「俺はサイラオーグ・バアル。バアル家の次期当主だ」

やはりあのサイラオーグさまだったか……

「それで彼女はアミティエ。私の昔からの友人よ」

「ご紹介に預かりましたアミティエ・ブエルです。ボクは別段礼儀とか気にしないからプライベートの時とかはアミティエって呼んでくれてもいいよ」

それでいいのか総裁家よ。

「それで、二人はこんな通路で何をしていたの？」

「ああ、くだらんから出てきただけだ」

「……くだらない？他のメンバーも来ているの？」

「そうだよ。リアスたちが来たからあと来てないのはソーナたちだけじゃないかな。まあ、ゼファードルが着いた早々にシーグヴァイラとやり合い始めてね。全く、迷惑だよ」

サイラオーグさまは心底嫌そうな顔。アミティエは呆れてどうも無関心な顔をしている。

やり合い始めた……戦闘か？

当方がそう思ったその時だった。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

建物が大きく揺れ、巨大な破碎音が聞こえてくる。……ああ、だいたい察した。

大きな扉の方からはイライラとした雰囲気を感じた。多くの気配を感じていた。

部長はそれが気になったのか、躊躇いもなくその大きな扉へ向かった。

「まったく、だから開始前の会合などいらないと進言したのだ」

「若手は血の気が多いのがほとんどだからね……」

二人とも自分の眷属と共に部長のあとへついて行く。

開かれた扉の向こうには破壊尽くされた大広間があった。テーブルも椅子も装飾品も全て壊されている。

中央には両陣営に分かれてた悪魔の皆さま方が睨み合っていた。武器を取り出し一瞬即発な様相だ。

一方は邪悪そうな魔物や悪魔たち。もう一方は比較的普通そうな悪魔たちだ。両陣営に共通していえるのは双方ともおそろしく冷たい殺気に満ちたオーラを放っている。

まあ、その中でも広間の隅に無事を保ったまま優雅にしている悪魔眷属の人たちもい

る。

さつきを飛ばしているのはアガレス家とグラシヤラボラス家の方々だから優雅にしているのはアスタロト家の方々だろうな。

「ゼファードル、こんなところで戦いを始めても仕方なくてはなくて？死ぬの？死にたいの？殺しても上に咎められないかしら？」

「ハッ！言ってるよ、クソアマツ！俺はせっかくそつちの個室で一発しこんでやるって言ってやってんのによ！アガレスのお姉さんはガードが硬くて嫌だね！へっ、だから未だに男も寄ってこず処女やっぺんだらう？つたく、魔王眷属の女どもはどいつもこいつも処女くさくて敵わないぜ！」

まったく対照的な方々だな。

そんな中、アミティエが疑問符を浮かべているイツセーに説明するように口を開いた。

「全く……本来は時間が来るまで待機する広間だったんだよ？若手が集まって軽く挨拶するってだけだったのにどうしてこうなるかな。すぐに問題が出ることもわかってるだろうに旧家や古い上級悪魔たちはどうしようもないね。サイラオーグ、どうしよつか？ボクらで催涙弾とか使って無効化したほうがいい？」

「いや。それに及ばん。無駄なものに関わりたくはなかったのだが仕方ない。俺がいこ

う」

「そう。なら任せるよ」

首を軽く鳴らすとサイラオーグさまは睨み合う二つの陣営の方に向かっていく。

「アミティエさん、止めなくていいんですか？」

イツセーはアミティエにさういう。

そんなイツセーに対してアミティエはあつけらかんと

「問題ないよ。彼はなにせ若手ナンバー1だからね」

サイラオーグさまはシーグヴァイラさま、ゼファードルさまの間に入っていく。双方の視線はサイラオーグさまに向けられた。

「アガレス家の姫シーグヴァイラ、グラシヤラボラス家の狂児ゼファードル。これ以上やるなら、俺が相手をする。いいか、いきなりだが、これは最後通告だ。次の言動しだいで俺は容赦なく拳を放つ」

サイラオーグさまは迫力のある一言を言い放つ。

その一言に対しゼファードルさまは青筋をたてて怒りの色を濃くする。

「バアル家の無能が……」

ドゴン！

激しい打撃音と共にゼファードルさまの気配が高速で移動をした。

殴り飛ばされた……ということだろうか。

壁にめり込んだゼファードルさまは既に気を失っている。

ワンパンKO……

「言つたはずだ。最後通告だ」と

「おのれ！」

「バアル家め！」

グラシヤラボラス眷属が主がやられたので飛び出しそうになるが……

「はいはいそこまで。君たちがやることはサイラオーグに向かうことじゃなくて主を介抱することじゃないかな？この状況でサイラオーグに剣を向けても君たちになんのもない。これから大事な行事なんだからさ、まずはゼファードルを回復させないと。ちがう？」

『ーッ！』

いつの間にかグラシヤラボラス眷属の前にいたアミテイエの言葉を聞くとグラシヤラボラス眷属は動きを止め、倒れているゼファードルさまに駆け寄っていた。

「物分りがよくてよろしい。さて、シーグヴァイラはお色直しだね。そんなもの纏ったままで行事はままならないだろうから……」

「わかっています……」

シーグヴァイラさまはそう言うくと自身の眷属と共に広間をあとにした。

サイラオーグさまはそれを見届けると

「スタッフを呼んでこい。広間がメチャクチャすぎて、これでは茶も飲めん」

ご自分の眷属にそう命令を下した。

さすがは若手ナンバーと言われるだけのことはある。

……それにしてもアミティエがいつの間にか移動していたのは驚いたな。気配が一瞬で移動した感じだった。

……一体なんだったのだろうか。

瞬間移動？

「お、兵藤にハルトマン」

「やあ、サジ。ソーナさまもお久しぶりですね」

「ごきげんよう、リアス。兵藤くん、リヴィくん」

ここでソーナ会長たちシトリー眷属が合流し若手悪魔七名がようやく揃った。

第37話 《ある意味ラツキースケベ?》

ホールでの大惨事?が片付き、軽く次期当主様たちの紹介を終えた後、当方たち若手悪魔は異様な雰囲気さが漂う場所に案内された。

かなり高いところに席が置かれ、そこにいかにも偉そうな方々が座っている。さらにその上段にも同じように偉そうな悪魔の方々。もうひとつ上には……我らが魔王様だった。四名全員だ。とりあえずセラフォルさま、この場で当方だけにピンポイントで謎殺気を放つのはやめてください。いつも思うのですが、当方をそんなに目の敵にする理由がないと思います。

まあ、それはいつもの事だから置いておいて。

……いつもの事?……いや、あの殺気は数えて二回目だ。そんなはずはない。うん。とりあえず、今の当方たちはお偉いさんたちに見下ろされている状態だ。魔女裁判とかを彷彿させるな。

もちろん、当方たち眷属悪魔は部長たち主の後ろに並んで待機してる。することはないがポーツとしてもかなり暇だ。イメーヅトレーニングでもしとくかな。

.....

あれ?サーゼクスさまのお話終わってる?

ちゃんと聞いとけばよかったな……

「最後にそれぞれの今後の目標を聞かせてもらえないだろうか?」

サーゼクスさまの問いかけにはじめに答えたのはサイラオーグさまだった。

「俺は魔王になるのが夢です」

言い切った……それほどの自信があるってことか。

「大王家から魔王が出たら前代未聞だな」

「いや、しかし……」

「待て、サイラオーグ・バアルよ。どうすれば魔王になれるかわかっておるのか?」

お偉いさんは口々に言う。

「俺が魔王になるしかない。と冥界の民が感じれば、自ずとそうなるでしょう」

「またもや言い切った。……だが、ありえない話じゃないように思えてくるのがすごい。」

すぐさまサアラオーグさまに続きアミティエが口を開いた。

「ボクの目標はブエルの次期当主として冥界の文明の成長を推し進めることにあります」

文明の成長……?どいうことだ?

「今でも冥界の文明レベルは高いと思うが？」

「これからは天界や墮天使の文明も入ってくるでしょう。それらをいち早く解析、我らの文明に取り入れ昇華し独自の成長を行う。さすれば、人間界の文明レベルを超えることも夢ではない。ボクはそう考えます」

スラスラとアミティエは言葉を繋いだ。

「ほう……ならば、何をすべきかわかっておるのだろうな？」

「もちろんです。先程も申し上げましたがまずは天界、墮天使の技術を我がものにすることを優先すべきと考えます」

アミティエはそれだけ言うとは他の次期当主に目配せをした。

すると部長……や、この場合は我が主とかが妥当か。

我が主が言い始める。

「私はグレモリーの次期当主として生き、そしてレーティングゲームの各大会で優勝するのが近い将来の目標ですわ」

それが我が主の目標……堅実だ。当方たち眷属はそれに向かって頑張ればいいのか。

その後もシーグヴァイラさま、ゼファードルさま、ディオドラさまが自分たちの夢を語った。

そして最後にはソーナさまが残った。

「冥界にレーティングゲームの学校を建てることです」

学校の設立か……ソーナさまらしいと言えばらしいか。

ただ……

「レーティングゲームを学ぶところならば、すでにあるはずだが？」

そう既にそういう施設はある。

「それは上級悪魔と一部の特権階級の悪魔のみしか行くことが許されていない学校です。私が建てたいのは下級悪魔、転生悪魔も通える分け隔てのない学舎です」

……ソーナさまらしいが、今の悪魔の情勢ではまだまだ平等とは言い難いのではないのか？

当方が思ったことは間違っていないかった。

なぜなら

「フハハ……」

「ハハハハハハ！」

『『ハハハハハハハハハハハハッ!!』』

一人の笑い声が伝染するかのように周りに伝わり醜悪な合唱を始めたからだ。

「それは無理だ！」

「ああ、傑作だ！」

口々に出来るわけがないと言うお偉いさんたち。その中にはソーナさまが若いということを理由にバカにしているものも多数だ。

「発言よろしいでしょうか」

そんな中、アミティエがお偉いさんたちに対して声を上げた。

「……なにか。アミティエ・ブエル」

恐らくは一番偉い人かそれに準ずる人の内の誰かだろう。その人の一言により場の注目はアミティエに向かった。

「この場はボクたち若手悪魔を見極める場。この場において若手を吊し上げてにして嘲笑するのは間違いです。であれば、あなた方が行うべきはなぜソーナ・シトリーがこの志しを持つようになったかを聞き、彼女を見極めることだとボクは考えますが」

「……総裁家の次期当主でも許される発言とそうでない発言は「またれよ」」

そう一声をかけたのはサイラオーグさまやアミティエの目標に対して疑問を投げかけた方だ。

その方の鶴の一声によってこの場が再び沈黙した。

「たしかにアミティエ・ブエルの言うことに一理ある。話してみせよ、ソーナ・シトリー」
「はっ。皆様が考えられていることは理解できます。下級悪魔、転生悪魔は上級悪魔たる主に仕え、才能が見出されるのが世の常だと。私が設立しようとするような養成施設

を建てては伝統と誇りを重んじる旧家の顔を潰すことになる。しかし、だからこそです。そのような伝統は廃すべきなのです。これは今までの悪魔の歴史や人類の歴史にも言えます。人間界の日本という国ではその昔、学舎に通えるのはほんの一握りであつたそうです。しかし今はほとんど人間が学舎を通つてゐる。これは悪魔界にも言えることではないでしょうか。今はほんの一握りしかレーティングの学舎の門を叩けなくとも、次の世代ではこの冥界にいる悪魔すべてに学舎の門を叩く資格がある未来を作る。そのための一歩として私は学舎を設立したいのです」

「ふむ……なるほど……人間という先達の発展を見てそう考えると」
「そうです」

「なかなか面白いではないか。そうは思わぬか？皆の衆」

その方の声によつて他の方々意見も否定的だったものから少しだけだが肯定的なものに変わつてゐる。

「ふむ、それではこうしないか」

そこでサーゼクスさまが口を開いた。

「この場にいる若手悪魔によるレーティングゲーム。君たちが今話した目標に対してどの程度本気なのか示すにはいい案だと思ふが、どうだろうか？」

レーティングゲーム……たしかアザゼル先生は近々我が主のレーティングゲームを

セッティングすると……えっ？この展開読んでたの？

※※※

『対戦の日取りは、人間界の時間で八月二十日。それまで各自好きに時間を割り振って
くれて構わない。詳細は後日送信する』

サーゼクスさまは素晴らしいあの場をお開きにした。

グレモリー家に帰ってきてから送られたものには大きく

グレモリーVSシトリー バアルVSグラシヤラボラス アガレスVSアスタロト

と書かれていた。どうやらブエル家は今回は戦わないらしい。

「それにしても修行に使えるのは二十日ほどか……」

なお当方たちは今、グレモリー私有の温泉に入っている。

当方は口元辺りまでをお湯に沈めボコボコと泡を立てていた。

「どうしたのリヴィ、今から不安？」

「……もちろん。当方はユートやイツセーと違って禁バランスプレイヤー手に至ってないからな……短

期間で至れると思えるほど幸せな頭はしてない」

「そんなに難しく考えなくてもいいと思うけど……」

ドポーーーンッ！

「わぷー！」

何かが着水する音と共に当方に水の波が襲ってきた。

突如、何者かが何かを湯船に投げ入れたようだ。

「湯船にものを投げ入れんな!」

投げられた先を見るとそこにはイツセーがいた。

「わっ悪い!」

「問答無用!」

当方は条件反射という感じで投げ入れられたソレを掴んで投げ返そうとするが……

「リヴィイ……それギヤスパークなんだよ」

「へ? あ、悪い」

「ふえええ……」

掴んでいたギヤスパークの頭を放しその代わりに手に魔力を集める。ゴポゴポと音を立て水の球を形成する。

「これ喰らって反省しろ! 簡易版ハイドロブラスト!」

ザパアアアアン!

「ぐあああ!」

イツセーを上には飛ばず。落下地点は温泉の上に調整してるし大事にはならないだろう。

「ところでリヴィよ」

「なんですか先生」

「お前は女性の胸を触ったことがあるか？」

「ないです。イツセーじやあるまいし」

「俺はあるぜ！」

イツセー復活はや！さつきハイドロブラスト喰らって伸びてなかったか？

「ほう……なら」

先生は人差し指を横に突き立て言う。

「女の乳首をつついたことはあるのか？」

「ない」

当方はもちろん即答。そもそも乳房を直視したこともない。

「ーっ！……い、いえ、まだです」

当方たちの反応を見て先生が嘆息する。

「なんだ、イツセーもないのか。乳首をな『ポチツ』とじゃなくて『ズムツ』とつつくんだよ。指が胸に埋没していく様は圧巻だぜ」

いやうん。イツセーならわかる。イツセーはなんやかんやでそういうので強くなつていつてるからな。

でも当方にそういう話をするのはどうなの？

その後も二三言話したが何故かイツセーは感嘆してる。

だから、その話当方にする意義あるのか？

「リヴィは何も感じないか？」

「……そういうのってお互いの合意がいますよ。当方はそういう相手はいないので話はまだまだ先だと……」

「らしいぞー！聞いたかゼノヴィア！リヴィはそういう相手がいたらやるらしいぞー！」

『なに！ホントかイツセー!!』

突如イツセーが声を張り上げ女湯の方に呼びかける。それに返事をしたのはゼノヴィアだ。

「え？なに？伏兵!？」

「はっはっはー！ゼノヴィアからどうやったたらリヴィをその気にさせるか相談されてな！なんでそういうのを求めるか聞いた時は胸焼けを起こしかけたが墓穴掘ったな！」

「イツセー、文おかしいぞ。一旦落ち着け」

「なんでこの状況で落ち着いてられるんだこいつ！」

「落ち着くしかないだろ。変に焦ったら思うつぼだし」

「ははーん？つまりお前むつつりか」

「なんでそうなる！」

ワイヤワイヤと言ひ合いを始める。あー頭痛い。なんでこんな馬鹿な会話してるんだろ。

「よし、折角だ。今からおまえ達を一流のスケベにしてやる」

「おお、一流のスケベ！それはなにをしたらなれますか！」

「そりやおまえ」

アザゼル先生も変なテンション……いや、この人はいつもと同じか。そのテンションで当方とイツセーの腕を掴んだ。

「……猛烈に嫌な予感が」

顔を青ざめながらいう当方の言葉なんて聞いてないと言わんばかりに握られた腕に力を込める。そして……

「混浴に決まつてんだろ！」

ぶううううううんっつ！投げ飛ばしやがったよこの人！このままだと変質者扱いされる！あわよくばグレモリー家に殺される！浮遊感に襲われてるが、これが無くなるとうついでのように当方の大切ななにかがなくなる気がする！こうしてはいられない。すぐさま軌道を修正して男湯に戻らないと……水を放出するときの反作用で戻れるか？いや、やるしかない！

「あ、そういうのいいから」

「へ?」

バキユユン!!

先生の羽から一筋の光が放たれる。その光はまっすぐ当方に向かっていき……

「ぐあああ!」

当方に直撃! そのまま当方はどう足掻いても男湯に戻れないように軌道を修正された湯船の湯船に叩きつけられる。

「ゲホツゴホツ! 器官に入った……ゴホツ!」

湯船のそこに手を付きとりあえず空気を確保。器官に水が入ったので咳き込んで水を追い払おうとするが……

「大丈夫か? リヴィ?」

「一応大丈夫……」

なかなか上手くないかない。確かこういう時は前屈姿勢になって……そこで始めて目を開いた。

そこには……全裸で傍から見れば当方に押し倒されているゼノヴィアがいた。

「その……流石の私もここでするのは恥ずかしいのだが……」

「……もう、勘弁してください」

当方の記憶は一旦ここで無くなっている。

第38話 《目覚めろ騎士の力》

グレモリー領内にあるとある泉。

そこで当方は泉の中心にある台座の前に立っていた。

台座には一本の短剣が置かれており、その短剣には龍の意匠が作り込まれていた。

当方と台座を挟んで向こう側にはルシファー眷属のグリーンガムさんがいる。

「さあ、その短剣で自分の……」

左目を突き刺せ」

※※※

温泉に入ってから一夜が明けた。

あの後、当方は部屋に寝かしつけられ目が覚めると既に朝だった。……隣にゼノヴィ

アがいて目覚めとともに変な声が出たがな。

まあ、そこはおいておいて。重要だが今気にすることじゃない。というか気にしたら

当方の胃がもたない。

今はグレモリー家の庭の一角にオカ研メンバーが集まっている。

服装は皆ジャージでなぜかアザゼル先生もジャージ姿だ。庭に置かれているテーブ

ルと椅子に座り修行前のミーティングが始まった。

「先に言っておく。いまから俺が言うものは将来的なものを見据えてのトレーニングメニューだ。すぐに効果が出る者もいるが、長期的に見なければならぬ者もいる。ただ、お前らは成長中の若手だ。方向性を見誤らなければ良い成長をするだろう。さて、まずはリアス。お前だ」

先生の口から特訓メニューが言い渡される。

部長は基礎能力の向上と戦いにおける思考と機転、判断力の訓練。

朱乃さんは自身の中にある墮天使の血を受け入れること。当方は初めて朱乃さんが墮天使のハーフである事を知った。

ユートは禁手の持続時間の向上。それと剣術を師匠にもう一度見てもらいたい。

ゼノヴィアはデュランダルを今以上に使いこなすことともう一本の聖剣に慣れてもらいたい。もう一本の聖剣?……どんな剣だ?

ギヤスパーは心身の特訓。主に恐怖心の克服。

アーシアは身体と魔力の向上。そして神器の強化。

そしてついに当方の番だ。

「次、リヴィ。とりあえず、特訓内容を言う前に二ーナからの伝言を預かっている。言うぞ」

「母からの伝言？」

「んん！『中々聞いてこないのでも今回の特訓合宿を機に言います。リヴィイ、あなたは人間ではありません』」

「……は？」

「まだ続きあるからな。驚くのは後にしてくれ。『あなたの種族は《半龍神》。人間である私と龍神《ヒトツメノムラジ》である哲也さんの息子のリヴィイは龍神と人間のハーフです。思い当たる節はあるのではないかと思います。あと、ついでなのでサーゼクスくんにもリヴィイの記憶の解放を頼みました。それでは特訓励んでください』だよ」

「……まるつきり意味がわからないのですが」

言う動機がまず《中々聞いてこないから》という点に物申したいし、それに半龍神？ そんな訳分からずの種族なの？あと、ついでに記憶の解放って……

「いよいよ、リヴィイの記憶が解放されるのね……」

「ようやく……ですね。これでグレモリー眷属のリヴィイが帰ってきますね」

「いや、あの。勝手に納得しないでくれますか。当方はまだ混乱してるのですが？」

「錯乱してないだけマシね」

「そういう話ではないかと。それにヒトツメノムラジでしたっけ？なんですかそれ？」

「知らねえのか？お前の父親、相川哲也の神格名だ。雨を司る日本生まれの龍神の中で

も風を扱える数少ない存在。特徴としては片目が潰れている龍として伝わっているがそれは誤解だ。一目連は龍になる場合は片目が潰れるが人間の体になる場合は両目とも存在している。片目を潰すことによつて龍になるのが特徴だな。今も多度大社別宮で祀られているぞ」

そんなにスラスラ言われてもね……困るんですが。

「という訳だから、お前の特訓内容は記憶が解放された後に半龍神としての力を使いこなせるようになること。それに禁^{バランスブレイカー}手の糸口を掴むこと。特訓相手はお前に記憶の封印を施したルシファー眷属^{エクストラピース}《番外の駒》グリーンガム・ゴドリツクだ」

《番外の駒》……つてなんですか？」

「それは特訓中にでもグリーンガムに聞け」

「ええ……」

「と言うかだな。そんなに驚くことか？ お前の基礎スペックはそもそも色々とおかしいだろうが。まず、お前の《悪魔の駒》^{イヴェイルピース}はなんだ？」

《戦車》^{ルーク}です」

「じゃあ《戦車》^{ルーク}の転生悪魔の特徴は？」

「馬鹿力と圧倒的なまでの防御能力……あつ」

「そうだ。やつと思ひあたったか。お前は普通の人間にしてはおかしいほど素養が高

い。木場に負けず劣らずのスピードに水の魔力を操る。フェニックス戦でのお前の魔力の使い方があれは明らかに消費量がおかしい。あれだけの魔力を消費したならすぐさま気絶してもおかしくない。なのにお前は意識を保っていたよな？この時点で素のスペックが人間じゃおかしいことを表している。まあ、それを引き出すような稽古をつけているニーナにも驚くばかりだが」

「そこまで聞いてやつと腑に落ちた。ただ、ひとつ疑問に思うことがある。

「でも、父は自分に《セイクリッドギア神器》があると行っていましたが？」

「あー……たしかに哲也は《メモリアデータ記憶伝承》持っていたな。あれはな。とち狂った一目連信者が生贄に出した人間のものだ。一目連は嵐を司るとも言われていてな。台風や嵐などで壊滅的な被害を受ける度に昔の人間は生贄を出していたらしい。哲也はその生贄のことを忘れないために《メモリアデータ記憶伝承》をその生贄から受け取ったらしい。……色々と疑問は残るがな」

「……なんでそこまで知ってるんです？」

「八百年前の酒の席で聞いた」

「なんでそんなことを教えてしまったのか。あれか、よくある聞かれたから答えたつてやつか。」

もうしんどい。

※※※

あの後、小猫ちゃんとイツセーの特訓メニューがいい渡された。……イツセーは巨大なドラゴンにどこかの山に連れていかれたが。

イツセーが連れていかれたあと、当方たちはそれぞれの修行に向かった。

その中でユート、ゼノヴィア、それと当方はそれぞれ宛てがわれた特訓場所に向かった。

と言つても魔法陣ですぐなのだがな。

当方が着いたのはとある泉の畔だった。

そこには青いフードを目元まで被っているグリーンガムさんがいた。

「やあ、リヴィ。駒王学園の一件ぶりだね」

「えと……こんにちは？」

グリーンガムさんは駒王協定の時に会ったきりだ。

頬にルーンを刻まれたのをよく覚えてる。

……にしても愛称の方で呼ばれるのはなんかこそばゆいな。

「早速だが、記憶の解放を始めたいと思う。心の準備はいいかい？」

「ホントに急ですね。構いませんよ。……記憶の解放って意味自体がわかりませんが」

「私に任してくればそれでいい」

グリンガムさんはそう言うとき空中にチョークで文字を書き始める。グリンガムの十番のルーンだ。

手早く書かれるそれは数を次第に増やしていき、時期に当方を囲い込むほどになる。

「少し昔話をしようか」

「昔話？」

この言い方だと記憶の解放とやらが完了するのはかなり時間がかかるのだろう。グリンガムさんのチョークを持つ手が止まっていないことかはそう考えた。

「あれは十数年前のこと。とある悪魔のお嬢様のところに一人の少年が預けられました」

※※※

少年はお嬢様とは一歳違いでした。

お嬢様は6歳、少年は5歳。初めはビクビクとしていたりヴィエールも次第にお嬢様に心を開いていき二人は仲の良い姉弟のような関係になりました。

しかし、お嬢様と少年が出会ってから一年後。

少年は突然うなされる様に目を覚ますと辺りに魔力を放出し暴れ始めました。

お嬢様のお兄さんによって少年は取り押さえられました。

そこでお嬢様はお兄さんに聞きました。

「彼はなんでこの家に来たの」と。

お兄さんはこう返しました。

「彼は龍神の子。母上の契約により彼が自分の力を人間の世界でも問題なく使えるようになるまで私たちが預かることになったんだよ」

少年は龍神の子。そして、英雄の子孫でもありません。

その大きな力は人間の世界で住むにはあまりに余分でした。

少年は自分が夜中に暴れたことに気がついていません。

自分の中にある魔力が怖い夢によって引き出されただけなのでした。

お嬢様は決心しました。彼を本当の弟にする。

でも、それでは少年は本当の両親に会うことはできなくなります。

お嬢様は悩みました。

そこで一人の魔法使いに相談しました。

どうすれば少年は幸せになるかと

魔法使いはお嬢様の相談に真摯に答えます。

「でしたらお嬢様の眷属にすればいいのです。彼はお嬢様を姉として慕っています。眷属悪魔にした後記憶を操り人間として過ごさせます。十年後、少年を再び悪魔として家

族として迎えればいいのです」

お嬢様は名案だと言わんばかりに喜びました。

年月が流れ数年後。

お嬢様の母上の言葉により少年はお嬢様の元を離れることになりました。

自分の中にある英雄の力を自在に操れるようになり、龍神の力は封じられ、半分悪魔、半分人間の不思議な存在として。

少年は両親の元に帰る時、お嬢様にこう言いました。

※※※

「行つてきます、リアス姉さん」

呟くように答えた当方は光り輝くルーン文字に囲まれている。

「偽りの記憶の一部が瓦解し始めたね。全く、ヴェネラ様のご友人とは言えニーナさんも変な契約をしたものだね」

後で聞いたことだが《自分の息子が暴走しないように、自分の力で死んでしまわないようにして欲しい。私にはできなかつた。だからお願いします。代償は何でも払います。自分の命でさえも》それが母がヴェネラ様と交わした契約らしい。情愛が深いグレモリー当主の妻としての仕事として行つたらしい。

母は自分には教える才能はあつても抑える才能はないと理解した。五年もの間父と

母は当方をどうにか生かすために世界中を回ったが有効な手立ては見つからなかった。龍神と言えども司るのは雨と風。万能ではない龍神の父と英雄の子孫として育てられた母は最後の手段として悪魔に願った。

そして、その願いは届き当方は九年の時間をかけてようやく生物として安定した。

ただ、龍の力を制御するにはあと3年がかかることが分かり後は本来の母親に託すことで当方という存在は生かされた。

ただ、悪魔の存在を知るものは少しでも少ないことがいいとの事で当方が自分から記憶を消すことを提案した。

……リアス姉さんや朱乃さん、祐斗に小猫ちゃんは最後まで反対していた。

まあ、それを絶対に大丈夫だからと言い伏せたのも当方だ。

……多分、あの時は記憶が無いのつてかつこよくない？とか思ってたんだろうな。恥ずかしい。

学校で虐められていた記憶、いもしない父方の祖父母の記憶、様々な記憶がリアス姉さんたちと過ごした幸せでそして、大事な記憶に戻っていく。

……にしても虐められるとか嫌な記憶を植え付けて……いや、一部分だけ本当だからか。

当方がなぜ擬似悪魔なんて存在になれるかわかった。

……あれの発案者ってリアス姉さんだったんだ。

リアス姉さんが人間界に悪魔がいると不都合だけど当方を眷属にしたいと駄々をこね、試しに悪魔の駒をやっと制御ができるようになった騎士の誉で取り込んだ時に変化が起こった。一時的に悪魔化したのだ。それでリアス姉さんの戦車の駒に当方が登録され、当方は悪魔の一員だが人間として人間の世界に戻った。

「さて、おかえり。リヴィエール」

「はい、久しぶりですね。グリーンガムさん」

こうして当方の特訓は幕を開けた。

第39話 《目覚めてください騎士の力》

数年前のグレモリー家にて。当方は小猫ちゃんに話しかけられていた。

「リヴィさん」

「ん？どうしたの小猫ちゃん」

「リヴィさんは自分の中にある力が怖くないんですか？」

「……怖いよ。いつ自分が暴走してリアス姉さんや小猫ちゃんたちに牙を剥くかわからないんだ。怖くないわけがないよ」

「でも……リヴィさんはその力を使いこなすために……」

「だって、僕の中にある龍神の力も神セイクリッド・ギア器も含めて全部僕だから。受け入れないと進めない気がするんだ」

「強いんですね」

「僕なんかまだまだ弱いよ。何もできないから。でも絶対に強くなって自分の力を受け入れてみせるんだ」

※※※

そういえば、昔の一人称は《僕》を使っていたなと思ひ出す当方。懐かしいといえ

懐かしいか。

あの時から小猫ちゃんは自分の中にある力と向き合おうとしていたのだろうか。

とりあえず、一言言わせて貰う。

なんで龍神の力解放するために片目を潰す必要があるんだ？

かなり抵抗があるんだが。

「この短剣で左目を潰した時にはじめて君は本来の力を手にする……成長して体の準備は出来てるし、精神の方もニーナさんに十分に鍛えられている。だから失敗することは万に一つもないよ。我が主サーゼクス・ルシファアの名に誓って」

「その点は安心してるんですけど、怖いですよ。これ」

台座に置かれてある短剣を両手で持ち自分の顔に向けて刃を立てる。銃を撃つ時と同じような感じで腕と頭はあまり連動させない。全く揺れない短剣がさらに恐怖を掻き立てる。

徐々に視界を埋めつくしていく刃は湖面で反射した光が波打つように投写されていく。

「……………ふーふー」

恐怖を心の中で握り潰す。やるなら一思いに。

グサツ

左目に短剣を突き刺した瞬間、左目から全身にかけて赤いラインが走る。カチカチカチと体のあちらこちらから何か切り替わる感じがする。

「うあああああッ!!」

泉が突如起こった暴風によって荒れ始める。

水球が何個も出現する。ゴポゴポと音を立て……

そして

その全てが一斉に弾けた。

引き起こしたのは言うまでもなく当方。ただ、頭の中は驚く程にクリアだ。

「さて、これで第一段階が終わり。特訓を始めるよ」

グリーンガムさんはそういいながらその手に赤い槍を構える。

「バランスブレイク禁手化させる1番手っ取り早くてなおかつ確実な方法……死戦をくぐり抜ける。今

の君の力じやどう足掻いても私に勝てない。それじゃあ……始めるよ」

それだけいうとグリーンガムさんは片目を失ったままの当方に突撃してくる。当方はそれをジュウユーズを出現させ受け止める。

「このまま少し講義でもしようか。そうだね……エクストラ・ピース《番外の駒》について話そうか」

※※※

エクストラ・ピース
番外の駒

それは変異ミューテーション・ピースの駒と同じく悪魔イートゥイル・ピースの駒の隠し機能の一つ。

ただ、番外の駒は始めはどの上級悪魔も持てない。主人と転生悪魔の信頼関係が成り立ち、尚且つ転生悪魔同士が強い目的意識で結びついている状態で始めて前提条件をクリアできる。

前提条件をクリアした場合、悪魔の駒のうちの一つがランダムエクストラ・ピースで番外の駒に変質する。

ただ、特徴的なのは番外の駒は変質元になった駒を主の元に新たに複製するという特性がある。しかも、真つ新たな状態で。

そして番外の駒は変質後に特性が付与されその特性によって名前が定められている。

高い対魔力性能と騎乗能力が付与される

《剣士の駒》
セイバー・ピース

対魔力性能と持続力補正が付与される

《弓兵の駒》
アーチャー・ピース

剣士の駒に次ぐ対魔力性能と敏捷性を付与される

《槍兵の駒》
ランサー・ピース

剣士の駒を超える騎乗性能と対魔力性能を付与される

《騎乗兵の駒》
ライダー・ピース

ファイールド生成機能と高い魔力を付与される

《魔術師の駒》
キヤスター・ピース

隠密性能と必殺性を付与される

《暗殺者の駒》
アサシン・ピース

理性を失う代わりに全ての能力が強化される

《狂戦士の駒》
バーサーカー・ピース

この他にも様々なものがあるらしいが今のところ

剣士の駒を凌ぐ対魔力性能を保有する

《裁定者の駒》
ルーラー・ピース

しか確認されていない。

現魔王アジユカ・ベルゼブブ様のご友人レオナルドと名乗る者によって追加されたそれはアジユカ様もノリノリで容認し現在のレーティングの上位陣や魔王眷属には番外の駒の転生悪魔は必ずいると言われている

※※※

「つてとこころかな」

当方が放つ弾丸の音をかき消し頭の中に直接入り込んでくるグリーンガムさんの言葉。

番外の駒……

そんなものもあるのか。

程度の感想しか出てこない。

それにしてもグリーンガムさんに弾丸が全くあたらない。デチューンしたばら撒く用のマシンガンを乱射しながら距離を取ろうとしても張り付いたように追ってくる。

これが魔王眷属……

鋭い気配と確実に殺しに來てるような殺気。

気が抜いた瞬間におそらくあの赤い槍が当方の体を貫く。

「思いの外に罅があかないね」

グリーンガムさんはそう言うのと赤い槍に魔力を集中させる。槍は注ぎ込まれた魔力に呼応するように赤く発光する。

キィィィンと音を放つ槍。

間違はなく死ぬ。

そんな絶対の一撃。

「真名封鎖……擬似宝具展開……これは私が私なりに昇華した私だけの宝具……全て必殺、避けてごらん？」

言葉を唱えようと槍を地面に突き刺した。

おぞましいほどの殺気を感じて当方は上空に飛び立つ。当方が立っていた泉の湖面

には無数の槍が墓標のように生えていた。

「さすがに避けるか……まあ、これぐらいはね。真名封鎖、擬似宝具展開……私から逃げられると思わないことだね」

次の瞬間、赤い槍をその身に纏い、まるで戦隊モノの怪物のような風貌に変わったグリーンガムさんが当方の目の前に現れた。

「……………ッ!!」

当方は咄嗟にその手から暴風と水を放出した。

「……………は？」

水はわかる。当方が前から使っていたからな。だが暴風はなんだ？これが龍神の力の一部なのか？

暴風と水はグリーンガムに直撃するがグリーンガムさんの目の前にルーン文字が現れた。暴風と水を弾いた。

このヒトと当方の相性って実は最悪何じゃないか？

「ぐああああああ!!」

グリーンガムさんはそのまま当方をその腕に作られた槍の鉤爪で切り裂いた。

そのまま何度も何度も切り裂かれ血が噴出する。

最後は蹴りを入れられ泉に落とされる。

「くう……あぐ……」

すぐさま岸に上がり呼吸をする。

泉の方を見ると怪物のような姿からいつもの青フードに戻ったグリーンガムさんが湖面に悠々と立っている。

「弱いね。まだ龍神の力が浸透してないのかな？」

息も絶え絶えで出血は止まらない。

グリーンガムさんは歩いて近づくとルーン魔術で回復を試みた。

「本来回復は私の領分じゃないから……てっ！」

「ち……」

あともう少しでジュワユーズがグリーンガムさんに直撃するところだったのに……気がはやったか？

今の当方の体は半分が龍神、半分が悪魔。治療能力はかなり高く、左目以外の傷はみるみるうちに塞がっていく。

ただ、細胞が活性化してるからかものすごく熱い。

「やっぱり油断ならないね」

「あいにく、母にはそう教わったので！」

距離があるのでデザートイーグルを出現させ速射する。

だが、弾丸はありえない軌道でグリーンガムを避けていった。
 ……だから弾丸があたりなかつたのか。

なら……ミサイル……とかでも一緒だろうな。

誘導式のやつは槍で落とされるだろうから……

「リミットアウト完全解放」

接近戦しか選択肢がなかった。黒鎧を身にまとい、いつもは水にする魔力を風に変換させる。水で突進するよりも風の見えにくい全包围攻撃なら逸らされにくいだろうと思ひ実行に移す。

「総督殿が言つてたのはこういうことか……なまじ頭の回転が早くて強い神セイクリッド・ギア器を持つてるからなんとかしようとしたら出来てしまうってことか……」

風は予想通りに逸れずにグリーンガムさんに向かつていく。

「輝劍よー！」

ジユウユーズの輝劍を操りグリーンガムさんを攻め立てる。暴風で加速した十二本の輝劍は音速は超えなくともかなりのスピードで空を飛ぶ。

「それなら私もできるよ」

グリーンガムさんはそう言うと赤い槍を空中に何本も生成する。

そして、蹴り飛ばし輝劍を槍で貫通させ動けないようにする。

「……それでもこの程度。至らないと死んじやうよう？」

グリーンガムさんは今一度、赤い槍を構える。

槍には魔力と殺意が集中する。

「その心臓貫い受けよう《刺し穿つ……》」

グリーンガムさんは一歩で視界から消え失せ……そして……

「死棘の槍!!」

当方の心臓にはあの赤い槍が突き刺さった。

第40話 《彼方より繋がる幻想の物語（ファンタズマ・フィックスト・ミソロジー）》

特訓終了日

当方はグレモリー本邸に戻るために道を歩いていった。

何かが飛来する音が聞こえたので後を振り返るとイツセーを山に連れていったドラゴンがグレモリー本邸から飛び去っていった。

なお、今の当方の格好は片目だけ包帯でぐるぐる巻きにされている上に包帯にはびっしりと治癒のルーンが刻まれている。……というか右半身にもものすごい数のルーンを書かれている。疲れを癒すのと魔力を回復するもの。それに念の為にグレモリー本邸まで迷わないようにするルーンもあるとか。あの人、ルーンと言えどもなんでもありか。

グレモリー本邸前につくと見知った気配が二つ感じたので声をかけた。

「祐斗にイツセー、もう帰っていたのか」

1人は上半身裸で下半身にボロボロになったジャージを着ているイツセー。もう1人はイツセーほどではないにせよボロボロになったジャージを着ている祐斗だ。

「リヴィイか。そっちはどうだった……って、なんだそれ？」

「これか？ ルーンだ。グリーンガムさんに色々刻まれてな。特に片目は治りかけだから重点的にやられた」

「リヴィイは……魔力の質が変わったね。やっぱり龍神の力を解放したから？」

「そんなところだな。……出来れば今はその話はやめてくれ。左目が痛む」

「……中二病か？ 思春期は過ぎただろ？」

「違う！」

その時、当方の背中にはドスンと何か被さる感触がした。まあ、ゼノヴィアが近くにいることは感じれたからおそらくゼノヴィアだ。

「おー、3人とも久しぶりだな」

「そうだな。とりあえず背中から離れてくれ」

「すこしこのままでいさせてくれ。治りが早い気がする」

「治りつて……イツセー、ゼノヴィアどんな格好してる？」

「どんなつて……ミイラ女」

「失敬な。私は永久保存される気は無いぞ？」

「そういう意味じゃねえ！」

「全身包帯グルグル巻つてことだよ。どうしてこうなったの？」

「修行して怪我して包帯巻いて、修行して怪我して包帯巻いてを繰り返したらこうなっ

た」

「それにしても3人ともオーラが濃くなつたな。ゼノヴィアは静かで厚みがあるように感じるし、祐斗は質が向上してる。イツセーは竜の気配が強くなつたな」

「そういうお前は二週間前とは全然違う感じだな」

「色々あつたのさ。目玉が吹き飛んだり、高速で落下したり、目玉が吹き飛んだり……」

「言いながら顔が青くなってるぞ！大丈夫か!？」

「だ、大丈夫だ。早く入るとしないか？」

そんな時、城門からこれまた見知つた気配が出てくる。

「イツセーさん！リヴィさん、木場さん、ゼノヴィアさんも！」

アーシアだ。アーシアもアーシアで魔力の流れが清らかになつている……気がする。

その後、アーシアはイツセーの上半身を見て赤面したり、イツセーは現れたリアス姉さんに抱きついたりしてたが外出組全員が揃い、特訓の報告をすることになった。

※※※

当方の心臓を貫く赤い槍。

普通の悪魔では絶命する一撃。

だが当方は本能でその一撃を甘んじて受け止めた。

死ぬわけにはいかない。

槍を即座に奪取、魂に取り込み治癒を始める。

「早すぎる……」

グリーンガムさんはそう言うのと飛び退き両手に赤い槍を出現させた。

その頃には心臓の治癒を終えていた。血は出続けているが……グリーンガムさんが達人でよかった。最低限の動き、最低限の必殺しか放っていないからこそ心臓とその表面の治癒だけで命を繋ぎ止めることができた。

けれど、先程のをもう一度放たれると間違いなく絶命する。

変革が訪れなければ間違いなく死ぬ。

生まれてからの付き合いの騎士の力と龍神の力。

当方の神器、《騎士の誉》はすでに亜種になっておりその力は強奪と……なんだ？

強奪と……融合？連結？合体？

どれもちがう……

当方の神器の本懐……それは

「強奪と……昇華だ！」

魔力を束ねジュウユーズを昇華させる。柄に埋め込まれているロンギヌスの穂先をも取り込み新たな神器としてその力を増大させる。

神をも殺す一振りの聖剣。

すべてを断ち切る聖帝の剣。

「ガアアアアアアアアッ!!」

完成させる。何としても。

龍神の魔力で暴れる魔力を抑え込みジユワユーズに昇華を施す。

荒れ狂う風とのたうち回る水。

その全てを1つの剣に集約させる。

人の世の常を超えて、ルールを壊し、有り得ざるものを作り出す。

全ての武器を繋げ新たな幻想を物語として確立させる。

本来は容認されない一品。

神がないからこそ神が想定していない武具を昇華によって生成する。

風が止み、水は静けさを取り戻す。

その中心には一振りの輝くフランベルジェ。

「……ゲッターデメリング・エクリプス・ジユワユーズ《王勇指し示す黄昏の剣》」

神々しい光を放つ剣を手に取り軽く振るう。

まるで重たい鈍器が振り回されるような音ともに重々しい風が発生した。

「至ったのかい?」

「……はい」

「……にしても特訓開始一日目で至るか……嬉しい誤算だな」

「……にしても特訓開始一日目で至るか……嬉しい誤算だな」

「……にしても特訓開始一日目で至るか……嬉しい誤算だな」

「……にしても特訓開始一日目で至るか……嬉しい誤算だな」

「……にしても特訓開始一日目で至るか……嬉しい誤算だな」

「……にしても特訓開始一日目で至るか……嬉しい誤算だな」

「……にしても特訓開始一日目で至るか……嬉しい誤算だな」

「……にしても特訓開始一日目で至るか……嬉しい誤算だな」

「……にしても特訓開始一日目で至るか……嬉しい誤算だな」

「……にしても特訓開始一日目で至るか……嬉しい誤算だな」

「……にしても特訓開始一日目で至るか……嬉しい誤算だな」

「……にしても特訓開始一日目で至るか……嬉しい誤算だな」

「……にしても特訓開始一日目で至るか……嬉しい誤算だな」

「……にしても特訓開始一日目で至るか……嬉しい誤算だな」

「……にしても特訓開始一日目で至るか……嬉しい誤算だな」

グリーンガムさんはそう言うと言った。槍をすべて消した。

「羽化寸前だったってことかな。これは今後の特訓メニューを見直さないとね……」

そこからは龍神の力に慣れつつ禁手を長時間維持させる訓練になった。

祐斗と同じ訓練になりつつあると感じた。

当方の禁手は発動にはそこまで時間を有するものではない。むしろ一瞬だ。

龍神としての力を解放したからかフィジカルなどもかなり上がって禁手を解放したままの状態だとすでに1日は持つようになった。……まあ、それ以外何もせずだが。

龍神の力も理解を深め前から使っていた水はもちろん、風も自在に操れるようになった。

一度気になったので禁手状態で完全解放を行ってみたが発動したのはなにもせずにして3時間だけ。しかもごっそりと体力を持っていかれた。

それに龍神の力（治癒能力や風の力など）を振るうためにはいちいち片目を何らかの手段で潰すのが面倒だ。

目を潰すのはグリーンガムさんに申告すると、頭の中でキーワードを思い浮かべると片目が潰れるようになった。

キーワードは《単眼解放》

これを唱えると左目に刻まれたルーン文字が反応し左目が破裂する。

なお、《両眼回帰》と唱えると治癒の力が目に集まり数秒で人間に戻れる。

……グリーンガムさん曰く、半龍神になっている時は竜種と神性の特性を得てるからその手の武器に気をつけることと言われた。

※※※

「以上が当方の特訓の成果です」

当方は特訓内容をすべて報告し終える。ちなみに報告会はイツセーの部屋で行われている。

バランスブレイカー

「禁 手に至ったか。まさか《生き残る》って単純な欲求だけで至るとは……リヴィ、お前もなかなかにおかしいぞ」

「そうなんですか?」

個人的にはイツセーの方がもつとんでもない理由で至りそうな気がする。

バランスブレイカー

「それに、奪取した武器を融合し《禁 手》として扱う《禁 手》……規格外もいところだな。色々試したんだろ?」

バランスブレイカー

「ええ、まあ。銀の銃を禁 手化させてモノは光の弾丸ではなく、誘導式の光のビームを放つようになってましたし、威力や弾速も段違いでした。フラッシュグレネードは目を閉じ、腕でガードしていても網膜が焼き尽くされるほどの光を放ちました。使い所を間違えるとこちらにも被害が出ます」

「だが、それも教えこまれたんだろう？」

「ええ、まあ」

「なら大丈夫だな。次、イツセー」

そこで先生との会話も終わりイツセーの特訓を聞くことになった。

……ここではとりあえず、ほとんどのメンバーが軽く引くようなD4Cなものだったとしておく。

※※※

その日の夜。

就寝時間なのだが、当方は一時期家でしていたようにゼノヴィアと同衾することになっていいる。ゼノヴィアは広いベッドは落ち着かないらしく、当方の寢床に潜り込んでいる。

当方は左手を下にして眠る癖がある。そして、ゼノヴィアは右手を下にして眠るようになっている。

つまり、眠る時は向き合うことになる。

「……眠れないのか、リヴィー」

「そりゃ……女子と対面していると眠気より湧き出るものがある。それにゼノヴィアもなかなか寝付けないだろ？」

「……家の時に何回かして慣れたつもりでいたけど、男と寝るのはやっぱりまだ慣れないんだ。性的な意味でなくとも緊張する……」

思い切った言動なのにこういう所で奥手か。

……まあ、気持ちはわからなくもない。

「年頃の男女が同じ部屋で寝るといつてことはそういうことなんだろ。イツセーは慣れていそうであるが」

「たしかに、イツセーは慣れてるだろうね」

くくくと笑うゼノヴィア。そんなゼノヴィアにつられて当方も少し笑ってしまう。

笑い声が収まった頃にゼノヴィアが当方の顔を真つ直ぐ見つめ問いかける。

「なあ、リヴィー」

「ん？」

「リヴィーは私のことをどう思っているんだ？」

「ゼノヴィアのこと……か」

同じ家に住んでいる修行仲間……なにか違うな。

眷属仲間と言うのも違う。どう答えればいいのか……

「一番近くにいる異性かな。流石に子作りとは行かないが、多分恋人関係になるとしたら今のゼノヴィア並に距離が近い人になると思う」

当方はそう答えるとゼノヴィアの反応をみる。

「……………」

ゼノヴィアは無言だったが口を少し開き、当方の唇と自身の唇を合わせる。

「ふふ、嬉しいことを言ってくれ。初めての口付けもこれからの口付けも全部リヴィに捧げたくなるよ」

「おまつ……………」

こうして当方たちの夜は更けていった。

第41話 《黒猫と白猫》

翌日夕刻、当方は光の翼を伸ばしながら夕焼けを見ていた。

「リヴィイどうしたんだい？」

宙に浮かぶ当方の横に祐斗が悪魔の羽を広げて並ぶ。

「祐斗か。いや、帰ってきたんだって思ってたさ」

「心做しか口調変わった？」

「昔の癖が少し出てるだけだ。気にするな」

そこで二人して黙って夕焼けを見る。

人間界の夕焼けの方が綺麗と感じるあたり、当方はかなりあちら側に感化されてるな。

「昔もこんな感じだったね」

「……飛べるようになった二人の悪魔が調子乗って飛行してたら主に怒られたただけだろ？」

「まあ、そうなんだけどさ。それでも思うことがあるよ。僕が言うのも変かもしれないけどさ」

「ん?」

祐斗は握り拳を突き出す。

「おかえり、リヴィ」

当方はその拳に自分の拳をコツンとぶつける。

「ああ、ただいま、祐斗」

二人して軽く声を上げ笑う。実は祐斗とは眷属メンバーの中では今年になって加入したゼノヴィア、イツセー、アーシアの次に付き合いが短かったりする。

初めは警戒されていたが、親友になれた今だから警戒されていた頃は昔の思い出になっっている。

……ギヤスパーはいつ頃に眷属入りしたかわからない。いつの間に眷属入りしてたんだろあいつ。

「そろそろ戻ろうか」

「だな。マスターリアスたちの準備も終わる頃だろう」

※※※

当方たちが待ち合わせ場所である客間に行くとそこにはイツセーと椅子に力なく座っているサジがいた。

「サジ、どうした?」

「さつきから呼びかけてるんだが反応がないんだ」

「イツセーくん何したのさ……」

「いや、俺はただ部長とどうい風に過ごしてるかの話をだな……」

「そんなのでサジはダウンしたのか？」

「ほんとにそれだけなのかい？ 流石に考えにくいんだけど……」

当方と祐斗はダウンしてるサジに対して考察を並べ始めた。

イツセーはなにやら苦笑してるが……

そこで数々の気配がこちらに向かってくるのを感じる。全てが見知った気配。いや、見知ってない気配だらけだと色々と問題ではあるが。

「どうやらマスターリアスたちが来たみたいだぞ」

「その感知力も半龍神のことが関係あるのかな？」

「気の流れみたいなのを常時感知してる……んだと思う」

ガチャリと扉が開かれる。

「お待たせ、イツセー、リヴィ、祐斗。あら、匙くん来てたのね」

そこにはドレスアップした女性陣がいた。

いやまあ、全員気配でわかってたけど。

問題があるとすれば……女装癖があるギヤスパーも着飾っていることだろうか。理

解はしていたつもりだが、なんだかな……

「リヴィ、どうだろうか？ 私には似合わないと思うんだが……」

ゼノヴィアは少し照れくさくしつつも当方に意見を求めてきた。

「当方はそういうのには疎いが……似合ってると思うぞ」

「そうか……」

ポリポリと頬を搔きながら答えた当方にゼノヴィアはそう返した。心做しか表情は嬉しそうに見える。

ちなみにゼノヴィアだけに反応した理由はソーナさん以外のドレス姿は焼き鳥パーティーで見たからだ。

まあ、朱乃さんは珍しく洋装だな。

「……あいつらの距離感変だよな」

「僕もそう思うけど……二人とも無自覚なの面白いしいんじゃない？」

※※※

「ヒトツメノムラジの悴はこっちだ」

元龍王タンニーンにそう言われ当方はタンニーンの頭にイツセーと共に座らされた。

初対面の元龍王に呼ばれるようなことは……いや、そういえば、父は龍神だった

か。その関連のことか？

それにしてもドラゴンの上から見る景色はなかなかいい。絶景とはいかないが……いや、飛行機を初めて乗った時の感覚に似てるか？

「しかし、強大なドラゴンで現役なのは俺を含めて4匹か……いや、俺は悪魔になったし、ヒトツメノムラジは人間社会に溶け込んだから元の姿を保っているのはオーフィスとティアマツトぐらいか」

「質問だが、そんなに当方の父は強大なドラゴンなのか？」

「ああ、極東の地に生まれたドラゴンだがその力は俺を軽く超える」
「オッサンを!？」

「あいつは蛇神信仰の影響で神のような特性を有していてな。天候を司りどのような劣悪な環境であろうとも十全の力を振るう。龍神と称されるだけの力を有している。その力はオーフィスに勝るとも劣らないとまで言われたこともある」

そんなに大それた存在なのか当方の父は……

もしかしなくてもハルトマン家は人外魔境なのか？

母は円卓の騎士の末裔で悪魔である当方とゼノヴィアが二人がかりでも一本が取れないほどの剣士

父はそもそも人外。龍神と呼ばれるドラゴン……

考えるのはやめた方がいいな。

「あの龍神の血が体の半分に流れているとすればお前も気をつけなければならぬ。いつの時代も強いドラゴンは恐れられ退治される」

「万が一でも暴走したら……という話か」

「俺にもそれは言えるのか……」

『ああ、そうなるな。赤龍帝に一目連。強大なドラゴンの力を持つものが二人も暴走したらその区域は間違いなく廃墟となるだろう』

「なんか嫌なことを聞いた気分だぜ……」

「ま、完全にものにすれば暴走の危険もないだろう」

「そう上手く行けばいいがな」

そこで話が一段落し数秒沈黙が訪れた。

「ところでムラジの倅」

「ん？」

「聞くところによるとお前は目標がないみたいだな」

「……確かにないな」

「若いうちからそれでは苦労するぞ。少しはイツセーを見習え」

「ふむ……なら……」

そこで当方は考えた。イツセーを参考にして思いつくことと言ったら……

「ならば当方も上級悪魔を目指すでしょう。当方に対し好意を持つている女性を全員娶つてやる。ま、イツセーほどはいないとは思うが」

そんなことを話しているといつの間にか会場についていた。

今回のパーティーは各御家の交流会みたいなもの。社交会と違いかなり軽いパーティーのようで次期当主たちの顔合わせの名目の下、数年に一度の頻度で行われている。ちなみに当方は八年前にリアス姉さんの付き添いできたことがある。

部長はイツセーを引き連れ挨拶回りに向かい、祐斗は既に女性悪魔に囲まれた。助けを求める目を向けてくるが………当方の予想だとこちらもそれぞれでは無くなる可能性がある。記憶が戻った素振りを見せるとそれを訝しんで同期の悪魔に囲まれる可能性が……特に昔「僕、ソーナさんの旦那さんになる!」と言ったことがあるからセラフオール様にはなるべく会いたくない。記憶が戻ったのになにかしらの超パワーでソーナさんと関わったことを忘れさせられそうだ……とりあえずサムズアップしておく。

あ、アイコンタクト帰ってきた。

アト デ オ ボ エ テ ロ

後で覚えてろ………か。なら

ツゴウヨクワスレトク

と。

「ゼノヴィア、少し見て回らないか？」

「いいぞ。私はこういう場で客として来るのは初めてだからエスコートは任せる」

「……客として……他としてなら来たことあるみたいな言い方だな」

「昔、祓魔師時代に悪魔の会合に殴り込みと言ったことならあるからな」

「なるほど」

そう返すと当方は膝をつきゼノヴィアの手を取る。数年前テレビでみたように。

「それではエスコートさせて頂こう。お嬢様」

「ああ、任せたぞ」

※※※

と、雰囲気を作ったところで当方にそんなことができるはずがない。とたかを括つていたら以前、ヴェネラナ母様に叩き込まれた貴族としての立ち振る舞いが幸をなし、なんとか様にはなっていた。

「どうだ？楽しいか？」

「好きな男性と一緒にいるんだ。楽しくないわけが無い」

「……………素面でそういうこと言うのは反則だと思っただが」

「なに、いつものことだろう？」

「それもそうなんだが……………ん？」

感じたことの無い気配。悪魔の気配だが……………なにか小猫と似ているようだが異質な気配。

場所は会場の外……………ふむ。

「少し席を外す。イツセーたちがそろそろくたびれる頃だろう。何か持って行ってやれ」

「……………ああ。わかった。気をつけろよ」

「もちろんだ」

ゼノヴィアも大方察してくれた模様。持つべきは心の通じる仲間だな。

即座に駆け足で会場のバルコニーに向かい……………

「騎士ナイト・オブ・オーナーの譽脚部第一解放」

別につぶやく必要はないが神器を起動させ森の方に文字通り飛んでいく。

気配は薄らとしか感じられないがそれだけでも充分だ。

地面に着地する前に光の翼を展開して一瞬浮遊。そしてスタツと着地する。

内心、上手く行ってよかったと思っている。

さて、異様な気配はどこだろうか、と。

「？」

そんな中にこちらに真つ直ぐ向かってくる気配を感じる。例の異様なものとは違い見知った気配だ。

「そんなに慌ててどこに行くんだ？小猫？」

「……リヴィ……先輩」

「もしかするとだが、先程から感じている小猫にどこか似ている異様な気配と関係しているのか？」

「……はい」

「そうか……ということは黒猫繋がりか？」

黒猫。当方が知りうる限りの情報からわかることは小猫を捨てた小猫の姉。そもそも小猫は元種族は人間ではなく猫？という猫又の上位種族の妖怪だ。在り方はグレモリー眷属の中では一目連と英雄の末裔のハーフである当方が一番近い。

だからか、昔は当方によく力を制御するための努力の仕方を聞いてきたりしていた。そんなこんなで猫？の姉のことも知っているのだが……

「ヴァーリチームの一員がパーティ会場に………か。テロという線もあるな」

転生者カレンからの情報でソイツは禍の団に所属しヴァーリチームに加入していると聞いている。

そんな奴と小猫を二人つきりで会わせるわけにはいかない……元姉妹だったとして

もだ。

「当方も同行しよう。元よりそのつもりだったからな。それに、黒猫に小猫を1人だけで会わせるわけにはいかない」

「……わかりました」

渋々といった様子で小猫が返事をした。

当方がついてくる理由もわかつているからだろうか強く拒否はしない。

「全く、せつかく姉妹二人つきりで落ち着いたお話ができると思つたのに……彼氏連れだとか聞いてないにゃ」

「……っー」

声のした方を振り向くと黒い着物に身を包んだ女性がいた。頭には猫耳が生え、着物の影から2つの尻尾がゆらゆらと揺れている。

こいつが件の……

「黒歌姉さま……リヴィさんは彼氏じゃありません」

そう。件の黒猫、小猫の姉『黒歌』……なんだけど、小猫が意外と落ち着いてる……

と、そこで小猫を追ってきたのかりアス姉さんとイツセーの気配が付近に到着した。

「姉さま。これはどういうことですか？」

落ち着きながらも怒気を含んだ言葉で口に出す小猫。だが、黒歌はその言葉を予想し

てたのか微笑んでいる。

「怖い顔しないで。ちよつとした野暮用なの。悪魔さんたちがここで大きな催しをしているっていうじゃない？だからあ、ちよつと気になって。会場に放った黒猫一匹だけだ。ここまで来てくれるなんてお姉ちゃん、感動して泣きちやいそうになるにゃん♪」

とりあえず抱いた印象は疑惑。まあ、あんまりよろしいものでは無い。とにかく、敵であることは間違いないのだからな。

それに敵はまだいる。あと一人……以前感じた美猴の気配を感じる。

「とりあえず要件を聞こうか。小猫はともかく当方はお前たちと小話をするためにここに来た訳では無いのだからな」

そう言いながら美猴の気配を感じる方向に騎士の誉で作成した強化型光線銃を向ける。

「嫌だにやあ。私はただ……」

「小猫なら渡すつもりは毛頭ない。小猫は当方の大事な仲間であり家族だからな」

第4 2話 《猿と半龍と赤龍帝》

「どこかで感じたことのある気配だと思つたら、円卓の末裔じゃねーか。それに……グレモリー眷属の王様と赤龍帝もそろい踏みか」

「やはり仙術か……」

美猴が姿を現しリアス姉さんとイツセーの気配を感知したのかそう言った。

「バレていたのか……」

「リヴィと小猫の力のことを考えたらやつぱりと思つたけど、やはりあなたも仙術を使えるのね？」

「おうよ。気の流れをちよつと把握すりや強大な妖怪の力を持つやつなら誰でも出来るぜ？」

当方に銃を向けられてもヘラヘラとした調子で喋る美猴。

「……そう言えば仙術で誤魔化された気配は熱探知などで看破できたりするのだろうか。」

「ところで姉さま、話とは？」

「予想以上に白音がたくましいにやん……」

「ねえ……黒歌知ってる？」

「なんでグレモリーのお嬢様がしゃべるんだにやん……」

「恋を知った乙女は無敵らしいわよ」

「……にや!？」

姉さんがそう言うのと小猫がいつの間にか黒歌の後ろに回り込み……首根っこに手を

回し……

チヨークスリーパーを決めた。

「……ええ？」

「さすがは小猫ね……」

「仙術で気配は完全に消してたはずにやのに……」

「姉様、私がないのであの力を使わないと思ったのですか？」

キリキリと黒歌の首がぐ落とされる音が聞こえてくる。怖い。

「なんで……」

「!!」

そこで小猫は黒歌を離しこちらに飛び退いてきた。

「悪いな、ここで簡単に黒歌を落とさせる訳には行かねえんだわ」

「……邪魔が入りました」

そんなことを言う小猫の頭には白い猫耳、そして尾骶骨辺りには白い尾がある。

「小猫ちゃん……それ……」

「これですか？……リヴィ先輩の力と同じタイミングでおひろめするつもりだったんですけど……時期尚早でしたでしょうか？」

「かわいいからいいんじゃないか？」

「そうですか」

そう会話をするとこちらも改めて戦闘態勢を取る。

手にいつものジュワユース、そして背には光の翼。

イツセーも赤龍帝の箆手を出現させやる気満々の様子。

「はあく……面倒になってきたにゃん」

「どうする？」

「もちろん。めんどいから殺すにゃん♪」

その瞬間、周囲の気配が異質なものに急変した。

……感知能力が今のままだと心もとない。少し、本気出してしまおうか。

「単眼解放」

例のキーワードを呟き左目を炸裂させる。

そして当方の在り方が元に戻る。

半龍神の力を持って今から全力で相手を倒してやる。

「おお？ 龍神の気配……お前さん、そんな力持ってたのか？」

「今まで忘れてはいたがな。尋常ではない死合と洒落込むか？ 猿」

「ははっ！ 龍王クラスの首に英雄の末裔、グレモリーの次期当主！ こんだけあればあの龍神様も黙るぜ！ やるしかねえよなあ！」

「嬉しそうですね。お猿さんは好きにすればいいにや」

「ああ！ そうさせてもらうぜ！ 如意棒ッ！」

そう言う猿は棍を構え突撃してくる。

「お前の相手はラッセルかアーサーだと思っていたが……こうなった以上は満足のいくまで戦ってもらうぜ！」

「勝手に言ってる！」

当方は光の翼を翻し、手に魔力を貯める。

水流を暴風でコーティングし正拳突きのを要領で解き放つつ！

ゴオウ！

と解き放たれた魔力は猿に向かって真っ直ぐ、そして広域を巻き込むように広がっていく。

「はっ！」

猿はそれを鼻で笑い、棍を高速で回転させることで逆向きの竜巻を起こし風を無力化、水流のみになったところを飛び越えてくる。

まあ、予測済みなので前もって展開した輝剣から発射されたミサイルの弾幕があるのだが。

「うおっ!!」

ミサイルが爆発し爆煙が辺りに立ち込める。

「姉さん、イツセー。あの猿は当方が相手する。黒猫は任せる!」

当方はそう言いながら上空に戦場を移す。

「筋斗雲!」

猿は雲に乗り爆煙の中から突撃してくる。

棍をジユワユースで受け止め罅迫り合いのようなものをする。

「ハハッ! 結構強くなってるんじゃないか!」

「おほめに預かりどうも!」

罅迫り合っている最中に暴風を展開し攻撃を行うが猿は物ともしていない。

「完全解放!」

筋力を大幅に増強させ猿を棍ごと弾き飛ばす。

「それが騎士の鎧ってやつか?」

「せっかくだから、その本懐を今から見せてやるよ。禁手化……」

風と水が圧縮され当方の鎧が強化される。

ジユウユース、祐斗の聖魔剣、光の翼

それらが全て混同しひとつの物語として昇華される。

「湖から迸る遥かな栄光」

所々に龍の意匠が施された紫苑の鎧を身に纏う。

一見すると白龍皇の禁手と形状は似ているが、こちらは常に水と風が周りに渦巻いており、そもそもの色が違うのでかなり見分けがつきやすいだろう。

「禁手……へっ、おもしれえー」

猿はまたもや接近してくる。だが……

この鎧に付加された能力は端的に言えば《考えうる限りの最優》

聖剣元来の悪魔特攻や聖槍とされたロンギヌスの槍の能力。さらには当方の中にある武器も取り込んでいる。

ゴボボツ！と音を立て水が辺りに出現し始める。

地上にいる3人と黒猫からは空に湖が出来たと錯覚するだろう。

「誰が空中戦を挑むと言った？」

「なに!？」

魔力をフル回転させ水を生み出し続ける。黒猫が貼ったであろう結界らしきもの上半分は水に満たされた。

そのおかげで当方と猿はどつぷりと水に全身が浸かっている。

水の中では陸上の生物だと上手く動けない。その分こちらは不満点はない。なぜなら、元より水中が当方のホームグラウンドであり、水を司る神性を持っているため呼吸を必要としないからだ。厳密には皮膚呼吸で水中から酸素を補っているだけだが。

『では、遠慮なく蹂躪させてもらおうぞ』

鎧の一部分を暴風を吹かし加速させる。ラムジェットだったか？それと似たようなものだ。多分。

水中では火器や剣が使いづらくなるがそれはあの猿も同じ。特殊な方法を取らない限りは地上や空中のように動けないはずだ。

手始めに暴風を纏わせた光の翼から水中に適応させた光のナイフを射出する。

まあ、もちろん猿は対応出来てないのだが。

ジェットで近づいたあとは水中用に加工した剣で一閃。

猿の血がでるがすぐさま水に溶けることで見えにくくなる。

なお、水の成分はほとんど海水。つまり、血が流れやすくなる。

このまま出血多量で死んでくれれば楽なんだがな……

ふむ？仙術かなにかで傷を塞いだか？

そして……発勁？で急激に加速。ゴボゴボ言わせながら近づいてくる。

……ヨクモヤツテクレタナ？

と言ってるのか？

なに、勝てば官軍。負ければ賊軍。

負けたヤツが悪い。

そんなことを考えつつ、猿を遠距離からのミサイル群で牽制し本命の一撃をさらに叩き込む。

そんな時

『ムラジの碎、少しいいか？』

頭の中に直接そんな声が響いてきた。

『ドライグ……？なんで当方の頭に……』

『お前の中にある龍の因子を通じて直接語りかけている』

『……？まあ、いいか。なんだ？』

『相棒から質問があるみたいだな』

『質問？』

『とりあえず、繋げるぞ』

音声^①が切り替わりイツセーの声^②が聞こえてくる。

『なあ、リヴィ。部長の胸、どっちをつつけばいいと思う？』

『……はあ!? そっちどういう状況なんだ!?』

『とりあえず答えてくれ!』 バランス・ブレイカー 禁 手に至れるかもしれないんだ!』

……状況はよくわからないが……酷いということがわかった。

『至れるならさっさとやったらどうなんだ!』

『初ブザーなんだぞ! さっさとなんてできるか!』

『知るか!』

頭が痛い会話^③をしている。なお、この間も猿は完封している。面倒だから。そろそろ溺れてくれはしないだろうか。

『ああ! もう! なら両方でいいんじゃないか!』

『そ……』

……ん、どうした? 念話^④が切れ

『ソレだアアアアアア!』

『ウルセエエエ!』

『答えは得た……』

『お前何言ってるの?』

そこでカツと刃りに赤い閃光が満ちる。水の中でも真下が光っていると感じる。

『ワハハ！至りやがったぞ！俺はそろそろ本格的に泣くからな！』

『エツチでごめんね！パランス・ブレイク禁手化!!』

なかなか酷いな……あ、いよいよ猿がゴボツと口から息を吐き出した。

勝てるな雑に、楽に。

そして、魔力の塊がいきなり膨れ上がったかと思うと、それが上空、つまり水溜まりに向かって放たれた。

ゴウウウンと轟音を上げながら結界を粉碎し、水も蒸発した。

……維持するのも面倒だからそろそろ解除するか。

大量の水を雨に変え徐々に霧散させていく。

そこには傍目から見るとあまたの雨粒と同時にゆっくりと降下する紫苑の龍鎧と地上に赤い閃光を煌めかす龍鎧がいる。

かたや一日連

かたや赤龍帝

一時は人に恐れられた2体の龍の現在の姿だ。

その姿は人によつては畏怖も覚えるだろう。

猿の死体が土煙を上げ地面に激突し、黒猫も余裕が無いのか表情が青ざめている。

「どうした？それで終わりか？」

「このクソガキがッ！」

黒猫のその目に少しの怯えが見え始めた。

……全身鎧と龍が放つ特有のプレッシャーが原因だろう。

「はいはい、そこまでそこまで」

「ええ、ラッセルの言う通りですとも。2人とも悪魔たちが感付きましたよ」

ふたつの声が聞こえたと思うと雨が降る中にひとつの海賊船が現れ、ゴホゴホ言つて
る猿と黒猫を鎖で回収し船に積んだ。

「その見た目……なるほど、赤龍帝の籠手ブリストテッド・ギアが禁手バランス・ブレイカーに……ほう、リヴィもですか……」

「その声……まさか……アーサーか？」

「覚えてますか。ええ、あなたの昔馴染みのアーサーですよ」

「情報では聞いていたが本当にヴァーリの所にいるなんてな」

「どうやら、その身にある力を全て使いこなせるようになったようで」

「お！つまりは略奪のしどきかい!？」

「まあ、そうなりますね。リヴィ、昔馴染みと言えど立ちはだかるのなら容赦はしません。この『コールブランド』と『支配エクスカリバールの聖剣』の二刀を持って相手しましょう」

あいつらはそんなことを言いながら船を来た時と同じように突如として消しその場

をあとにした。

「リヴィさん、大丈夫ですか？」

「至つて無事だ。それよりも姉さんと小猫……いや、もう白音か……白音は大丈夫なのか？」

「ええ。あのお猿さんをリヴィさんが引き付けてくれてエツチな先輩が姉様と戦つてくれたので私も部長も無傷です」

「そうか……なら良かった」

そこで当方はようやく地に足をつけ、武装を解除した。

イツセーも部長と言葉を二三言交わし禁手を解いた。

「何はともあれ……イツセーも禁バランス・ブレイカー手に至れたし、リヴィの本来の強さも確認出来た。

成果は上々ね」

姉さんのその言葉でこの場は一旦お開きとなった。その後急行してきたタンニーン含む悪魔の方々に当方たちは救助という名目で連行され、事情聴取のようなものを受けたのだがそれはまったくと言っていいほど別の話。

……今は目下の問題

VSソーナさんたちに備えないとな……

第43話 《開幕!VSシトリー眷属》

「シトリー眷属版のリヴィ?」

「ああ」

グレモリー邸の当方にあてがわれた一室。そこで男子組は一同に会している。

なおゼノヴィアはアジアの部屋に向かつてもらっている。男だけでないと話せないこともあるからな。

「名前は夜兎ナイト・ラクシユミー。駒は確か騎士だったか」

「そんな子いたっけ?」

「祐斗は知らないだろうな。なんせ徹底した引きこもりだしな」

「:なんかギャー助みたいだな」

「確かにな」

「と言うかラクシユミー?なんでインド神話の神の名前を?」

「インド人自体が神の名前をつける傾向にあるらしいぞ。詳しくは知らないが」

「へー」

二人にジュースを入れたコップを差し出す。

夜は長いからな、飲料物がないと困るだろう。

「それでそいつの話をするってことは今度のシトリ―戦で注意したほうがいいからか？」

「ああ、何せ夜兎の能力は不明だからな。そのくせソーナさんはあいつに変異の駒を使つたと聞く」

「変異の駒…まじか」

「ソーナさんが6年前に仕込んだブラフじゃなかったらな」

※※※

と言つても何をどう対策すればいいのかわからないままゲームの当日になつてしまった。

ゲーム専用の巨大な魔法陣をくぐり、今回のステージである駒王町にあるショッピングモールを再現したフィールドに到着。今回の陣地であるフードコートで椅子に座り目を閉じ精神を集中させようとしていたのだが…

「どうかしましたリヴィさん？」

「いや…まあ…」

「当方が正座で心を落ち着かせようとしているとk…白音が真ん前から抱きついてきた。猫耳と尻尾を生やして。」

「何でいきなり?」

「ゲームが始まると高確率でリヴィさんと離れ離れになるので成分の補充です」

「何の成分!」

「そうかそういうアピールもあるのか」

変に緊張するよりかはマシか?こちらは気が気でもないのだが:

「ここいらで一度女性関係についてはつきりとさせたほうがいいのだろうか:姉さんに相談してもいい答えは得られそうにないからな:

とりあえずはこのゲームが終わった後でいいか?いや、だが龍王タンニーンの前(正確には頭の上だが)で好意を寄せてくれる女性は全員娶ると言ってしまったからな:あの時の自分が少し恨めしい。

そんな風にしてると姉さんから召集され作戦を言い渡された。

「今回のルールは『バトルフィールドを破壊しつくさないこと』と『ギヤスパアの神器の使用禁止』。この二つを顧みるに私たちが得意とする力押しができないとみていいでしょう」

姉さんはそう言いながら机の上に広げられたパンフレットをさしながらつづける。

「だから今回はリヴィと白音の二人を軸にしてチームを展開、私とアジア、朱乃は状況をみて進軍するわ」

※※※

と言われ当方はゼノヴィア、祐斗の騎士二人ともに立体駐車場に向かって進攻を開始した。

騎士のスピードについていけないのは当方だけだったので足並みを揃えられる組み合わせがこれしかないので仕方ないといえれば仕方ないのだが…

「…待ち伏せだ。数は3」

「潜伏してるのは？」

「特には感じられないな」

当方たちはそれぞれの得物を構え敵に備える。

「姉さんの初公式戦、ソーナさんには悪いが遠慮なく勝ちにいかせてもらおう」

「距離と接敵予想時間は？」

「距離は不明、そこまではわからん。だが、気配は一階部分で停滞している。このまま立体駐車場を使い進み続けるなら、4分後には視界に入る」

「目と耳を潰してからやるとしないか？」

「だな。当方は別方向から脚部解放を使った強襲であちら側の感覚系を閃光爆弾で潰す。ゼノヴィアと祐斗はその隙について一人でも多く撃破^{ディック}してくれ」

正直なところ、床を吹き飛ばしてやるのが一番手取り早いだろう。だが、それは今

回のルールに触れてしまうため出来ない。

そのため、奇襲をかけるには一階に駐車場外から降下する必要がある。

が、罾が仕掛けられている可能性が高い。ワイヤーガンを使えば地面に接することなくたどり着けるが、その手の訓練を受けたのはおそらく当方のみ、なので単独で強襲することにした。

「タイミングはどうやって合わせる?」

「別に合わせなくても結構、君たちはここでやられるんだからね」

「!?!」

全くの知らない声がして振り向くとそこには褐色の肌を持ち、額に青い菱形の文様を刻んでいる少年がいた。

「……久々だな、^{ナイト}夜兎」

外見に見覚えがあつたのであたりをつけそう話す。そうすると少年はニヤリと笑い「さすがはリヴィ。だいぶ落ち着いているね。そうだよ、僕は夜兎だ」

夜兎はそう言いながら両手に一本ずつ持っているナイフをクルクルと回す。

「いや、慌ててはいる。だが、こうしている間にも一階部分にいた三人がこちらに向かっているからな。冷静に対処するしかないというだけだ」

そう言いながら出現させていたハンドガンの引き金を弾く。が、着弾するよりも早く

夜兎は闇に溶けるように消えてしまった。

「ははっ！それなりに焦ってるのは本当みただね！いきなり発砲だとか……」

突如悪寒がし後ろに跳び退く。当方がいた場所には二本のナイフが刺さっていた。

「気配がまったく感じられなかった……」

「リヴィでも感知できないなんて……白音ちゃんとイツセー君のところに行かせるわけにはいかないね」

「ああ、イツセーの禁バランズブレイカー手は強大だが、今のように影に溶けられては一方的に蹂躪される可能性がある。ここで潰しておくに越したことはない」

「当方たちはそう言いつつ互いに背中を預ける。奇襲がどこから来るかわからないからな。」

「ま、そうなるよね。会長もそう予想してたみたいだし……でも、テクニクタイプのリヴィ君と木場君、それに本来のは火力が制限されているパワータイプのゼノヴィアさんじゃおおよそ、新しい力を手にした僕の敵じゃないね」

「全方位から声が響くように聞こえてくる。気配も一切感じられず、気の流れも夜兎のはまったく読めない。」

……夜兎の神器か？

「だとしたらこれほどの禁手のはず……当方やイツセーのように修行して手に入れ

た。ということか？

『リアス・グレモリー様の「僧侶」ビシヨッフ一名、リタイヤ』

ギヤスパーがやられたか……

「ふふ、これで君たちの頭数は一つ減ったということになるね」

「ああ、そうなるな」

「あれ？てつきり激昂すると思っていたのに。グレモリーは仲間意識が特別強いから」

「ああ、今もハラワタが煮えくりそうだよ。でも」

「それで勝負を逃してしまつては倒れてしまつたギヤスパーに顔向けできんからな」

「まったく、あいつは体の鍛えが足りないから……だが、可愛い後輩がやられたのでね。仇

はとらせてもらおう」

ゼノヴィア方とてつもないプレッシャーが放たれる。意外に思えるだろうが彼女は身内にかなり甘い。ああ見えてもギヤスパーを可愛がっていた。ゼノヴィアに取つてもギヤスパーの撃破は度し難いものだろう

「ふーん……ところでさ。僕の目標である挟み撃ちは綺麗に完了したんだけどどうするのさ……」

夜兔のいう通り、あたりに一階にいた三人がきていた。

『女王クイーン』の真羅さん。

『戦車』の由良さん。

そして『騎士』の巡さん。

だが、まあ。なんというか……読み通りというかなんというか。

「ああ確か、こういうのをwinnerwinの関係というのだったか？」

「？」

「祐斗、ゼノヴィアやるぞ！」

「ああ！」

祐斗が聖魔剣を突き立てゼノヴィアがそれに異空間に収納されているデュランダルのオーラを纏わせる。さらに当方が龍神の力によりその剣の気配をかき消し当方の禁手を介した聖魔剣の昇華により、聖魔剣に戦車の駒の特性の頑強さ、グリーンガムさんからパクった槍に付随してあった必中の能力を付与する。

そして祐斗がその剣を地面からいつものように生やした。

これが当方たちが行える広範囲殲滅技

その名も：

「『双覇龍蘭の不滅刃!!』」

あたり一面に聖なる龍神の剣が咲き誇り、視認できる三人に襲いかかる。

当方たち三人が合わさって行うこの技は当方たちの敵全てを貫くフィールドを形成

する。だが…

『追憶の鏡』
ミラ!アリス

真羅さんは自分に向かってくる剣の前に鏡を出現させる。

鏡は剣により粉微塵に破壊されるが、それにより強大な波動が形成される。

ゴオオオオオオオオオオオオオオン!!

あたりの空間を歪ませると思えるほどの波動が当方たちに襲いかかる。

「この鏡は破壊された時、衝撃を倍にして返します。あなた方の行動は予想通り、わざわざ三人で囲をやった甲斐があるというものです」

真羅さんは冷笑を浮かべている。くそ!

何から何まで予想済みか!このままだと間違いなく三人とも撃破される!

それだけは避けないといけない!

と、当方が考えているとゼノヴィアが当方に覆いかぶさってきた。

「何…」

そのまま二人して吹き飛ばされる。祐斗は衝撃よりも早く動くことでダメージを負うより先に確実に真羅さんを撃破していた。

「ゼノヴィア!大丈夫か!」

「……大丈夫ではあるが……この傷だと後数秒で私も木場も消え去るだろう」

「くそ！すまない！当方が勝ちを急いだばかりに……！」

「そんなに自分を悪く言うな、まだ私たちは負けていない。負けていない限りは何をしなくても勝つ。ハルトマンの流儀だろう？」

ゼノヴィアはそう言い残し消え去った。

『ソーナ・シトリー様の「女王」一名、「戦車」一名、「騎士」一名、リタイヤ』

『リアス・グレモリー様の「騎士」二名、リタイヤ』

「ああ、当方たちは負けてない」

二人の撃破を知らせるアナウンスを聞き、当方は立ち上がる。

「来いよ、夜兎。英雄の末裔同士仲良く死合おうじゃないか」

「うん。僕もね。これで自分の本来の力が使えるだ……」

闇から再び夜兎が姿を現した。そしてその額には先ほどと変わり赤く爛々と輝く寶石が付いていた。

「僕は静かに、だけど苛烈に怒ろう。僕たちの夢を笑った悪魔たちに。そして僕の仲間を倒した君たちに。僕はアシユヴァッターマンの末裔、夜兎・ラクシユミー。一度に六万の軍勢を相手にできるとまでいわれた偉大なる戦士の末裔。そして我が主ソーナ・シトリー様の『暗殺者』である。その僕と刃を交える君は何者だ？」

そう名乗りを上げた。こうなれば当方も返すしかない。

「当方はランスロットの末裔、リヴェイエル・A・ハルトマン。円卓最良と言われた騎士の末裔であると同時に龍神ヒトツメノムラジ一目連の力を秘めるリアス・グレモリー様の『戦車ルック』である。当方の血に流れる英雄と龍神の力、そして友の剣に誓い、お前を倒そう」

当方の名乗りを聞き、夜兔はニヤリと笑う。

「いいね。なかなか面白くなってきた」

そう言いナイフを構えその場でステップを踏み始めた。

「行くよ、いざいざ!」

「尋常に!」

「勝負!」

第44話 《英雄VS戦士》

「勝負!!」

当方と夜兔は同時に地面を蹴り、各々の武器を振るう。

当方の開幕の一撃は夜兔のナイフによって逸らされ、夜兔の一撃もまた当方の左手に握られたハンドガンにより傷を与えることはできなかつた。

夜兔はそのまま駆け抜け距離を取り再び身をくرامせるつもりだろうが

それは当方にとってかなり不利に……!?

「消えた!?!」

追撃を与えようと身をひねり剣を振るつたところで夜兔の姿は消えていた。

そして例のごとく気配も全く感知できない。

「……分がかなり悪いな」

「考え事をしている暇はないよー」

そう言いつつ夜兔は当方の首にナイフを突き立ててくる。

くそ! 攻撃されるまで全く予兆なかつたぞ!

ゲイボルク・ミーティア・ベイオネット

「《朱翔に先導す暁の武功》!!」

姿を現した瞬間に二丁セットの必中の弾丸を放つハンドガンを作り出し夜兎に銃口を向ける。

グリーンガムさんとの訓練で身についた当方の新しい戦闘スタイル。確かガン⇨カタだったか？

格闘戦で拳銃を扱う武術らしく、この場合なら剣を振り回すよりもこちらのほうが適しているだろう。

すぐさま第一解放で腕の筋力や肩の動く速度を上げ夜兎の額に銃口を向ける。

その銃に装填されている弾丸の危険度に気がついたのか顔に一瞬焦りの表情が見える。

それもそのはず。

対悪魔用に特化した必中と聖剣の力を込めた弾丸だ。もし魔王の方々に命中した場合にも光による持続的なダメージが狙える。

そういうレベルの弾丸だ。

悪魔であるなら直感で悟れるはずだ。

「…バランブレイク禁手化！」

そう叫ぶと夜兎は影に一瞬で溶け、その姿を再びくらませた。

「あれだけ堂々と名乗りを上げたんだ。正々堂々と戦ったらどうだ！」

「断る！なにその銃！一発でも当たると即撃破^{テイク}じゃん！」

「攻撃の時以外完全に気配を無くす奴に言われたくない！」

そこからまた無言になった。相手の神器の能力がわからない以上迂闊に移動するわけにも……!!

突如気配が二つ！後方と前方から同時の攻撃。どんな禁手なんだ!?

片方に銃弾を浴びせ、もう片方にも同じようにしようとするが……

その瞬間、足に激痛が走った。

苦痛に顔を歪め、右腕に一瞬で麻痺の症状が現れ銃を取り落としてしまう。

ふと足に視線をやると黒い影がナイフを鎧のない肉の部分にねじ込んでいるのが見えた。

そして、残ったもう一人……夜兎本人が当方の半身をナイフで切り刻んだ。

「グアアアアア！」

「これでチエツクメイト……だね」

全身に激痛が走る。

「このナイフはね。かの賢者ケイローンが不死を手放す原因になったヒュドラの牙を素材に加工されたナイフなんだ。かすればたちまち全身に痺れが周り、根元まで差し込まれると絶命する。暗殺者^{アサシン}の僕らしい装備でしょ？」

「つまり後数秒で……命が危険な状態と認識され退場か」

「ご名答、だからチェックメイトなのさ」

「そうか……なら当方のありったけを食らっておけ！」

銃を即座に消し、ジュークスに昇華を施す。輝劍の個数を最大の12まで添加し、そのすべてに先ほどの《ゲイボルク・ミーティア・ペイオネット朱翔に先導す暁の武功》と同じものにする。見栄えを考えてすべてライフルに変えてはいるが。

「喰らつとけ！ 《オルタナティブ・ミーティア・ライクス朱翔を示す宵闇の軍勢》!!」

必中の弾丸の群れが斉射され、すべてが姿を現している夜兎に吸い込まれるように軌道を変えていく。

「それは僕に効かないわからない……「暗闇だ」は？」

「夜兎のその隠密能力はこの暗闇が関係している。だから！」

魔力強化型閃光爆弾を作り出し、目の前で炸裂させた。

どうせ、あと数秒で消え失せるんだ。

これぐらいしてもいいだろう。

「くそ！よくもやってくれる！」

「これで相打ちは狙えるだろ？」

そのあとに夜兎が何か言った気がしたが容赦のない一斉射撃による音で何も聞こえ

なくなつた。

「…撃破^{ティク}つて言つても仙術もどきで毒の流れを遅くしてもあと数十分の命…か。くそ、体力を温存するために完全開放^{リミットアウト}を使用しないなんて考えるんじゃないな」

誰もいなくなつた戦場で、当方は無線を頼りにイツセーたちとの合流を開始した。

※※※

『ソーナ・シトリー様の「暗殺者^{アサシン}」一名、リタイヤ』

「おおー！リヴィのやつ勝ちやがったー！」

「さすがリヴィさんです」

俺たちは自販機のドアを壊し水分補給に興じていた。ただ、さっきの匙との戦闘でのダメージが残っているのか体のふらつきがなかなか取れない。

それに匙を倒したつていうのにこの腕に繋がった管も消えはしない、どこにつながっているんだ？

※※※

当方がショッピングモールの中央広場に着くとそこには意外や意外、ソーナさんがいた。

ソーナさんを挟んで向こう側にはイツセーと白音が、さらにその後ろには姉さんがいる。

しかし、そこで当方とイツセーが同時に膝をつき、当方は大量の血を口から吐き出した。

……もう時間切れか。

「どうやら二人とも役目は果たしてくれたみたいですね」

「ヒュドラの猛毒……ここまでの……」

どんどん力が抜けていく指の先が冷たくなり意識が混濁する。

だが、イツセーの腕に付けられた管……あれだけでも切り離れた方が良さそうだ。どういうわけかはわからないが血が抜かれていつてる。このままだと、退場待ったなしだ。

「最後のやけっ……ゴフ……食らって……くださいよ」

当方はそういうと、イツセーの管めがけて一本の剣を投擲した。

他の人たちの声はもはや何を言ってるのかはわからなかったが、管が切れたことだけ確認すると、意識を闇の中に手放した。

『リアス・グレモリー様の「戦車」^{ルック}一名、リタイヤ』

※※※

次に目がさめるとそこは医療室だった。呼吸器がやられているのか生命維持装置のようなものにつなげられている。ヒュドラの猛毒は抜くのが時間がかかり、なおかつ神

経の麻痺を引き起こすのでよく武器に塗られるらしい。まさか、その牙で作られたナイフなんていうものがあるなんて考えなかったこちらの落ち度だろう。

その後、反転リバースという技でアーシアーの回復能力が攻撃に利用され落とされ、イツセーも失血多量で落ちた。

当方が最後に投げた剣をイツセーが取ったらしく、それのおかげで思う存分に暴れられたらしい。

……グリーンガムさんのルーンによる急速治療の術を剣に触れた竜に発生させるようにした剣だ。土壇場の思いつきで意識も朦朧としていたので自信はなかったがうまくいったよかった。

だが、最終的には部長、朱乃さん、白音以外を落としたりしたグレモリー眷属の評価は間違はなく下がる。勝ち拾えたものの圧倒的に有利とされていたからだ。特に序盤の一斉殲滅のカウンターにより騎士ナイトの二人が撃破されたのと、一人で散々に評価に印象を与えた湖の騎士が単独で撃破され、赤龍帝が倒されたのがさらに評価を下げている。

なお、イツセーはギリギリまで戦い、最終的には即死級の攻撃から朱乃さんをかばうというファインプレーを見せた。

そして、当方は夏休みギリギリまで入院を言い渡された。他のメンバーも当方の退院に合わせて人間界に帰るようなので付き合わせてしまつて申し訳ない。

そういった入院の日のある日だった。

生命維持装置からようやく解放され、あと二日で退院という時にそれはきた。

桜色の髪に白い軍服ワンピースにベレー帽、大量銃火器の原因アミティエ・ブエルがなぜか見舞いに来ていた。

花束を持って。

「やあ、リヴィ君。久しぶりだね。記憶がある状態だと大体5年ぶりかな？」

「はあ…そうですね。何しに来たんですか？」

「君たちグレモリーに対する宣戦布告。もうリアスたちにはやったからね。君には次期当主であるボク直々に言いに来たんだ。光栄に思えよ？」

花瓶に花を入れ、パンパンと手を鳴らしこちらにアミティエが向き直った。

「というわけだ。ボクたちブエルは君らグレモリーを容赦なく叩き潰させてもらう。これはボクの目標のために行く大事なことだからね。悪く思わないでよ？」

八月の後半、下向きにサムズアップしたアミティエの宣戦布告が当方の戦闘意欲を刺激するのだった。

そこにはアミティエの髪色と同じ色の胡蝶蘭が揺らめいていた。

天生輪廻のセカンドライフ

第45話 《本来のハルトマン家》

当方は今、久しぶりの我が家にいる。記憶がまだ偽物のと本物のが混在してるので気分がぐちゃぐちゃだ。

懐かしいと思う反面、寂しいとも思う。わけがわからん。

そして、誰かに早く会いたいと思ってる自分もいる。自分がいた。

誰のことかは見当すら付かない、顔を見たら思い出すのだろうか？

「どうした？入らないのか？」

当方の様子を訝しげに思ったゼノヴィアが顔を覗き込みそう言う。いや、距離が近い。明らかに白音に対抗意識を燃やしている。

「いや、入るが…」

懐かしいようなどこか遠い気配がする。

引き戸に手をかけガララと開ける。

「あら？リヴィにゼノヴィアちゃん、白音ちゃん、おかえりなさい」

「ただいまです、ニーナさん」

「…母さん、何か見知った気配がするんだが」

「気のせいじゃないわよ。哲也さんもあの子もいるんだし」

「あの子？」

記憶を探ろうにも、どうやら姉さんのところにいる時も年に数回は父や母の元に通っていたらしく、それが元々あつた記憶と混濁している。なので、その時のことを言われると正直なところうろ覚えどころの話ではないのだ。

「まだ思い出せ切れてないの？」

「…思い出す？」

「私にとつてはその方が都合いいんですけどね」

「白音ちゃんはそのうでしょうね」

「…ええ、あーちゃんのことを覚えていないとなると私にとつてもゼノヴィア先輩にとつても都合がいいですけどね」

「あーちゃん？誰だそれ？」

「何にせよ、会えばわかるわよ」

「？」

とりあえず家に入ることにした。

※※※

「ここはサツと手元を返すんです」

「……………」

「そうです。イリナさんは上手ですね」

「えへへ……………」リヴィくんに出せるまでには上達するかな？」

久々の我が家、母に厨房に通されたらさつき顔を思い出した割烹着を着た幼女と数ヶ月前に共闘した少女がエプロンをつけご飯を作っていた。

「あ、おかえりなさいリヴィくんにゼノヴィア」

「なぜイリナがここにいるんだ？」

「あれ？聞いてない？私もこの家にお世話になることにしたのよ」

「ミカエルくんからお願いだね」

おっと？ミカエルさんも君付けで呼ぶのか母よ。

無礼講とかいうレベルじゃない…………

「……………にしても二人も増えたのか」

「……………」

「なんだ？」

「お母さん、腐れ兄さんがまだ私のこと思い出してません」

「え？お兄さん？」

「いやね。妹のことを忘れるなんてひどいじゃない」

「え?」

この女の子が? 髪色……は確かに母譲りの白い髪に末端に当方の白部分と同じように黒いメッシュが入っている。

まるで当方の反転バージョンの髪色だ。

そして顔はソーナさんに似ている。まあ、写真で見せてもらった中学時代のソーナさんだけだ。

「はあ、自己紹介が必要ですね。私は彩南・A・ハルトマン。リヴィ兄さんの妹だよ。久しぶり、ざっと2年ぶりだね」

「……………」

……………?

いや、兄妹……いたの?」

初耳……だと思う。うん。

「あんなにドラマチックに私を助けてくれたのに忘れたんですか?」

「正直に言うと思ってません」

「そこは嘘でも『覚えていた』という所じゃないですか?」

「本言が嘘は意味が無いと言っていたからな」

「むー……確かにそうですね……」

ふーむ……少し寝た方がいいか？

たしか睡眠は記憶を整理する効果があるはず……

「名前でも声でも姿でもダメ……はあ、記憶喪失系主人公なんて今更流行りませんよ？」

「あーちゃん、最後の手段あるよね」

「そーですけどね。シロちゃん、あれは信憑性というかなんと言いますか……」

「やってみる価値あり」

「……ダメ元でやってみますか」

※※※

「というわけで私の手料理を兄さんに食べてもらいます」

「あ、はい」

「わざわざ陰キャ演出しなくていいですから」

「いやいや、当方はどう転がっても陰キャだろう。少なくとも陽キャは高校1年の半分を1人では過ごさない」

「はいはい。いいからさっさと食べ」

「へ？」

ゼノヴィアに突然羽交い締めになされ白音が当方の口をこじ開ける。

「ひよんなことしなくても**食べるぞ**!？」

「そうです。ゼノヴィアさん、シロちゃんやめて」

「兄妹漫才終わりそうになかったのてつい……」

「はあ……」

2人から解放されスプーンを持つ。

というか、匂いとかの方が声よりも記憶に深く結びついてるとはいえ……最終手段がこれでいいのか妹よ……

「美味しい……暖かくて……どことなく懐かしいけど……食べなれた味だ……」

小さい頃、誕生日は毎年家に帰って彩奈のご飯を食べたつけ……

……あ、なんだか頭の中にあつた氷の塊が溶けてく感じが

「なにか私にいうことないですかー?」

「え、あ? ああ……ただいま?」

「ふっふー。あとはあの人さえ帰ってきたら兄さんを好きな人が勢揃い、ですね」

「え、まだリヴィに思いを寄せてる人いるのか?」

「それは……まあ。私の姉貴分の人が一人。3年前からの交流で……たしか今はヴァルキリーに就職してるはずですよ」

「ヴァルキリー……? そんな大層な知り合いは……え、まさかあの人?」

「兄さんが思い浮かべてる人で間違いないですよ」

何度か母さんのお弟子さんが家に来たことがある。

そのうちの年が近い一人として割と仲良くなつた覚えがある。といつても彩南と同じく別の記憶が埋め込まれている間はあつてないから会うとしても二年越しになる。

「ロスヴァイセさんも兄さんに会えるの心待ち……にしているとおもいますよ?」

「なんで希望系?」

「二年で彼氏さんとかできてれば兄さんにかまけている余裕ないと思います」

「それもそうなんだが……」

「初恋、叶うかどうかはギャンブルですねえ?」

「それ、ゼノヴィアと白音の前でいうことか?」

「大丈夫です。シロちゃんはとのこと知ってるし、ゼノヴィアさんは案の定フリーズし

てますから」

「問題あるだろ……当方のプライベートは……私がこの家に帰ってきた時点でもうないですね」

「だろ……彩南の耳の良さは異常だから……」

「ふふん。これでも兄さんの巫女としてそれなりの英才教育のようなものは受けてますので」

「巫女……龍神が神としての猛威を振るうのに必要不可欠な存在。ようは自分を神だと信じてくれる人のことだ。」

龍神はもともと蛇神信仰が同一化したモノらしく神であることを誰かが信じてくれないと神としての力が失せるらしい。のでできうる限り存在が確立されている状態で巫女を用意しとかなないと最悪消滅してしまうかもしれない。

「まあ、身内ではあるが当方の巫女は彩南が請け負ってくれているので別に問題は無い。」

問題があるとすれば

龍神と巫女は基本的に夫婦関係になることがいいらしい。

ということぐらいである。

「実妹にそういうことできるか?ときかれたらもちろんno。」

だが、彩南はそんなこと知らないと言わんばかりに当方の巫女になったという。

別に昔の人らがやっていたしセーフというのは母さんと父さんの持論ですがに当方は遠慮したい。

「とにかく、合宿気分も早速抜いて今度は父さんや私と龍神の力をコントロールする訓練ですよ。なんですかレーティングゲームのあの負けざま。それでもかのヒトツメノムラジの息子ですか?」

「仕方ないだろ……ふれたら負けだなんて装備を投入してくるなんて……」

「ソーナさん本気で勝ちに行つてましたからね。兄さんのことは人一倍高く評価してましたから弱点であるものをつくのは当たり前でしょう」

「え？毒つて弱点なのか？」

「私はそうでもないですよ。ただ兄さんはまだ毒の遅延しかできないのでは弱点ですよ」

うーむ。なるほど。言つてゐることは正直彩南がフィーリングで話すからよくわからない。

とりあえず龍神の力の鍛錬を続けたら毒に対する耐性がつくということか？

「荷物おろしてからにしませんか？」

「ですね。シロちゃんという通りです。ついでにフリーズしてるゼノヴィアさんも連れてつてください。そろそろ夕飯の仕込み始めるので」

※※※

そしてすこし時間が過ぎ夜の自室。

明日は久々の学校だ。夏休み明け早々遅刻なんてただでさえほぼ女子高の駒王学園で悪目立ちはしたくない。

なのでホットミルクを飲んでベットに入る。

のだが……

「ゼノヴィア、なにしてるんだ？」

「なんでもない。気にしないでくれ」

そこには妙にいじけているゼノヴィアがいた。しかも陣取っているのはよりもよって当方のベットだ。

その腕にはいつ買ったのかY e sと書かれた枕が抱きしめられている。

……なんだそれ？

「初恋の人……それにイリナに誰よりも付き合いが長いであろう後輩組の参入……むむ……」

「あー……確かにロスヴァイセさんは当方の初恋ではあるが、彩南のいう通り初恋が叶うとは限らない。そんなに悩むことか？」

「悩むことだ！夏休みではイツセー曰く男女が距離を縮めるイベントが多いと聞いた。だがふたを開けてみればどうだ？私とリヴィが一緒にいた時間は少なく距離が縮まったとは到底思えない！」

「……はあ当方のファーストキスを奪っておいてよく言う」

「ん？何か言ったか？」

「なんで聞こえてないのだろうか……まあ、ゼノヴィアが思っているほど当方たちの距

離は近い」

ゼノヴィアの隣に腰掛けそつと頬に手をやる。

「ほら、少し手を伸ばせばすぐにふれることができる」

「そういう話じゃないだろう」

「そうかもしれないが少なくともロスヴァイセさんよりも今はゼノヴィアのほうが魅力的に見える」

「そうか……そうか！」

そういうとゼノヴィアは布団を広げ寝つ転がった。

「……どうした？」

「ふふん。そういうのなら同衾でもするがいい。あわよくば襲ってくれても構わん」

「本人の同意がなければしない」

「なら同意する。襲ってくれないか？」

「ムードも減ったくれもない……明日は学校だ。別の機会にしてくれ」

「なるほど……翌日が学校ではない日だと問題ないと。言質とったぞ」

「別にかまわんよ。おやすみ」

「ふふ……そうかそうか。私の方が魅力的か……そうかそうか」

ゼノヴィアの満足げな声を聴きつつ当方は意識をまどろみの中に放り込んだ。

第46話 《転校生、もはや集団疎開レベル》

「というわけで今日から皆さんと同じ学び舎で勉学に励むことになった衛宮くんエミヤとアミティエさんよ」

「衛宮士エミヤツカサだ。日本は小さい時に住んでたけど久しぶりに帰ってきたからわからないことが多いんだ。間違っているところがあつたら教えて欲しい。よろしくな」

「ボクはアミティエ・ブエル。この学園にも友達とか顔見知りがいるからとりあえず安心してるけどできる限り仲良くしてください。よろしくお願いします!」

夏休みが開け始業式前のホームルーム。

赤銅色の髪を持つ男子生徒とそろそろ見慣れた桜髪の女生徒が転入してきた。

……いや、お前……同い年なのか!?

てつきり大学生ぐらいかと……

「……あとで部長に聞こうか」

「だな……いや、姉さんも把握してるかどうかは怪しいが……」

「はは……それもそうだね」

そして昼休み。衛宮とアミティエはお決まりの転校生質問攻めというイベントに巻

き込まれている。

「……聞ける雰囲気じゃないな」

当方にあの人混みの中に突撃する気概がある訳もなく。ただ、祐斗ゼノヴィアと共に昼ごはんを食べている。

「イリナを含めるとこれで3人……一挙に転校生が増えたな」

「いや、白音ちゃんのクラスにも転校生は来たみたいだよ。もしかしたらブエル眷属全員が転校してるかもね」

「ははっ集団疎開か？」

「可能性は無きにしも非ず……って感じだと思っただけ？」

※※※

「そういえばアミティエは私の一つ下だったわね……」

「まあ、悪魔社会では飛び級に次ぐ飛び級で10歳ぐらいで学業は終えてるからね。覚えてないのも仕方ないよ」

「ならなんで2年生として転入してきたのかしら？」

「アオハルしかったからねえ……あ、そうだ。ボクの眷属を紹介するよ」

オカ研部室である旧校舎に数人の悪魔が入ってくる。

「じゃあ1人ずつ自己紹介よろしくね」

アミティエがそういうと黒い長髪をマフラーのように纏めているなんとも奇抜な髪型の男性が前に出る。

「私は大塚景一^{オオツカカゲヒト}。ブエル眷属の《女王^{クイーン}》をやらせてもらっている。次のレーティングゲームはあなた方が相手だと聞いた。大学生であるため私生活で関わることは一番少なくなるだろうが、よろしく頼む」

「じゃあ、次はわっし達!」

「ちよつとティア!」

大塚さんが下がると今度は女子2人……いや、金髪赤眼の女子が黒髪の女子の腕を引つ張ってきた。

「わっしはヒステリア・ウィツカー。それでこっちは……」

「速水美那^{ハヤミミナ}です……ティアともどもよろしくお願いします……」

「わっしは《僧侶^{ベシヨツブ}》、ミーちゃんは《戦車^{ルーク}》だ!よろしくな!」

すると今度は溜息をつきながら衛宮が前に出てきた。

「俺は衛宮士。眷属内では《番外の駒^{エクストラ・ピース}》の《剣士^{セイバー}》をやらせてもらっている。よろしく頼む」

「次、どつちが行く?」

「なら私が行こう。私はシャーロット・ヘルメス。《騎士^{ナイト}》だ。聖魔剣とデユランダ

……グレモリーの《騎士》との戦いを楽しみにしているぞ」

威圧感を少し感じる茶髪の女性の自己紹介が終わると最後は眼鏡をかけた緑髪の女子が前に出る。

「ウチはハーミヤ、ハーミヤ・レミントン言います。よろしゅうな？」

「これがボクの眷属だよ！まあ、あと一人いるんだけどその子は普通に人間界の学校に通っているから機会があつたら紹介するよ」

アミティエがそういうとボソリときつきからずと端っこで立っていたイリナと他一名（カレン）が……「おかしいですね。原作だとこんなに転校生は居ないはずです……」だとか「うう……せつかく転入出来たのになにもいいところ無しだよ……」とか言っている。

「ええ、転入を歓迎するわ。それでアミティエ。いつまで滞在するつもりなの？」

「んー……とりあえずは禍の団の一件が片付くまでかな。お偉いさんたちはまたこの駒王学園、もしくは赤龍帝であるイツセーくんの近くでなにかが起ころって思ってるらしいよ」

「なるほど……長い滞在になりそうね？」

「そうだね。まあ、研究とかはボクの実家でやらせてもらうから週末は頻繁に家に帰ると思う……あ」

アミティエはそういうと思う出したような素振りをしてこう続けた。

「あと、これ言うの忘れてたね。ボクの眷属は皆転生者だから」

……転生者がこんなに大量にいていいのか？

※※※

その後、解散となりオカ研の部室にはグレモリー眷属だけが集まっていた。

「さて、それでは2週間後に迫るアミティエたちブエルとのレーティングゲームに向けてミーティングといきましょうか。今回はアザゼル先生の手助けは借りれないから出来る限りの最良を尽くしていくわよ」

『はい！』

姉さんはそういうとスクリーンを投影した。

「ここに映っているのはソーナとの戦いの後に開催されたブエルVSグラシヤラボラスのレーティングの様だよ。なにかわかるかしら？」

「……んー、すみません！俺にはわからないです！」

「いや、簡単だろう。ブエル眷属は全員、同じ装備で武装している。当方が以前使っていた銃火器だ。……見たところ駒の役に応じてカスタマイズやチェーンは変えているよ。うだが、一見すると同じように見えるな」

「そう。つまりブエルは前の戦いでは眷属各々の力を全く使わずに勝利してるのよ」

「なるほど……」

……恐らくこちらの試合も録画され向こうの手に渡っていると考えると……他はどうかは知らないがとりあえず当方は手の内をほとんど晒してしまっている……

いやまあ。禁手にはまだまだレパートリーがあるから晒していないといえましょう。のだが……そういった類の禁手であることは晒してしまっている。

「情報量では私たちが圧倒的に不利。数でこそ有利ではあるけれど、レーティングゲームのルールによつてはその数の有利ですら簡単に覆るわ」

……これだけ聞くと勝てる要素が全然見当たらないな。

「それにソーナの《暗殺者》、アミティエの《剣士》。前のゲームではリヴィが何とか撃破したけど本来《番外の駒》の悪魔は他の駒とは比べ物にならない強さを秘めているの。前回は行けたのだから今回も……という訳にはいかないわ。あくまでリヴィと夜兎くんの相性が良かっただけ。だから今回の私たちの特訓の目標は《番外の駒》へ目覚めること、とするわ」

《番外の駒》……俺たちだと誰がなるんですかね？」

「さあ……そこは完全にランダムよ。イツセーかもしれないし祐斗かもしれない。はたまたゼノヴィアかもしれないわね」

どの駒になるかも定かではないらしいし……

というか、番外の駒に目覚めるって言うのはいいもののどうやって姉さんは目覚めさせるつもりなんだ？

※※※

ということがあり、現在ハルトマン邸の広すぎる一階部分の訓練所に当方たちは集合していた。

……同居してるからだろうかイリナと彩南もジャージで着替えてきてる……謎だ。

まあ、それよりもフンスフンスとカレンが参加してるのが謎を通り越している気もする。

「《番外の駒》^{エクストラ・ピース}へ目覚める前提条件のうちの一つは『眷属同士が強い目的意識で繋がること』これをクリアするために私たちの息が合わないとやり遂げられないことを片っ端からやろうと思うの」

……なぜだろう。絶対に成功しない気がする。

「とりあえずストレッツチから始めるわよ。2人でペアを作ってちょうだい」

当方は軽く辺りを見回すと体格の都合で白音と彩南が。

そして、蟠りを解消したのかゼノシアとイリナがペアを組んでいるのが目に付いた……アーシアはカレンとイツセーは祐斗と……あれ？当方気がついていたら溢れてない？

姉さんはもちろん朱乃さんとやってるし……ギヤスパーとするしかないのか……体

格差結構あるぞ？大丈夫かこれ？

「ギャ「まだ人肌に触れるのは無理ですううううう!!」……まだ名前すら言っていないだろくに……」

なくなく一人ですることになりました。

とまあ、陰キャアピールがはかどるようなあつてもなくてもいいストレッチが終わり、少し伸びをすると姉さんが口を開いた。

「まずはいつも通り連携攻撃の練習。アザゼル先生を頼るわけにはいかないから手探りで行くわよ」

ふむ……連携……

さて、どうしてくれようか。

「なんかかんやと単独行動が多い当方は正直遊撃につとめた方がいい気がしなくもないが……」

「攻撃手段でも増やすかな……」

久々に銃を出現させ構える。

近距離突撃型であるゼノヴィアか祐斗とよく組むから2人の援護が出来るように魔力を用いた銃撃でも覚えるかな……

「リヴィ何をしようとしてるのかしら？」

「何って……当方なりに個人特訓だけど……」

姉さんの質問に当方はそう答える。

銃を手のひらでクルクルと回し意思表示をして見せる。

「そういうのは後でニーナさんの教導の元でやりなさい。今は連帯感を高めるわよ」
 ……ものすごく空回りしそうな気配がする。

「ところで何をするつもり？」

「そうね……まずは……」

※※※

組体操

「つてやつぱり当方と白音は土台か……」

がっちりといっせいの足を肩の上に固定し、白音と向き合うようにしている。

白音はカレン、彩南二名を保持しているが姿勢は全くブレていない。

「それはそうでしょう。《戦車》^{ルック}の私たちが土台になるのが一番安定しますし」

「あわわ……シロちゃん！兄さん！落とさないですよ！」

わが妹が上の方でわいわいやと騒いでいる。

なお、他のメンバーは鍛えられているので体幹がしっかりしているのか揺れは少ない。

ただ上はうえでイツセーの取り合いが行われているのかがやがやとしている。

「落ちててもその高さだと怪我無いだろ」

「あややも龍神の血が流れてるんだからそれぐらい平気」

「気分的な問題なの!?!」

あわわとうろたえる彩南。

当方と似たようなツートーン調の長髪をフルフルと震わせている様は夏休み明けに張り出されていた『弟か妹に欲しい生徒選手権』の一年部門一位に輝いたのも納得の愛らしさだ。

ちなみに二年部門では何故か当方が一位だった。

……なんでだろうな。

「にしても、これで《番外の駒》エクストラ・ピースに目覚められるとは到底思えないのだが？」

「私も同感です」

……どうやら今回の特訓の先は長そうだ。

第47話 《英雄の子孫であるということ》

朝

微睡みから目が覚め朝の光が目に入る。

本格的に悪魔になってからまだ日は浅い。

「……」

無言で体を伸ばし寢床から外に出る。

まだまだ残暑が残るような日にちだが朝はまだずずしい。

トレーニングウェアに着替え玄関に向かう。

その途中にある洗面所で顔を洗いタオルを手に取る。

玄関で靴を履き先に来ていた同居人と朝の挨拶を交わす。

「おはようゼノヴィア」

「ああ、おはようリヴィ。今日もいつも通りだな」

「生活のルーチンを乱すつもりはない。そんなことをしてしまつたら自分の体のことが分からなくなってしまうからな」

そんな会話をしているとバタバタと居住スペースからこちらに向かって階段をかけ

て降りてくる音が聞こえる。

「……朝っぱらから騒がしいな」

その足音の正体は先日から我が家に母の弟子として居候を始めた転生天使の女の子『紫藤イリナ』だった。

当方たちと同じようにトレーニングウェアに着替えているが髪の毛は整える暇がなかったのか今はおろしている。

「ま、間に合った……もう！起こしてって頼んだのに！」

「ん〜？あ、すまない忘れていた」

どうやら紫藤さんはゼノヴィアに頼みごとをしていたようだった。

この様子だとうやら目論見は失敗しかけたようだが。

「にしても紫藤さんの髪をおろしてるのは新鮮だな」

「そ、そうかな？……リヴィくんはどっちが好き？」

「結んだ方と今のでいうなら……ふむ、下ろしているのが好みと言えば好みだな。うん、どちらにしても魅力的だとは思うが……どうした？」

むむむと唸り自分の二の腕をつねってる……何をしているんだ？

にやける顔を抑えているのか顔も少し赤らんでる……

「……体調が悪いのなら無理をする必要はない。そもそもこれは当方たちの日課であつ

て紫藤さんが付き合う意味はないと思うが？」

「お母さまと彩南ちゃんから聞いた通り……これは苦勞しそう……」
「？」

どうしてそこで母と彩南が出てくる？

「私はリヴィくんを知りたい。あの時、私を守ってくれた君のことを知って、そして……その先はまだ考えてないけど……だから私もついていくよ」

「……そうか。なら何も言うまい」

それだけ言うと言ランニングシューズを履き玄関の扉を開ける。

「では軽く世間話をしながらランニングと行こうか。なに、互いの理解を深めたいのはこちらもだ」

※※※

当方はゼノヴィアに紫藤さんを連れ朝方の街をかけている。

まずは河川敷へと向かい、あとはそこをひたすら走るだけ。

家に帰れるよう、制限時間の半分に差し掛かると時計のタイマーが鳴るようにしてあ
る。

「ねえリヴィくん」

「……早速だな。どうした」

「リヴィくんってどんなタイプが好みなのかなって」

「好み……か。それは女性の、ということでもいいだろうか？」

「うん、もちろん」

「そうか……なら……」

頭の中で想像する。

当方の理想形の女性……

「まずは家庭的な人……だろうか」

「それはなんで？」

「家に帰ったとき、だれかが『おかえり』と言ってくれただけで心は満たされる。それが愛する人ならなおさら。そしてそこに食事があれば最高……かどうかは知らないが」

「なるほどなるほど……」

「あとは……そうだな。思い返すと他にはないかもしれない。さっきのが最低条件……ですらないかもしれない。それについて先日……といつてもすでに二週間も前だが『当方に対し好意を持っている女性を全員娶ってやる』と言ってしまったからな。それにいい男というのは女性が合わせるのではなく男性が女性に合わせるのだとも聞く。それなら当方はゼノヴィアや白音たちがずっと好きでいてくれるような男になるだけだ」

「……ようはごういうこと？」

「紫藤さんが当方を墮とすつもりなら、それより早く当方が紫藤さんを墮とすさ」
「ひゃい!？」

……先日の組体操が終わった後。

当方は彩南に呼び出せれひとつの事を伝えられた。

それは……

『イリナさんも兄さんを狙ってるのですから、今後この家で情けない姿は晒さないでくださいね?』

ということだった。

……つまりは紫藤さんが当方に好意を向けているってこと……でおそらくは間違っていないだろう。

「そういうわけだイリナ。リヴィが墮ちるのが先か、イリナが墮とされるのが先か……見ものだな」

「アザゼル先生曰く、天使が悪魔に言い寄られると墮天するらしい。だがそこに愛があるなら墮天使だろうが神であろうが魔王であろうが関係あるまい?」

「悪魔ふたりが私を誘惑してきますううう!」

ギヤイギヤイといつもより5割以上増し増しでうるさくなつた朝のジョギング。

だが、これが日常。

例え当方が元半龍神の悪魔であろうともこの変え難い穏やかな日常というものは大切にしないといけない。

……禍カオス・トリガーの団が存在している以上、今後何らかの形で日常が損なわれるかもしれない。

それを阻止するためには……

「信号赤だぞ」

「!!」

……とりあえず考え事しながら走るの辞めよう。

車に引かれても車が弾け飛ぶだけだが往来の間でそれは……さすがに……不味いというか、兄さんとセラフォル様のお世話になりそうなのでできる限りない方がいいに決まっている……

※※※

「おかえりなさい」

「彩南か、ただいま。まだ寝ていてもよかつたんじゃないか？」

「兄さんたちが帰ってきたところを見計らってご飯作ってただけです。シロちゃんも起きてますよ?」

「そうか。ならさつとシャワーを浴びて食べてしまうか」

「ではそれぐらいのときに準備してますね。着替えもすでに脱衣所に用意してますから」

「何から何まで悪いな」

「兄さんを始めとした人たちのお世話ぐらいさせてください」

そんな会話をしながらタオルの受け渡しをしているハルトマン兄妹の姿を見ながらゼノヴィアたちは……

「彩南の気遣いがすでにできた嫁レベルだな」

「さすが師匠……私も早くあのレベルに……」

「目指してるのか？」

「もっちゃん！良妻賢母は大和撫子の理想形なんだよ！」

「そうなのか……だがリヴィはどちらかというドイツ人っぽくないか？」

「だったらドイツ人が好むような女性の方が有利？……件の「ロスヴァイセさん」がそんなのかな？」

「私はよく知らないが……直接聞いてみたらどうだ？」

「そんな勇気はまだ……それに私が一番新参だから聞きにくい……」

という会話をしていたのだとか。

「二人ともシャワー浴びないのか？」

「……兄さん、一緒に入るつもりですか？」

「当方にその気が無くても勝手にゼノヴィアが凸ってくる」

「……仲いいですね」

彩南のその一言にゼノヴィアはふふんと鼻を鳴らしいきなりリヴィイの背に覆いかぶさり頬にキスをする。

「そうだとも。なにせ私はリヴィイにとつて「ロスヴァイセさん」より魅力的だからな」

「……なるほど。義姉おねえさん最有力候補というわけですか」

「ああ。愛してるぞリヴィイ」

「……この場でいうのはやめてくれ」

「ならベットルームで言おうか？」

「……何も言うまい」

諦めたような感じでリヴィイはゼノヴィアをおぶったままシャワールームへと向かう。

「そうだ。リヴィイ、私が背を流してやろう。桐生に教えられたことを試してみたいんだ」
「刺激が強くないなら構わないが……」

「男性が必ずドキドキするものと聞いたぞ」

「……嫌な予感がする」

そんな一日の始まりを迎え学校へ向かい授業を受け部活に励み帰宅する。

だが今日はここで大きなターニングポイントが発生した。

それは兄たちと一緒に帰ってきた彩南の一言で分かったことだった。

「……来客ですね。しかも予期しないうえに私と兄さんにとっては望むべきものではないですね」

「どういうことだ?」

「あやや、私たちにもわかるように説明して?」

白音の声に彩南はやれやれという態度で説明を始める。

カオス・ブリゲード

「かいつまんで言うとな、兄さんやシロちゃんと敵対している禍の団の英雄派っていう団体のリーダー格が我が家の客人としてやってきたんだよ」

「……なんで?」

「多分英雄の末裔で一応半分神様だからスカウトに来たんだと思う」

「……!!リヴィ先輩は渡しません。あとあややも」

「私、おまけなんだ……」

「……どうする?部長に連絡した方がいいか?」

「いや。今の姉さんに変な刺激を与えたくない」

そういうとリヴィはいつものように扉に手をかけ

「ただいま」

といい家の中に入っていった。

※※※

とてつもないほどのプレッシャー。

おそらく聖なるものに関する何かを持っているのだろう。

それに正直なところ血肉が湧き踊るのか何故かワクワクが止まらない。

先日相手をした夜兔よりはるかに格上。

現在の東方が周りの被害を考慮せずに戦ったとして勝てるかどうかの相手。

記憶が戻ってから初めて遭遇する強者^{ツツモノ}。

ゼノヴィアもそれを感じつつているのか少し肩が震えている。

そしてリビングへの階段を上がり戸を開け、その強者^{ツツモノ}と邂逅を果たす。

「帰ってきたか。彩南は久しぶり、兄の方は初めましてだな。俺は曹操と名乗っている。

単刀直入にいう。俺たちの仲間になってくれないか？」

曹操というものの言葉に彩南が一步前に出てその顔を真正面からにらみつける。

……身長の都合で見上げる形になってはいるが。

「その話は何回も断つたはずですよ。それに私はともかく兄さんはすでに悪魔に転生しましたよっ！」

「なに、その要素を考慮してもリヴィエールの英雄の血とその強大な龍神の力は俺たち

の仲間になるにふさわしい」

「……詭弁ですね。とにかく、この話は無駄ですよ」

「……そうだな。少なくとも姉さんたちと敵対している以上当方の明確な敵だ。そんな奴の軍門に下るわけにはいかないな」

「……そうか。残念だ。こうなったら残った手段はあまり褒められたものではなくなるが……」

「戦つて行動不能にして洗脳か？」

「二ーナさんの家でそんなことをしようものなら殺されてしまう。是非ともそうしたいところだがそれは別の機会にしよう」

曹操は素晴らしい玄関へと向かっていった。

「ではさらばだ。次に会うときは間違いなくて敵同士だろうな」

「……望むところだ。彩南も当方も絶対お前にはついていかないぞ」
「それを決めるのは戦いの結果だ。楽しみにしているぞ」

こうして予期せぬ珍客はカツカツと足音を立て帰っていった。

第48話 《総裁家の恋愛感》

リアスのチームワーク統一特訓が終わり、だらだらと疲れた体に鞭をうちながら帰路についていると、花屋の前で店員と談笑しているアミティエを見つけた。

リヴィはその二人を横目を通りすぎようとしたが、当のアミティエに肩を捕まれ、歩みを止められる。

「級友とすれ違うのに、声もかけないのはどうかと思うよ。リヴィ君」

「いや、楽しそうに話をしていたからな。当方が声をかけない方がいいと思っただ」

少し不機嫌そうなアミティエに疑問を覚えるも、リヴィはそう答える。

「そんなこと気にしなくていいのよ？私も仕事があつて離れないといけないことだつてあるから。それに、こういうのはおばちゃんよりも、若い二人にする方が見て癒されるしね」

そう言うと、店員のおばちゃんは店の奥に引つ込み、自身の仕事に戻る。

「と、言うことらしいよ」

「みたいだな」

二人の間を静寂が包みこむ。何を話せばいいのか、話題が見つからない、という感じ

だ。

そんな空気を「青春してるわねえ……」と呟く店員がにやにやと見続けること、数分。その静寂をぶち破ったのはリヴィイだった。

「アミティエは何でここに？」

「最近、花に興味が湧いてね。リヴィイ君は特訓帰り？」

「ああ。意味があるのかはわからないけど」

「リアスは空回る時はとことん空回るからね」

「確かに」

苦笑いを浮かべながら、それを肯定すると、また静寂が場を支配した。

そして、今度この空気をぶち破ったのは、特訓後の特訓の終わったイリナだった。

「あ、リヴィイさんとアミティエさんだ。おーい！二人ともーなにやってるのー？」

遠くから二人を見つけたイリナが手を振り、近づきながら、声をかけてくる。

それに、二人揃って助かったと大きなため息をつき救世主のごとくイリナを内心で褒め称える。

「ああ、花に興味があつてみていたら、リヴィイ君から声をかけてくれたんだ」

「声をかけてきたのはアミティエだろう？」

「うん、冗談だよ。それより、紫藤さんはどうしてここに？」

「ほら、来月には体育祭があるから、ゼノヴィアと走り込みをしていたの」

「そのわりにゼノヴィアが見当たらないが？」

「まだ足りないみたいで私が抜けたあとは別のこととしてたわ。もう少し女の子らしいこととかすればいいのに」

「それは、ひとそれぞれと言うものだろう？」

「そうなんだけどね」

長年の付き合いからゼノヴィアと言う少女を知るイリナは、苦笑いをしながら、そう答える。

「それじゃあ、私は師匠から料理の指導を受けるから、またあとでね。アミティエさんも機会があればお花について教えてください」

「ボクもまだにわか知識だけどね……いや、そうだ。これからボクもリヴィ君の家にお邪魔してもいいかな？」

そう言つて去ろうとするイリナになにか閃いたのか、アミティエがそんな提案をしてきた。

「母さんならいいと言うと思うが、なんのために？」

「君の妹さんに興味が湧いたんだ。それに、同じ年の友達の家遊びに行くのはアオハルっぽいでしょ？」

それに、イリナは同意しそれじゃあものの次いでだし、三人で一緒に帰ろうということになった。

二人のコミュニケーションを一人の陽キャ潤滑油が支えることにより、二人はうまく話せていたように錯覚する。

潤滑油的陽キャの重要性を知ることとなるのはこの先あるかもしれないかもしれないかもしれない。

※※※

「で、また新しい女の人ですか？」

という経緯を辿り現在、当方の家には先に帰っていた彩南と当方と帰ってきた紫藤さん。そして本日の来客であるアミティエがいる。

……少々彩南はご立腹のようだが。

「お客さんが来るなら先に言っておいてください」

「リヴィ君に似てしつかりとした子だね。はじめまして私は……」

「アミティエ・ブエル先輩ですよね？はじめましてリアス先輩たちからお話は伺っています。今度の兄さんのお相手は貴女の眷属とも聞いてます」

「なるほど。こっちの事情についてそれなりに詳しいみたいだね」

「それは……まあ。私は兄さんの巫女なので」

「巫女？」

聞きなれない言葉に疑問符を浮かべるアミティエ。

姉さんは日本文化がかなり好きだから彩南の巫女発言に相当反応していたが……

アミティエはどのようなのだろうか。

研究の標的にされなければいいが。

「そういえばさ、リヴィくん」

「どうした？」

あたりをキョロキョロしている……

どうしたんだ？

「もしかしてリヴィくんってロリコン？」

「……は？」

かなり素であきれた声が出た。

……どういふことだ？

なんでそうなった？

「いやだって……師匠と白音ちゃんは……ほら、ちっさいじゃん」

「……正直なところ。外見はどうだっていい」

「ふーん……」

「こんな男を好いてくれたんだ。その気持ちになるべく応えるのが男というものだろう？」

そういうと荷物を下ろしに自分の部屋への階段を上がっていく。

「アミティエ、ゆっくりしておくといい……といいたいところだが。すまないが、晩御飯までには帰ってもらいたい」

「ま、ボクも急に押し掛けたようなものだからね。いいよ」

「……それと妹の頬をのばすのはやめてもらいたい」

むにいと擬音が付くような感じでわが妹の頬を引っ張る総裁家次期当主様……

なにしてるんだ？

「いやね。龍神の子どもって割と興味あるからつい……好奇心が……それと柔らかさそうだったし」

「……まあ、私はいいですけど……モルモット扱いは初めてですけど」

若干不服そうではあるが……どうやら嫌がってはいないらしい。

断ることを覚えたらどうだ？

……

「よーほりゃー！」

「むむ………あ、すみません」

「サンダー?!?!」

「……随分と仲がいいな」

楽な服装に着替え、二階へ降りると女子三人は某配管工の名前を冠するレーシングゲームで遊んでいた。

ちなみに今は彩南がサンダーを使って他二人を奈落に叩き落したところだ。

「アミティも同志だったのよ!」

「同志?」

「ようはボクも君を狙ってるのさ!そい!」

「緑充てるのうまいですね……」

「ボム狙ったように当てれる妹さんにいわれてもな……」

一旦レースが終わりアミティエは当方に駆け寄った。

少し女の子らしい匂いにドキツとさせられる。

「匂いは割と注意したし、それに病室に飾った花。いちおうアレ、ボクなりの告白だったんだよ?」

「告白……?」

「桃色の胡蝶蘭の花言葉【あなたを愛します】……やっぱり知らなかったか」

「ちよつと待て。どこで当方を好きになった？」

「うーん……なるほど。ボクにとつては救いの一手だったけどリヴィ君にとつてはありふれた一手だったのか」

「……兄さん無意識の英雄基質ですからね」

「……一応聞くかい？ 我ながらちよろいなとは思うんだけどね」

「後学のために……頼む」

「オツケー。うん、どこから話そうか……」

※※※

あれは……だいたい十年前かな？

7つぐらいの時。ボクは既に悪魔社会での高等教育を終了していてね。

周りの年が近い悪魔たちはおろか、少々年上の悪魔も能無しの口たたきだと思っ
たんだ。

我ながら嫌なガキだったと思うよ。

なにせほぼ全員を見下していたんだから。

次期当主はほぼ確定。

言葉を選ばないなら「クソガキ」っていうのがボクを形容していたんだ。

ボクがリヴィくと初めて会ったのはそんな時だった。

グレモリーとブエルの次期当主の初顔合わせ。

リアスの横にいた君はそんなボクを見つけると迷わずかけてきて手を握ってこういったんだ。

「兄さんたちの許可は得ているから遊びに行こう！」
って。

正直「何バカいってるんだ？」

と思ったよ。

やれやれと大人ぶって一緒に遊んだ。

でもこれが……

割と楽しくて！

だって今まで私の周りにいた悪魔は総裁家の娘だからってという理由で年齢一桁に媚びてくるようなゲスと

自分の家にブエルっていう箔をつけたい連中が大半を占めていた。

残ったあと少しも子どもだからって見下してくるような愚図ばかり。

あの時。

十年前の初めて友達と遊んだ時。

私は初めて世界に色がついたように見えた。

ああ、彼ならきつとボクの外聞や血筋、能力を考えずにずっと対等にいてくれる。そう思えた。

ボクは確かに君に救われた。

ボクの眷属が転生者ばかりなのも君の影響なんだよ？

あの子たちは神の加護を全く受けられない。

だからボクが一方的に手を取った。

君がボクにやったように手を出し続けた。

それがボクの眷属。

そして数年後。

君は人間の世界に帰った。

リアスには悪いけど内緒でニーナさんと接触していてね。

その一環としてリヴィくんにもボクが人間の文明を真似て作った銃器の扱いとかを仕込んでもらって……

そして一気に現物を送り付けた。

そうすればリアスが君を連れて来てくれるって思ったからね。

いやゝ。久々に君に会えた時はつい抱き着きそうになつて自制するのに苦労したよ。

そう。

会わないうちに君のことばかり考えているうちにさ。
好きになっちゃったんだよ。

そうなるとボクは一直線で止まるつもりはないからね。

※※※

「つていうわけで行動に起こしたんだけど……遠回しすぎたかな？」

「いいえ！アミティ！とてもロマンチックでとても女の子らしいと私は思うわ！」
イリナはたははと言いながら頬を掻いていたアミティエの手を取りそういう。

……花言葉か。ろくに調べる気すらなかったな。

「兄さんはただでさえ鈍感なんですから。記憶が戻ってない時にシロちゃんがずっと見てたの気づいてないですよね？」

「……その通りだ」

すまんな鈍感で。

……そういえばフェニックス戦の前の合宿で大怪我をした時、なぜか白音が起きていたのはそれが起因していたのか？

「思い当たる節はあるみたいですね」

「まありヴィくんだし。そこはもう割り切ったよ」

「宣言したのにまだまだ女心に疎くてすみません……」

「逆に兄さんがいきなり百戦錬磨のナンパ師みたいになつたらこつちが困惑します」

「そういうながらアミティエを光り輝く車で跳ね飛ばすわが妹……」

「容赦なしだな。」

「え。あ。ちよー！」

星赤弾丸。そのコンボによりアミティエのカートは場外に弾き飛ばされてしまつていた。

「ボクのこと集中狙いしてない!?!」

「気のせいですよ。ええ。私を狙った赤甲羅を直撃させるように仕向けたのはわざとです。」

「なにそのテクニック!」

「私も狙つたかな。ちようどいいところにいたし」

そんな風にガヤガヤと遊んでいる三人。

その光景を後目に当方はこうつぶやいた。

「【疑似の駒】か……」

第49話 《開幕レーティングゲーム》

レーティングゲーム当日。

オカルト研究部部屋に当方たちグレモリー眷属は集まっていた。

アーシアがシスター服、ゼノヴィアがエクソシストの戦闘服。それ以外は学校の制服に身を包みゲームの開始を待っていた。

今回の相手であるブエル眷属の実力は全くの未知数。

そしてこちらの戦力はほとんどが露見している。

切り札に近い新しい力は……その性質上、始めから露見する可能性がある。

次回までには探れなかった新しい戦法や技術は身に着けた方がいいか……？

そんなことを考えていると魔法陣が光り輝き戦場へと転送される。

「……着いたか」

光が止み、視界が開ける。

そこは高層ビルの屋上だった。

強い風と灰色の空。

数十メートル先にはまた別のビルの屋上がある。

『皆さま、この度リアス・グレモリー様、アミティエ・ブエル様の「レーティングゲーム」^{アービター}審判役を担うことになりました。ブエル家現当主ラフィリア・ブエル様の《女王》^{クイーン}ダー
ルです』

初めて聞く声。どうやら今回の審判はブエル側の人間らしい。

……レーティングゲームで不正はほぼできないからあんまりどちらの陣営から排出しても変わらないのだろうな。

『グレモリーとブエルの名のもと、ご両家の戦いを見守らせていただきます。さて今回のルール説明に映らせていただきます』

目の前に……今回のフィールドの見取り図だろうか。

ビルのマップがまるで3DCGのように投射された。

『今回のフィールドは高層ビル群を異空間に用意させていただきました。下は奈落となつているのでご注意ください』

そう言われ下を確認する……

夜の闇がどこまでも続いている。

一定量落ちると撃破扱いというわけか……

基本的に飛べる悪魔からしたらなんてことはないギミックだが……

『両陣営、転移された先が《本陣》です。リアスさまの本陣、アミティエさまの本陣にあたるビルには紋章を刻んでおります。《プロモーション》を行う場合は本陣から隣接するビルまで赴いてください』

それぞれの本陣にあたる場所が赤く点滅する。

『《フェニックスの涙》は両陣営一つずつ。作戦時間は20分とします。それでは作戦時間開始です』

そういうとアナウンスは止まった。

「今回は屋外戦……しかも空中戦を想定されてるわね」

前回のソーナさんたちとのゲームは屋内戦で尚且つこちらの利点が潰されるルールだった。

今回はまだ大丈夫だろうか……

そう思っているとへなへなと手を挙げるイツセーが目についた。

「どうしたのイツセー？」

「部長……俺……飛べません……」

「……?でも焼き鳥の時は飛んでなかったか？」

「バランスブレイカーのジェットなら行けるけど、悪魔の羽を使って飛ぶのはまだ慣れ

ないんだ……」

「なるほど……」

……意外なアキレス腱が発覚した。

「それでも今回は前回ののように力を存分に振るえないわけじゃないわ。それにいざとなったら……」

姉さんはそういういながら当方を見る。

「……なるほど。神通力で強引に浮かせればいいと」

「そういうこと。なにも羽だけが空を飛ぶ方法じゃないわ」

「ちよつと待つてください。神通力!？」

「そういうばまだ共有はしていなかったか」

当方はそういうと騎士ナイト・オブ・ホーナーの誉から剣を一本取り出す。

その剣に気を集中させ浮かび上がるイメージを脳裏に植え付ける。

念力のようなもので手から剣を浮かばせる。

「こんな具合だな」

「おお! 浮いた!」

「ちなみに彩南はもつとできるぞ」

「マジでか!」

仙術の一種……ではなく、半龍神としての権能を引き出したようなものだ。

当方は人二人ぐらいが

彩南は普通の住居ぐらいなら神通力で動かせることができる。

「……改めてすげえな……これが龍神の力ってやつか」

「これでもまだまだ末端に過ぎないがな」

となると……今回のゲームでは当方はイツセーと組むべきなのか？

「作戦を伝えるわ」

姉さんの一言で全員に緊張が走る。

「ギヤスパーは今回も神セイクリッド・ギア器は使用禁止。だから、蝙蝠になって全員について戦況を常

に把握すること。必要とあらば索敵に飛ばすことも許可するわ」

「わ、わかりました!」

「祐斗は持ち前のスピードを活かして強襲。ゼノヴィアは祐斗が作ったスキにデュランダルの波動を相手にお見舞いしてやりなさい」

「了解だ」

「わかりました」

「白音とリヴィは……例の力を使用して敵陣を思う存分にかき乱してやりなさい」

「わかった」

「任せてください」

「イツセー、朱乃、アーシアは開幕時点では後方で私と待機。戦況に応じて各グループのフォローに回るわ」

「はい部長」

「わかりました！」

「はい！」

全員に指示がいき渡る。

戦闘開始まであと数分。

公式戦では二回目。

焼き鳥の件をい含めるのならば三回目。

今まで最後まで残ることはなかった。

今回は……

最後まで家族を守ることを心のうちに誓った。

※※※

強烈な風が吹くビルの屋上。

レーティングゲームが始まって三分とまだ立っていない。

だが……

「やほおおい！」

「ティア！ちゃんとつかまって！」

「わっしがマスターと共同開発したアーマーを信用せよ！」

「め……めちやくちやだよ……」

一人の女の子が手足からジェットを噴射させピルの間を少女を背負って飛んでいた。

「真っ先に落とすべきは木場パイセンとゼノヴィアパイセン！射程距離に入ったら容赦なくふつとばしちやいなよー！」

「テンションおかしいよ……」

背負われてる少女はどこからともなくカメラを取り出し構える。

「デュランダルと聖魔剣……このカメラならバッチリ観測できる！」

パシヤと風景がとられる。

「どう？先輩たちどこにいる？」

「む……お、早い。南南東に向かって直進！」

「了解！」

方向を調整し木場たちの元に向かう二人組。

しかし……

「そうは問屋がおろしません」

「ひょっ？」

純白の炎が二人の進行方向に突然現れる。

「……塔城さんか！……つて誰!？」

声がる方向。そこには駒王学園制服を着こなした白い猫耳と二本の尻尾をはやした女性が立っていた。

「……今の私はリヴィ先輩と一心同体。龍神の力と仙術の発展で周囲の気と私の魔力を増幅させ一時的に成長しただけです」

「あれま……もう白音モード会得してるの?」

「ティア、どうすればいい!」

「もし白音モードと同じ特性を有してるならミーちゃんとの相性は効果抜群! わっしを下して戦闘に移るぞよ!」

なにやら成長しているグレモリーの戦車の塔城白音

仲良し二人組のブエル眷属の戦車速水美那、僧侶のヒスティア・ウィツカーは激突する。

白音は拳を構え二人を見据える。

「わっしも全力で援護する! 人類神話フルで行くよな!」

「了解! 手加減無用、情け無用だね!」

※※※

その頃。

木場は一人の騎士と打ち合っていた。

まるでサイエンスフィクションの産物であろう光線を刃とする剣は木場の聖魔剣をいとも簡単に溶断する。

「……まるで歯が立たない！」

「それもそうだ。なにせ私は剣セイを使うものバウを倒す力を入有しているのだからな」

木場は今戦っている相手を見る。

黒いコートを羽織りその開かれた隙間からは白いアーマーが顔をのぞかせている。

実体剣と光線剣をその手に握っている。

「私が名付けた私自身の力ソルト・ブレイカー【剣必殺刃】聖魔剣だろうがデュランダルであろうが剣であるならば破壊して見せよう」

「……なるほど。僕との相性はずいぶんと悪そうだね。だけど！」

木場は負けじとその手に新たな聖魔剣を作り出す。

「破壊されたらまた創り出せばいい！それがぼくの力だ！」

「……面白〜！」

騎士の戦いはさらに白熱する。

剣が溶断され砕け散り、さらに作り出される。

「貴様が創り出す速度と私が破棄する速度。どちらが上か勝負と行こうか！」

「望むところだ！」

※※※

グレモリーの本陣にて。

一誠は赤龍帝の籠手ブリステッドギアを具現化し力の倍加をためていた。

『Boost!』

「溜まりました！」

「じゃあ始めましょうか」

リアスの作戦通りイツセーはリアスに溜まった倍加を譲渡した。

赤龍帝の倍加により魔力を大きく高めたリアスは隣接するビルに向け大の魔力を発射する。

プロモーションをさせにくくするためには滅びの魔力を用いてビルごと焼き払えばいい。

そう結論付けたリアスはそれを実行に移した。

……だが。

突然何かが飛来しその魔力を貫き霧散させた。

ゴウン！と大きく音を鳴らしビルの側面に突き刺さったのは……
槍を持った一人の悪魔。

穂先が完全に埋まった槍を蹴り上げ急上昇する。

ブエル眷属の兵士。

一誠たちからすると全くの新顔。

御伽天児駒おとぎあまがつ価値は一誠と同じく八。

そしてブエル眷属の例に漏れず転生者でもある。

その手に握られている黒い槍は武骨な一品で聖なる力や特殊なモノは何も感じれない。
い。

だが、使い手の御伽自身からはヒシヒシと体が燃え上がるようなプレッシャーを感じた。

「……外れか。やはり聖魔槍使いは切り込んでいるか」

「聖魔……そう？」

「ま、いいか。とりあえず女王クイーンを落としてから考えるか」

本陣に降り立ちボソツと「プロモーシヨン、女王」と唱え槍を構えなおす。

凄まじい程の悪寒。槍から放たれるのはなんて事のない一撃だろう。

だが、それはこの場にいるどのような手段よりも速く、確実に命を屠る。

そう思わせるほどの気迫がグレモリー側の四人を襲う。

「さあ、尋常じゃない武闘と参ろうか!!」

「ツ……………!」《禁手化!!》
バランス・ブレイク

『Welsh Dragon Balance blealer!!!』
ウエルシュドラゴン バランス ブレイルカー!!!

朱乃に迫った槍を赤鎧を纏った一誠が強引に穂先をつかみ何千倍にも膨れ上がった筋力で掴み止める。

「……………ほう? グレモリーにはまだ面白い槍があつたか?」

(……………バランスブレイクしてるのに押しとめるので精一杯……………何もんだこいつ!)

一誠は負けじと火種の魔力を生み出し力を譲渡。

放たれた豪炎は間違いなく御伽を焼くかに思えた。

だが……………

その行動に気が付いた瞬間に御伽は飛びのき焼かれたのはビルの屋上だけだった。

一部溶解していることからその火力の凄まじさがうかがえた。

「……………まるでインドの大英雄カルナにも勝るとも劣らない業火……………炎の槍使いか」

各地で戦いは激化していく。

まだまだゲームは始まったばかりだというのに。

第50話 《剣士（セイバー）VS疑似（デミ）剣士（セイバー）》

打撃音と爆音がビルの合間にこだまする。

白いオーラを迸らせた白音が美那の腕を気に練りこんだ一撃を浴びせるが美那は意にも返さず脚部から至近距離で光学兵器を放つ。

だが発射部が水に覆われ屈折率が変わり明後日の方向にあったビルの窓を焼く。

（そのまま近接戦でいい。拳にジュワユーズのオーラを引き出しておいた。思いのままにやれ！）

「えい」

白音の頭にリヴィイの声が響く。

それもそのはず。

グレモリー眷属の《番外の駒》エクストラ・ピース

目覚めたのはリヴィイだった。

【疑似の駒】デミ・ピース

眷属の一人を触媒にリヴィイが融合し《番外の駒》エクストラ・ピースと《悪魔の駒》イヴァイル・ピース二つの特性を得た役

にする力。

今回は開幕から白音と融合させ《擬似暗殺者》デミアサシンとして投入されている。

必殺級の気と聖剣のオーラを纏った拳。

ニフウチイラス

无二打とは言わないが一発当たただけで悪魔であるならばほぼ確実に魔を祓うオーラで倒され、もしそれを耐えきったとしても膨大な気が流し込まれ昏倒し今回のルールならばそのままフィールドの外へ落とされ撃破テイックとなるはずなのだ。

だが美那は先ほどから白音の拳を数発受けているにもかかわらずほぼダメージをは見られない。

「ティアー！」

「おうさー！」

それにこの二人のコンビネーションは異常なほど洗練されている。

美那が作った隙にすかさずヒステリアが電撃を飛ばす。

白音の拳が胴体にあたるような軌道になった場合はヒステリアの能力だろうか。

突如としてシールドが攻撃の間に滑り込みその攻撃を防いでいる。

（正直なところジリ貧です。どうしますか？）

（どうしようもない。あの盾ごと粉碎するか？）

（……なるほど。結局は力押しですか。テクニククタイプのくせに？）

(テクニックタイプのくせに、だ)

リヴィイとの脳内会議を終わらせた白音はオーラを増幅させ右手に集中させる。

「ティア、何か嫌な予感するんだけど……」

「衛宮パイセンなら勝てたんだろうな……ふむり、パーツ変えて逃げようぞ！」

そういうとヒステリアの周囲に魔法陣が展開される。

「R R S Aでいくぞよー！」

「了解！」

魔法陣からは何やら物品が射出される。

ドリル状のパーツが二つに魚の背ビレのような部位がある足。

そして漁船についてあるようなアンカークレーンだ。

それは等間隔で美那に迫る。

「……誤射？」

(さすがに質量で押し切ろうとは考えんだらうからそれはないだろ)

美那に物品が着弾すると……

両腕、両足がポロリと取れ、射出されたパーツに組み替えられていた。

両腕はロケットに。足にはスタビライザー。そして片足には追加でアンカーがセツ

トされている。

「ティア行くよ」

「オツケー」

「逃がしません……!」

だがロケットが噴射され白音の攻撃は届かなくなった。

二人を追おうとする白音は蝙蝠となってあたりに散っているギヤスパーに呼び止められる。

『白音ちゃん、リヴィ先輩、ゼノヴィア先輩の方に衛宮先輩が来ました』

「部長はなんて?」

『リヴィ先輩をゼノヴィア先輩と合流させるようにって』

「わかった。リリース解放」

白音の体が発光し、光が止む。

そこにはいつもの少女姿に戻った白音とリヴィが立っていた。

「ギヤスパー、距離はどれくらいだ」

『だいたい700ぐらいです』

「ざっと10秒つてところか……行ってくる」

「頑張ってください」

「ああ、任せろ」

黒鎧に身を包み悪魔の翼と光エナジー・ウイングの翼を展開しリヴィイは暴風とともにゼノヴィアのもとへ向かっていった。

『白音ちゃんはこのまま進軍だつて。変な気を感じたら撤退することとも言つてたよ』
「うん、わかつた。ギャーくんも無理しないでね」

『これぐらいまだまだ大丈夫！』

※※※

ギヤスパーを通して援護をリアスに要請したゼノヴィア。

その相手はリヴィイたちに伝えられたようにブエル眷属の剣士衛宮士セイパーだった。

まるで木場の魔剣創造ソード・パースのように数々の剣が屋上に突き刺さっていた。

「さすがはデュランダルだな。投影した剣じやまるで歯が立たない」

「そう思うのならば、一思いに決めたらどうだ？」

デュランダルを片手にゼノヴィアは肩で息をする。

対する衛宮は全くと言っていいほど息が上がっていない。

そして……

「そうさせてもらうよ。あいにくとここで時間をかけるわけにもいかないからな」

といい魔法陣から何かを召喚させる。

大きな弓のようなオブジェクト。

それは衛宮が投影したと言っている剣たちを吸い込んだ。

剣たちはオブジェクトの矢として新生する。

「マアンナ。これが俺の切り札のひとつだ。悪いけど反応すら与えずに倒させてもらう」

「やってみる！」

衛宮は宙に飛びゼノヴィアを見据える。

今から放たれるであろう一撃は足場に行っているビルさえも倒壊するであろう一撃。

本来なら足場が崩されることを避けゼノヴィアも空に飛び上がるべきだろう。

だが、ゼノヴィアが空に飛び上がることはなかった。

確かに耳に届いた風切り音。

それはゼノヴィアの想い人の到着を知らせるものだった。

「やるぞゼノヴィア！」

リヴィイが吠える。その声は衛宮の耳にも届き。

番えられていた矢を即座に放とうと引き絞る。

「ああ！」

ゼノヴィアはリヴィイの方へ駆け出しその手を掴む。

「インストロル夢幻召喚!!」

矢が光となり放たれた。

だがその一撃はゼノヴィアには届いたがビルが倒壊することはなかった。

その手に握られたデュランダルとジユワユーズ。

そして腕を守るように展開された黒鎧がその一撃を防いだ。

「ハルトマンが……消えた?」

衛宮の言葉の通りリヴィの姿は白音の時と同じように消えていた。

到着して即座に融合をしたのだ。

今回の駒は《擬似剣士》

ジユワユーズやゼノヴィアの手にまとわれている黒鎧……本来はリヴィの神セイクリッド・ギア器で

ある騎士ナイト・オブ・オーナーの誉からわかる通り今のゼノヴィアはリヴィの力を扱える。

また、ゼノヴィアの容姿は白音ほどではないが変わっていた。

元々ショートカットだった髪は腰に届くほどに延びた。

「全く、これほどの長さだと手入れするのが大変そうだな」

(いいから前向いてろ!二射目くるぞ!)

二射目を二本の聖剣が共鳴し膨れ上がった聖なるオーラを纏った斬撃で切り払う。

「さて、これで形成逆転だ」

ゼノヴィアは光エナジー・ウイングの翼を展開し、衛宮と同じ高さまで飛翔する。

「確かにデュランダルとジュワユーズなんて一等級の聖剣二本があるんじや俺の勝ち目は薄い。だけど負けるほどでもないさ」

衛宮は胸に手を当て呪文を唱え始める。

「体は鉄でできていた。心も血潮も仮初のモノ」

「何をしようとしてるかわからないが……思い通りにはさせない！」

ゼノヴィアが突撃し衛宮に二本の聖剣を振るうが衛宮の前に七つの花卉が展開されたそれを防いだ。

「二つの世界を歩き夢はなく」

ゼノヴィアは変わらぬに聖剣を振るい続けるが花卉の一枚が砕け散っただけだった。

（龍神の力、全力で行くぞー！）

それをゼノヴィアの目を通して知ったりヴィはジュワユーズの輝剣を展開しハイドロブラストの準備をする。

「なるべく手早くしてくれ！」

（任せろ）

こうしている間にも衛宮は呪文を唱え続ける。

「過去に闘争は一度もなく、現在は剣を手取る」

唱えられる呪文は転生した衛宮の人生を唄うモノ。

「理解者は今生にて得たり」

ゼノヴィアの攻撃で花卉は一つさらに減る。

そしてリヴィが放つハイドロブラストによりさらに一つ花卉がはがれる。

「蒼い水平を上塗で彩る」

だがそれでも。花卉の半数を失っても衛宮は詠唱を続ける。

ゼノヴィアは更にリヴィの力を引き出し聖剣に暴風を纏わせさらに薙ぐ。

「ならばこの生涯には答えを」

花卉を落とし最後の一枚。

だが……

衛宮の呪文は最後の一節を迎えてしまった。

「だが魂は、自分のモノだと理解せよ！」

※※※

蒼い炎が風景を塗り替える。

一面が水面に。

蒼くただ広い空に。

水面はまるで鏡のように二人を映し出していた。

「……………ハイ」

「これが俺の固有結界。まだなにもない。何も生まれていない原初の惑星。だからこそ無限の可能性を内包する世界。ここにいる限りは俺は【衛宮士】であり【何者】でもある」

水面が泡を浮かべる。

その泡に映る衛宮の姿は……

（イツセー!?……もし、衛宮のいうことが仮に本当だと仮定するならば……）

嫌な予感がゼノヴィアと融合しているリヴィの脳裏に過ぎる。

衛宮は左手をフラリと出すところを呟いた。

「……【ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手】」

手のひらに緑の宝玉が現れそこから見知った赤い籠手が展開されていく。

『Boost!』

いつも聞く赤龍帝の籠手の倍加を知らせる音声。

だが、それは味方のイツセーではなく敵の衛宮の腕から聞こえた。

「原作は……悪い。アニメ勢つてやつだから【赤龍帝の籠手】もなにか凄い籠手ぐらいしか知らない。だけど、今ならわかる。俺自身に兵藤を投影させた今なら。今や赤龍帝でもある俺なら!」

『Boost!』

そうしてまた泡が浮かぶ。

今度は邪の主のような少女の姿だった。

……もし、邪の主だというのなら。今、衛宮が手にした剣は……

(ゼノヴィアまずい！)

「言われなくともわかつている！」

デュランダルに危険なまでオーラを纏わせる。

だがそれでもわかつていた。

共通の友人で眷属仲間が持つ力はこんなものでは中和できないほどの力を持ち合わせている。

『Transferr!!』

衛宮は軽く右手に握る聖剣を振るう。

それだけでゼノヴィアの周囲に展開していた輝剣は粉々に砕け散った。

「……力が大きいと扱いにくいな」

(やはり統合されたエクスカリバーか！)

否。

衛宮が握るのはそんなものではない。

決して折れることの無い星が造りだした【神造兵装】

またの名を《最強ラスト・ファンタズムの幻想》

【約束エされし勝利スの剣カ】

ここに転生者がいたら間違いなく絶望するだろう。

右手にはFateという世界観において規格外の力を持つ宝具。

左手にはハイスクールDXDという作品において主人公が持つ力。

神が造つたとされる聖剣

神を殺せるとされる神器

そのふたつを持ち合わせた衛宮の前に

ゼノヴィアとリヴィはただ前を見据えるしか無かった。

第51話 《真名解放》

ゼノヴィアは現在デュランダールとジュワユーズの二刀流。

ようは両手が塞がっている状態だ。

追加で騎ナイト・オブ・オーナー士の誉から武器を取り出そうにも浮遊する武器を強奪していない以上、握ることは出来ない。

そして握られていない武器は当たり前だが重力により落下する。

リヴィが操作できるのはあくまで輝剣をカスタマイズしたものに限られる。

しかも出された瞬間、衛宮が握るエクスカリバーによりすぐさま砕かれてしまう。

かと言って龍神の力を振るおうにも本調子になるには片目を潰さなくてはならない。

片目でも戦えるリヴィならまだしも、この場でゼノヴィアが片目を失うのは距離感を失うことに等しい。

そして、距離感を失うことは間合いを読めなくなると同義。

ある程度は今まで養った勘やリヴィの仙術による気配察知で補えるとはいえ、それでも完璧とは言い難い。

当たれば即死といえる聖剣を持つ相手に片目を失うのはありえない。

直ぐにその体に刃が届いてしまうだろう。

「バランズ・ブレイカー 禁手の《ファンタズマ・フィックスト・ミツロジ彼方より繋がる幻想の物語》もリヴィが表に出ていなければ扱うことが出来ない。」

（かと言つて時間をかければブリストッド・ギア赤龍帝の籠手で能力は倍加し続ける一方か）
単純火力の二倍やたかが四倍でも元の数が多ければ実力差は一気に開く。

言い方は悪いが、イツセーが特に何かに優れているわけではないからこそリヴィは同格と判断した。

だが……

衛宮の力量はおそらく木場と同格クラス。

そんな強さの使い手がエクスカリバーなどという最強の幻想を持ち、尚且つ力が倍加するようであれば

幾ら二人分の力を持っていても相手にするのは難しい。

いや、本来ならば相手にしない方がいい。

「なあ、衛宮。知ってるか？」

「なんだ？」

「恋する乙女はな……無敵らしいぞ？」

（突進するつもりか？ やめろ！ 自殺行為だぞ！）

ゼノヴィアは二本の聖剣を持ち突進する。

そんなゼノヴィアに対して衛宮は迷うことなくエクスカリバーを振るった。

光の波動はゼノヴィアに襲いかかり……

研ぎ澄まされたもつと大きな光に飲み込まれた。

「な……！」

衛宮はその光を飛ぶことかわす。

本来なら、倍加されたエクスカリバーの波動はゼノヴィアは浮き消せない。

だが、ゼノヴィアの左手にはジュウユーズとさらに新しい聖剣が握られていた。

「その剣……アスカロンかー！」

「ご明察。竜殺しの剣、聖^{セント}ジョージのアスカロンだ」

ゼノヴィアが行ったことは一見物凄く単純であり簡単なこと。

デュランダルとジュウユーズの波動を共鳴させ大きな波動を作り、イツセーから預

かっていたアスカロンも交えさらに増幅させ放っただけのこと。

アスカロンという新たな聖剣をつくという発想に至ったゼノヴィアは迷うことなく

それを実行に移した。

そして……

『Reset』

衛宮の倍加が終了する。

そう、倍加には時間制限がある。

「さて、次はためらわないぞ?」

「そうか……なら、こちらも次で勝たせてもらおう!」

三本の聖剣とエクスカリバーがぶつかり合う。

刃が打ち合う度に聖なる波動と衝撃が辺りに走る。

その衝撃により衛宮の体に炎で焼かれたような傷が現れ始める。

どうやら自分が振るっているエクスカリバーにより腕が焼けているようだ。

「……ほう?」

それもそのはず。

衛宮はどうあがいても神の加護を得られない転生者であり悪魔。

そして手に持つのは星の聖剣。

デュランダルをも凌ぐ聖なる波動はじわじわとその体を焼いていた。」

「気づかれたか」

「ああ、気づいたさ。どうやらその聖剣を使うのは……いや、聖剣を握ることすら本来な

ら叶わないようだな」

「その通りだ。だが、俺が燃え尽きる前にアンタを倒せばいいだけだ」

衛宮はそういうとその手に握る聖剣を垂直に構える。

「永久に遙か……」

聖剣に今までとは比較にならないほど夥しい量の聖なる波動が収束していく。

『Boost! Boost! Boost!』

キュインという音とともに左手の赤龍帝ブリス・テッド・ギアの籠手の宝玉が緑の光を灯す。

「どうやらこちらは全力のようだな」

（宴もたけなわ……こちらも全力で答えるとするか？）

「ああ、そうしよう……《単眼解放》!!」

ゼノヴィアを中心に水飛沫が上がる。

左目のはじめ飛びその体を龍が放つ独特なオーラで包む。

そしてその背後には銀色の鱗を煌めかせる蛇龍がいた。

「輝け……」

ゼノヴィアはリヴィイの力により三本の聖剣を統合した大剣を構える。

その形はかつて彼女が手にしていた【破壊エクスカリバー・デイス・ドラクン・ヨンの聖剣】と酷似していた。

辺りに発生する激流と暴風がゼノヴィアに集まっていく。

腰まで伸びた髪が暴風によりはためき、その目には神威が宿っていた。

「はああああああ!!」

嵐と共に神威の光が振り抜かれる。

『Transfer!!』

「黄金の剣」!!」

機械音声とともに何倍にも膨れ上がった聖なる波動がそれを浮き消さんと放たれる。破壊の嵐と聖なる極光は撃ち合い拮抗する。

どちらからともなく叫ぶ。

この絶対なる一撃を相手に届かせるため。

いや、違った。

愛する人の力を得た自分こそが最強だと証明するため。

この手に握る2つの主人公のチカラは最強であると。

しかし、拮抗してしまった。

これが本来のエクスカリバーと複合デュランダルの戦いなら問題はなかった。

だが……

衛宮が握るのは己の幻想を核とした模造品。

最強の幻想が他の力に並んでしまった。

最強であるという盲信

盲信からくる自負

それが覆された。

パキン！

金属が割れるような音とともに衛宮の持つ二つの幻想が砕け散る。衛宮を守っていた幻想がたった三振りの聖剣を束ねたものに砕かれた。

「……」

泡が新たな幻想を投影する。

巨人と見紛うほどの巨躯を持った、巖のような男性が映し出される。だが……デュランダル波動が衛宮を焼いた。

※※※

光の本流に飲まれた。

俺の手にあつたエクスカリバーとブーステッド・ギアは砕け消えた。

次の一手にはステイナイトのバーサーカーを選んだ。

一度死のうが勝手に発動する自動再生の宝具【十二の試練^{ゴッド・ハンド}】

それを俺の体に投影させることで

俺の体が地面に倒れることはなくなる。

焼けつくような痛みとともに再び目の前にいる剣士を見据える。

この世界でいうところの主人公ハーレムの一員のゼノヴィア。

どうやら俺が知っているモノとは違い、数々の相違点がある。大きなモノといえはその背後に見える銀色の龍……

おそらくは元々いなかったハルトマンだろう。

そいつが今口を開け俺に向かって吐き出そうとしている。

ああ、恐らくは俺は負ける。

拾ってくれた恩のあるアミティエの顔に泥を塗ることになる。

なにせ本来の実力を出し切れれば容易に勝てる相手だからだ。

でも……

ハルトマン。お前のその姿は

お前にとって切り札とっておきなのだろう？

※※※

体のあちこちが焼け付き衣服は原型を残さないほど損傷している。

だがそれでも衛宮はまだ立っている。

それはブルの名を背負うものとしての責務を果たすためだろうか。

「……恐れ入った。まさか俺が考える最強が拮抗するなんてな」

そういう口からは一筋の血が。

そしてまた新しい泡が……

いや。

衛宮が保有する最後の特典が姿を現した。

鉛色の石球。

それは衛宮の背後に浮遊し形を変える。

(あれは……剣か?)

リヴィはいぶかしげな声を上げる。

さきのエクスカリバーの方が圧倒的に危険なのだ。

ゼノヴィアが持つ聖剣がその格を赤龍帝の籠手に引き上げられていようとも凌駕したため

次に来るのはエクスカリバーを上回る真正正銘の奥の手だとばかり思っていた。

だが、衛宮の最後の武器にはせいぜい分断され七つに分かれていたエクスカリバー程度の脅威度しか感じられない。

「だが、用心に越したことはない。フェニックスの涙か他の何かか。それともこの空間が有する特性かどうかは定かではないが、そう何度も私たちの一撃を耐えられるはずがない」

「ああ、たしかに。さっきの威力はそう何度も耐えられない。今回もルールに引つかからないか不安だったよ。でも楽しい試合は終わりだ」

バチバチと衛宮の体に直線で構成された文様が走る。

それらすべてから電流のようなものが解き放たれ石球が変化した剣にまとわりついていく。

「さあ、最後の大見せ場だ。付き合ってもらえるか？」

「……いいだろう。その勝負のつた！」

ゼノヴィアは衛宮の誘いにのり自分の持てる力を存分に引き出す。

たかが騎士が番外の駒を倒せるのならまたとない機会だろう。

実質的に駒価値に制限がない番外の駒をたつた三棒の騎士が倒す。

例え実質的に疑似の駒による駒価値の引き上げが行われていようと

このチャンスは逃すにはあまりにも惜しい。

そしてその思考こそ衛宮の思惑通りだった。

ゼノヴィアの聖剣が振るわれた瞬間、衛宮の剣がその腕を焼き放たれる。

その一撃は寸分の狂いもなくゼノヴィアの心臓に向かつていく。

それを認知したゼノヴィアの行動は早かった。

「解放！^{リリース}！」

「な!?!」

リヴィイとの融合を解除することでこのまま二人とも撃破される展開を防いだ。

そしてゼノヴィアの心臓は……

衛宮の剣により穿たれた。

「最強の後出しじゃんけん……斬り抉る戦神の剣だ。因果を形成しお前たちの切り札が放たれたという事実を上塗りさせてもらった」

右腕が真っ黒に焼かれた衛宮がそういう。

その体はすでに撃破された時に現れる光に包まれていた。

「今回の勝負は俺の負けだ……だけど、俺ごときが消えてもブエルの勝利は揺るがない。

あがいて見せろよ、グレモリー」

それだけ言うと衛宮は消え失せた。

それに伴い、上書きされていた世界が元の世界に戻る。

一つの闘争が終わった今、立っていたのは無傷のリヴィだけだった。

『アミティエ・ブエル様の「剣士」一名、リアス・グレモリー様の「騎士」一名、リタイヤ』